

**ANNUAL RESEARCH REPORT  
OF  
ARCHAEOLOGY IN NARA CITY AREA  
2019**

**奈良市埋蔵文化財調査年報**

令和元(2019)年度



奈良市埋蔵文化財調査年報

令和元(2019)年度

# 奈良市埋蔵文化財調査年報

---

令和元（2019）年度

奈良市教育委員会

2022





秋篠阿弥陀谷横穴墓群近景(北から) 秋篠阿弥陀谷遺跡・横穴墓群の調査 AAM 第1次(本文 58-88 頁)



1. 秋篠阿弥陀谷遺跡発掘区遠景（南から）秋篠阿弥陀谷遺跡・横穴墓群の調査 AAM 第1次（本文 58～88 頁）



2. 秋篠阿弥陀谷横穴墓（西から）秋篠阿弥陀谷遺跡・横穴墓群の調査 AAM 第1次（本文 58～88 頁）



1. 秋篠阿弥陀谷横穴墓群 1号墓出土陶棺 秋篠阿弥陀谷遺跡・横穴墓群の調査 AAM 第1次 (本文 58～88頁)



2. 秋篠阿弥陀谷横穴墓群 2号墓出土陶棺 秋篠阿弥陀谷遺跡・横穴墓群の調査 AAM 第1次 (本文 58～88頁)



1. 秋篠阿弥陀谷横穴墓群3号墓出土陶棺 秋篠阿弥陀谷遺跡・横穴墓群の調査 AAM 第1次(本文58～88頁)



2. 秋篠阿弥陀谷横穴墓群4号墓出土陶棺 秋篠阿弥陀谷遺跡・横穴墓群の調査 AAM 第1次(本文58～88頁)



1. 秋篠阿弥陀谷横穴墓群出土金属製品 秋篠阿弥陀谷遺跡・横穴墓群の調査 AAM 第 1 次 (本文 58 ～ 88 頁)



2. 秋篠阿弥陀谷横穴墓群 3 号墓出土土器 秋篠阿弥陀谷遺跡・横穴墓群の調査 AAM 第 1 次 (本文 58 ～ 88 頁)





秋篠阿弥陀谷遺跡出土古代・中世出土遺物 秋篠阿弥陀谷遺跡・横穴墓群の調査 AAM 第1次(本文58～88頁)



1. 発掘区東側全景 平城京跡(右京四条三坊十五坪・西三坊大路)の調査 第741次(本文48-54頁)



2. 4(左)・3号窯(右) 風道部分(東から) 平城京跡(右京四条三坊十五坪・西三坊大路)の調査 第741次(本文48-54頁)



3. 試掘2018-7次調査 4(左)・5(右)号窯(北西から) 平城京跡(右京四条三坊十五坪・西三坊大路)の調査 第741次(本文48-54頁)



1. 菅原東遺跡出土の石製未製品・車輪石・石釧・ガラス玉・管玉 第741次(本文131～136頁)



2. 市内遺跡出土の合子・石釧・紡錘車形石製品(本文131-136頁)

## 例 言

1. 本書は、令和元(2019)年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財に関する各事業の概要と、研究成果を収録したものである。

ただし、令和元年度に実施した調査のうち平城京跡第739次調査については、次年度以降に報告の予定であるため本書には収録していない。

また、富雄丸山古墳第3次調査は平成29(2017)・平成30(2018)年度に実施した同第1(測量調査)・2次調査と合わせて平成30年度に報告済である。同じく、令和元年度に実施した史跡大安寺旧境内第148次調査についても平成30年度に報告済である。

平成30(2018)年度に実施した平城京跡第722次・729次調査については本書に収録した。

2. 令和元(2019)年度～令和3(2021)年度の埋蔵文化財に関する各事業は下記の体制で実施した。

奈良市教育委員会事務局 教育部

文化財課

課 長 松浦五輪美

記念物係

係 長 池田裕英

主 務 原田香織 永野智子(令和元・2年度は活用係主務)

再任用職員 篠原豊一

埋蔵文化財調査センター

所 長 三好美穂(令和元年度) 鐘方正樹(令和2・3年度、令和元年度は所長補佐)

所長補佐 中島和彦(令和2・3年度、令和元年度は調査係長)

管理係

係 長 森田幸一(令和3年度から) 奥和田佳邦(令和元・2年度)

主 任 松村健次

主 務 山前智敬 新井信介(令和元年度)

調査係

係 長 久保邦江(令和元・2年度は記念物係主任)

主 任 秋山成人・安井宣也

主 務 吉田朋史

主 事 高岡桃子

技 術 員 三澤朋未(令和3年度から)

活用係

係 長 原田憲二郎

主 務 大窪淳司(令和元年度)

主 事 村瀬 陸(令和元・2年度は調査係)

再任用職員 森下浩行(令和元年度は調査係主任・令和2年度は調査係長)

3. 発掘調査、出土遺物整理、保存活用等の各事業に関しては、奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、独立行政法人奈良文化財研究所、奈良市文化財保護審議委員会などの関係諸機関よりご指導とご協力を賜った。ここに記して謝意を表する。

4. 各発掘調査の次数は、奈良市教育委員会が実施した調査に付した遺跡ごとの通算次数となっている。遺跡の略記号は下記のとおりである。

H J 平城京跡      D A 大安寺旧境内      G G 元興寺跡      K F 興福寺跡  
M I 南市推定地      M K 南紀寺遺跡      A A M 秋篠阿弥陀谷遺跡      T O M 富雄丸山古墳  
なお、奈良町遺跡は前述の遺跡と重複するため、略記号は付していない。

5. 本書で使用した遺構番号は、一部を除いて調査ごとに付した仮番号である。遺構等の番号の前には、その種類に応じて以下の番号を付した。

S A (柱列・塀)      S B (掘立柱建物)      S D (溝・濠・溝状遺構・暗渠)      S E (井戸)  
S F (道路)      S K (土坑)      S X (その他)

また、遺構の大きさの数値は、すべて遺構検出面での計測値である。

6. 本文中で示した過去の調査については、調査次数等の前に下記の略記号を使用して調査機関を表記した。

奈良市教育委員会	—遺跡略記号	次数
独立行政法人奈良文化財研究所 (旧奈良国立文化財研究所含む)	—国	次数
奈良県教育委員会 および 奈良県立橿原考古学研究所	—番号または調査年	

7. 本書で使用した遺物名称・形式・型式は、一部を除き下記の刊行物に準拠した。

奈良時代 軒 瓦：『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』奈良市教育委員会 1996  
土 器：『平城宮発掘調査報告書VII』奈良国立文化財研究所 1976  
『平城宮発掘調査報告書XI』奈良国立文化財研究所 1982  
古墳時代 須恵器：田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981  
弥生時代 土 器：『奈良県の弥生土器集成』奈良県立橿原考古学研究所 2003

8. 発掘区位置図については、奈良市発行の「大和都市計画図」(1/2,500)を、また調査地位置図については、国土地理院発行の1/25,000の地形図を利用した。

9. 本文中において示した位置の表示値は、平面直角座標系第VI系(世界測地系)の数値である。なお、座標値の表・図中の標記については単位(m)を省略した。

10. この報告に関する調査記録・出土遺物は、奈良市埋蔵文化財調査センターで保管している。

11. 執筆は、当該調査と遺物整理を担当した埋蔵文化財調査センター職員等が分担し、文責は各調査報告の文末に記した。

12. 本書の執筆および編集は令和3(2021)年度に行い、埋蔵文化財調査センター所長 鐘方正樹、所長補佐 中島和彦の助言を得て、久保邦江が編集を担当した。

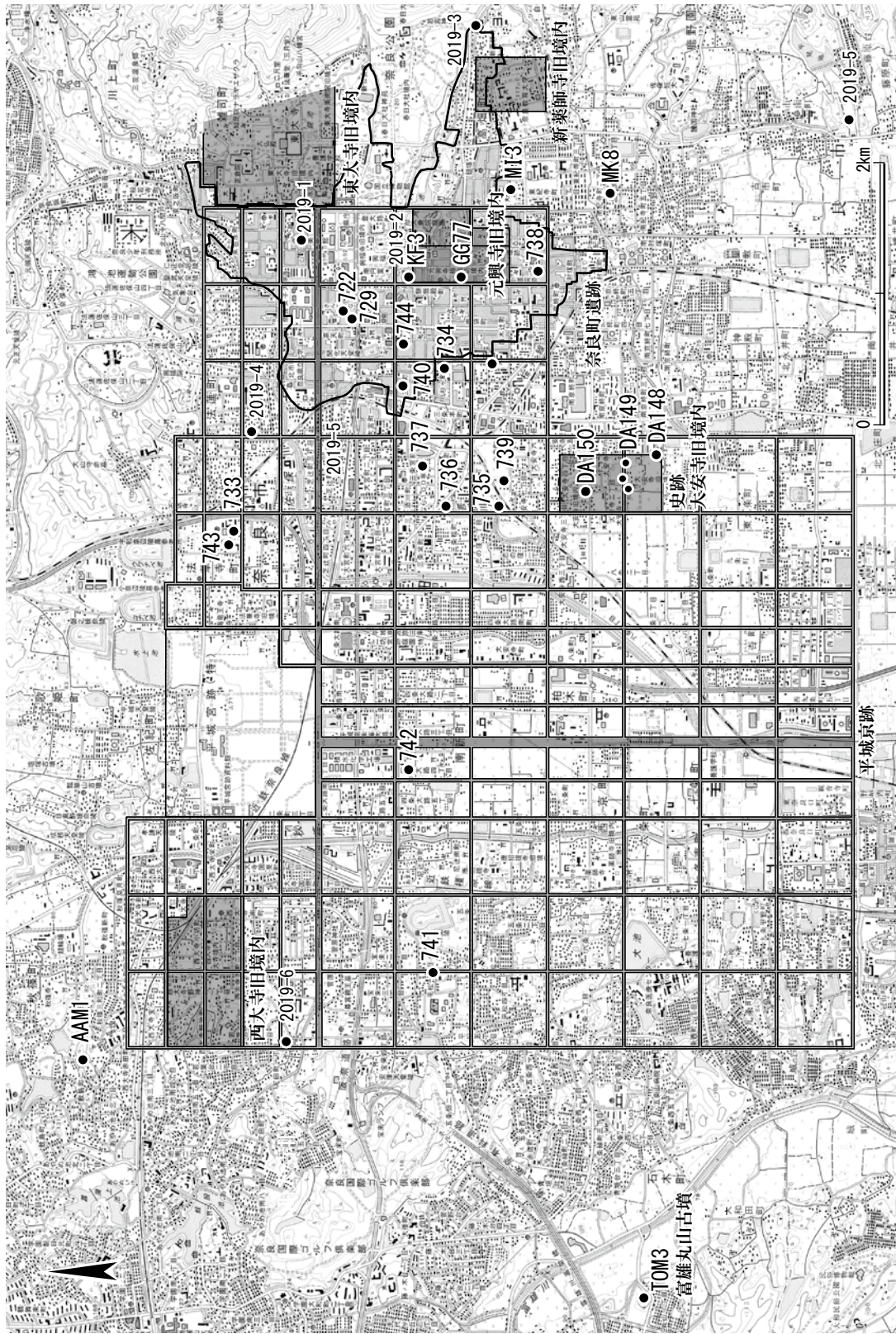
令和元（2019）年度 奈良市教育委員会実施 埋蔵文化財発掘調査一覧

調査回数	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積 ㎡	調査 担当者	地調査原因事業内容/ 届出者・申請者	事業 区分	届出等受理 番号	
1	HJ733	平城京跡(左-1-3-12・13)	法華寺町1365-1、-2、1381、1382	2019.5.07～2019.9.05	830	安井・高岡	一条高校講堂改築工事／奈良市長	公共	H30.3562
2	HJ734	平城京跡(左-4-5-14)	杉ヶ町75-1、-3	2019.5.16～2019.5.23	220	村瀬	病院新築／医療法人社団生和会	原因者	H30.3499
3	HJ735	平城京跡(左-5-4-2)	大森西町646-1、648-2、649、685-1	2019.6.24～2019.10.29	1216	安井	JR奈良駅南特定土地区画整理事業／奈良市長	公共	H12.3145
4	HJ736	平城京跡(左-4-4-3)	三条松町374番1	2019.9.24～2019.10.21	196	高岡	共同住宅新築／株式会社エンジェルウィン	原因者	H30.3321
5	HJ737	平城京跡(左-4-4-10)	三条宮前町283-1、283-2、283-3	2019.12.13～2020.2.21	490	安井	ホテル新築／株式会社東横イン	原因者	H30.3388
6	HJ738	平城京跡(左-5-7-4)・奈良町遺跡	中辻町72番1、74番2の各1部	2019.11.18～2019.11.22	80	中島	宅地造成／株式会社Dear	原因者	H30.3203
7	HJ739	平城京跡(左-5-4-7)	大安寺七丁目670-1、676-11	2019.11.25～2020.2.10	596	高岡	JR奈良駅南特定土地区画整理事業／奈良市長	公共	H12.3145
8	HJ740	平城京跡(左-4-5-9)・奈良町遺跡	三条町489番1、490番1、490番3、530番、531番1、531番2	2019.12.10～2019.12.17	90	中島	ホテル新築／株式会社dhp都市開発	原因者	H31.3036
9	HJ741	平城京跡(右-4-3-15)	平松一丁目828-4他6筆	2020.1.9～2020.2.3	450	村瀬	宅地造成・共同住宅新築／個人	原因者	R元.3316
10	HJ742	平城京跡(右-4-1-8)	四条大路四丁目53番1他3筆	2020.1.28～2020.2.1	93	中島	宅地造成／(株)八洲エイジェント	原因者	R元.3330
11	HJ743	平城京跡(左1-3-12)	法華寺町1359番3他2筆	2020.2.5～2020.2.10	100	村瀬	宅地造成／株式会社吉川商事	原因者	R元.3442
12	HJ744	平城京跡(左4-6-1)・奈良町遺跡	奈良市北向町26番、下三条町8番7、8番9	2020.2.10～2020.2.12	80	中島	宅地造成／個人	原因者	R元.3443
13	AAM1	秋篠阿弥陀谷遺跡・横穴墓群	秋篠町529-12他	2019.10.3～2020.3.18	1751.3	中島・吉田	大和中央道街路整備単独事業／奈良市長	公共	H24.3045
14	DA148	史跡大安寺旧境内	東九条町1416番、1417番の一部	2019.4.12～2019.4.25	56	高岡	戸建て住宅新築・地盤改良／個人	緊急	H31.1175
15	DA149	史跡大安寺旧境内	東九条町1295-1他	2019.7.22～2019.9.18	250	村瀬	範囲確認調査／奈良市教育長	緊急	H31.1011
16	DA150	史跡大安寺旧境内	大安寺四丁目1127番地の一部	2020.1.30～2020.2.21	44	秋山	個人住宅新築／個人	緊急	R元.1123
17	GG77	平城京跡・元興寺跡・奈良町遺跡	勝戸町1-2、1-3、1-4の一部	2019.6.5～2019.6.12	10	村瀬	個人住宅新築／個人	緊急	H30.3529
18	KF3	平城京跡・興福寺跡・奈良町遺跡	元林院町25他	2019.9.30～2019.10.3	41	中島	店舗新築／中川政七商店	原因者	H31.3028
19	MI3	南市推定地	紀寺町797-1他	2019.4.8～2019.4.17	100	村瀬	宅地造成／ベル不動産コンサルティング株式会社	原因者	H30.3439
20	MK8	南紀寺遺跡	南紀寺町二丁目260番1、261番	2019.4.11～2019.4.23	86.5	安井	宅地造成／(株)飯田産業	原因者	H30.3471
21	TOM3	富雄丸山古墳	丸山一丁目1079番地の239	2019.10.21～2019.12.20	275	村瀬	範囲確認調査／奈良市長	緊急	R元文保1146

令和元（2019）年度 奈良市教育委員会実施 小規模・試掘調査一覧

回数	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積 (㎡)	事業者	事業内容	事業区分	届出受理 番号
2019-1	平城京跡(左-2-7-11・12)・奈良町遺跡	北半田中町18番地、19-1の一部	2019.5.9	8	住都営繕(株)	事務所新築	原因者	H31.3037
調査結果：鎌倉時代の土坑確認								
2019-2	平城京跡・興福寺跡・奈良町遺跡	元林院町25他	2019.5.14	8	(株)中川政七商店	店舗新築	原因者	H31.3028
調査結果：平安時代の柱穴確認 本調査KF3次を実施								
2019-3	奈良町遺跡	春日野町160番15の一部	2019.8.26	22	春日大社	職員公舎新築	原因者	R1.3180
調査結果：遺構なし								
2019-4	平城京跡(左-5-2-1)	法蓮町323番1,323番3～13	2019.10.8	7.5	(株)吉川商事	宅地造成	原因者	R1.3220
調査結果：遺構なし								
2019-5	古市桜谷遺跡・古市城跡	古市町93番1	2020.2.3	12	社会福祉法人こぶしの会	生活支援援助施設新築	原因者	R1.3432
調査結果：時期不明の小柱穴確認								
2019-6	平城京跡(左-2-4-14)	疋田町一丁目3-1・2・3・7、3-3、3-4各一部	2020.3.23	37.5	(株)英和	賃貸住宅新築	原因者	R1.3403
調査結果：時期不明の土坑確認								

※平城京跡に付している(○-○-○-○)は、○京○条○坊○坪の略である。



令和元（2019）年度 発掘調査位置図（過年度調査で本書報告分を含む）

# 目次

巻首図版	I～VIII
例言・目次	i～v
第1章 令和元(2019)年度 埋蔵文化財発掘調査概要報告	
1. 平城京跡(左京三条六坊十坪)の調査 HJ第722・729次	3
2. 平城京跡(左京一条三坊十二・十三坪)の調査 HJ第733・743次	16
3. 平城京跡(左京四条五坊十四坪)の調査 HJ第734次	25
4. 平城京跡(左京五条四坊二坪)の調査 HJ第735次	28
5. 平城京跡(左京四条四坊三坪)の調査 HJ第736次	36
6. 平城京跡(左京四条四坊十坪)の調査 HJ第737次	39
7. 平城京跡(左京五条七坊四坪)・奈良町遺跡の調査 HJ第738次	43
8. 平城京跡(左京四条五坊九坪)・奈良町遺跡の調査 HJ第740次	46
9. 平城京跡(右京四条三坊十五坪・西三坊大路)の調査 HJ第741次	48
10. 平城京跡(右京四条一坊八坪)の調査 HJ第742次	55
11. 平城京跡(左京四条六坊一坪)・奈良町遺跡の調査 HJ第744次	57
12. 秋篠阿弥陀谷遺跡・横穴墓群の調査 AAM第1次	58
13. 史跡大安寺旧境内の調査	89
(1) 六条大路の調査 DA第149次	90
(2) 禅院食堂并大衆院の調査 DA第150次	95
14. 元興寺跡・奈良町遺跡の調査 GG第77次	97
15. 興福寺跡・奈良町遺跡の調査 KF第3次	99
16. 南市推定地の調査 MI第3次	101
17. 南紀寺遺跡の調査 MK第8次	108
18. 令和元年度実施 遺跡有無確認踏査一覧	110
19. 令和元年度実施 工事立会一覧	110
第2章 令和元(2019)年度 埋蔵文化財保存活用・学習推進事業報告	119
第3章 資料報告	
菅原東遺跡出土の石製品・玉類	129





---

## 第 1 章 令和元 (2019) 年度 埋蔵文化財発掘調査概要報告

---



# 1. 平城京跡（左京三条六坊十坪）・奈良町遺跡の調査 第 722・729 次

事業名	共同住宅新築 (722 次)・店舗新築 (729 次)	調査期間	平成 30 年 4 月 16 日～ 4 月 27 日(722 次) 平成 30 年 10 月 15 日～ 11 月 16 日(729 次)
届出者名	個人 (722 次) 大和情報サービス株式会社 (729 次)	調査面積	49㎡ (722 次)・100㎡ (729 次)
調査地	中筋町 35 番 3 (722 次) 西御門町 15-1 (729 次)	調査担当者	中島和彦

## I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京三条六坊十坪の南西部分にあたり、近接して実施した 2 件の発掘調査成果を合わせて報告する。

十坪内の発掘調査は過去 4 回行われており、高天町で実施した HJ 第 559 次調査では、奈良～江戸時代に至る各時期の遺構を約 1200 基確認しており、周辺一帯は中近世の遺構の分布密度の高い地域である。

今回 2 件の発掘調査でも、奈良時代のみならず中世以降の遺構が確認されると想定され、古代から近世に至る土地利用の変遷の解明を目的として調査を実施した。

## II 基本層序

発掘区内の層序は、各時期の遺構・整地土が複雑に重層して様でないが、各時期の整地土単位で概説する。

第 722 次調査 上から近現代の造成土 (約 0.2 m)、整地土 3 (江戸時代前半～中頃・0.2 m)、整地土 2 (室町～江戸時代前半・0.3 m)、整地土 1 (鎌倉時代・0.15 m) とつづき、地表下約 0.85 m で明黄橙色粘土の地山となる。地山面の標高は約 82.5 m である。

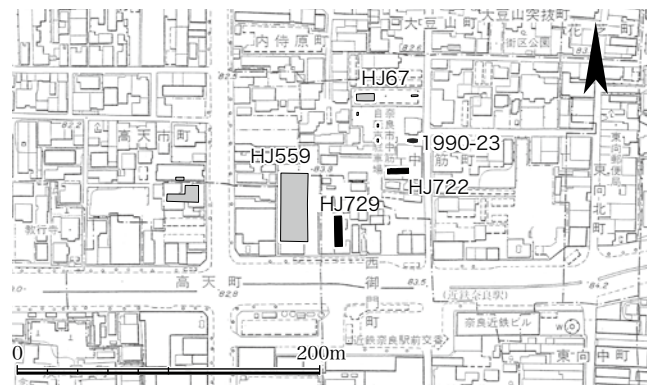
遺構検出は整地土 3 上面 (上層) と地山上面 (下層) で 2 回行った。また、建物の基礎掘削深度の関係上、遺構は現地地表下 0.9 m までしか掘り下げておらず、一部で底を確認したにとどまる。

第 729 次調査 上から近現代の造成土 (約 0.2 m)、整地土 6 (江戸時代後半・0.2 m)、整地土 5 (江戸時代中頃・0.2 m)、整地土 4 (室町時代後半・0.2 m)、整地土 3 (室町時代前半・0.3 m)、整地土 2 (平安時代後半・0.2 m)、整地土 1 (奈良時代・0.05 m) とつづき、地表下約 1.3～1.4 m で明黄橙色粘土の地山となる。地山面の標高は約 81.9～82.0 m である。

遺構検出は整地土 6 上面 (上層) と整地土 1 上面 (中層)、地山上面 (下層) で 3 回行い、排土置き場の関係から、発掘区を南北 2 回に分けて行った。

## III 検出遺構

検出遺構には、柱穴、土坑、井戸、石組遺構、埋甕遺構等が約 260 基ある。詳細は検出遺構一覧表に記し、



HJ 第 722・729 次調査 調査地位位置図 (1/5,000)

各時代毎に概要を記す。

### 奈良時代の遺構

第 722 次調査 溝 1 条、建物としてまとまらない柱穴 4 基がある。柱穴は深さ約 0.15 m である。

第 729 次調査 溝 1 条、土坑 1 基がある。S D 19 は東西方向の溝で、西でやや南に傾く。宅地内の溝としては規模が大きく、坪内 1/8 等の分割線上にも位置しないため性格は不明。

### 平安時代の遺構

第 722 次調査 12 世紀後半の土坑 1 基がある。

第 729 次調査 掘立柱建物 4 棟とまとまらない柱穴約 70 基、土坑多数、素掘小溝 6 条がある。

S K 20 は浅い窪み状の土坑で、9 世紀末～10 世紀初の土器がまとまって出土した。

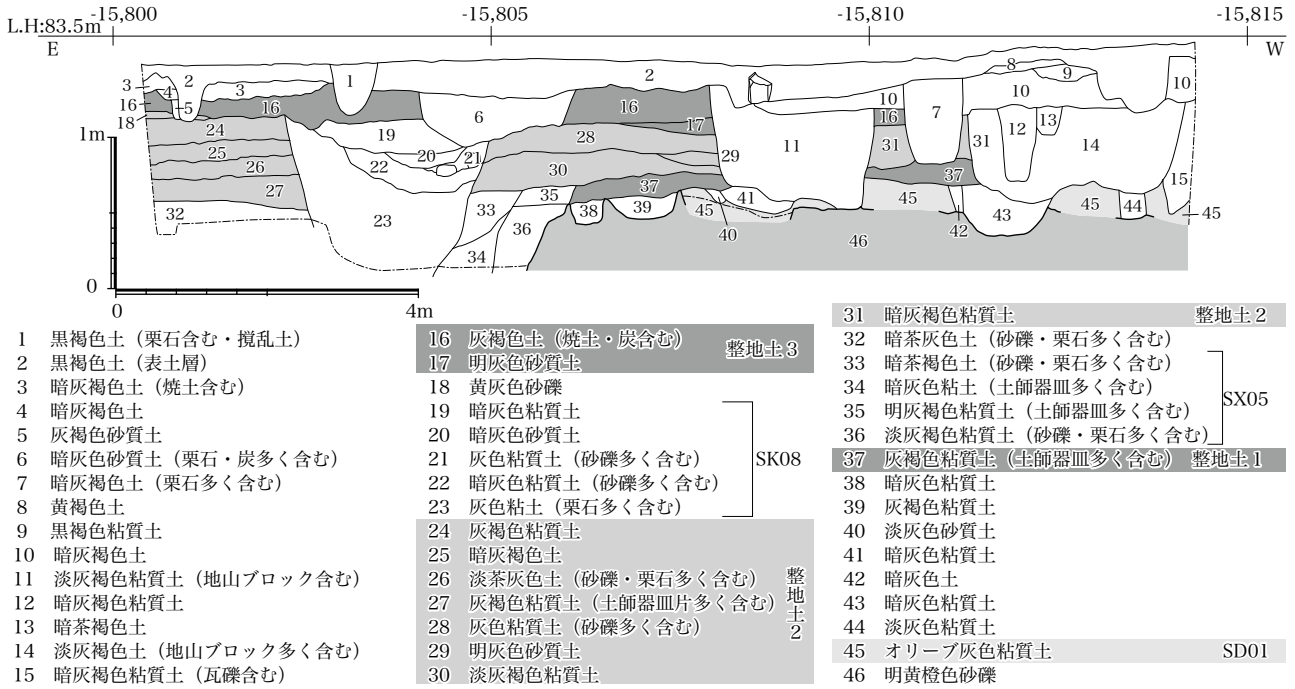
掘立柱建物 S B 21～24 は、いずれも深さ約 0.4～0.5 m の深い柱掘方が特徴で、底には地下式礎石がある。出土土器から 12・13 世紀頃のもので、他の小柱穴も同時期のものと考えられる。

土坑はいずれも平面不整楕円形で、発掘区東半部に南北に連なる。土師器Ⅲ・瓦器碗が完形で出土するもの (S K 25・26) がある。

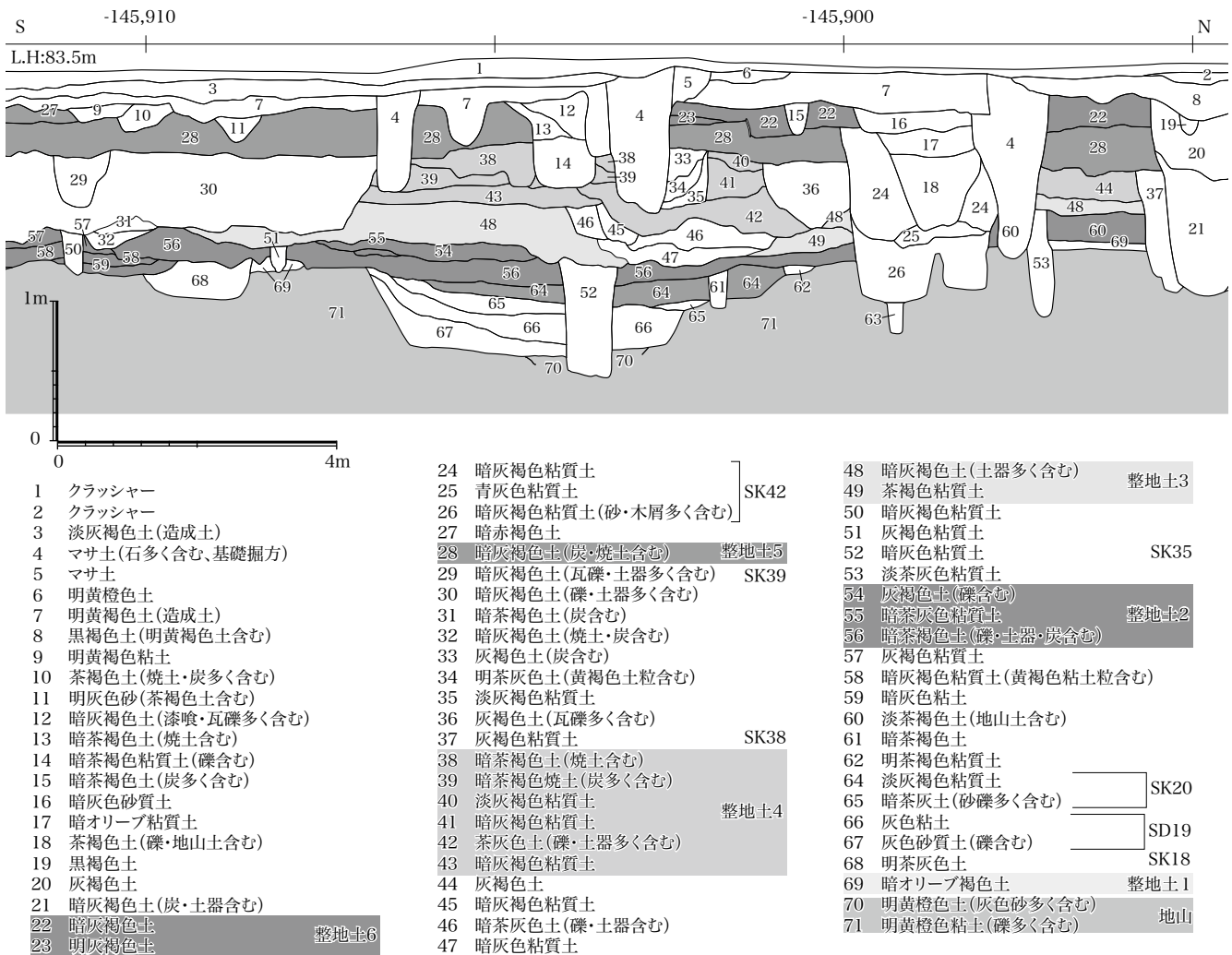
素掘小溝は南北方向の溝で、12 世紀頃の土器が出土するが、重複関係から S K 25・26 等の土坑より古い。

### 鎌倉時代の遺構

第 722 次調査 土坑 2 基、溝状遺構 1 基がある。S K 03・04 は深さ 0.2 m の浅い土器廃棄土坑で、坑内は



HJ 第722次調査 南壁土層図(横1/100・縦1/50)



HJ 第729次調査 西壁土層図(横1/100・縦1/50)

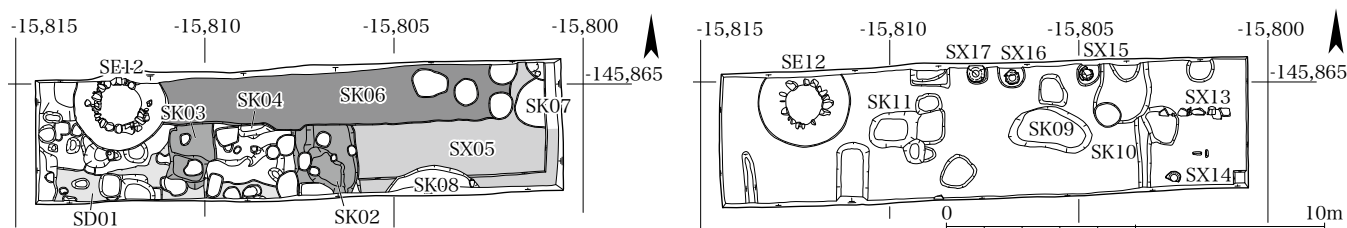
13世紀中頃の土師器皿で埋めつくされる。S X 05は南北方向の溝状遺構の西肩部分と考えられ、幅5.5m以上、深さ0.5m以上ある。調査地北側約20mの試掘調査(1990-23)で同時期の溝状遺構(深さ約0.8m)の東肩を検出しており、同一の遺構と考えれば、幅約9.0m、長さ約20m以上の南北溝が復原できる。試掘調査地の更に北側約30mの発掘調査(HJ第67次調査)では、奈良時代の東六坊坊間東側溝(S D 01)が延長上で検出されており、古代の条坊を踏襲した溝と考えられる。

第729次調査 土坑が多数ある。13世紀～14世紀初頭頃のもので、それ以降江戸時代までの間の遺構は検

出されていない。S K 32は土器廃棄土坑で、13世紀初めの土器が完形で多数出土した。またS K 36とS K 37は、幅0.4m以上、深さ約0.6mの南北方向の溝状の遺構の西肩と考えられ、南北に連なる。出土土器の型式と組成に僅かな差があり、埋没の時期・過程に差が認められるが、本来は一連の遺構の可能性はある。

江戸時代の遺構

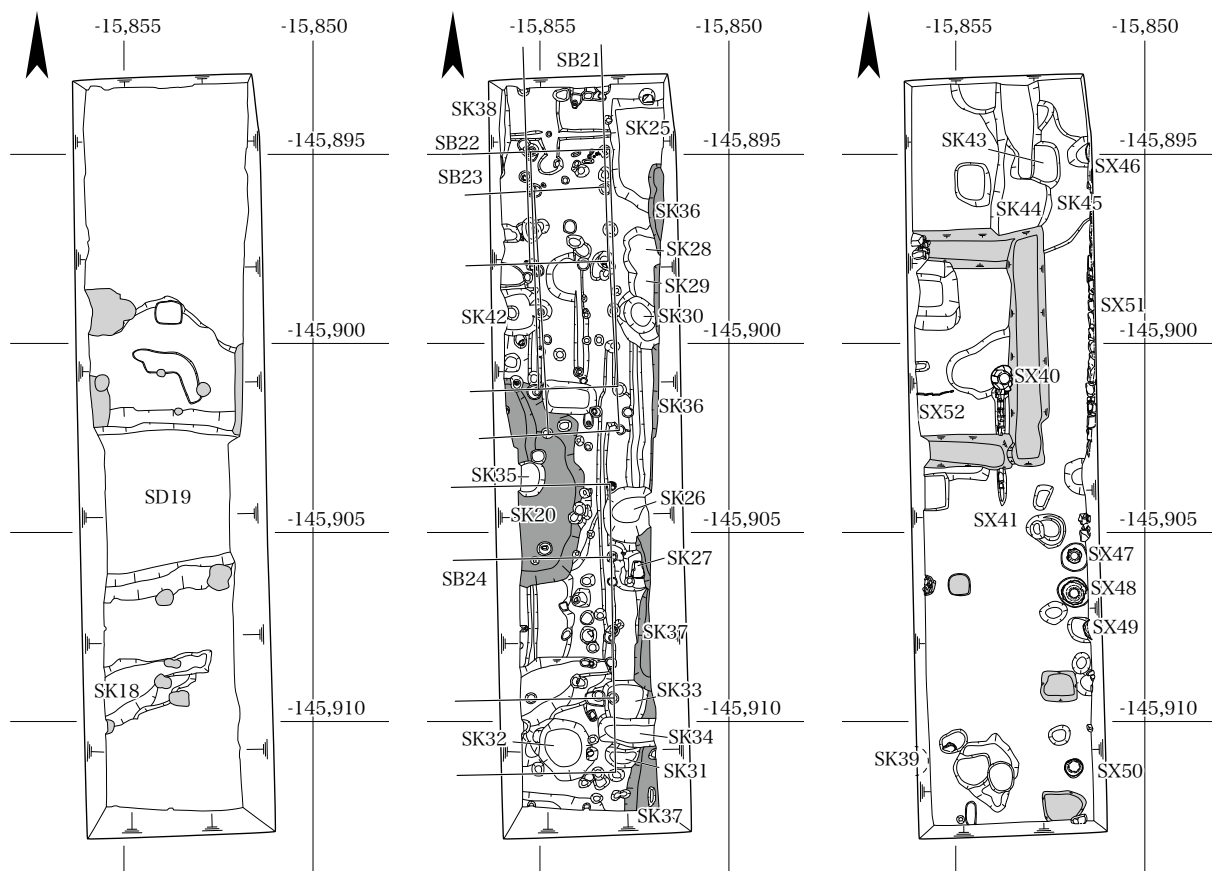
第722次調査 土坑15基、石組井戸1基、埋甕遺構4基、石列1条がある。S K 06は、東西9.5m以上、南北3.3m以上、深さ1.0mの大規模な土坑で、発掘区北半の大部分を占める。埋土は焼土と炭で、2次焼成を



下層遺構平面図

HJ 第722次調査 発掘区平面図 (1/200)

上層遺構平面図



下層遺構平面図  
網掛け部分は中世以降の遺構

中層遺構平面図  
網掛け部分は遺構  
SK20・36・37

上層遺構平面図  
網掛け部分は近代以降の攪乱

HJ 第729次調査 発掘区平面図 (1/200)

HJ 第722・729次調査 遺構一覧表1

遺構番号	平面形等	規模 (m)	深さ (m)	時期	主要出土遺物	備考		
HJ 第722次	下層	SD01	東西溝	幅0.9以上	0.2	8世紀	砥石	
		SK02	不整形?	東西1.4×南北2.0以上	0.3	12世紀後半	土師器皿、瓦器椀・皿、須恵器鉢(東播産)、東海産陶器甕、白色土器高杯、白磁碗、丸瓦、平瓦	
		SK03	不整形?	東西1.2×南北1.7以上	0.2	13世紀中頃	土師器皿、丸瓦、平瓦、方形石硯、鉄釘?、壁土、滓?	土師器皿が大量に出土
		SK04	不整形?	東西1.0以上×南北0.3以上	0.2	13世紀中頃	土師器皿、丸瓦、平瓦、鉄釘、鞆羽口、壁土	土師器皿が大量に出土
		SX05	南北溝?	幅5.5以上×長さ3.3以上	0.5以上	13世紀前～中頃	土師器皿、瓦器椀、白磁碗、丸瓦、平瓦、土管、円盤形土製品	試掘90-23次調査成果と合わせて、幅約9.0m、長さ20m以上の南北溝と考えられる。
		SK06	長方形?	東西9.5以上×南北1.7以上	1.0	17世紀中頃	土師器皿、瓦質土器捏鉢、国産陶器(肥前産椀・皿・壺、備前産壺)、国産磁器(肥前産碗)、白磁皿、青花盤・皿・合子、焼塩壺、軒平瓦(平安後期)、丸瓦、平瓦、鉄釘、砥石、壁土	
		SK07	楕円形?	東西1.2以上×南北1.2	0.6以上	17世紀中頃	瓦質土器鍋?、国産陶器(備前産甕)、丸瓦	
		SK08	楕円形?	東西2.0以上×南北0.9以上	0.9以上	17世紀頃	土師器皿・羽釜、瓦質土器捏鉢、東海産陶器甕、丸瓦、平瓦	
	上層	SK09	不整形楕円形	東西2.2×南北1.2	0.3	18世紀前～中頃	国産陶器(肥前産椀・皿・瓶、備前産甕、軟質施釉陶器鬘皿)、国産磁器(肥前産碗)、軒丸瓦(中世)、軒平瓦(中世)、丸瓦、平瓦、棧瓦、土管、煙管、鉄釘、砥石	
		SK10	円形	径0.7	0.2	18世紀中頃	土師器皿、瓦質土器深鉢、国産陶器(信楽産搦鉢・甕、肥前産椀、備前産甕、瀬戸美濃産椀)、国産磁器(肥前産碗)、土人形?、軒丸瓦(近世)、軒平瓦(近世)、丸瓦、平瓦、棧瓦、道具瓦	
		SK11	隅丸方形	東西2.2×南北0.12	0.2	17世紀末～18世紀初	土師器皿・炮烙、瓦質土器深鉢、国産陶器(肥前産椀、信楽産搦鉢、備前産甕)、国産磁器(肥前産碗・皿)、丸瓦、平瓦、銭貨(寛永通宝1)、鉄釘、不明銅製品、砥石	
		SE12	円形	径2.5	1.2以上	江戸時代以降		円形石組井戸枠、内法1.0m
		SX13				江戸時代以降	瓦質土器鉢類、国産陶器(備前産甕)	東西方向石列、長さ1.9m以上
		SX14	円形?	不明	0.1	17世紀中頃	土師器皿、瓦質土器深鉢	埋甕遺構、瓦質土器深鉢径0.3m、残存0.1m
		SX15	円形	径0.6	0.1	江戸後半以降	瓦質土器深鉢	埋甕遺構、瓦質土器深鉢径0.3m、残存0.1m
		SX16	円形	径0.7	0.1	江戸後半以降	国産施釉陶器甕(常滑産?)	埋甕遺構、国産施釉陶器甕径0.4m、残存0.1m
		SX17	円形	径0.55	0.2	江戸後半以降	国産施釉陶器甕(常滑産?)	埋甕遺構、国産施釉陶器甕径0.45m、残存0.2m
HJ 第729次	下層	SK18	不整形	東西2.4以上×南北1.0	0.3	8世紀後半	土師器杯・皿・椀・高杯・鉢・盤・壺・甕、須恵器杯・蓋・皿・高杯・鉢・壺・甕、黒色土器杯?、製塩土器、丸瓦、平瓦、不明銅製品、壁土	
		SD19	東西方向	幅5.0×長さ5.0m以上	0.5	8世紀末～9世紀初	土師器杯・皿・椀・高杯・壺・甕・籠、須恵器杯・蓋・皿・鉢・盤・壺・甕、製塩土器、丸瓦、平瓦、砥石	
		SK20	不整形楕円形	東西1.8以上×南北5.5	0.2	9世紀後半～10世紀初	土師器杯・皿・椀・甕、黒色土器椀・鉢・甕、緑釉陶器椀、灰釉陶器椀、丸瓦、平瓦、	
	中層	SK25	不整形	東西1.5以上×南北3.0	0.4	12世紀前半	土師器皿、瓦器椀	完形の土器出土
		SK26	楕円形	東西1.3以上×南北1.5	0.6	12世紀後半	土師器皿・高台付皿・羽釜、瓦器椀・皿、瓦質土器浅鉢?、東海産陶器皿、白磁碗・皿・壺、丸瓦、平瓦、木製品(横櫛・箸・栓)、壁土、桃種	完形の土器多量に出土
		SK27	不整形楕円形	東西1.0以上×南北1.0	0.2	12世紀後半	土師器皿、瓦器皿、東海産陶器甕、凝灰岩	
		SK28	不整形楕円形	東西1.0以上×南北1.2	0.6	12世紀以降	土師器皿	
		SK29	不整形楕円形	東西0.8以上×南北0.5	0.2	12世紀以降	土師器皿	
		SK30	楕円形	東西1.2以上×南北1.5	0.2	12世紀以降	土師器皿	
		SK31	不整形楕円形	東西0.9×南北0.7	0.3	12世紀以降	土師器皿・羽釜、黒色土器皿、平瓦、	
		SK32	楕円形	東西1.4以上×南北1.6	0.3	13世紀前半	土師器皿・高台付皿・三足付皿・蓋・羽釜、瓦器椀・皿、須恵器(東播産鉢・甕、産地不明甕)、東海産陶器甕、白磁碗・皿、軒丸瓦(中世)、軒平瓦(平安)、丸瓦、平瓦、円盤形土製品、鉄釘、鞆羽口?、壁土	完形の土器多量に出土
		SK33	不整形	東西1.1×南北1.0	0.2	13世紀前半	土師器皿・羽釜、瓦器椀・皿、瓦質土器羽釜、須恵器鉢(東播産)・鉢(産地不明)、東海産陶器甕、白磁碗、青磁碗、軒丸瓦(中世)、丸瓦、平瓦、鉄釘、壁土	完形の土器出土
		SK34	楕円形	東西1.5以上×南北0.8	0.5	13世紀前半	土師器皿、瓦器椀	
SK35	楕円形	東西0.8以上×南北0.9	0.8	13世紀中頃	土師器皿、瓦器椀、瓦質土器鉢、東海産陶器甕、白磁碗、青磁碗、平瓦、温石			

HJ 第722・729次調査 遺構一覽表2

遺構番号	平面形等	規模 (m)	深さ (m)	時期	主要出土遺物	備考		
HJ 第729次	中層	SK36	不明	東西 0.4 以上 × 南北 9.0 以上	0.6	13 世紀末	土師器皿・羽釜、瓦質土器浅鉢・鉢類、須恵器鉢・甕(東播産)、東海産陶器壺・甕、白色土器高杯、白磁碗・皿、青白磁壺、緑釉陶器、灰釉陶器壺、軒丸瓦(中世)、軒平瓦(平安・中世)、熨斗瓦、丸瓦、平瓦、石鍋、木製品(箸)、桃種	土師器皿が大量に出土
		SK37	不明	東西 0.8 以上 × 南北 7.5 以上	0.6	13 世紀末	土師器皿・高台付皿・羽釜、瓦質土器蓋・鉢類、須恵器鉢・甕(東播産)・甕(産地不明)、東海産陶器鉢・甕、白磁碗、軒丸瓦(中世)、軒平瓦(平安)、丸瓦、平瓦、円盤形土製品、石鍋、木製品(箸)、鉄釘、壁土、桃種	土師器皿が大量に出土
		SK38	不明	東西 0.3 以上 × 南北 2.2	1.4	17 世紀後～18 世紀	土師器皿、国産磁器(肥前産皿)、国産陶器(信楽産搦鉢・鉢、備前産搦鉢) 丸瓦、平瓦、	
	上層	SK39	不明	東西不明 × 南北 0.8	0.4	17 世紀前半	土師器皿・羽釜、瓦質土器深鉢・蓋、国産磁器(肥前産碗)、国産陶器(肥前産碗、丹波産盤・信楽産搦鉢、備前産甕)、軒丸瓦(近世)、丸瓦、平瓦、鉄釘、壁土	
		SX40	円形	径 0.7	1.2	17 世紀後～18 世紀	土師器皿、瓦質土器深鉢、国産磁器(肥前産碗・皿・仏飯器・鉢)、国産陶器(肥前産碗、信楽産搦鉢・甕、備前産甕、瀬戸美濃産碗・深鉢、京都産碗・鉢)、道具瓦、丸瓦、平瓦、棧瓦、円盤形土製品、鉄釘、壁土、骨	瓦質土器深鉢、径 0.7 m、残存 1.1 m
		SX41	南北方向	幅 0.3	0.2	17 世紀後～18 世紀	瓦質土器土管、軒丸瓦(中世)、丸瓦、平瓦、砥石、鉄釘	暗渠遺構、瓦質土器土管 7 本以上、長さ 3.0 m 以上、
		SK42	楕円形	東西 0.9 以上 × 南北 2.0	1.2	18 世紀中頃	土師器皿、瓦質土器深鉢、国産磁器(肥前産碗・小碗・皿・杯)、国産陶器(肥前産碗、信楽産搦鉢・両手鍋、備前産甕、瀬戸美濃産碗・深鉢、京都産碗・鉢)、軒丸瓦(中世)、丸瓦、平瓦、木筒、墨書木製品、木製品(曲物・箸)、漆碗、檜皮、壁土、貝	墨書木製品「南都諸白」
		SK43	不整形	東西 1.3 × 南北 1.2	0.3	18 世紀後半	土師器皿・高台付皿、瓦質土器鉢・焜炉、国産陶器(信楽産碗・鍋・搦鉢、備前産徳利、堺産搦鉢、軟質施釉陶器皿)、国産磁器(肥前産碗・小碗・皿・仏飯器)、軒丸瓦(中世)、丸瓦、平瓦、棧瓦、鉄釘	
		SK44	不整形	東西 1.5 × 南北 1.5 以上	0.4	19 世紀前半	土師器皿、瓦質土器鉢、国産磁器(肥前産碗・皿・水滴)、国産陶器(肥前産碗・瓶、信楽産搦鉢、備前産甕)、軒丸瓦(中世・近世)、軒平瓦(近世)、文字瓦、丸瓦、平瓦、棧瓦、鉄釘、銅線、石硯、骨、貝	
		SK45	不整楕円形	東西 2.6 以上 × 南北 3.0	0.05	19 世紀前半～中頃	土師器皿、瓦質土器鉢、国産陶器(信楽産碗・鉢・鍋・搦鉢・壺、軟質施釉陶器焜炉)、国産磁器(肥前産碗・皿・仏飯器・盤、瀬戸産碗)、軒丸瓦(近世)、刻印瓦、丸瓦、平瓦、棧瓦、銅製品(十能・針金・用途不明品)、鉄釘、ガラス片、骨角器(用途不明)、魚骨	「安永四年」(1775 年) 墨書信楽産施釉陶器壺出土
		SK46	円形	径 1.0	1.0	18 世紀後半	土師器皿・炮烙、瓦質土器深鉢、国産磁器(肥前産碗・皿)、国産陶器(信楽産甕・灯明皿、備前産甕)、鉄釘、不明鉄製品、壁土、骨	埋甕遺構、備前産陶器甕(17 世紀)、径 1.0 m、残存 0.6 m
		SX47	円形	径 0.7	0.3	18 世紀後半	信楽産施釉陶器甕、不明銅製品	埋甕遺構、信楽産施釉陶器甕、径 0.4 m、残存 0.2 m
		SX48	円形	径 0.8	0.9	19 世紀前半	信楽産施釉陶器甕、丸瓦、平瓦、	埋甕遺構、信楽産施釉陶器甕、径 0.65 m、残存 0.8 m
		SX49	円形	径 0.8	0.7	19 世紀前半	信楽産施釉陶器甕、	埋甕遺構、信楽産施釉陶器甕、径 0.55 m、残存 0.4 m
		SX50	円形	径 0.5	0.2	19 世紀前半	瓦質土器深鉢、平瓦、	埋甕遺構、瓦質土器深鉢、径 0.45 m、残存 0.1 m
		SX51				19 世紀後半?		南北方向石列、長さ 7.0 m 以上、西側に石列の面を揃える
SX52				19 世紀前半	国産陶器(備前産甕)、平瓦	東西方向陶片列、長さ 1.0 m 以上		

遺構番号	棟方向	規模 (間)		桁行全長	梁行全長	柱間寸法 (m)		廂の出	備考	
		桁行 × 梁行	(m)	(m)	桁行	梁行	(m)			
HJ 第729次	中層	SB21	東西?	2 以上 × 2 以上	2.1 以上	4.2 以上	2.1	2.2 等間		総柱建物? 地下式礎石
		SB22	東西?	2 以上 × 3	2.1 以上	6.3	2.1	2.1 等間		総柱建物? 地下式礎石
		SB23	東西?	2 以上 × 3	1.9 以上	6.3	1.9	2.1 等間		総柱建物? 地下式礎石
		SB24	東西?	2 以上 × 2	2.1 以上	3.8	2.1	1.9 等間	南北とも 1.9	南北両面廂付建物? 地下式礎石

うけた土器も出土し、火災後の塵芥処理土坑と考えられる。直近の災害としては元和9年(1620年)の南都の火災があるが、出土土器からは明確にしがたい。

第729次調査 土坑23基、埋甕遺構6基、暗渠遺構1条、石積遺構1、陶片列1条がある。

江戸時代後半の土坑SK43等は発掘区北側に集中し、

南側道路に北面する宅地奥側に掘られた塵芥処理用と考えられる。また18世紀中頃の土坑SK42からは、「南都諸白」の墨書木製品が出土している。埋甕遺構SX40は瓦質土器深鉢を埋甕とし、胴部中位に孔を開け南側に暗渠遺構SX41を接続する。SX41は瓦質土器土管を7本以上接続させて、南側から甕内に水を導く。





HJ 第722次調査 発掘区全景(下層・西から)



HJ 第722次調査 発掘区全景(上層・西から)



HJ 第729次調査 発掘区南半全景(下層・北から)



HJ 第729次調査 発掘区北半全景(下層・南東から)



HJ 第729次調査 発掘区南半全景(中層・北から)



HJ 第729次調査 発掘区北半全景(中層・南から)



HJ 第729次調査 発掘区南半全景(上層・北から)



HJ 第729次調査 発掘区北半全景(上層・北から)

## IV 出土遺物

出土遺物は、第722次調査が土器類20箱・瓦類7箱・その他1箱、第729次調査が土器類60箱・瓦類24箱・その他4箱ある。種類は多様で、奈良～近代までの各時期の土器・瓦類の他、銭貨10点(乾元大宝?1、元豊通寶2、寛永通寶5、銭文不明2)石製品(石鍋、石硯、砥石)、墨書木製品3、木製品(漆椀・横櫛・箸等)、金属製品(煙管、鉄釘)などがある。各遺構出土遺物は遺構一覧表に載せ、以下古代・中世の土器と近世の墨書木製品について記す。(中島和彦)

SK18出土土器 土師器が379点、須恵器が118点、黒色土器A類が2点、製塩土器が18点ある。製塩土器を除く土器類の出土比率は、土師器が76.0%、須恵器が23.6%、黒色土器A類が0.4%である。この中でも土師器食器類が過半数以上を占める。

土師器食器類のうち口径を測定できたものは、杯Aが12個体、皿が13個体、椀C2個体、杯カ皿1個体、杯B蓋1個体で、掲載したのは22個体である。

杯Aは、口径15.0cm～22.0cmまでのものがある。外面調整は、口縁部をヨコナデするa手法(2・6・7)と底部から口縁部下半までを削るb手法のもの(3・8)がある。2・8はヨコナデした後、ヘラミガキを施している。1・4・5の調整は不明。内面にラセン状暗文や一段の斜放射状暗文が施されたもの(2・3・6～8)がある。皿は、口径14.8～2.8cmまでのものがある。皿Aは、通常口縁部の形態からA・B形態の2つに大別されている。16～19のような口縁端部が内傾するものは、皿器形であっても杯Cに分類されることが多いが、本稿では皿Aの中のC形態として分類しておくことにする。これらは大半がa手法であるが、9・11・19はb手法。11は口縁部半ばまでケズリが及び、19はヨコナデ後、ヘラミガキが施されている。12・13・15・16・19の口縁部内面に一段の斜放射状暗文がある。杯B蓋(20)は口径18.0cm。頂部外面はケズリ後丁寧なヘラミガキで仕上げられている。椀C(21)は口径13.6cm、22は口径14.7cm・器高4.0cm。22は口縁部内面に、横方向のハケメ痕跡が連続的に残る。体部内面にはコテ状工具のアタリもみられる。土師器食器類のうち、6・8・12・17・19～22は、二次的な被熱によって口縁部及び底部内外面の一部が変色し、灯明皿として使用されたことがわかる。

この他に壺B体部片と甕がある。甕は口径30.0～34.0cmの比較的大型の甕で、6個体分が出土。いずれも煤が付着し、被熱痕跡がみられる。

HJ第729次調査 SK18出土土器点数表

種類	器種	点数	出土比率(%)			
土師器	杯A	88	259	51.9		
	杯B	2				
	杯B蓋	1				
	杯C	1				
	杯A or B	6				
	皿A	37				
	皿C	2				
	杯 or 皿	104				
	椀C	7				
	高杯	8				
	鉢・盤	3				
	壺	1	1	0.2		
	甕	119	119	23.8		
小計		379	76.0			
須恵器	杯A	28	65	13.0		
	杯B	7				
	杯A or B	11				
	杯B蓋	7				
	皿C	1				
	杯 or 皿	10				
	高杯	1				
	鉢	8			8	1.6
	壺	29			29	5.8
	甕	16	16	3.2		
小計		118	23.6			
黒色土器A類	杯 or 皿	2	2	0.4		
小計		2	0.4			
合計		499	100.0			

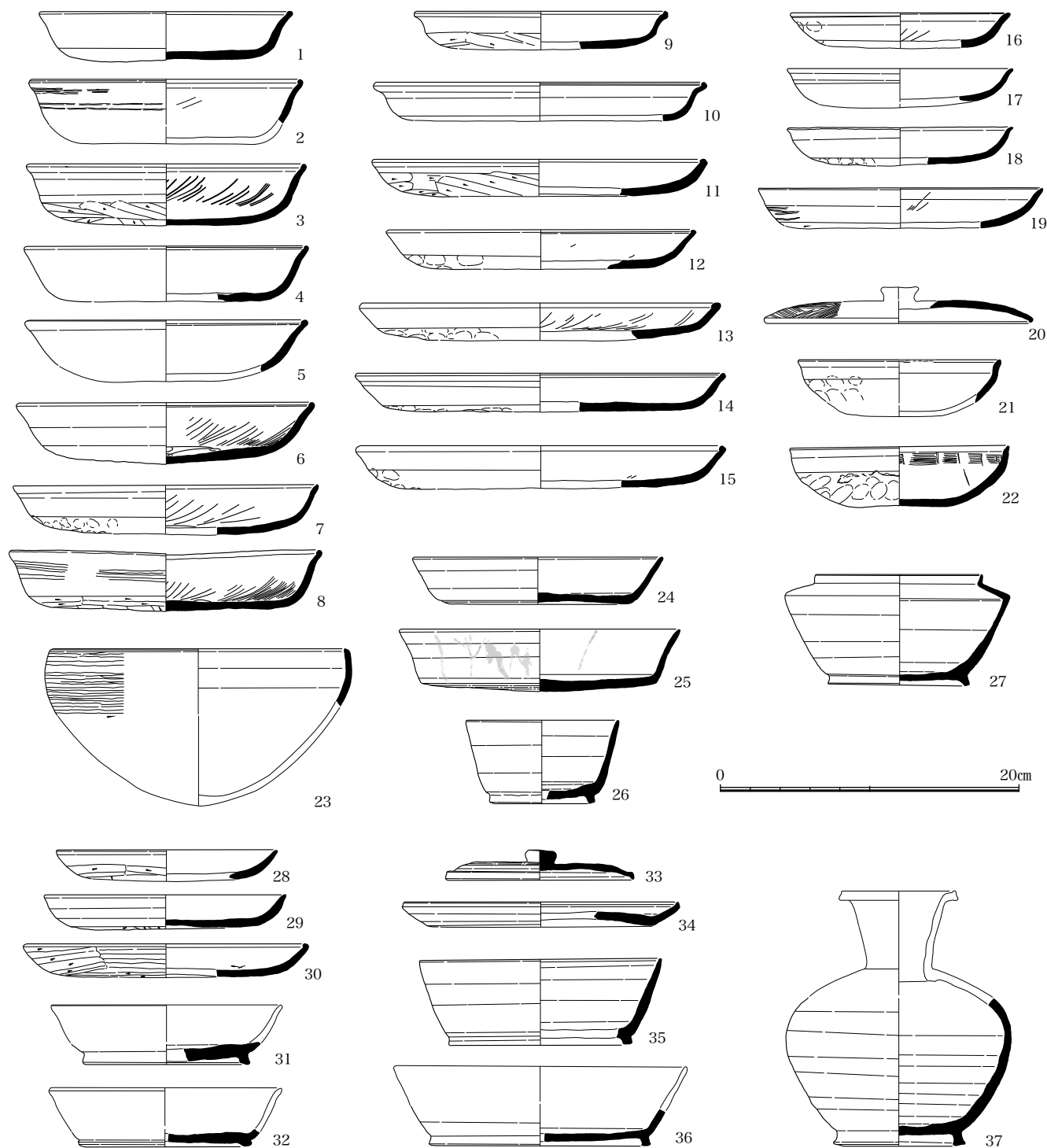
須恵器の出土量は118点と少なく、小破片が多い。このうち比較的残存状態の良好な5点を掲載した。杯Aは、24が口径16.8cm・器高3.2cm、25が口径18.8cm・器高4.2cm。24の底部外面はヘラキリ、25はロクロケズリ調整で体部内外面に火禿が残る。杯B(26)は口径10.2cm・器高5.6cm、底部外面はヘラ切りのままである。鉢A(23)は底部が尖底になる器形である。体部外面はロクロケズリ後、ヘラミガキが丁寧に施されている。焼成時に重ね焼きされたようで、口縁部から体部外面上半まで黒灰色に変色している。壺E(27)は口径11.2cm・器高7.4cm、肩部最大径15.1cm。底部外面はヘラキリ後、ロクロナデ、体部内外面もロクロナデ調整である。

黒色土器A類は杯カ皿の体部片2点が出土している。

この土器群の時期は、形態的な特徴や法量等からみて、8世紀後半でも比較的古い時期のものと考えられる。

SD19出土土器 土師器が146点、須恵器が180点あり、出土比率は44.8:55.2%で、須恵器の方が若干多い。中でも量的に多いのは食器類で、土師器が100点(全体の30.7%)、須恵器が70点(21.5%)を占める。

土師器には、杯A、皿A・C、椀A・C、高杯脚部、壺B・小壺、甕、竈がある。底部部片が多く、実測した

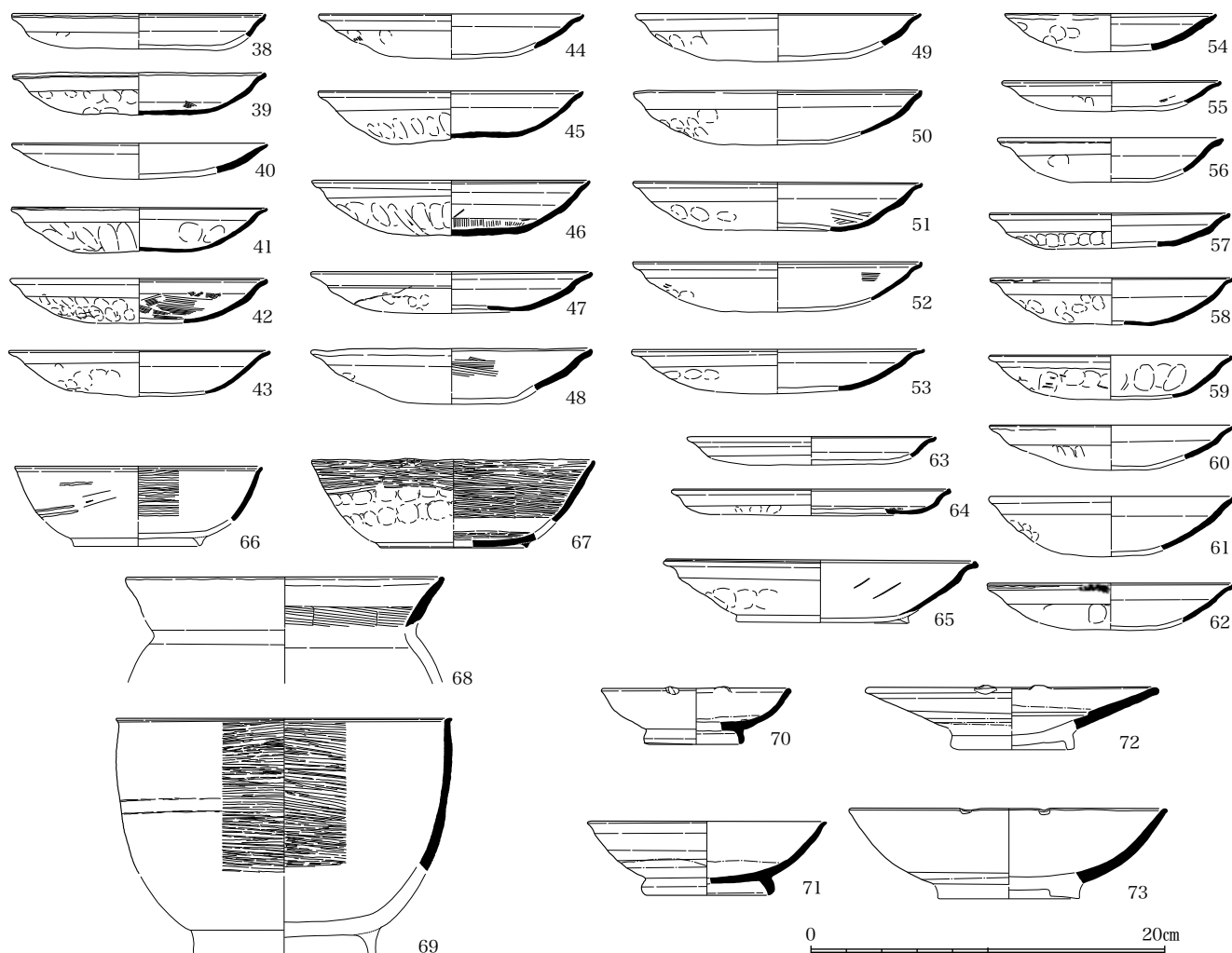


HJ 第729次調査 SK 18・SD 19出土土器 (1/4)

のは皿A 3点である。皿Aは、口縁部B形態 (30) とC形態 (28・29) がある。28・29はb手法、30は底部から口縁部外面全体をヘラケズリ (c手法) で仕上げている。SK18出土皿AのB形態 (11) よりも30の方が器厚が薄く、C形態 (16～18) よりも28・29の方が器高が低くなっている。これらの特徴は、型的にSD19出土遺物の方が新しいことを示していると言えよう。

須恵器には、杯A・B、杯B蓋、皿A・B・C、鉢A・

D、盤、壺L、壺A蓋、甕がある。須恵器も小破片が多く、実測したものは7点だけである。杯B (31・32) は底部の器厚が0.5～0.9cmと厚い。底部外面はヘラキリのままである。36はヘラキリ後、底部外面の中央部付近をロクロナデで調整。杯B蓋 (33) はほぼ完形で、口径12.6cm、器高2.0cmを測る。頂部外面はロクロケズリ、墨書があるが判読不明。皿C (34) は底部が焼き歪んでいる。壺L (37) の体部外面下半はロクロケズリ。



HJ第729次調査 SK 20出土土器(1/4)

これらの土器群の時期は、SK 18よりも新しく、8世紀末～9世紀初頭頃と考える。

SK 20出土土器 土師器が328点、黒色土器A類が21点、緑釉陶器2点、灰釉陶器が8点ある。土師器の出土量が全体の91.4%を占め、特に土師器食器類が多い。土師器食器類は、体部外面はオサエ、口縁部をヨコナデ調整で仕上げている。内面にハケメ痕跡がヨコナデで消されずに残っているものもある。器厚は0.2～0.4cmを測る。口径は、杯Aが14.4～16.6cm、碗Aが12.0～14.0cm、皿Aは14.1cmと15.8cmのものがある。

黒色土器A類には、碗(66・67)、鉢(69)、甕(68)が16点あるが、小破片が多い。67は輪花碗で、口縁端部内外面とも丁寧なヘラミガキで仕上げられている。58は口縁部内外面に炭素が吸着しているが、ヘラミガキは観察できなかった。

施釉陶器には、緑釉陶器碗(73)、灰釉陶器碗(70・71)・段皿(72)がある。70・73は輪花碗、72は輪花皿である。73の釉の下にはヘラミガキ痕跡がみられる。

HJ第729次調査 SK 20出土土器点数表

種類	器種	点数	出土比率(%)
土師器	杯A	85	300 83.6
	杯B	1	
	皿A	16	
	碗A	49	
	杯 or 皿 or 碗	149	
	甕	28	28 7.8
小計		328	91.4
黒色土器A類	碗	16	16 4.5
	鉢	4	4 1.1
	甕	1	1 0.3
小計		21	5.8
緑釉陶器	碗	2	2 0.6
灰釉陶器	碗	8	8 2.2
小計		10	2.8
合計		359	100.0

いずれも釉層が薄く、上質な製品とは言い難いものである。灰釉陶器は東海産、緑釉陶器は京都産の製品であろう。

土師器・黒色土器の形態的特徴や法量からみて、9世紀後半～10世紀初頭のものとする。(三好美穂)

S K 32 出土土器 遺物整理箱5箱分、約1700点あり、内訳は別表に記す。

土師器皿はすべて中島・佐藤分類<sup>1)</sup>のA群に属し、口径10cm前後の小皿(74～95)と、口径14cm前後の大皿(96～107)に分かれ、小皿は約230点、大皿は約170点ある。器高が深手の皿は確認できない。胎土の色調は、にぶい橙色を主体とするが、大皿の96はやや白色を帯び、数種のバリエーションが確認できる。94の小皿は、口縁部の片方が内側に大きく湾曲する。焼成時の不良品とも考えられるが、消費地遺跡で出土し何らかの意図が存在するものであろうか。類例を待ちたい。

特異な器形として、108の蓋と109の三足付皿がある。蓋は口径約21.4cmで、通常の皿に比べ器壁が厚手で、天井と口縁部の屈曲も緩やかである。焼成後に径約6mmの孔を外側から1つ中央部に穿孔する。三足付皿は口径約16.7cmで、底部に長さ約2cmの短い三足を貼り付ける。口縁端部は内側につまみ上げる。焼成後に径約8mmの孔を内面から1つ底面に穿孔する。

羽釜は口縁部が外反する大和B型(122)と内湾するH型(121)とがある。121は口縁部の内湾の度合いが小さく直立気味で、口縁端部は外側に折り返して玉縁状に仕上げる。

瓦器椀(114～116)は、口径14cm前後、器高5cm前後である。見込み部には3回転ほどの螺旋状のヘラミガキ、内面には30～40条のヘラミガキ、外面には粗いヘラミガキが施される。高台は断面三角形の低いものである。瓦器皿(111～113)は、口径8cm前後、器高1.8cm前後である。見込み部には8～16条ほどの粗いジグザグ状のヘラミガキが施される。椀・皿とも器形の歪みが目立つ。瓦器椀は川越編年のⅢ-A型式の新しい様相である。110は口縁端部を内側に折り返したコースター状の瓦器皿で、見込み部には18条以上のジグザグ状のヘラミガキが施される。これ1点のみの出土で、瓦器でこの器種の出土例は非常に少ない。

須恵器鉢(117)は東播磨産のもの。東海産陶器壺(118)・甕(120)は外面に自然釉が厚く掛かる。東播磨産の須恵器に比べ、東海産陶器の率が高いのが特徴である。

輸入陶磁器はすべて白磁で、碗には太宰府分類<sup>2)</sup>のIV類(119)とV類がある。

S K 42 出土遺物 133は「南都諸白」の墨書が記された木製品である。幅約8.1cm、最大厚さ1.5cmの長方形の板状で、一方を欠損しており長さ20.5cm分が残る。形態から桶の側板とも考えられるが、墨書面の裏側は部

HJ 第729次調査 S K 32 出土土器点数表

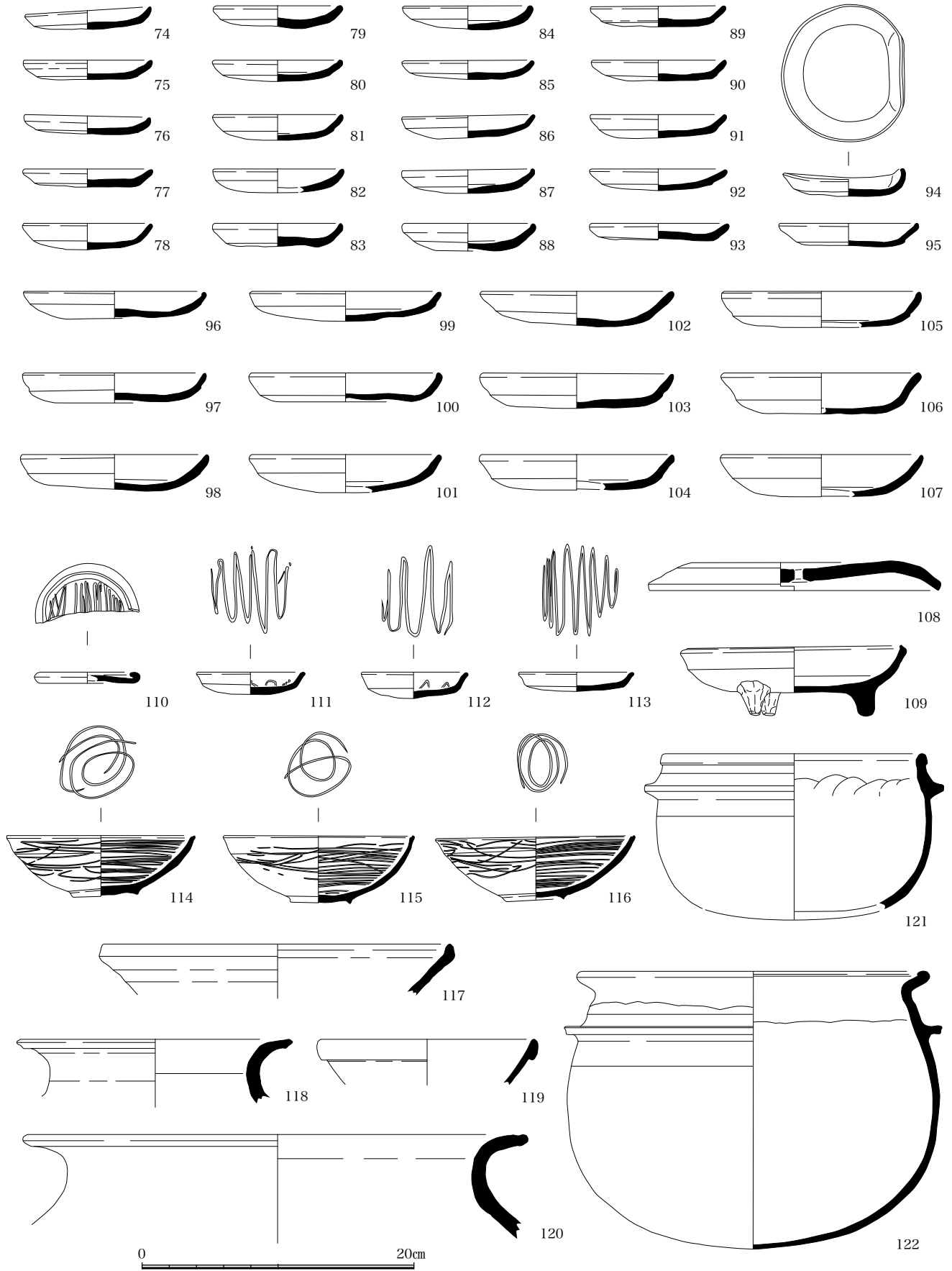
種類	産地等	器種	点数	出土比率(%)
土師器		皿	1025	61.23
		高台付皿	2	0.12
		三足付皿	1	0.06
		蓋	4	0.24
		羽釜・鍋	153	9.14
小計			1185	70.79
瓦器		皿	45	2.69
		椀	365	21.80
小計			410	24.49
須恵器	東播磨産	鉢	11	0.66
		甕	2	0.12
	産地不明	甕	9	0.54
小計			22	1.31
東海産陶器		壺・甕	49	2.93
		他	1	0.06
小計			50	2.99
輸入陶磁器	白磁	碗	6	0.36
		皿	1	0.06
小計			7	0.42
合計			1674	100.00

分的に窪み厚みが薄くなっている。墨書は「□□/南都諸白/□□」と3行にわたり、中央部の「南都諸白」は両隣に比べ大きく記される。131は幅約3.4cm、厚さ約0.2cmの薄板状で、上下とも欠損し長さ約8.0cmが残る。両面に墨書が記されるが判読できない。132は幅約2.4cm、厚さ約0.5cmの板状で、下端を尖らせ上端は欠損し長さ約8.0cmが残る。これも墨書は判読できない<sup>3)</sup>。

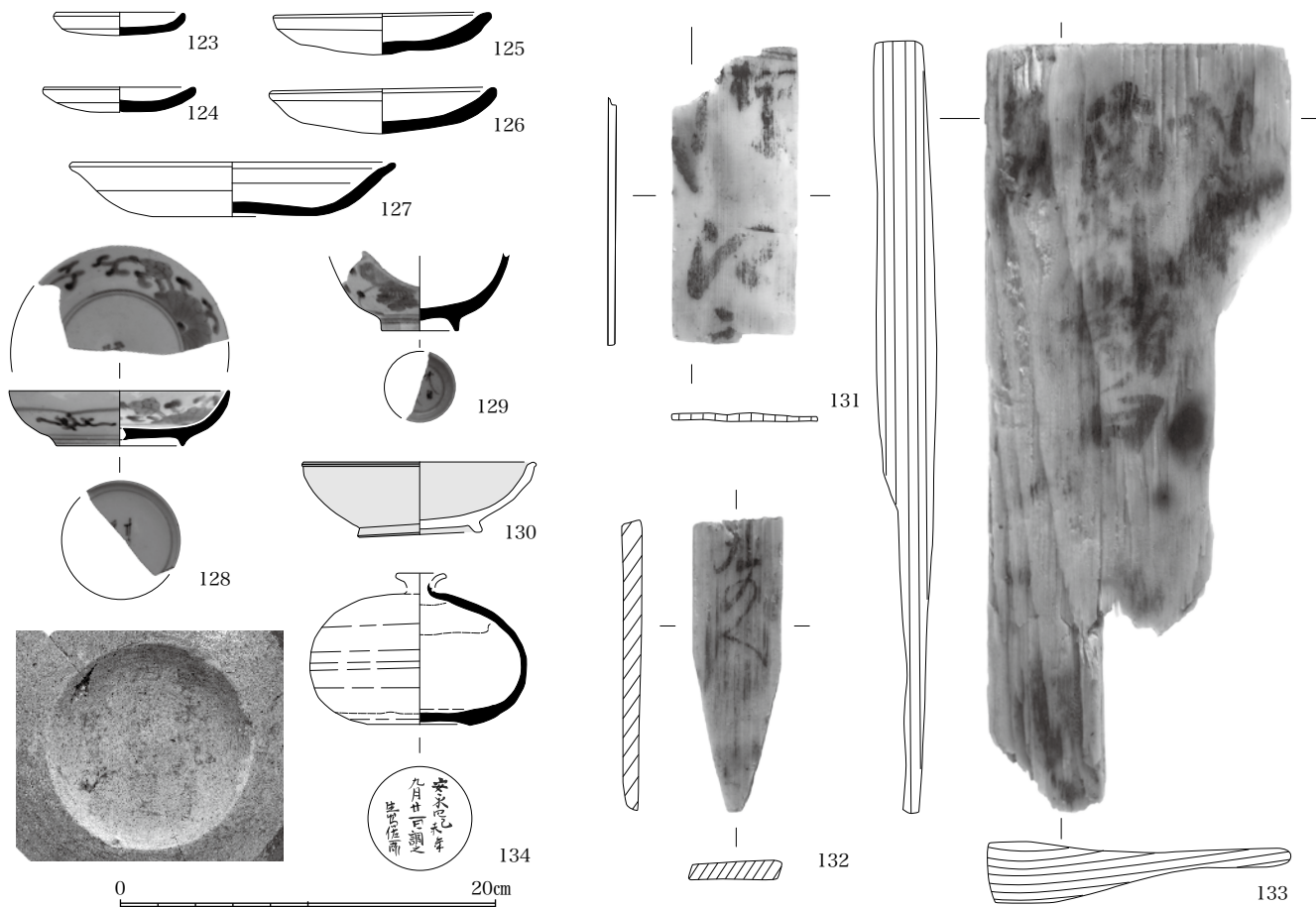
123～127は土師器皿で、124～126は中島・佐藤分類のD群、123はE群、127はC群である。129は肥前産磁器の碗で、外面にはコンニャク印判の染付文様が、高台内には崩れた「大明年製」銘がある。128は肥前産磁器の皿で、見込み部にはコンニャク印判の五弁花の染付文様が、高台内には同じく崩れた「大明年製」銘がある。肥前産磁器の型式から18世紀中頃のものと考えられるが、この時期まで残るC群土師器皿は珍しく、他地域からの搬入品の可能性も考えられる。

130は漆器椀で、口径約12.5cm、器高約3.8cm、高台径約6.6cmである。内外面全面に赤漆が塗られ、口縁端部と高台付部は黒漆である。樹種はケヤキである。

S K 45 出土土器 134は鉄釉の信楽産施釉陶器壺で、口縁部を欠損する。外面底部の露胎部分と体部下端の底部に沿った部分に墨書が記される。底部の墨書は「安永四乙未年/九月廿一日調之/生寫佐一郎」と判読できるが、体部のものは判読できない。S K 45は出土土器から19世紀前半～中頃のもので、墨書土器自体は前代からの伝世品または混入品といえる。



HJ 第729次調査 SK 32出土土器(1/4)

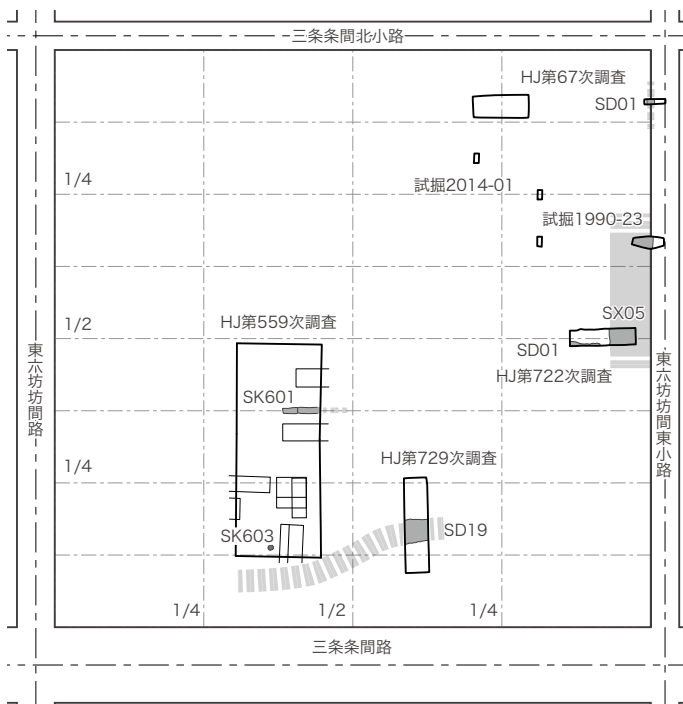


HJ第729次調査 SK42・45出土遺物(1/4・131~133は1/2・130の淡いトーンは赤漆・濃いトーンは黒漆)

### VI 調査所見

調査の結果、奈良時代から近代にわたる各時期の遺構が検出され、各時代において当該地周辺が活発に宅地利用されている様子が改めて確認できた。特にHJ第729次調査の東西溝SD19は、外京域における類例の少ない古代の遺構である。周辺の調査を含めた十坪内の位置関係は右図のようになる<sup>4)</sup>。これを見ればSD19は坪内の分割としては中途半端な位置にあることがわかる。また西側のHJ第559次調査区南端では、南側に下降してゆく奈良時代の整地層を確認しており、SD19の北肩がこれに接続するならば溝は坪内を斜行することになる。一方HJ第559次調査の東西に細長い土坑SK601は、坪内の南北1/8分割線上に位置し、宅地分割に関わる遺構と言える。しかしながら、SK601南側の掘立柱建物の配置やSD19のあり方から、整然とした1/32町規模の宅地の復原は難しい。(中島和彦)

1) 中島和彦・佐藤亜聖『南都出土中近世土器資料集』奈良市教育委員会2014  
 2) 横田賢次朗・森田勉「太宰府出土の貿易陶磁」『九州歴史資料館論集4』九州歴史資料館1978  
 3) 木簡の積読・撮影にあたっては、奈良文化財研究所のご教示・ご協力を得た。



十坪内の発掘調査地の位置関係(1/1,600)

4) 十坪の復原には、平成19年度に元興寺文化財研究所が実施した西新在家町における調査(HJG6次調査)の、東六坊坊間西小路と二条条間南小路交差点の成果を利用した。



## 2. 平城京跡（左京一条三坊十二・十三坪）の調査 HJ 第 733・743 次

事業名	①（第 733 次）一条高校講堂改築事業 ②（第 743 次）宅地造成	調査期間	①令和元年 5 月 7 日～9 月 5 日 ②令和 2 年 2 月 5 日～2 月 10 日
届出者名	①奈良市長 ②吉川商事	調査面積	① 830㎡ ② 100㎡
調査地	①法華寺町 1365-1、1365-2、1381、1382 ②法華寺町 1359-3 ほか	調査担当者	①安井宣也・高岡桃子 ②村瀬 陸

### I はじめに

調査地は平城京の条坊復原では左京一条三坊十二・十三坪（第 733 次調査）および十二坪の中央やや東寄りの部分（第 743 次調査）にあたる。

周辺では、奈良市立一条高等学校の校舎等の建て替えに伴い過去に 6 度の発掘調査がおこなわれている。昭和 54 年の HJ 第 3 次調査では、推定される東三坊坊間東小路が検出されず、路面上と推定される場所に南北方向の掘立柱列が検出されている<sup>(1)</sup>。平成元年度には HJ 第 185 次調査を実施し、推定される一条条間南小路上に東西 7 間（21m）以上、南北 4 間（12m）以上の大規模な北廂付建物を検出し<sup>(2)</sup>、十三・十四坪が一体で利用されていたと推定された。また、平成 11 年には HJ 第 440 次調査を実施し、大型井戸が検出されている<sup>(3)</sup>。出土した土師器、黒色土器などから 9 世紀初頭頃につくられ、9 世紀中頃に改修し、10 世紀前半に埋没したとみられる。また、井戸枠内から出土した緑釉壺内から「伊勢竹河」「伊勢宗子」「秦奈良子 又名栗日」と墨書のある木製人形 98 点などが出土している。

HJ 第 733 次・第 743 次調査ともに、十二・十三坪における宅地の様相を確認する目的でおこなった。なお、HJ 第 733 次調査は排土置き場確保のため、北・中央・南の 3 回に分けて調査を実施した。

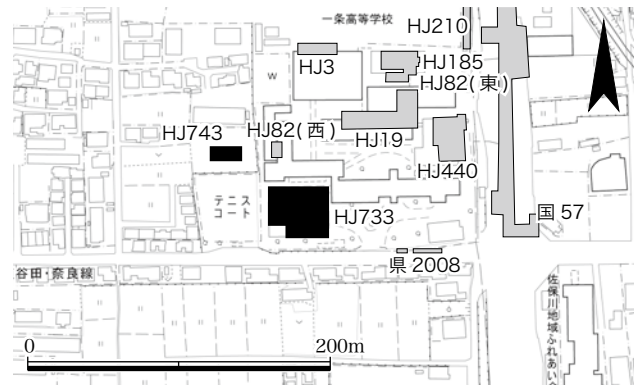
### II 基本層序

#### HJ 第 733 次調査区

調査区内では旧講堂の基礎掘方とみられる攪乱が数箇所確認されるものの、遺構面は良好に遺存していた。層序は上から造成土（約 1.2m）、旧耕土（約 0.3m）、旧床土および河川の氾濫時の堆積土（約 0.3m）、8 世紀中頃から後半の土器・瓦類を含む整地土（約 0.3m）が堆積し、その下で明黄褐色砂質土の地山に至る。遺構検出は主に地山面でおこなったが、一部の柱穴については北壁・東壁の土層観察によって整地土上面から掘り込まれていることを確認した。地山面の標高は約 64.5m である。

#### HJ 第 743 次調査区

層序は表土面から造成土（約 0.6m）、耕土（約 0.02m）、床土（約 0.08m）、褐色土（約 0.1m）、灰褐色土（約 0.1m）、



HJ 第 733・743 次調査 調査地位置図 (1/5,000)

暗褐色土（約 0.1m）と続き、現地表面下約 1.0m で整地土上面に至る。遺構検出は整地土上面（標高約 64.5m）及び地山上面（標高約 64.1m）で行った。

### III 検出遺構

#### HJ 第 733 次調査区

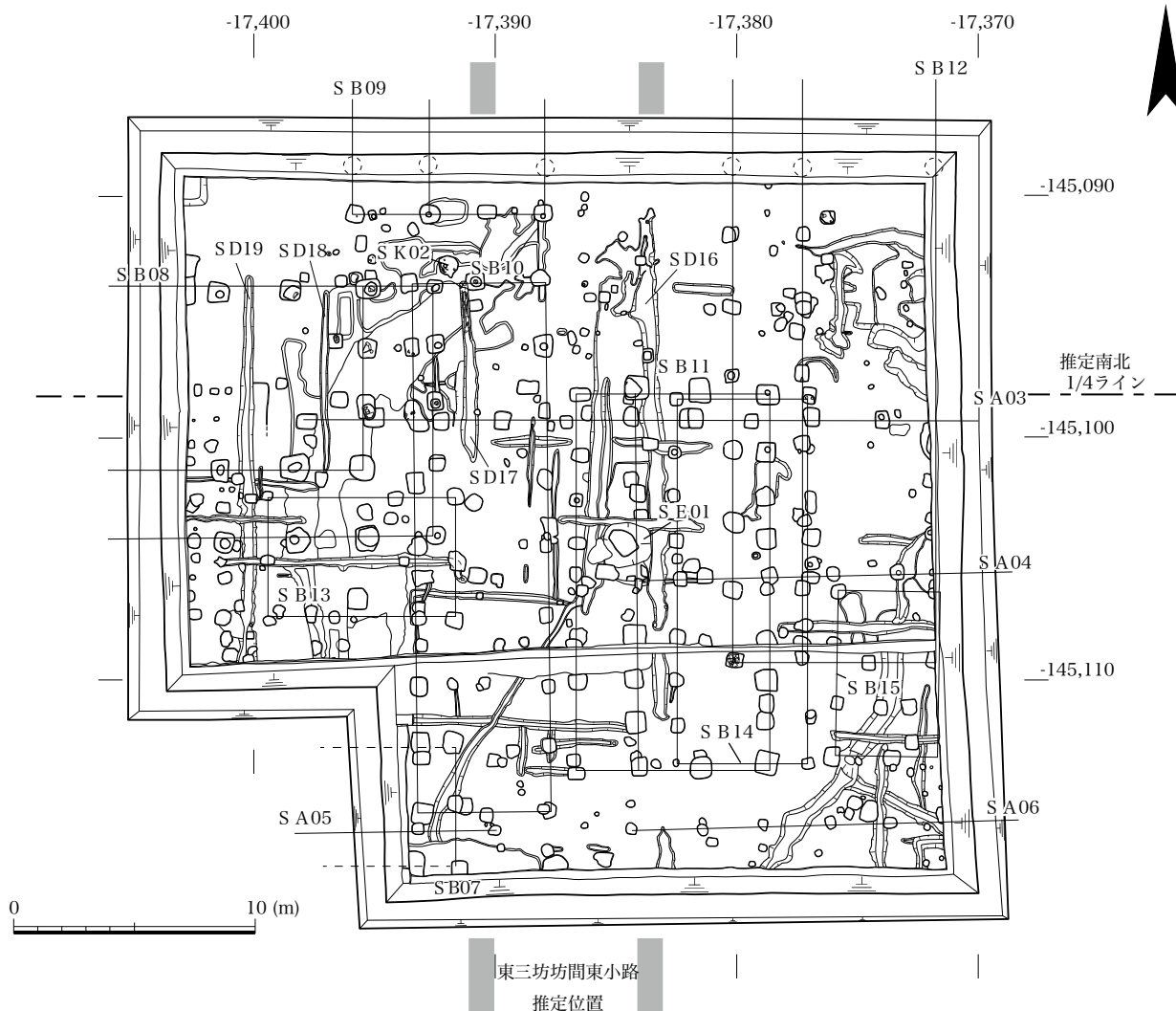
主に検出した遺構は、古墳時代の井戸 1 基（SE01）、土坑 1 基（SK02）、奈良時代～平安時代前半の掘立柱列 5 条（SA03～SA06）、掘立柱建物 8 棟（SB07～SB15）、南北溝 4 条（SD16～19）である。以下、その概要について述べる。

#### 古墳時代の遺構

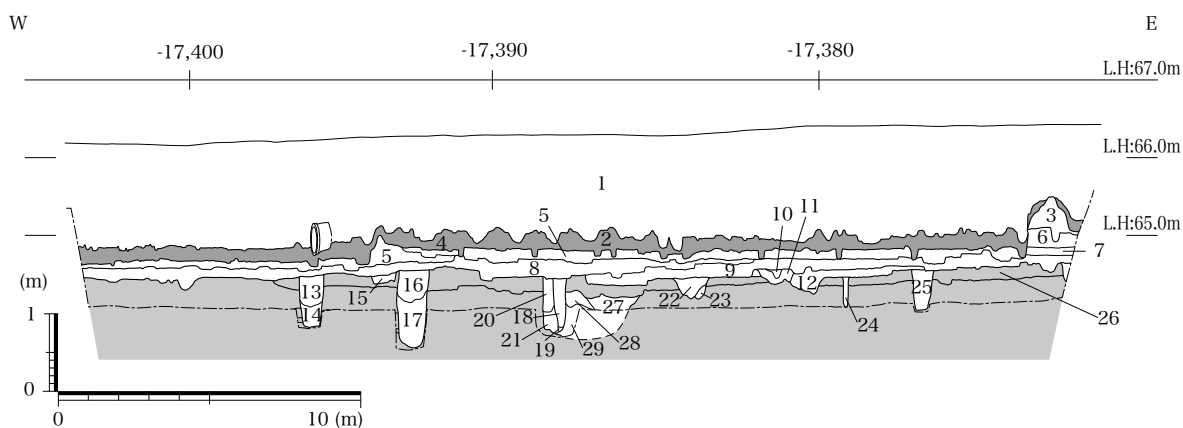
SE01 発掘区中央で検出した、深さ約 1.6m の素掘りの井戸である。掘方壁面に沿って木杭の痕跡が見られ、壁面の崩落を防ぐため打ち込んだものと考えられる。土



HJ 第 733 次調査 SE01 井戸完掘状態（北東から）



HJ 第 733 次調査 発掘区遺構平面図 (S = 1/300)



- |                      |                |                     |                     |
|----------------------|----------------|---------------------|---------------------|
| 1 造成土                | 10 灰色粘土混じりシルト  | 17 暗オリーブ褐色シルト質粘土    | 24 黄灰色粘土混じりシルト      |
| 2 黒褐色砂質シルト           | 11 灰色粗粒砂       | 18 黄灰色粘土質シルト        | 25 黄灰色粘土質シルト        |
| 3 暗灰黄色シルト質砂          | 12 灰色粘土質シルト    | 19 黒褐色粘土混じりシルト      | 26 黄灰色粘土混じりシルト      |
| 4 暗灰黄色砂質シルト          | 13 暗灰黄色極粗粒砂    | 20 黄灰色極粗粒砂 + 1 ブロック | 27 灰色極粗粒砂           |
| 5 暗灰黄色粘土混じりシルト       | 14 黄灰色粘土混じりシルト | 21 黒褐色粘土混じりシルト      | 28 灰色シルト質粘土         |
| 6 暗灰黄色砂質シルト          | 15 黄灰色粘土混じりシルト | 22 灰色粗粒砂            | 29 灰色粗粒砂・礫          |
| 7 黄灰色砂質シルト           | 16 黄灰色シルト質粘土   | 23 黄灰色極粗粒砂          |                     |
| 8 少し青味がかつた灰色砂質シルト    |                |                     |                     |
| 9 灰色砂質シルト、炭粒・土師器細片含む |                |                     | I 少し青味がかつた灰白色シルト質粘土 |

(1:造成土 2:旧耕地 3~9, 12:旧床土 10・11:素掘溝埋土 13~21, 24, 25:SB09 柱穴埋土 10・11:素掘溝埋土 26:整地土 27~29:旧河川)

HJ 第 733 次調査 北壁土層図 (横: S = 1/250 縦: S = 1/100)

HJ 第 733 次 検出遺構一覧

遺構番号	掘方等			井戸枠		時期	主な出土遺物	備考
	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)	構造	内法			
SE01	円形	径 1.7	1.6	なし		古墳時代中期	土師器高杯・小型丸底壺	掘方壁面に沿って木杭の痕跡が見られる
SK02	円形	0.7	0.4	—		古墳時代中期	土師器高杯・小型丸底壺	

遺構番号	棟方向	規模 (間)		桁行全長 (m)	梁行全長 (m)	柱間寸法 (m)		廂の出 (m)	柱穴の深さ (m)	備考
		桁行 × 梁行				桁行	梁行			
SA03	東西	9 以上		24.0 以上		(西から) 2.7-2.7-2.7-2.7-2.7-2.7-2.4-2.4-3.0		—	0.2 ~ 0.4	SB08 より古い。
SA04	東西	4 以上		10.8 以上		2.7 等間		—	0.2	
SA05	東西	1 以上		3.3 以上		3.3		—	0.2 ~ 0.3	
SA06	東西	4 以上		10.8 以上		2.7 等間		—	0.4 ~ 0.5	
SB07	東西	1 以上 × 2		—	5.4	—	2.7 等間	—	0.2 ~ 0.4	調査区外西側に続く。
SB08	東西	2 以上 × 3		6.0	5.2	3.0 等間	2.4 等間	3.0	0.3 ~ 0.4	東・南に廂をもつ。SA03 より新しい。
SB09	南北	1 以上 × 2		1.8	4.8	1.8	2.4 等間	3.0	0.8	整地土上面から掘り込む。
SB10	南北	8 × 2		22.2	5.4	(北から) 2.7-2.7-2.7-2.7-3.0-3.0-2.7-2.7	2.7 等間	—	0.4 ~ 0.8	
SB11	南北	8 × 2		15.6	5.4	(北から) 2.4-1.8-1.8-2.1-2.1-1.8-1.8-1.8	2.7 等間	2.4	0.3 ~ 0.4	
SB12	南北	7 以上 × 2		21.0 以上	5.4	3.0 等間	2.7 等間	3.0	0.7 ~ 0.8	整地土上面から掘り込む。
SB13	東西	3 × 2		7.8	5.4	(西から) 2.7-2.7-2.4	2.7 等間	—	0.2 ~ 0.3	
SB14	南北	8 × 1		15.3	5.4	(北から) 2.1-2.1-1.8-1.5-2.1-2.1-1.8-1.8	5.4	—	0.2	
SB15	南北	3 × 1 以上		6.9	2.4 以上	(北から) 2.1-2.4-2.4	2.4	—	0.2 ~ 0.3	調査区外東側に続く。

遺構番号	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)	時期	主要出土遺物	備考
SD16	南北	東西幅：1.0、南北長：21.0 以上	0.1	8 世紀	土師器、須恵器、平瓦、製塩土器	SB11 より古い。
SD17	南北	東西幅：0.5、南北長：約 7.0	0.1	8 世紀	土師器片、須恵器片、平瓦	
SD18	南北	東西幅：0.4、南北長：約 7.5	0.1	—	—	
SD19	南北	東西幅：0.5 ~ 0.8 南北長：16.0 以上	0.1 ~ 0.2	8 世紀	土師器片、須恵器片、製塩土器、平瓦	

師器高杯が多く出土している。

SK02 発掘区北西側で検出した。埋土から土師器小型丸底壺および高杯が出土している。

**奈良時代～平安時代前半の遺構**

SA03 全長 24.0m 以上の東西方向の掘立柱列。柱穴の切り合いから、SB08 よりも古いとみられる。推定される東三坊坊間東小路推定箇所を横断する形で設けられている。

SA04 発掘区中央で検出した東西 4 間以上（全長 10.8m 以上）の掘立柱列。発掘区外東側に続くと思われる。

SA05・SA06 発掘区南端で検出した掘立柱列。SA05 については 1 間 (3.3m) しか検出していないものの、SA06 と柱筋を揃えることから掘立柱列と判断した。SA05 および SA06 は一連で機能したと考えられ、同時期のものと推定される。

SB07 南北方向の柱列を 2 間分 (5.4m) 検出した。SB13 の東妻柱列と柱筋を揃えており、SB13 と同時期の東西棟建物の東妻柱列と考える。

SB08 梁行 3 間 (5.4m)、桁行 2 間 (6.0m) 以上の東西棟建物。東側と南側に廂がつく。廂の出はいずれも約 10 尺 (3.0m)。南側柱の柱穴埋土から軒平瓦 (7734A 型式) 1 点が出土している。

SB09 梁行 2 間 (4.8m)、桁行 1 間 (1.8m) 以上の

南北棟建物と推測される。西側に廂が付く。廂の出は約 10 尺 (3.0m)。発掘区北壁での土層観察から、SB09 の柱穴は整地土上面から掘り込まれていることを確認した。後述する SB10 と東側柱列を揃える。

SB10 梁行 2 間 (5.4m)、桁行 8 間 (22.2m) の南北棟建物。SB09 と東側柱列を揃える。

SB11 梁行 2 間 (5.4m)、桁行 8 間 (15.6m) の南北棟建物で、西側に廂がつく。廂の出は約 8 尺 (2.4m)。

SB12 梁行 2 間 (5.4m)、桁行 7 間 (21.0m) 以上の南北棟建物。西側に廂がつく。廂の出は約 10 尺 (3.0m)。東側柱列については調査区東壁の土層観察で確認した。

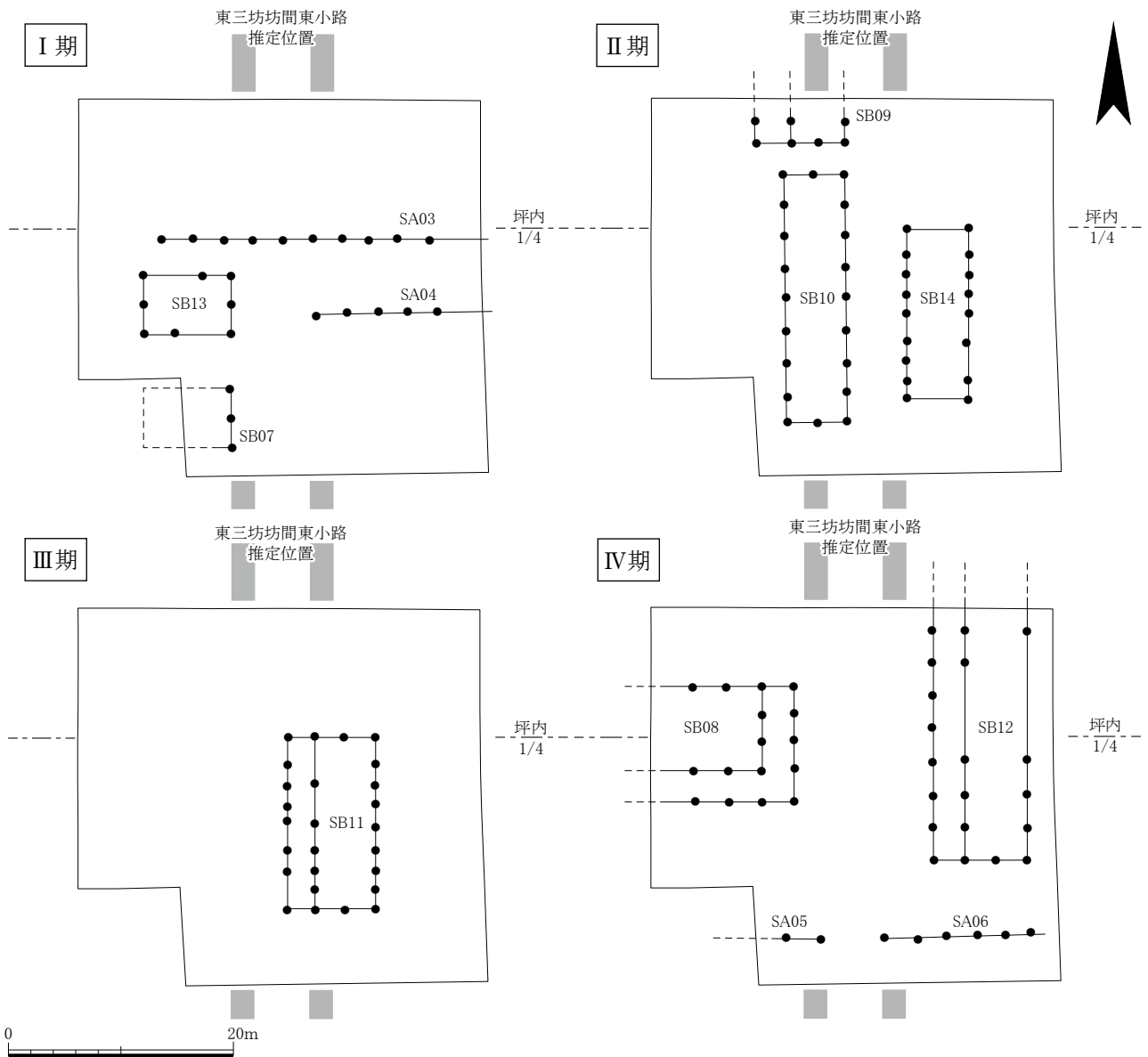
SB13 梁行 2 間 (5.4m)、桁行 3 間 (7.8m) の東西棟建物。東妻柱列は SB07 と柱筋を揃えている。

SB14 梁行 1 間 (5.4m)、桁行 8 間 (15.3m) の南北棟建物。

SB15 SB11 の東側で検出した、梁行 1 間 (2.4m) 以上、桁行 3 間 (6.9m) の南北棟建物。調査区外東側に続くと思われる。

SD16 東三坊坊間東小路東側溝の推定位置で検出した南北溝。溝心の座標は X=-145,099.0m、Y=-17,383.7m である。切り合い関係から、SB11 より古いことがわかる。

SD17 東三坊坊間東小路西側溝の推定位置で検出し



HJ 第 733 次調査 遺構変遷図 (1/600)

た南北溝。溝心の座標は X=-145,097.0m、Y=-17,391.0 m である。SD17 の北端では南北長約 1.7m、東西幅約 0.3m の木樋を検出している。暗渠であった可能性がある。

SD18・19 十二坪の東端に位置する南北溝。SD18 は東三坊坊間東小路西側溝の推定位置から西に 6.0m (約 20 尺)、SD19 は西に 9.0m (約 30 尺) に位置する。

**遺構の先後関係・重複関係について**

同時併存 柱筋が揃う下記の遺構は同時併存していたと想定できる。

- ① SB09・SB10
- ② SB07・SB13
- ③ SA05・SA06

先後関係 柱穴の切り合いから先後関係が分かる遺構は下記の通りである。(旧 → 新)

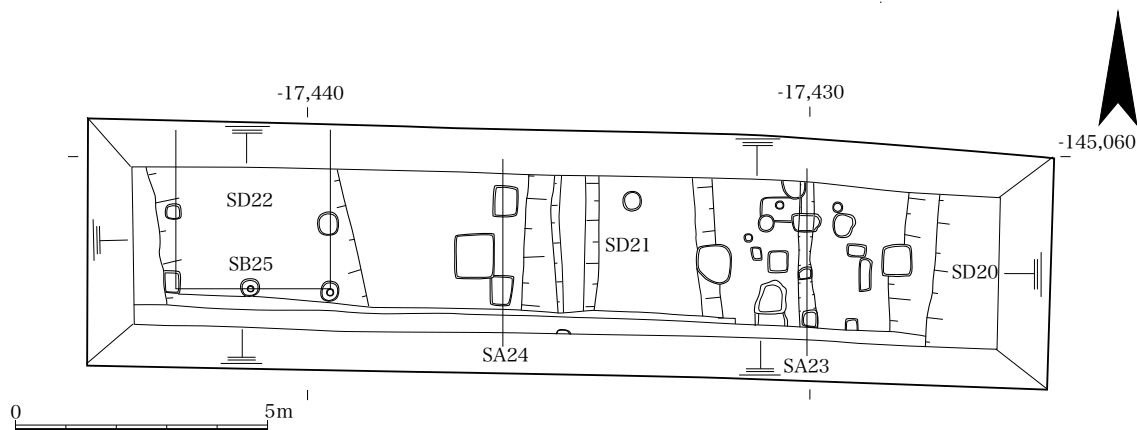
- ① SA03 → SB08
- ② SA04 → SB11
- ③ SA04 → SB12

空間的に重複するため同時併存があり得ないものは下記の通りである。

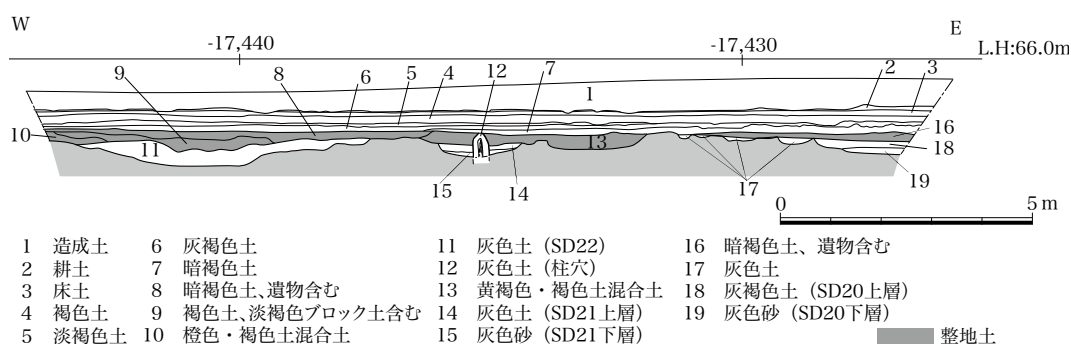
- ① SB08 と SB10 と SB13
- ② SB10 と SB07
- ③ SB12 と SB11、SB14
- ④ SA05 と SB07
- ⑤ SA03 と SB08、SB10、SB11、SB14
- ⑥ SA04 と SB11、SB12、SB14

以上のことから、奈良～平安時代の遺構は少なくとも 4 時期に識別される。

【I 期】 十二・十三坪を南北に 4 分割するライン上に掘立柱列 SA03 が建ち、その南側に掘立柱建物 1 棟 (SB13)



HJ 第 743 次調査 遺構平面図 (1/150)



HJ 第 743 次調査 南壁土層図 (1/150)

HJ 第 743 次 遺構一覧表

遺構番号	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)	時期	主要出土遺物	備考
SD20	南北	東西幅：2.1、南北長：約 3.0 以上	0.3	8～9 世紀	土師器、須恵器	
SD21	南北	南北幅：1.5 以上、東西長：約 3.0 以上	0.2	8～9 世紀	土師器、須恵器	
SD22	北西 - 南東	幅：3.8、長：3.0 以上	0.5			

遺構番号	棟方向	規模 (間)		桁行全長 (m)	梁行全長 (m)	柱間寸法 (m)		廂の出 (m)	柱穴の深さ (m)	備考
		桁行 × 梁行				桁行	梁行			
SA23	南北	2 以上		1.8 以上		0.9 等間		-	-	
SA24	南北	1 以上		1.8 以上		1.8		-	-	地山上面で検出
SB25	南北	1 以上 × 2	1.5 以上	3.0	1.5	1.5 等間		-	-	整地土上で検出

が建つ。SB13 は SA03 から南に約 10 尺 (3.0m) の位置に北側柱列がくるように建てられている。

SA03 は東三坊坊間東小路推定箇所を横断する形で設けられていることから、I 期では既に十二・十三坪が一体で利用されていたとみられる。また、SB13 と東妻柱の柱筋が揃うことから SB07 についてもこの時期の遺構と考えられる。

【II 期】 掘立柱建物 2 棟 (SB09・10) が建つ時期。SB10 の東側には SB14 が並ぶ。

SB09 については北壁での土層観察から、地山上の整地土から掘り込まれていることが確認できる。SB09 および SB10 は東側柱列を揃えており、同時期の遺構と考えられることから、SB10 についても整地土上から掘り込まれていたものと考えられる。

SB09・10 は共に東三坊坊間東小路推定箇所に建てられており、I 期と同じく十二・十三坪を一体で利用していたと考えられる。

【III 期】 発掘区中央に南北棟建物 1 棟 (SB11) が建つ。I 期・II 期と同様、十二・十三坪を一体で利用していたと考えられる。

【IV 期】 掘立柱建物 2 棟 (SB08・SB12) が建ち、発掘区南側では掘立柱塀 2 条 (SA05・06) が設けられ、宅地南辺を区画する。SA05 東端の柱穴と SA06 西端の柱穴との間の距離は 5.7m (約 19 尺) であり、宅地への出入口となっていた可能性がある。

#### HJ 第 743 次調査区

検出した主な遺構は、奈良時代の溝 3 条 (SD20～22)、掘立柱列 2 条 (SA23・24)、掘立柱建物 1 棟 (SB25)

である。

SD20 東端で検出した南北溝である。幅2.1m以上、長さ3m以上で、深さ0.3mである。溝の堆積土は2層にわかれており、いずれの層からも多くの奈良時代から平安時代初頭の土器類が多く出土した。

SD21 発掘区中央付近で検出した南北溝である。幅1.5m以上、長さ3m以上で西側が2段掘りとなっており、深さ0.2mである。堆積土はSD20と同様2層にわかれている。出土遺物はSD20より少ない。

SD22 発掘区西端で検出した北西-南東方向の溝である。幅3.8m、長さ3m以上、深さ0.5mである。埋土はSD20・SD21のような灰色砂ではなく灰色粘質土であり、斜行溝であることも含めて様相が異なる。

SA23 南北方向の柱列で柱間0.9m（3尺）である。

SA24 南北方向の柱列で柱間1.8m（6尺）である。

整地土上面では確認できず、地山上面で検出した。

SB25 整地土上面で検出した。東西2間、南北1間

以上で柱間1.5m（5尺）である。発掘区外北側に続くとみられる。

#### IV 出土遺物

##### HJ第733次調査

遺物整理箱で46箱分の土器・瓦類が出土した。内訳はSE01、SK02から出土した古墳時代中期の土師器小型丸底壺・高杯、8世紀中頃から9世紀前半の土器類（土師器、須恵器、製塩土器）、瓦磚類（軒丸瓦（6301K 1点、6133Aa 1点、6282Ca 1点、型式不明3点）、軒平瓦（6572J 1点、6672A 1点、7734A 1点、型式不明3点）、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、面戸瓦、磚8点（うち2点は施釉品））がある。（高岡桃子）

このうち6301K種は、6301型式ではB種・C種・J種と同程度の小型品である。B種・C種・J種の中房蓮子配置が1+5+9であるのに対し、K種は1+5+8である点が異なる。また、子葉が太く高い。さらには、外縁頂部に凹線を巡らさない点もB種・J種とは異なる。



左京一条三坊十一～十四坪 既往の調査区 (1/1,000)

6301 型式は瓦当裏面に布目痕跡を残す布目押圧技法による製作と確認できるものが多いが、本例は瓦当裏面にタテナデ、周縁にはこれに沿うナデを施し、布目痕跡は確認できない。ただし丸瓦部剥離痕に指頭圧痕が確認できる。平城京左京二条四坊十坪（市 HJ708 次）出土品は同範である<sup>4)</sup>。（原田憲二郎）

また、造成土から底部外面に「奈女」と印刷された磁器皿などが出土しており、一条高校（昭和 25 年（1950）設立）の前身であり、昭和 16 年（1941）に設立された市立奈良高等女学校に関わる遺物と考えられる。

### HJ 第 743 次調査

遺物整理箱 17 箱分の土器・瓦類が出土した。内訳は、8～9 世紀の土器類（土師器・須恵器・奈良三彩）、瓦塼類（軒丸瓦（6301 型式種別不明 1 点、型式不明 1 点）軒平瓦（6572J 2 点、6672A 1 点、6760A 1 点）・丸瓦・平瓦・磚）である。このうち軒平瓦 6760A 型式は施釉瓦である。

### V 調査所見

今回の調査、および過去 6 度の発掘調査の内容から、左京一条三坊の宅地利用について、以下のような成果を得ることができた。

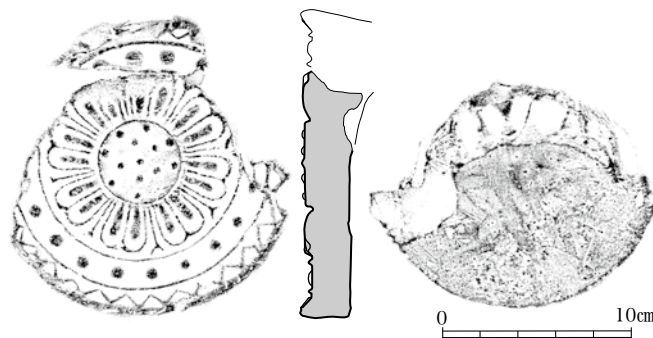
#### (1) 十一・十二・十三・十四坪の土地利用について

HJ 第 733 次調査の結果、当初十二・十三坪の坪境に東三坊坊間東小路を敷設していたことが明らかとなった。特に十二坪では宅地を区画したとみられる南北溝（SD18・19）を検出しており、造営当初は十二・十三坪を分割して宅地利用する計画だったと考えられる。

しかし、今回検出したなかで一番古い I 期の遺構は東三坊坊間東小路推定箇所を横断する形で設けられていることから、当初の計画に反し十二・十三坪が一体で利用されていたことが判明した。

今回の調査結果を踏まえて、周辺の過去の調査事例から、十二・十三坪周辺の宅地利用について整理したい。十三坪と十四坪との坪境小路（一条南条間南小路）が想定される位置でおこなわれた、昭和 59 年度の HJ 第 82 次（東）調査および平成元年の HJ 第 185 次調査では、梁行 4 間以上（10 尺等間）、桁行 7 間以上（10 尺等間）と大型の東西棟建物を検出した。また、梁行 3 間（5.1m）、桁行 6 間（14.4m）の西廂付の南北棟建物も検出している。これらの 2 棟の建物は、十三・十四坪の坪境上に位置しており、かつ坪の東西中軸線上にあることから、十三・十四坪は一体で土地利用されていた可能性が高い。また、昭和 54 年の HJ 第 3 次調査では推定される東三坊坊間東小路が検出されていないことから、十一・十四坪についても一体で利用されていたとみられる。

以上の調査成果を踏まえると、左京一条三坊十一・十二・十三・十四坪は一体で利用されていたと考えられる。



出土軒丸瓦 6301 型式 A 種（1/4）

#### (2) SD20・21 について

HJ 第 743 次調査では、国土方眼方位に沿って平行する南北溝 SD20・21 を検出した。この 2 本の溝は堆積状況が類似しており、同時併存していたと考えられる。概ね溝心々間距離は約 8 m である。

仮に、これを道路遺構とみた場合の道路心は十二坪の東西 1/2 や 1/4 といった整数値で分割できる位置とはならず、溝の性格については今後検討する必要がある。

#### (3) 重圏・重郭紋軒瓦の出土傾向からみた土地利用

HJ 第 733 次調査では軒平瓦 6572J が 1 点、HJ 第 744 次調査では 2 点出土した。左京一条三坊十二坪での 6572 型式の出土は初である。6572 型式はいわゆる重郭紋系軒平瓦と呼ばれるものであり、平城京内から今回の出土品を含めて 84 点出土している<sup>5)</sup>。

このうち、左京一条三坊十二・十三・十五・十六坪、および左京一条東三坊大路からは 45 点（約 53%）出土している。同じエリアからは重圏紋系軒丸瓦である 6011・6012・6015 型式も出土しており、平城京内において重圏・重郭紋系軒瓦が集中して出土する場所といえる。

十一・十二・十三・十四坪が一体で利用された可能性については既に言及したが、重圏・重郭紋系軒瓦の出土傾向からみると、九・十・十五・十六坪を加えた八町利用の可能性も考えられ、今後条坊道路の施工状況を検証するなかで論じるべき課題である。（高岡桃子）

（註）

- 1) 奈良市教育委員会 1980 「平城京左京一条三坊十四坪 発掘調査報告」『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和 54 年度』
- 2) 奈良市教育委員会 1990 「平城京左京一条三坊十三・十四坪の調査 第 185 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成元年年度』
- 3) 奈良市教育委員会 2001 「平城京左京一条三坊十三坪の調査 第 440 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 11 年度』
- 4) 奈良市教育委員会 2019 「平城京跡（左京二条四坊十坪）の調査 第 708 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報平成 28 年度（2016）年度』の文中の 6301 種別不明としたものが実物照合により同範であると判明した。なお、今回の調査地周辺の調査では、多くの 6301 型式 B・C 種の出土が報告されているが、紋様の類似性から、6301 新種と誤認されているものが存在する可能性がある。
- 5) 原田憲二郎 2014 「平城京の重圏文系軒瓦」『古代瓦研究 VI』奈良文化財研究所



HJ 第 733 次調査 北発掘区全景（北東から）



HJ 第 733 次調査 中央発掘区全景（北西から）





HJ 第 733 次調査 南発掘区全景（北東から）



HJ 第 743 次調査 発掘区全景（北東から）

### 3. 平城京跡（左京四条五坊十四坪）の調査 第734次

事業名	病院新築	調査期間	令和元年5月16日～23日
届出者名	医療法人社団 生和会	調査面積	220㎡
調査地	杉ヶ町57-1,3	調査担当者	村瀬 陸

#### I はじめに

調査地は平城京の条坊復元によると、左京四条五坊十四坪の北東部にあたる。周辺では、調査地の西側ではHJ第476次調査で弥生時代の溝・土坑を検出し、HJ721次調査で弥生時代の竪穴建物・掘立柱建物・溝・土坑等を検出している。また南西約70mでHJ第423次調査を実施し、弥生時代後期～古墳時代前期の溝・土坑、多数の杭跡を検出した。調査地の南西約150mで実施されたHJ第388次調査は杉ヶ町遺跡に該当しており、弥生時代後期～古墳時代前期の溝や土坑を検出した。平城京跡に関連する遺構の確認事例は少なく、弥生時代後期～古墳時代前期の杉ヶ町遺跡に関連するものが多い。

本調査は、平城京跡としての様相、および杉ヶ町遺跡の広がりを確認することを目的に実施した。既存建物の範囲は、建物基礎で遺跡が破壊されている可能性が高いため、その部分を避けて北区・南区の2ヶ所に発掘区を設定した。

#### II 基本層序

今回の調査では、調査地のほぼ全面が建物基礎抜取りにより攪乱されており、遺構面がほとんど残存していなかった。かろうじて残存していた北区北端部分では、上から造成土（厚さ約1.0m）、黒褐色耕土（約0.2m）、褐灰色シルト（約0.2m）、灰色砂質土（約0.2m）と続き、灰色粗砂が1.8m以上堆積する。灰色砂質土・灰色



HJ第734次調査 調査地位置図 (1/5,000)

粗砂からは遺物が出土せず、河川堆積とみられる。遺構面は褐灰色シルト上面（標高約68.8m）と想定できるが、この上に直接耕土が堆積するため、遺構面自体も削平をうけていると思われる。

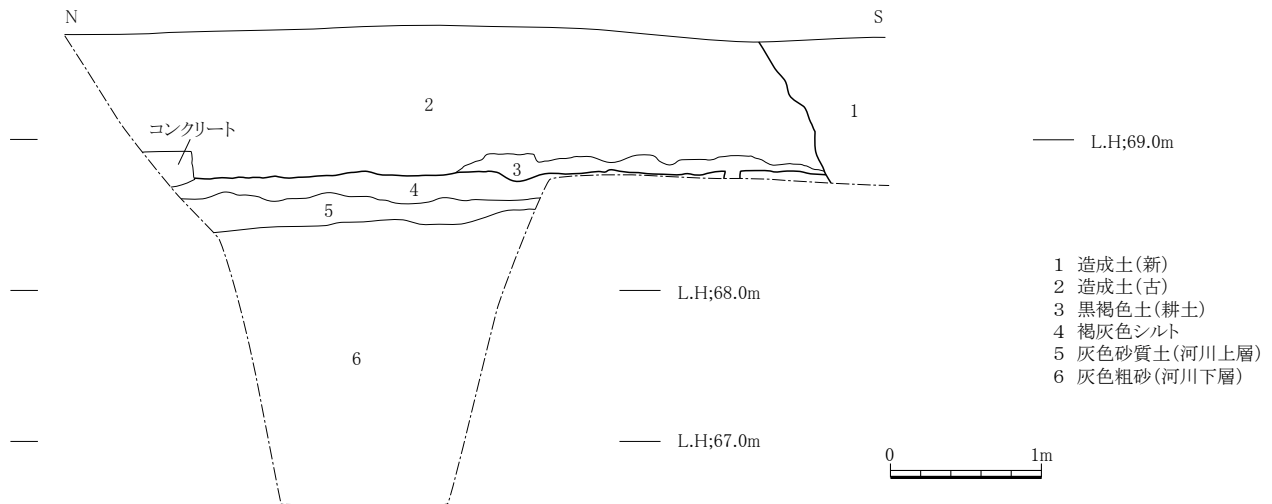
南区では独立基礎抜取り痕跡の間に若干の遺構面が残存しており、東壁でみると厚さ約0.5mの造成土下で黄褐色粘質土の地山（標高約68.6m）となる。ただし、この地山も発掘区内の大部分では、さらに0.4m削平されていることを確認した。

#### III 検出遺構

北区は全面攪乱により遺構が残存していなかった。

南区では15世紀以前の土坑SK01と、それより新しい掘立柱建物SB02を検出した。

SK01は幅約2.4m、長さ3.3m以上の方形を呈し、



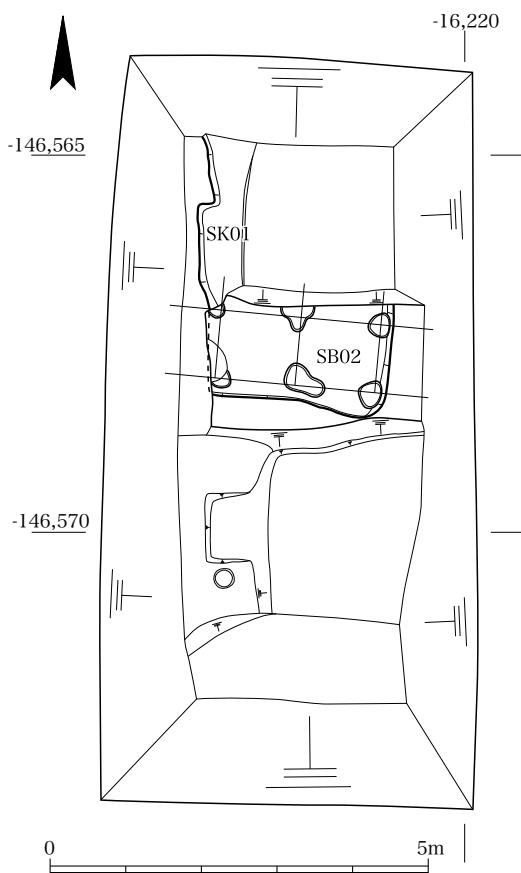
HJ第734次調査 北区東壁北端部分 土層断面図 (1/50)

- 1 造成土(新)
- 2 造成土(古)
- 3 黒褐色土(耕土)
- 4 褐灰色シルト
- 5 灰色砂質土(河川上層)
- 6 灰色粗砂(河川下層)

北東側は攪乱で壊されている。最も深いところで深さ0.7mである。上下2層に分かれ、上層は厚さ約0.2mで後に凹んだ部分に溜まった埋土とみられる。地山が粘土質であり、遺構の肩は垂直気味で底の形状も凸凹で埋土内に遺物をほとんど含まないことから、粘土採掘坑の可能性もある。上層では15世紀頃の土器類が出土した。

SB02は総柱建物の一部と考えられ、北でやや東に振れる。柱間約1.0mで1間以上×2間以上である。

SK01下層の上面で検出したが、柱穴埋土とSK01上層埋土が類似するため、本来はSK01上層から掘り込まれたと考えられる。



HJ 第734次調査 南区平面図 (1/100)



HJ 第734次調査 土坑SK01、掘立柱建物SB02 (南西から)

#### IV 出土遺物

遺物整理箱1箱に満たない土器類がある。SK01上層から15世紀の土師器・瓦質土器、包含層から弥生土器が出土したがいずれも小片である。

#### V 調査所見

本調査では、以前の建物解体時の攪乱により当初目的とした弥生～奈良時代の遺構は確認できなかった。南区のわずかに残存した遺構面でSK01・SB02を確認した。少量ながら弥生土器が出土していることから、杉ヶ町遺跡の広がりを検討するうえで参考になる資料であると考えられる。(村瀬 陸)



HJ 第734次調査 南区全景(北から)



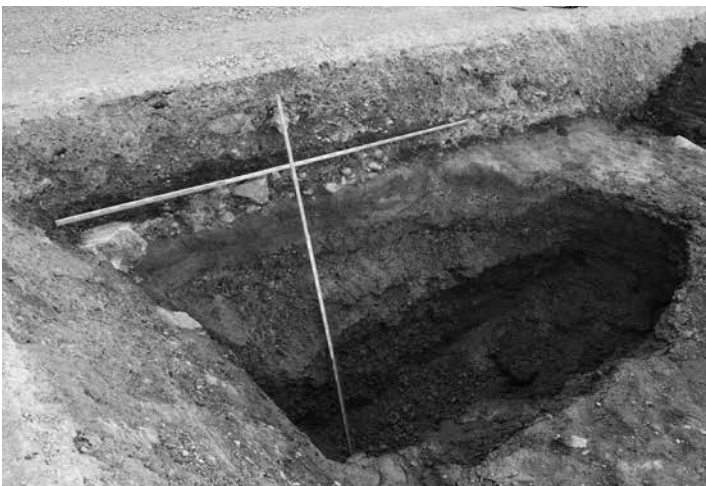
HJ 第734次調査 土坑SK01、掘立柱建物SB02 (南から)



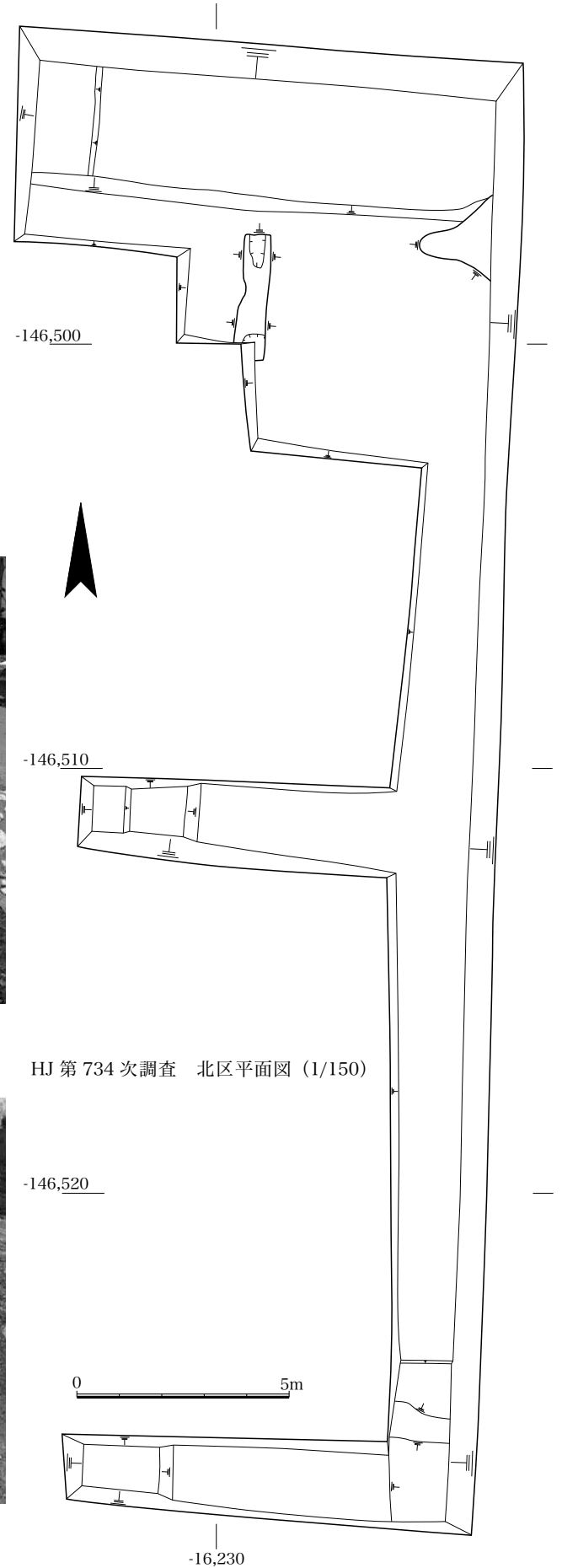
HJ 第734次調査 北区全景(北東から)



HJ 第734次調査 北区全景(南東から)



HJ 第734次調査 北区東壁断面(北西から)



## 4. 平城京跡（左京五条四坊二坪）の調査 第735次

事業名	J R奈良駅南特定土地区画整理社会資本整備総合交付金事業	調査期間	令和元年6月24日～10月29日
通知者名	奈良市長	調査面積	1,216 m <sup>2</sup>
調査地	大森西町 646-1、648-2、649、685-1	調査担当者	安井宣也

### I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京五条四坊二坪の北西部にあたり、地形的には能登川扇状地の扇端付近の微高地北辺及びその北に接する低地に位置する。

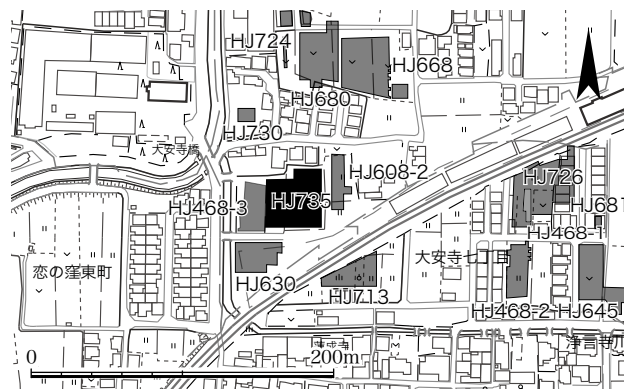
二坪内ではこれまでに4回（HJ第468-3・608-2・630・713次）の調査を行い、奈良時代前半～平安時代初頭の掘立柱建物・塀、区画溝、井戸、土坑を検出した。重複関係や分布等から、坪内が1/16～1/8坪規模の宅地に分割して利用されたことが明らかになっている。

また、古墳時代以前の遺構・遺物包含層等も重複して存在し、低地では縄文～弥生時代の遺物を含む堆積層（HJ第468-3次）と古墳時代前期後半～中期初頭の河川（同第608次）、微高地上では平城京造営時に削平された古墳時代前期の円墳（石ガマチ2号墳、径約21m、同第713次）、同後期の方墳（石ガマチ古墳、一辺約13m、同第630次）を確認している。

今回の調査は、奈良～平安時代の二坪北西部の宅地利用の様相及び古墳時代以前の遺構・遺物包含層の有無の確認を目的として実施した。

### II 基本層序

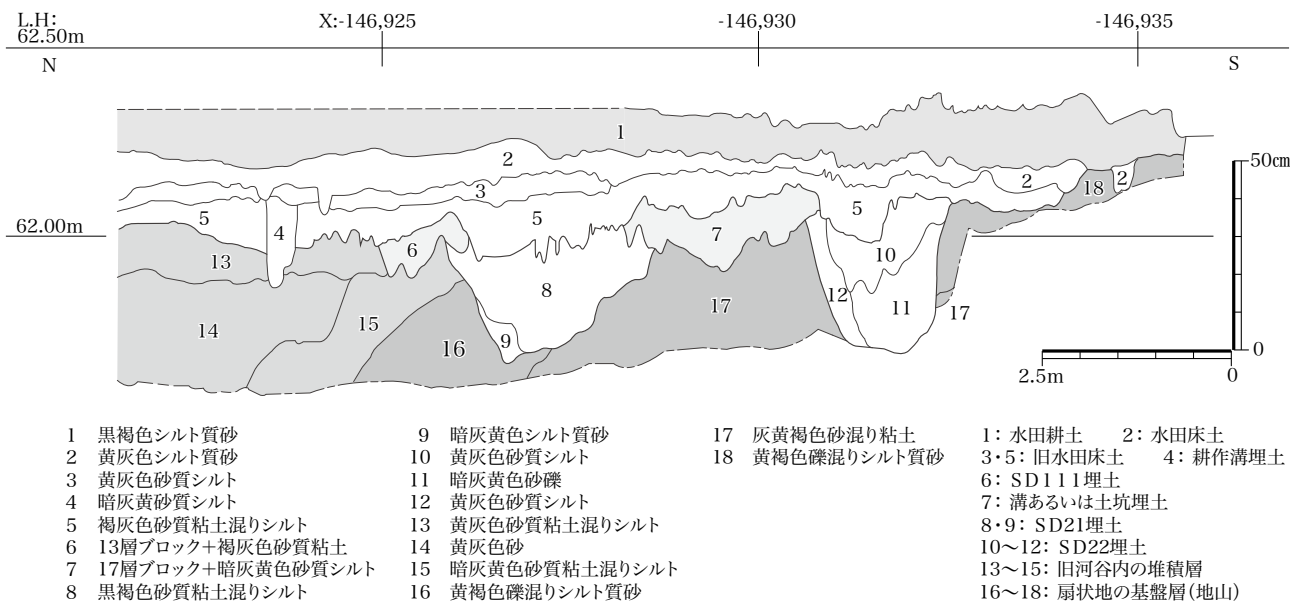
微高地にあたる発掘区の南辺では、水田耕土・床土層



HJ 第735次調査 調査地位置図 (1/5,000)

（厚さ0.2m）の下で扇状地扇端部の地山、低地にあたるその北側では、水田耕土・床土層（厚さ0.2～0.5m）の下に奈良時代の整地土層（厚さ0.05～0.1m）をはさんで河谷内の堆積層（厚さ1.6m以上）となる。

水田耕土層は黒褐色のシルト質砂、同床土層は黄灰色の砂質シルトやシルト質砂。奈良時代の整地土層は褐灰色の砂質シルトからなり、8世紀の土器・瓦片を含む。扇状地扇端部の地山はやや固い黄褐色の礫混りシルト質砂や砂混り粘土、河谷内の堆積層は主に黄灰色や青灰色の砂質シルト～粘土からなり、ともに遺物を含まない。水田床土層の直下の面（標高60.8～61.2m）が奈良～



HJ 第735次調査 南東部東壁土層断面図（縦：1/20、横：1/100）

- |                     |                  |                |                |                   |
|---------------------|------------------|----------------|----------------|-------------------|
| 1 黒褐色シルト質砂          | 9 暗灰黄色シルト質砂      | 17 灰黄褐色砂混り粘土   | 1 水田耕土         | 2 水田床土            |
| 2 黄灰色シルト質砂          | 10 黄灰色砂質シルト      | 18 黄褐色礫混りシルト質砂 | 3・5 旧水田床土      | 4 耕作溝埋土           |
| 3 黄灰色砂質シルト          | 11 暗灰黄色砂礫        |                | 6 SD111埋土      | 7 溝あるいは土坑埋土       |
| 4 暗灰黄砂質シルト          | 12 黄灰色砂質シルト      |                | 8・9 SD21埋土     | 10～12 SD22埋土      |
| 5 褐灰色砂質粘土混りシルト      | 13 黄灰色砂質粘土混りシルト  |                | 13～15 旧河谷内の堆積層 | 16～18 扇状地の基盤層(地山) |
| 6 13層ブロック+褐灰色砂質粘土   | 14 黄灰色砂          |                |                |                   |
| 7 17層ブロック+暗灰黄色砂質シルト | 15 暗灰黄色砂質粘土混りシルト |                |                |                   |
| 8 黒褐色砂質粘土混りシルト      | 16 黄褐色礫混りシルト質砂   |                |                |                   |

平安時代の遺構面、地山上面及び河谷内の堆積層の最上面（標高：前者とほぼ同じ）が弥生～古墳時代の遺構面で、ともに南から北に緩やかに下る。

### III 検出遺構

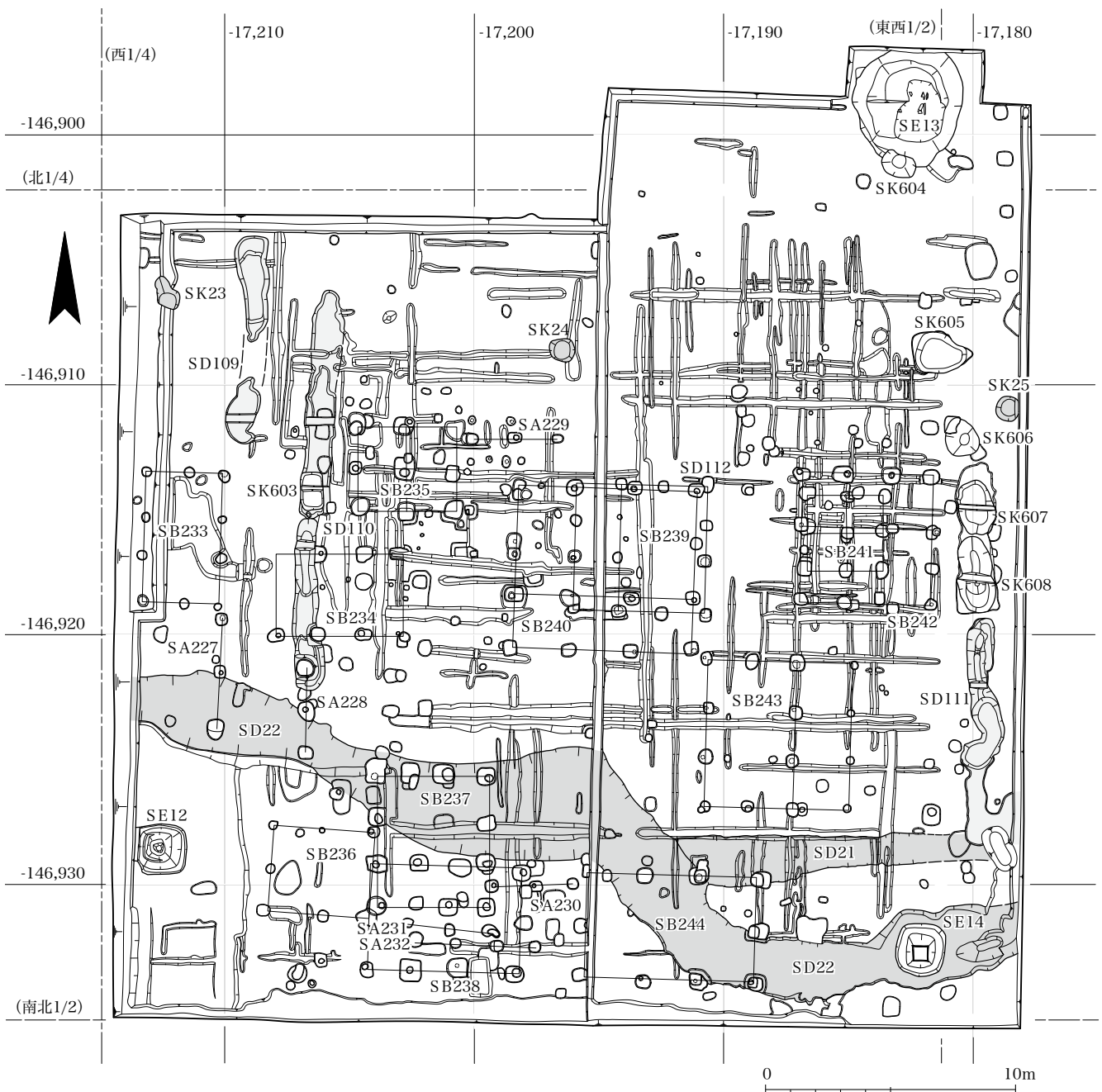
遺構検出はまず水田床土層直下の奈良～平安時代の遺構面で行い、次に整地土層を掘り下げて古墳時代以前の遺構の有無を確認した。検出した主な遺構は、弥生～古墳時代のものとなら～平安時代の宅地関連のものがあり、概要は下記及び一覧表のとおりである。なお、遺構番号は二坪内での通し番号である。

#### 弥生～古墳時代

溝2条（SD21・22）と土坑3基（SK23～25）があり、前者は地山の北縁、後者は旧河谷で検出した。

SD21・22 とともに固い地山上に形成されていることから、人工的に掘削された可能性が高い。SD21の埋土が黒褐色の砂質粘土混じりシルトで、弥生時代後期末の甕・高杯片が出土した。

SD22の埋土は上層が暗黄灰色の砂質シルト、下層が砂礫。下層から古墳時代前期頃の土師器小型丸底壺片が出土した。位置・形状と出土遺物から、HJ第608-1次調査で検出した旧河川と一連のものにとらえる。先後関係から、前述のSD21より新しい。



HJ 第735次調査 発掘区平面図 (1/250)

古墳時代以前 遺構一覧表

遺構番号	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)	時期	主な出土遺物	備考
SD21	東西	長さ14以上 幅; 1.3~2.0	0.3~0.4	弥生後期	弥生土器甕・高杯 (大和VI-3・4)	SD22より古く、発掘区外東に続く
SD22	東南~西北	長さ37以上 幅; 1.5~2.5	0.3~0.4	古墳前期の可能性	上層: 土師器甕、須恵器鉢A (8世紀) 下層: 弥生土器甕 (大和VI-3・4)、土師器小型丸底壺 (布留式)	発掘区外東に続き、特徴と位置関係からHJ608-2次調査地で検出した旧河川と一連の可能性
SK23	不整形円形	長径1.5× 短径0.8	0.5	弥生後期の可能性	—	埋土はSD21と同様の黒褐色砂質シルト
SK24	円形	径1.0	0.4	弥生後期の可能性	—	埋土はSD21と同様の黒褐色砂質シルト
SK25	円形	径1.0	0.2	弥生後期の可能性	—	埋土はSD21と同様の黒褐色砂質シルト

奈良時代 遺構一覧表

遺構番号	柱筋 棟方向	規模 (間)		長さ (m)			柱間寸法 (m)		備考
		桁行×梁行 + 廂	桁行	梁行	廂の出	桁行	梁行		
SA227	南北	2		4.2			2.1等間		
SA228	南北	2		3.3			1.65等間		SD110より新しい
SA229	東西	2		3.3			1.65等間		
SA230	東西	2		3.3			1.65等間		SB237・238と位置が重複
SA231	東西	2		3.0			1.5等間		SB238と位置が重複
SA232	東西	3		4.8			東から1.65-1.5-1.65		SB238と位置が重複
SB233	南北	3×2	5.25	3.0		北から1.65-1.65-1.95	1.5等間		
SB234	東西	3×1	4.95	3.3		1.65等間	1.65等間	北西隅と妻の柱欠く、SD110より新しい	
SB235	東西か	2×2	東西3.9	南北3.0		東西1.95等間	南北1.5等間	総柱建物	
SB236	東西	2×2	3.9	3.3		1.95等間	1.65等間	SB237・238より古い可能性	
SB237	南北	3×3	5.4	4.5		1.8等間	1.5等間		
SB238	東西	3×2	6.0	4.2		東から2.4-1.8-1.8	2.1等間	SB237より新しい	
SB239	南北	3×2+西1	5.1	3.3	1.8	北から1.5-1.5-2.1	1.65等間		
SB240	東西	3×2+南1	7.2	4.2	2.1	2.4等間	2.1等間	SB239より新しい	
SB241	—	2×2	東西・南北とも3.0			東西・南北とも1.5等間		総柱建物	
SB242	東西	3×2+北1	5.1	3.0	2.25	東から2.1-1.5-1.5	1.5等間	SB241より新しい	
SB243	南北	3×2+東1	5.85	3.6	2.25	1.95等間	1.8等間	西側柱列がSB239の東側柱列と柱筋が揃う	
SB244	東西	3×2	6.75	4.2		2.25等間	2.1等間	SB238と両側柱筋が揃う	

遺構番号	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)	時期	主な出土遺物	備考
SD109	南北	長さ: 10、幅: 1前後	0.2	8世紀	土師器; 皿A、甕 須恵器; 杯、杯蓋、甕	
SD110	南北	長さ: 16、幅: 0.8~1.4	0.2~0.4	8世紀	土師器; 杯A・B、皿C、甕 須恵器; 杯A、鉢A、甕 (縄文土器; 深鉢-時期不明)	SA228・SB234・SK603より古い
SD111	南北-東西	長さ: 9、幅: 0.8~1.1	0.1~0.5	8世紀	土師器; 杯A・B、皿A・C、甕 須恵器; 杯A・B、杯蓋、鉢A、甕、壺 (短頸、猿投産) (古墳後期; 朝顔形埴輪)	南北溝の南端で東に屈曲し、発掘区外に続く南北溝の位置は坪内の東西2分割線付近
SD112	東西	長さ: 11.5、幅: 0.3	0.1	8世紀	なし	SB239・242より古い
SK603	隅丸方形	東西1.2×南北2.0	0.2	8世紀	土師器; 杯か皿 須恵器; 甕	SD110より新しい
SK604	隅丸方形	東西1.4×南北1以上	0.7	8世紀か	土師器片 (甕か)	SE28より古い
SK605	不整形円形	東西2.3×南北1.7	0.3	8世紀	土師器; 杯A、皿A・C 須恵器; 杯B、盤A、甕、壺K	
SK606	円形	径1.4	0.4	8世紀	土師器; 杯A、壺B、甕 須恵器; 甕	
SK607	楕円形	東西1.5×南北2.7	0.2	8世紀	須恵器; 杯蓋、甕	SD26と中軸が揃い、SK35と近接
SK608	楕円形	東西1.5×南北2.7	0.5	8世紀	土師器; 杯A、杯蓋、壺A、甕 須恵器; 甕	SD26・SK34と中軸が揃い、近接

遺構番号	掘方等			井戸枠			時期	主な出土遺物	備考
	平面形態	平面規模 (m)	深さ (m)	構造	内法 (m)	水溜・濾過施設等			
SE12	隅丸方形	一辺2.0	2.2	(方形縦板組横 棧留の可能性)	(一辺0.9 前後)	なし	8世紀後半	土師器; 椀A、皿A・C、高杯、甕、壺E 須恵器; 杯A・B、杯蓋、皿A、鉢E、甕、壺L・M、横瓶、転用硯、墨書 瓦類; 丸・平瓦 (古墳後期; 埴輪-円筒・朝顔形・家形)	井戸枠は抜き取られており、部材の一部が残存
SE13	円形	径4.5	2.1	(方形縦板組横 棧留の可能性)	(一辺0.9 前後)	なし	8世紀	土師器; 杯A、杯蓋、椀A、皿C、壺A蓋、壺B 須恵器; 杯B、杯蓋、皿A・E、甕、壺K 瓦類; 丸・平瓦 木製品; 蓋板 炉壁 (铸造関連か)	井戸枠は抜き取られており、部材の一部が残存
SE14	隅丸方形	一辺2.0	1.1	方形縦板組横 棧留	一辺0.6	なし	8世紀末頃	土師器; 杯A・B、椀A、皿A、甕 須恵器; 杯A・B、杯蓋、甕、壺、転用硯、墨書 瓦類; 丸・平瓦、熨斗瓦 木製品; 曲物底板	側板は一枚板

SK23～25 30～35m 間隔で西北から東南にほぼ一直線上に並ぶ。出土遺物はないが、埋土がSD21と同様の黒褐色砂質粘土で、これと同時期の可能性が高い。

### 奈良時代

掘立柱列6条(SA227～232)、掘立柱建物12棟(SB233～244)、溝3条(SD109～111)、井戸3基(SE12～14)、土坑6基(SK603～608)がある。

SA227～232 いずれも柱間2～3間の柱列で、小規模な塀の可能性もある。SA227の柱筋は北に対しやや東、SA231・232の柱筋は東に対しやや南に振れる。

SB233～244 身舎桁行3間×梁間2間の廂付き建物が4棟(SB239・240・242・243)、東西・南北とも2間の総柱建物が2棟(SB235・241)ある。SB233・236・238・244の主軸は、北に対しやや東に振れる。SB239の東側柱列とSB243の西側柱列、SB240の身舎南側柱列とSB242の南側柱列は柱筋が揃う。SB238・244は柱筋・棟筋を揃えて東西に並び、南側柱列は道路心から推定した二坪の南北1/2分割ラインのすぐ北である。SB242の東妻面は、同様に推定した二坪の東西1/2分割ラインにほぼ沿う。なお、これらの1/2分割ラインをまたぐ建物はない。

SD109～112 SD110は、後述するSD111の27m(90小尺)西に位置する。SD111は、西肩が道路心から推定した二坪の東西1/2分割ラインにほぼ沿い、南端で東に屈曲する。東隣のHJ608-3次調査で検出した東西方向の溝SD106とは接続しない。位置と形状から、ともに二坪内の区画溝とみる。SD112は、後述する重複関係から最も古い段階の遺構であることがわかる。

SE12～14 取水層はSE12・14が微高地の地山の砂礫層、SE13が河谷の埋没流路の砂礫層である。

SE12・13は井戸枠が抜き取られていた。SE12は掘形内に部材の縦板片が残り、底部付近で須恵器横瓶・皿Aが出土した。SE13は掘形東寄りに掘られた井戸枠の抜取穴内に部材の縦板片や横板片が残っていた。SE14は櫃の側板を井戸枠の側板に転用しており、枠内から完形の土師器甕が出土した。SE13・14は、道路心から推定した二坪の東西1/2分割ラインのすぐ西に位置する。

SK603～608 SK607・608は、SD110のすぐ北側で溝と南北中軸線を合わせて並ぶ。SK604～606もこのライン付近に掘削されている。

なお、これらの遺構に認められる先後・重複関係は、以下の通りである。

### 先後関係(旧→新)

1) SD110 → SA228、SB234、SK603

2) SD112 —→ SB239 → SB240  
                        └→ SB242

2) SB237 → SB238

4) SB241 → SB242

5) SK604 → SE13

### 重複関係(新・旧不明、同時併存が不可)

a) SA230 — SB237

b) SB238 — SA230・231・232、SB236

※下線：柱筋や主軸が方位に対しやや振れる柱列・建物

## IV 出土遺物

遺物整理箱で33箱分あり、その内訳は縄文～弥生時代のサヌカイト石核・剥片、弥生土器、古墳時代の土師器、奈良時代の土器類、瓦埴類、木製品である。主なものを以下に記す。

### 土器類

**弥生時代** 溝SD21から出土した弥生土器甕・高杯は大和VI-3・4様式のもの。甕は体部片で外面にタタキ目が残る。高杯は碗形の杯部片。

**古墳時代** 溝SD22から出土した土師器小型丸底壺は肩～体部片で、詳細な時期は不明。奈良時代の井戸SE12から出土した埴輪は川西編年V期のもので、円筒・朝顔形・形象(家形)の破片がある。時期と位置関係から、すぐ南の石ガマチ古墳に伴う可能性が高い。

**奈良時代** 主な器種は、土師器杯A・B、杯蓋、碗A、皿A・C、高杯、壺A・B・E及び壺A蓋、須恵器杯A・B、杯蓋、皿A・E、鉢A・E、盤A、甕、壺K・L・M、横瓶で、他に製塩土器がある。

井戸SE12から出土した土師器碗Aはc手法、須恵器壺Mは底部へう切りで高台を付す。井戸SE12～14の出土土器は概して8世紀後半～末の様相がみられる。

なお、溝SD111から猿投産の須恵器壺、井戸SE12・14から須恵器の転用硯(杯蓋・杯A)や墨書土器片、同SE13付近の遺物包含層から円面硯が出土した。土坑SK606から出土した土師器壺B・皿Cには、内面に漆膜が付着したものがある。

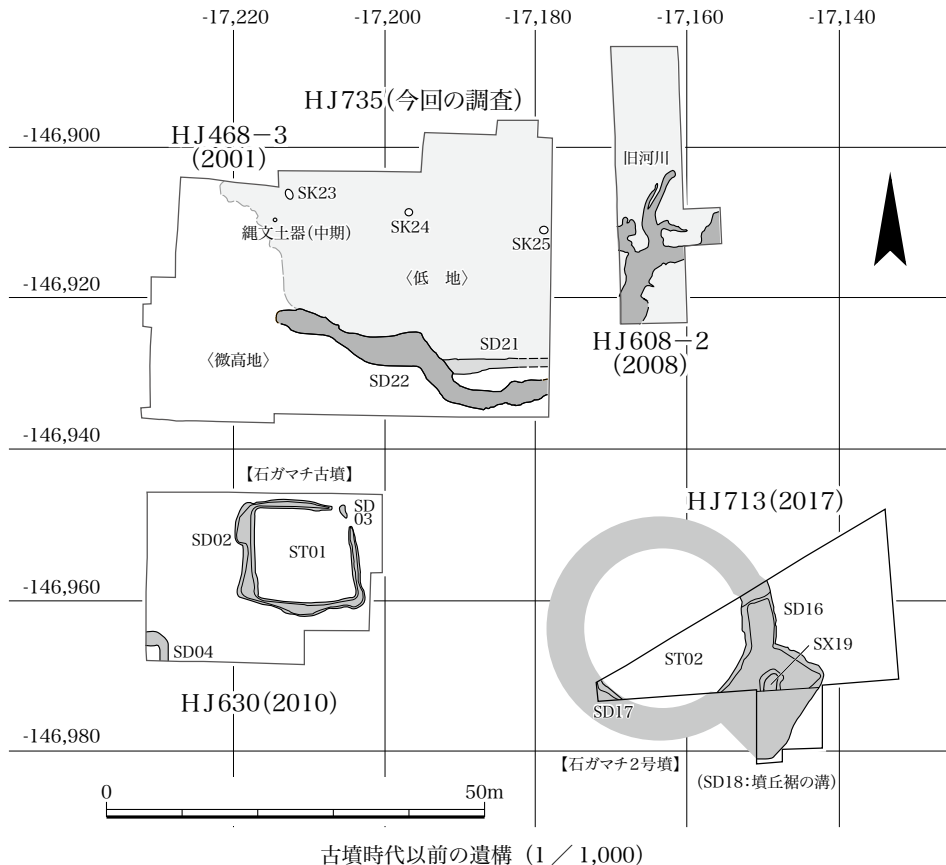
### 瓦埴類

軒瓦、丸・平瓦、熨斗瓦、埴がある。大半が丸・平瓦で、軒瓦は井戸SE13から出土した型式不明の軒平瓦1点のみである。熨斗瓦は井戸SE14の枠内上部の埋土から20点以上出土している。

### 木製品他

井戸SE14の井戸枠側板には櫃の側板を転用しており、接合部の切欠きや釘穴が残る。井戸SE13から多数出土した炉壁片は、铸造と関連する可能性がある。





## V 調査所見

今回の調査と隣接地で実施した HJ 第 468-3・608-2・630・713 次調査の成果を総合すると、縄文～古墳時代の旧地形と遺構の様相及び奈良～平安時代の二坪内の宅地利用について、以下のことがわかった。

**古墳時代以前** 旧地形は、今回の調査地の南寄り、西隣の HJ 第 468-3 次調査地の北東部を除く部分と南隣の同第 630・713 次調査地が地盤の固い扇状地扇端部の微高地、今回の調査地の中央部以北、西隣の HJ 第 468-3 次調査地の北東部と東隣の同第 608-1 次調査地がシルト・粘土で河谷が埋まってできた低地にあたる。

微高地上に古墳時代前期の石ガマチ 2 号墳と同中期末の石ガマチ古墳が築かれ、その縁辺部に弥生時代後期末の溝 SD21 と古墳時代前期後半～中期初頭の溝 SD22 (= 旧河川) が、低地に溝 SD21 と同時期とみられる土坑 SK23～25 が掘削されている。また、縄文～弥生時代の遺物を含む堆積層は HJ 第 468-3 次調査北東部付近の低地に限られている。

微高地縁辺部～低地の遺構からは、弥生時代後期末に開発され、古墳時代前期末～中期に再開されたことがうかがえる。溝 SD21・22 は埋土がシルト・粘土や砂礫であることから水路と考えられ、先後・位置関係から SD21 は SD22 の前身遺構とみる。地形・地盤や集落関

連の遺構がなく出土遺物が極めて少ない点を踏まえれば、耕地開発の可能性はある。

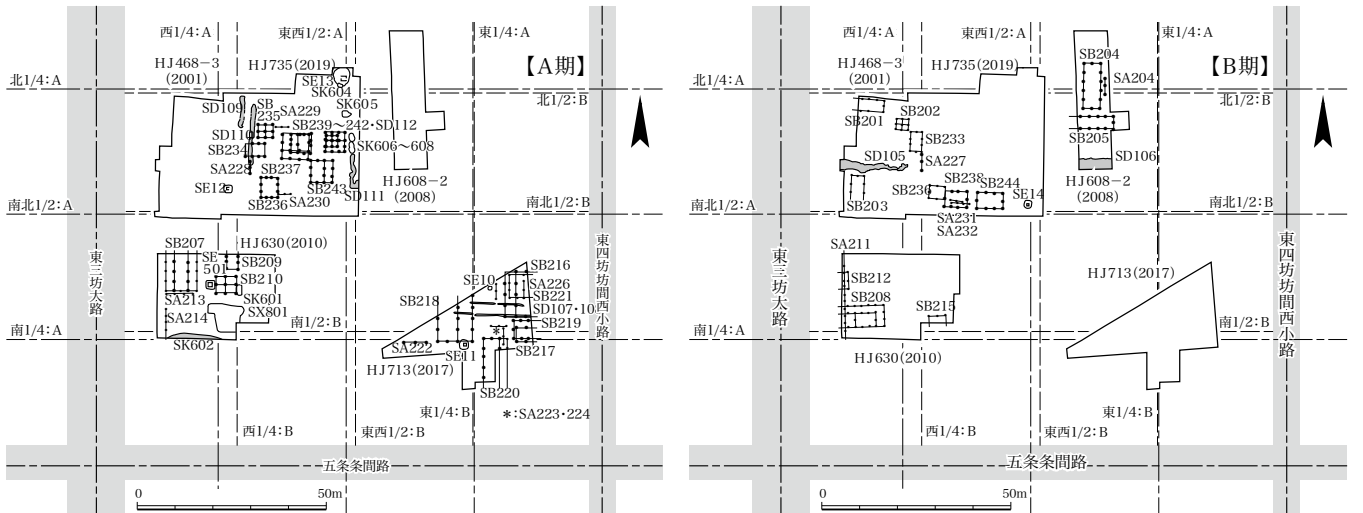
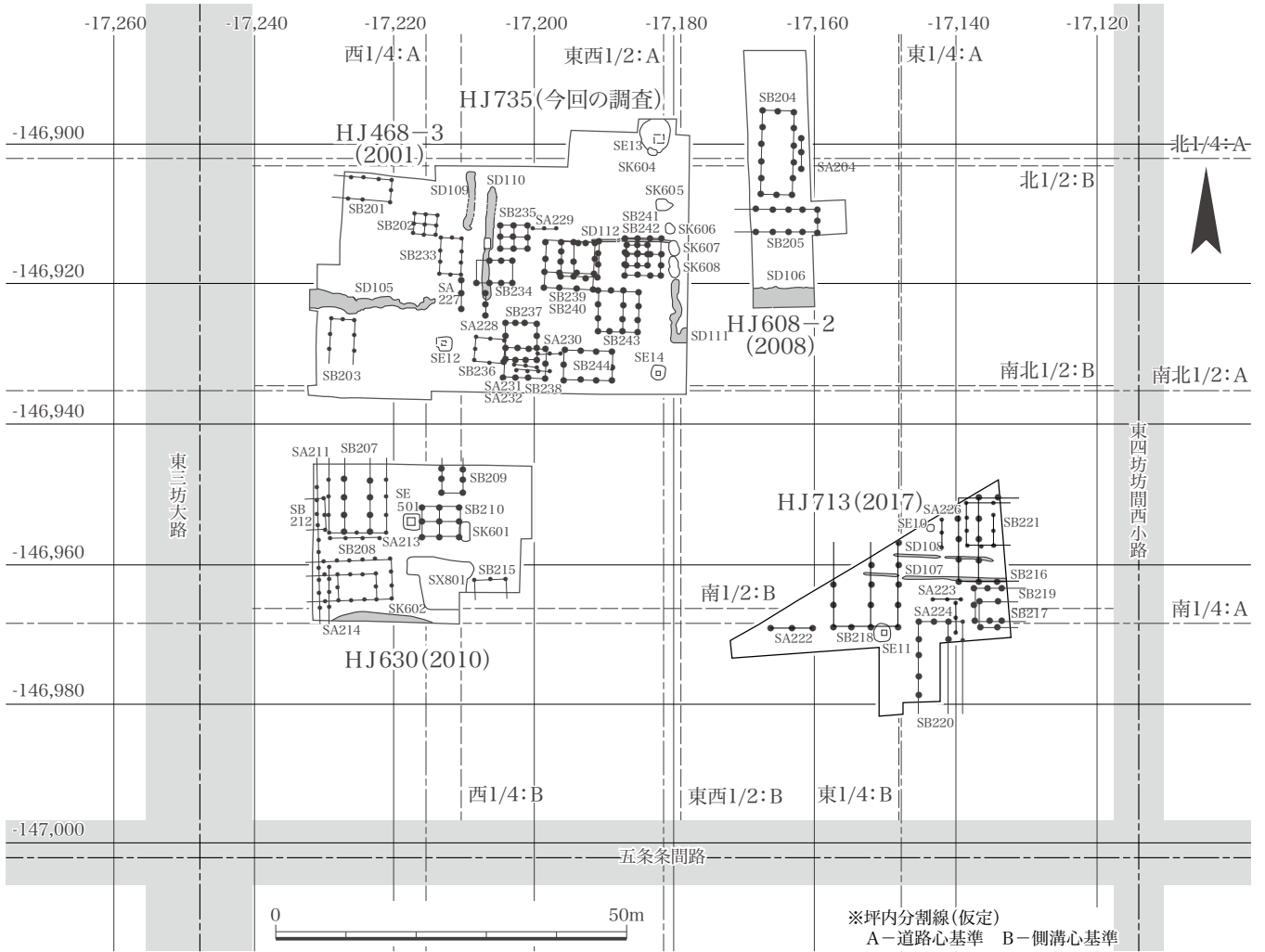
石ガマチ 2 号墳が溝 SD22 とほぼ同時期に築かれ、同中期末に石ガマチ古墳が築かれたことについては、同前期後半～中期初頭の再開が地域社会の再編と関連し、再編された社会が中期末まで継続したことを反映すると捉える。周辺の微高地には、他にも同様の小規模な古墳が存在する可能性がある。

**奈良～平安時代** 二坪の北半部では、主に奈良時代後半～末頃に宅地として利用され、その下限は HJ 第 468-1 次調査地の溝 SD105 の出土土器の時期から平安時代前半と考える。

建物・柱列は、主軸や柱筋が方位にほぼ合うものと、北（東）に対しやや東（南）に振れるものに大別でき、前者は坪の東西 1/2 分割ライン西側で西 1/4 分割ラインの東にまとまる。建物 SB239・240 の先後関係や周辺の調査成果から、後者の方が新しいとみる。

坪の 1/2 分割ライン上に建つ建物がなく、東西 1/2 分割ライン沿いに区画溝・井戸等がみられることから、坪内を大きく四つに区分して利用したことが明確になった。主軸や柱筋が方位にほぼ合う建物・柱列や区画溝の分布から、さらに分割して利用したことが推察できる。

南半部の調査成果と総合すると、二坪内の宅地利用の



奈良時代 二坪内の遺構の様相 (1 / 1,000) と宅地利用の変遷 (1 / 2,000)

特徴は、概ね以下のようにまとめることができる。

1. 奈良時代前半に南東部で宅地利用が始まり、同後半～平安時代初頭には坪内全体に及んでいる。坪の1/2分割ラインで大きく四つに区分し、さらにその中を細分化する場合もあり、1/16～1/4坪規模の宅地に分割利用している。
2. 建物・柱列は、主軸や柱筋が方位にほぼ合うもの(A)

とやや振れるもの(B)があり、先後関係から後者の方が新しいとみる。

3. 2と他の遺構の先後・重複関係から、Aが主体となる時期(A期)とBが主体となる時期(B期)に区分できる。北半・南西・南東の各部分で1時期につき2・3の小変遷が認められるが、対応関係の手がかりが少なく、坪内全体での把握には至らなかった。(安井宣也)

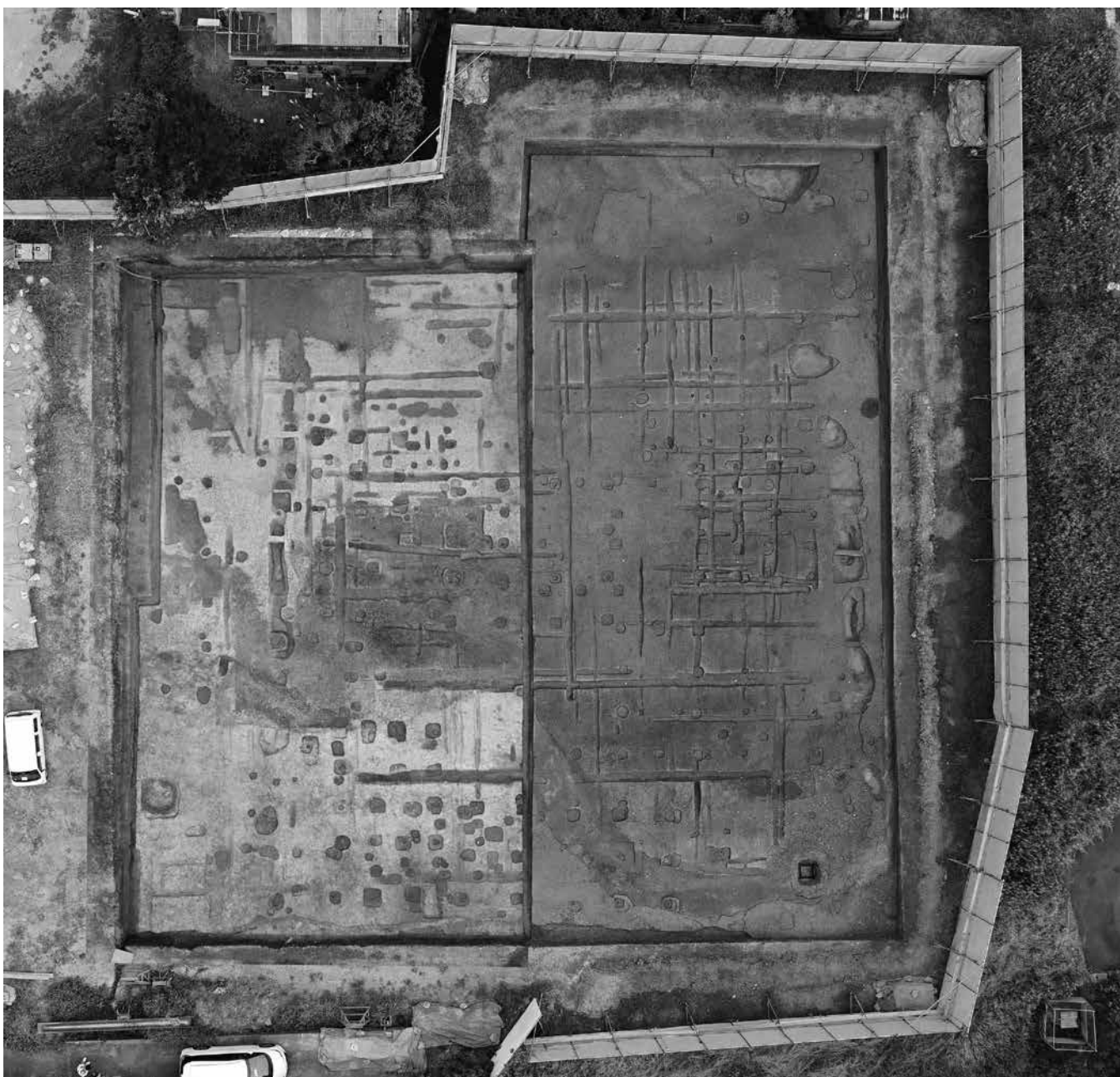
平城京跡（左京五條四坊二坪）の調査 第735次



HJ 第735次調査 発掘区遠景（西南から）



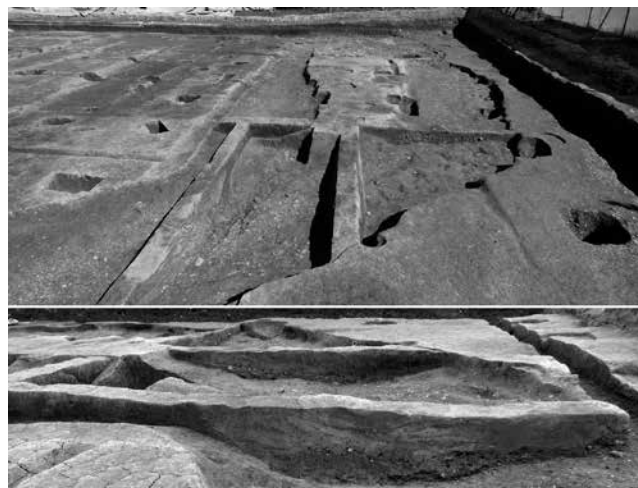
HJ 第735次調査 発掘区遠景（東南から）



HJ 第735次調査 発掘区垂直写真（上が北）



HJ 第735次調査 発掘区南西部（東から）



HJ 第735次調査 上：SD21・22(西から)、下：SD21埋土断面(北から)



HJ 第735次調査 発掘区北西部（西南から）



HJ 第735次調査 井戸SE12（東北から）



HJ 第735次調査 発掘区東半部（西南から）



HJ 第735次調査 井戸SE13（半裁時、南から）



HJ 第735次調査 発掘区東半部（北から）



HJ 第735次調査 井戸SE14（北から）

## 5. 平城京跡（左京四条五坊九坪）・奈良町遺跡 第736次調査

事業名 共同住宅新築	調査期間 令和元年9月24日～10月21日
届出者名 株式会社エンジェル ウィン	調査面積 196㎡
調査地 三条松町 374 番 1	調査担当者 高岡 桃子

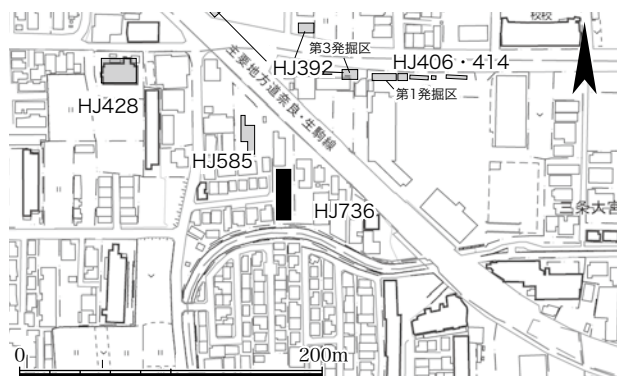
### I はじめに

調査地は平城京の条坊復原では左京四条四坊三坪の中央部にあたる。三坪内では、坪北東隅で奈良市が平成9年度にHJ第392次調査を実施し、第3発掘区では掘立柱建物のほか、四条条間路を踏襲する流路の可能性がある素掘溝を検出している。また、今回の調査区の北西側で平成19年度にHJ第585次調査をおこない、8世紀、12世紀、15～16世紀の土器を含む南北方向の河川跡を検出している。北東の位置で平成10年度に実施したHJ第406・414次調査では、西端の第1発掘区で、三・六坪の坪境小路の両側溝の可能性のある溝2条を検出している。

今回の調査は三坪内における遺構の残存状態の確認と宅地利用の様相を確認するためにおこなった。

### II 基本層序

発掘区内の基本層序は、造成土が約1.2m、暗灰色～黒色粘土質シルト（湿地状の堆積）が約0.5m、灰褐色粘土質シルト（15世紀以降の旧地表面）が約0.1～0.3m

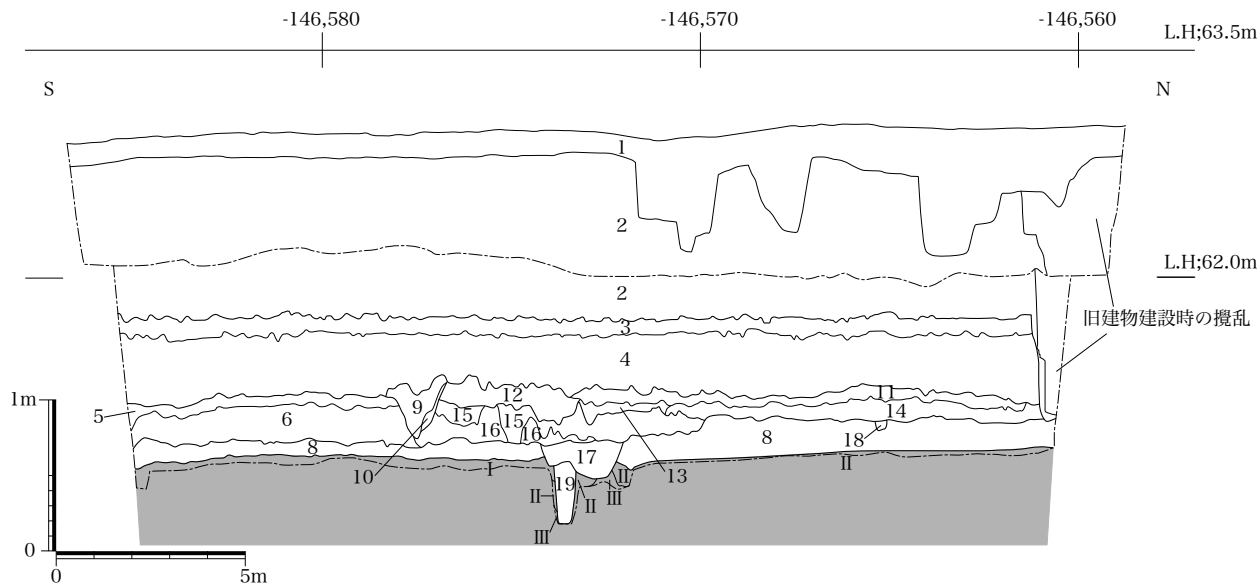


HJ 第736次調査 調査地位置図 (1/5,000)

堆積し、地山に至る。地山は調査区南側で径5～8cmの礫が多量に混じる茶褐色粘土質シルト、北側で黄灰色粘土質シルトとなり現地表面から遺構面の深さは概ね2.2mである。遺構検出は地山上面でおこなった。地山面の標高は、約60.8mである。

### III 検出遺構

検出した遺構には奈良時代の掘立柱列1条(SA01)、



- |                   |                      |                            |
|-------------------|----------------------|----------------------------|
| 1 碎石              | 9 礫混じりの暗灰褐色砂質土（攪乱）   | 17 茶褐色粘土質シルト（SK 08埋土）      |
| 2 造成土             | 10 黒色粘土質シルト（攪乱）      | 18 黄白色粘土質シルト（素掘溝埋土）        |
| 3 黒色粘土質シルト        | 11 やや褐色がかかった灰色粘土質シルト | 19 暗褐色砂質土（柱穴埋土）            |
| 4 暗灰色粘土質シルト       | 12 やや暗めの青灰色粘土質シルト    | I 茶褐色粘土質シルト、径5～8cmの礫多量に混じる |
| 5 灰褐色粘土質シルト       | 13 褐色砂質土             | II 黄灰色粘土質シルト               |
| 6 褐色砂質土           | 14 灰色砂質土             | III 灰褐色砂質土                 |
| 7 灰褐色砂質土（素掘溝埋土）   | 15 褐灰色砂質土            | ※ I～III＝地山                 |
| 8 茶褐色砂質土（SD 05埋土） | 16 褐灰色粘土質シルト         |                            |

HJ 第736次調査 発掘区西壁土層図（横 1/200、縦 1/50）

HJ 第736次調査 遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模(間)	桁行全長	梁行全長	柱間寸法(m)		廂の出(m)	柱穴の深さ(m)	備考
		桁行×梁行	(m)	(m)	桁行	梁行			
SA01	東西	1以上	2.1以上	—	2.1	—	—	0.2	
SB02	南北	2×不明	6.0	—	3.0等間	—	—	0.3～0.5	
SB03	南北	3×不明	6.9	—	(北から) 2.4-2.4-2.1	—	—	0.3～0.5	SK08より古い
SB04	南北	2×不明	3.6	—	1.8等間	—	—	0.2～0.4	

遺構番号	平面形等	平面規模(m)	深さ(m)	時期	主要出土遺物	備考
SD05	南北方向	幅1.0以上、長さ25以上	0.1～0.2	8世紀後半	土師器片、須恵器片、平瓦	SK08より古い。三坪内区画溝の可能性
SK06	不整形	東西1.3×南北0.5以上	0.1～0.15	8世紀	平瓦	
SK07	方形	東西1.5以上×南北1.5以上	0.05～0.1	8世紀	土師器片、須恵器片、土馬	
SK08	不整形	東西3.0以上×南北3.0	0.1～0.2	不明	土師器片	

掘立柱建物 (SB02～04)、素掘溝1条 (SD05)、土坑3基 (SK06～08) がある。

SA01 東西1間 (2.1m) 以上の掘立柱列。発掘区外西側に続くと思われる。検出した柱穴2基の上面はSK08によって壊され、SD05との前後関係については判明しなかった。

SB02 柱間2間 (6.0m) の掘立柱列。発掘区外東あるいは西に続く掘立柱建物と考える。

SB03 南北3間 (7.2m) の掘立柱列。発掘区外東側に続く掘立柱建物と考える。

SB04 南北2間 (3.6m) の掘立柱列。発掘区外東側に続く掘立柱建物と考える。

SD05 発掘区西端で検出した南北方向の素掘溝で、東肩のみ検出した。西肩は発掘区外である。発掘区北側ではSD05より新しい南北方向の素掘溝によって東肩の一部が壊されているものの、ほぼ国土方眼方位に沿って掘削される。三坪の推定東西1/2ライン付近に位置しており、三坪内を分割する区画溝の可能性はある。

SK06 発掘区北西隅で検出した小土坑である。SD05より新しく、埋土は褐色砂質土である。平瓦が5～6点まとまって出土している。

SK07 発掘区北東隅で検出した浅い土坑状の遺構。褐色粘土質シルトの埋土中から8世紀の土師器・須恵器・土馬が出土した。

SK08 発掘区中央部で検出した不整形の土坑。SA01・SD05より新しい。

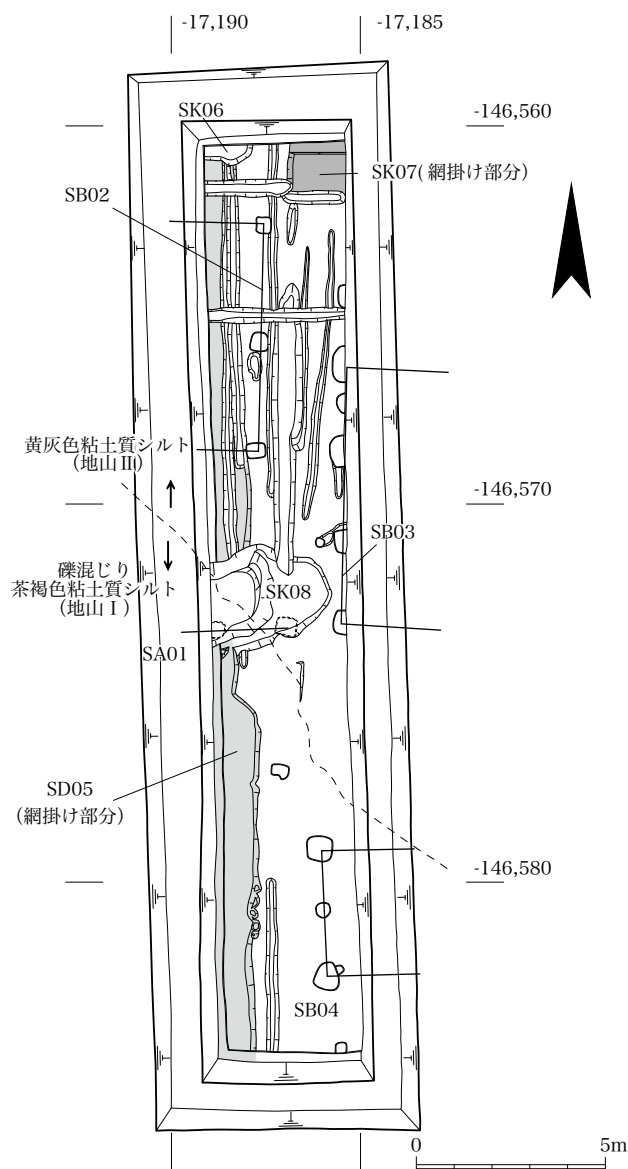
IV 出土遺物

遺物整理箱で3箱分が出土した。主な出土遺物には8～9世紀の土師器、須恵器、平瓦、丸瓦、土馬、銭文不明の銭貨1点がある。土器類は小片が多く、詳細な時期の特定は難しい。

V 調査所見

今回の調査では、遺構が良好な状態で遺存しており、SD05の検出によって三坪を東西に区画し利用してい

た可能性がある」と判明した。SA01、SB02～04については、国土方眼方位北でやや東に振れるもの (SB02・03)、国土方眼方位北でやや西に振れるもの (SA01・SB04) に分かれることから、2時期の遺構変遷が想定されるが、遺物が少ないため詳細な時期の判断は難しい。  
(高岡桃子)



HJ 第736次調査 遺構平面図 (1/200)



HJ 第736次調査 発掘区全景（北から）



HJ 第736次調査 発掘区全景（南西から）

## 6. 平城京跡（左京四条四坊十坪）の調査 第737次

事業名 ホテル新築  
届出者名 株式会社 東横イン  
調査地 三条宮前町 283 - 1、283 - 2、283 - 3

調査期間 令和元年12月13日～令和2年2月21日  
調査面積 490㎡  
調査担当者 安井宣也

### I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京四条四坊十坪の北東部南寄りにあたり、地形的には佐保川の氾濫平野に面する能登川扇状地の扇端に位置する。

北隣接地ではHJ第616次調査（平成20年度）を実施し、地山上面で奈良時代の掘立柱建物2棟（SB01・02）、掘立柱列1条（SA03）、鎌倉時代以降の粘土採掘坑群（SX04）を検出した。

今回の調査は、十坪の宅地利用の様相確認を主な目的として、建物予定地に発掘区を設定して実施した。

### II 基本層序

基本的には、宅地に伴う造成土（厚さ0.5m）、黒褐色砂質シルトの耕土（厚さ0.2m）、主に灰色砂質シルトからなる同床土層（3層あり、厚さ0.3m）の下で、発掘区西・東寄りが扇状地の基盤層（以下、「地山」）である灰色粘土質シルト層、中央部が旧河谷の埋土である青灰色砂混り粘土層となる。旧水田床土層には乾田に特有の斑鉄がみられ、最下層は8世紀の土器・瓦片を含む。地山及び旧河谷埋土の上面も斑鉄が目立つ。

旧水田床土層直下の地山及び旧河谷埋土の上面（標高62.0～62.2m）が弥生時代後期末～奈良時代の遺構面で、東から西に緩やかに下る。

### III 検出遺構

遺構検出作業は地山及び旧河谷埋土上面で行った。主な遺構は弥生～奈良時代のもので、その概要は下記及び一覧表の通り。なお、遺構番号はHJ第616次調査からの続き番号とした。

#### 弥生～古墳時代

弥生時代後期末の溝3条（SD05～07）及びSD05内に構築された堰（SX08）・杭列（SX09）、SD06内に掘削された土坑（SK10）と、時期不詳の溝2条（SD11・12）がある。特記する点は、以下の通り。

SD05 旧河谷の西辺に掘削され、掘り直しがある。埋土は河川と似ており、当初の溝SD05古は灰色砂礫層の堆積後に黒褐色腐植混じり粘土層で埋まり、掘り直された溝SD05新は灰色の砂礫層や砂層で埋まる。底面の標高はSD05古が概ね61.3m、SD05新が概ね61.6m。



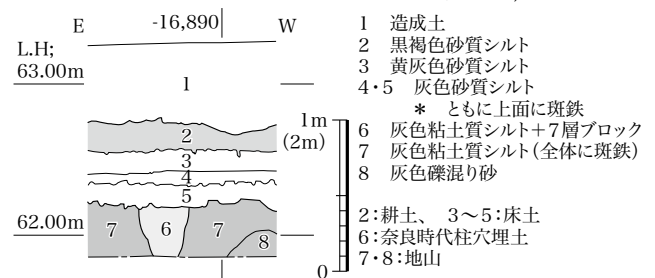
HJ第737次調査 調査地位置図 (1/5,000)



HJ第737次調査 調査地全景 (南西から)

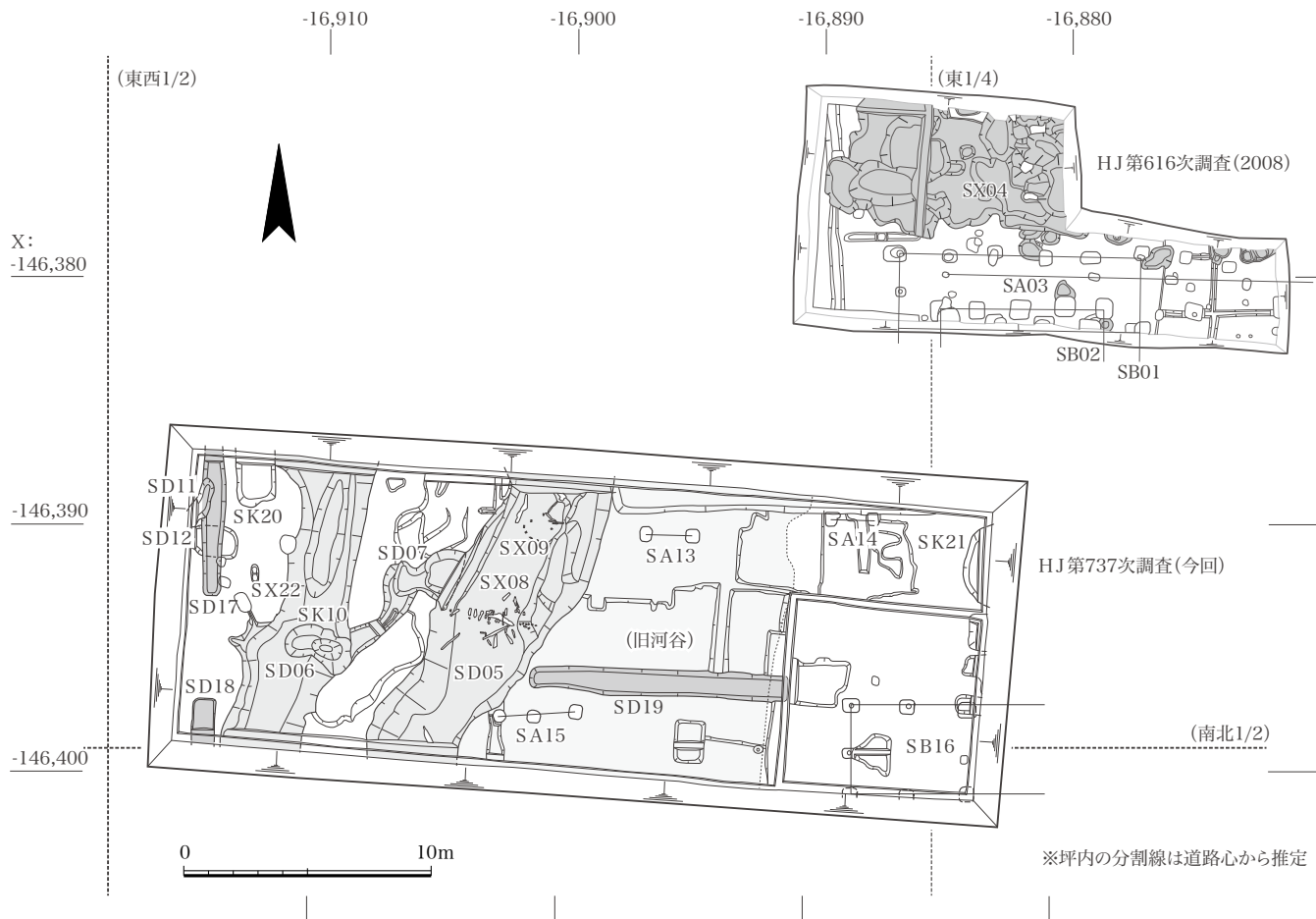


HJ第737次調査 調査地全景 (東から)



HJ第737次調査 南壁土層断面図 (縦1/50 横1/100)





HJ 第 737 次調査 遺構平面図 (1/300)



HJ 第 737 次調査 発掘区全景 (真上から、上が北)



HJ 第 737 次調査 発掘区東南部 (北西から)



HJ 第 737 次調査 発掘区全景 (南西から)



HJ 第 737 次調査 発掘区全景 (東から)



HJ 第737次調査 SD05及びSX08・09検出状態(北東から)



HJ 第737次調査 SX08(北東から)



HJ 第737次調査 SX09(南西から)

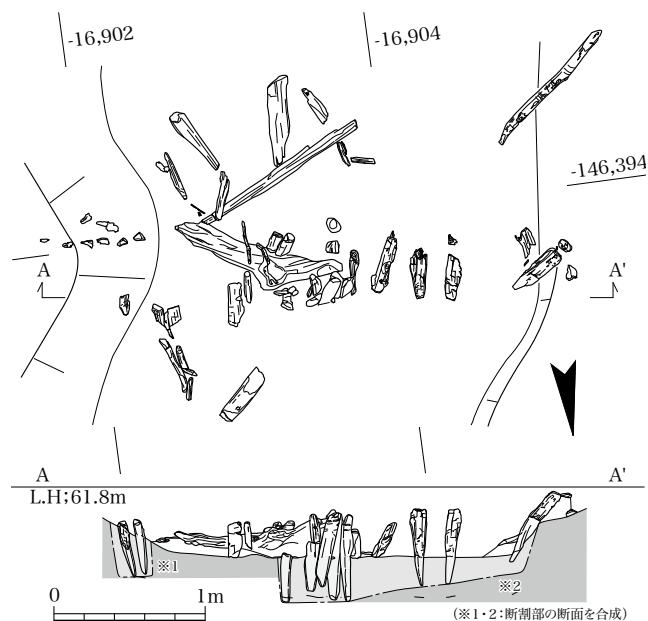
SD05 新・古ともに埋土から弥生時代後期末の土器片が出土したが、SD05 新が大半を占める。

SD06 SD05の西側に沿って掘削されており、後述のSD07を介してSD05新と同じ灰色の砂礫層や砂層で埋まる。底面の標高は概ね61.8mでほぼ水平。

埋土から弥生時代後期末と古墳時代初頭の土器片が出土し、後者は埋没時期の下限を示すと考える。

SD07 SD05・06を接続する。底面は西から東に下り、その標高は61.6~61.9m。出土遺物はない。

SX08・09、SK10 SX08、09はSD05古の埋土掘り下げ時に検出した。SX08はSD07南肩の延長上で溝を横断する堰で、矢板と杭・横木で構成され、矢板・杭の基部を地山の底面に打ち込む。北からの水流で押され、南向きに傾か倒れている。SX09は方形に周回する杭列で、基部を旧河谷埋土の底面に打ち込む。用途不明。検出状態から、SD05古の付属施設とみる。SK10はSD06



HJ 第737次調査 SX08平面・立面図(1/50)

遺構一覧表(古墳時代以前)

遺構番号	平面形等	平面規模(m)	深さ(m)	時期	主な出土遺物	備考
SD 05	北東→南西	長さ12.5以上 幅約4	0.8前後	弥生後期末	弥生土器-甕・壺・鉢・高杯(大和第VI-3・4様式)	掘り直しがあり、土器の大半は掘り直し後のSD05新の埋土から出土。
SD 06	北→南	長さ12.0以上 幅約3	0.2前後	弥生後期末	弥生土器-甕・壺・鉢・高杯(大和第VI-3・4様式)、古墳時代土器器-甕・高杯(布留式)	SD07を介してSD05と接続。埋没の下限は古墳時代初頭の可能性。
SD 07	北東→南西	長さ5.5以上 幅0.8~3.0	0.1~0.3	弥生後期末	-	SD05・06と接続、埋土はSD05新と一連。
SX 08	ほぼ東西	長さ約8 残存高約0.3	-	弥生後期末	-	SD05内でSD10との分岐部に構築された堰。掘削当初の溝に伴う。
SX 09	ほぼ方形	一辺0.9~1 残存高約0.3	-	弥生後期末	-	SD05内で堰SX08の北にある周回する杭列。掘削当初の溝に伴う。
SK 10	不整形円形	東西1.5×南北2.6	0.3	弥生後期末	-	SD06内でSD10との合流部に掘削、水溜の可能性。
SD 11	北東→南西	長さ2以上 幅約1.0	0.3	古墳以前の可能性	-	先後関係からSD17(奈良時代)より古く、発掘区外南西に続く。
SD 12	北東→南西	長さ2以上 幅約1.3	0.1~0.3	古墳以前の可能性	-	先後関係からSD17(奈良時代)より古く、発掘区外西に続く。

遺構一覧表（奈良時代）

遺構番号	柱筋棟方向	規模（間）	全長（m）		柱間寸法（m）		柱穴の深さ（m）	備考
		桁行×梁行	桁行	梁行	桁行	梁行		
SA13	東西	1	2.1		2.1		0.3	
SA14	東西	1	1.8		1.8		0.3	
SA15	東西	2	3.0		1.5等間		0.3	
SB16	東西	2以上×2の可能性	4.8以上	3.6	2.4等間	1.8等間	0.1～0.2	発掘区外東に続く。

遺構番号	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	時期	主な出土遺物	備考
SD17	南北	長さ 6.0 以上 幅 0.8	0.3	8 世紀	土師器細片、須恵器蓋、丸瓦	発掘区外北に続く。坪内を東西 2 分割する区画溝の一部の可能性。
SD18	南北	長さ 1.8 以上 幅 0.8	0.2	8 世紀	土師器細片、須恵器蓋	S D 17 と中軸線が揃い、発掘区外南に続く。
SD19	東西	長さ 11.0 幅 1.0	0.2	8 世紀	土師器細片、須恵器甕、製塩土器	坪内を南北 2 分割する区画溝の一部の可能性。
SK20	隅丸方形	東西 1.6× 南北 2.0 以上	0.2	8 世紀	土師器細片、須恵器甕	発掘区外北に続く。
SK21	円形か	東西 1.0 以上 × 南北 3.7 以上	0.3 以上	8 世紀	土師器細片、須恵器杯 A	発掘区外東に続く。
SX22	楕円形	東西 0.4× 南北 0.7	0.3	8 世紀	土師器甕・杯 A・高杯杯部（甕は 2 個体、他は各 1 個体）	2 個体の土師器甕を合わせ口で埋納。

内で SD07 との合流部付近に掘削された土坑。埋土は灰色シルトで、水溜として機能した可能性がある。

#### 奈良時代

掘立柱列 3 条（SA13～15）、掘立柱建物 1 棟（SB16）、溝 3 条（SD17～19）、土坑 2 基（SK20・21）、土器埋納遺構 1 基（SX22）がある。特記する点は、以下の通り。

SA13～15 いずれも柱間 1～2 間の東西方向の柱列。発掘区外にある建物の目隠し塀か門の可能性はある。

SB16 桁行 2 間以上、梁行 2 間の東西棟建物。HJ 第 377-1 次調査（平成 9 年度）で検出した東四坊坊間路の路面心から求めた坪内の東 1/4 分割線及び HJ 第 199 次調査（平成 2 年度）で検出した四条条間北小路の路面心から求めた同南北 1/2 分割線の交点付近に位置する。

SD17～19 南北方向の溝 SD17・18 は前述した坪内の東西 1/2 分割線の約 4 m 東、東西方向の溝 SD19 は同南北 1/2 分割線の約 2 m 北に位置し、いずれも坪内を 4 分割する区画溝の一部の可能性はある。

SX22 南北に長い掘方内に土師器甕 2 点を合わせ口にして据え、北側の甕の底部に土師器杯 A・高杯杯部を伏せていた。甕の内部に遺物はなかった。

#### IV 出土遺物

遺物整理箱で 9 箱分あり、主なものは溝 SD05・06 から出土した弥生時代後期末の弥生土器（大和 VI-3・4 様式、甕・壺・高杯・鉢）、前述した奈良時代の遺構の埋土、土器埋納遺構 SX22 及び旧水田床土最下層から出土した 8 世紀の土器類（須恵器：甕・壺・杯 A・杯 B、



HJ 第 737 次調査 土器埋納遺構 SX22（東南から）

土師器：甕・杯 A・高杯）・瓦類（丸・平瓦）である。

#### V 調査所見

弥生時代後期末 溝 SD05～07 は、扇状地の扇端に位置することや埋土・付属施設の様相等から、北方にある河川から水を引き込む水路で、特に SD05 は他の溝より幅が広く深いことから基幹水路とみる。堰 SX08 を伴う点からは、すぐ西方の低地に営まれた水田の灌漑用の可能性が考えられる。

奈良時代 坪中心部分には建物がなく、SB16 が南北 1/2 ライン上にあることから坪を 1/2 に分割する宅地利用の時期があったと考えられる。また、区画溝 SD17～19 の位置関係からは、坪内を 1/4 に分割して利用した時期があったことが推察される。SB01・SB02・SB16 は坪内東半の中心（東 1/4）ライン上に並ぶが、どちらの時期の建物であるかは遺構の重複や出土遺物からは判断できなかった。（安井宣也）

# 7. 平城京跡（左京五条七坊四坪）・奈良町遺跡の調査 第738次

事業名 宅地造成	調査期間 令和元年11月18日～11月22日
届出者名 株式会社 Dear	調査面積 80㎡
調査地 中辻町72番1、74番2の各一部	調査担当者 中島和彦

## I はじめに

調査地は、平城京の条坊復元によると左京五条七坊四坪にあたり、七坪の東半部の南北中央付近に位置する。東側には、東七坊坊間西小路が南北に通る、これを踏襲する南北道路が現代まで存続している。中辻町はこの南北道路と五条大路を踏襲した東西道路の交差点に面する町で、文献には15世紀頃より登場する。

調査地北約50mの地点では、平成元年に奈良県立橿原考古学研究所による発掘調査が行われており、弥生～奈良時代の自然流路、奈良時代の柱穴、鎌倉時代の井戸、江戸時代の溝・石組遺構などが検出されている。またその北のHJ第258次調査では、平安～江戸時代の各時代の遺構が高密度で確認されている。

今回の調査は、道路予定地に発掘区を設定し、奈良時代以降の遺跡の様相を明らかにする目的で実施した。

## II 基本層序

発掘区内の層序は、上から解体時盛土（土層図1）、整地土Ⅲ（20～25）、整地土Ⅱ（30～34）、整地土Ⅰ（39）となり、現地表下1.0～1.2mで明橙色粘土または明橙



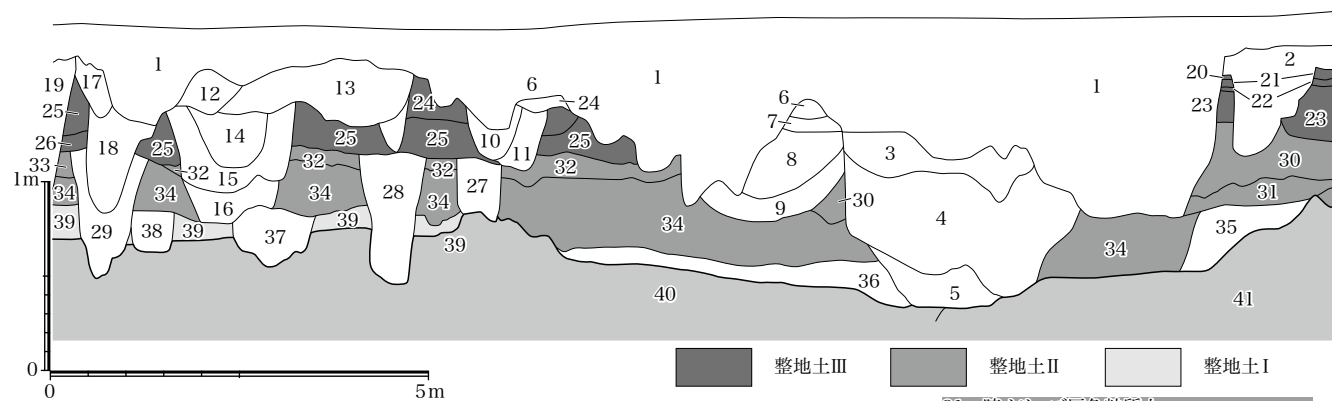
HJ 第738次調査 調査地位置図 (1/5,000)

色砂礫の地山となる。

整地土層の年代は、整地土Ⅲが江戸時代中頃以降、整地土Ⅱが室町～江戸時代初め、整地土Ⅰが奈良時代頃のものと考えられる。地山面の標高は発掘区東端で約83.5m、西側で約83.1mで、西に向かって下降する。

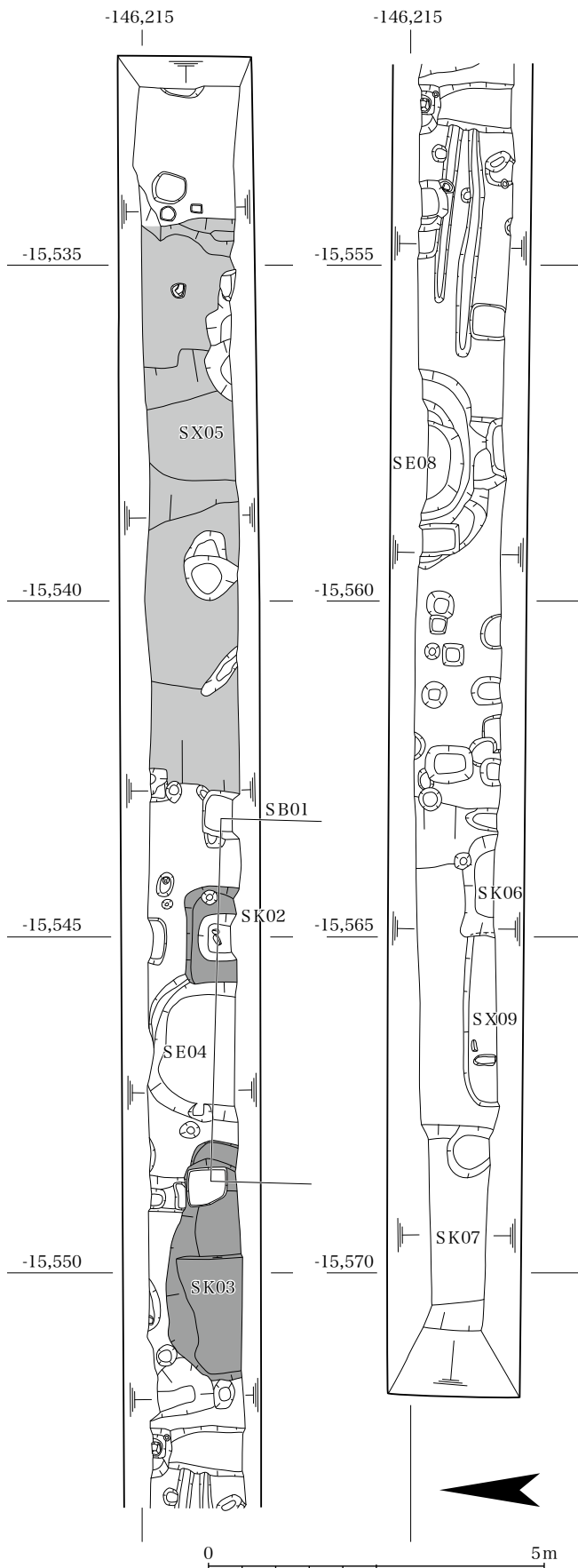
## III 検出遺構

奈良時代の掘立柱建物1棟・土坑、鎌倉時代の井戸1基・小柱穴多数・土坑・溝状遺構、江戸時代の井戸1基・土坑、時期不明の石組遺構1基がある。以下時期ごとに



- |                 |                 |                       |                        |
|-----------------|-----------------|-----------------------|------------------------|
| 1 解体時盛土         | 11 暗灰褐色土        | 21 黒褐色土(砂含む・土間か?)     | 31 暗オリーブ灰色粘質土          |
| 2 淡灰褐色土         | 12 黒褐色土         | 22 淡茶灰色土(土間か?)        | 32 暗茶褐色粘質土             |
| 3 茶灰褐色土(土器・礫含む) | 13 淡黒褐色土(礫多く含む) | 23 灰褐色土               | 33 茶灰色粘質土              |
| 4 暗灰色粘質土(礫多く含む) | 14 暗灰褐色粘質土      | 24 淡灰褐色土              | 34 灰褐色粘質土(黄褐色粘土ブロック含む) |
| 5 暗灰色粘土         | 15 暗茶褐色粘土       | 25 暗灰褐色粘質土            | 35 灰色粘質土(土器多く含む)       |
| 6 黒褐色土          | 16 暗灰褐色粘土(焼土含む) | 26 青灰色粘質土             | 36 灰色粘土(SX05)          |
| 7 淡灰褐色土         | 17 黒褐色土(炭多く含む)  | 27 暗灰褐色土              | 37 暗茶褐色粘質土(SE04)       |
| 8 暗茶褐色土         | 18 暗茶褐色土(焼土含む)  | 28 暗灰褐色粘質土(炭含む)       | 38 暗茶褐色粘質土             |
| 9 灰色砂質土         | 19 暗灰褐色粘土(礫含む)  | 29 茶褐色粘質土(黄褐色土ブロック含む) | 39 茶褐色粘質土              |
| 10 灰褐色土         | 20 明茶灰色土(土間か?)  | 30 淡灰褐色粘質土            | 40 明橙色粘土(地山)           |
|                 |                 |                       | 41 明橙色砂礫(地山)           |

HJ 第738次調査 土層図 (横1/100・縦1/40)



H J 第738次調査 遺構平面図 (1/100)

(網掛け部分は、遺構の範囲を示す)



H J 第738次調査 発掘区全景 (西から)



H J 第738次調査 発掘区全景 (東から)

主要な遺構について記す。

#### 奈良時代の遺構

S B 01 東西3間（5.4 m）、南北1間以上の東西棟建物の側柱列と考えられ、発掘区外南または北側へと続く。桁行の柱間は1.8 m等間、柱穴掘形の深さは約0.5 mである。鎌倉時代の井戸S E 04により柱穴の1つが失われている。

S K 02・03 いずれも重複関係から、掘立柱建物S B 01より新しく、深さは約0.3 mである。発掘区外南側に続く。埋土はいずれも茶褐色土で、一連の遺構とも考えられる。8世紀後半の遺物が出土する。

#### 鎌倉・室町時代の遺構

S E 04 径約2.1 mの平面円形掘形の井戸で、深さ約0.6 mまで掘削したが、井戸枠は確認できなかった。遺物整理箱2箱分の土師器皿・羽釜、瓦器椀・皿と石鍋の底部片1点が出土した。12世紀末頃のもの。

S X 05 南北方向の溝と考えられ、東西幅約8.5 m、深さ約0.55 mある。13世紀頃の土器が少量出土した。

S K 06 東西約1.5 m、南北0.5 m以上、深さ約0.2 mある平面隅丸方形の土坑で、後述する石組遺構S X 09で西側が破壊されている。13世紀中頃の土師器皿・瓦器椀が少量出土した。

小柱穴 発掘区全域で23個の小柱穴を検出した。建物としてまとまらないが、12～14世紀の遺物が出土しており、概ねこの時期のものと考えられる。

#### 江戸時代の遺構

S K 07 東西3.0 m以上、南北1.0 m以上、深さ約1.0 mの土坑で、大量の瓦と土器が出土した。敷地奥に位置し塵芥処理用の土坑と考えられる。19世紀中頃のもの。

S E 08 直径約2.9 mの平面円形掘形の井戸で、深さ約0.8 mまで掘削したが枠は抜き取られており確認できなかった。枠抜き取り孔は径約1.3 mの平面円形で、石組みの井戸枠であった可能性がある。出土遺物から詳細な時期は確定出来なかったが、層位的には江戸時代以降のものである。

#### 時期不明の遺構

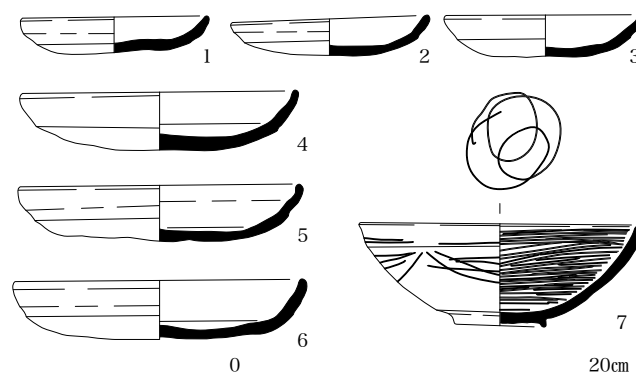
S X 09 平面長方形の石組遺構で、東西約2.5 m、南北0.5 m以上、深さ約0.15 mの掘形を確認した。石組の多くは抜き取られており、西側に1段分（高さ約0.15 m）が一部残る。

#### IV 出土遺物

遺物整理箱8箱分の土器類・瓦類他が出土した。土器類には奈良時代の土師器・須恵器・製塩土器・円面硯、鎌倉・室町時代の土師器・瓦器・瓦質土器・石鍋、江戸



H J 第738次調査 SB01・SE04（北東から）



H J 第738次調査 SE 04 出土土器（1/4）

時代の土師器・瓦質土器・国産陶磁器が、瓦類には奈良・平安時代の丸瓦・平瓦、江戸時代の棧瓦があり、その他円筒埴輪、鞆羽口、鉄滓、石硯が少量ある。

S E 04 出土遺物を図示する。1～6は土師器皿、7は瓦器椀である。瓦器椀は川越Ⅲ-A型式で、外面は3分割のヘラミガキ調整、器高も高く古相である。

#### V 調査所見

調査の結果、古代～近世までの各時期の遺構が高密度で見つかり、調査地が各時期において活発に利用されていたことが判明した。外京域の縁辺部においても奈良時代の掘立柱建物を確認したことは、平城京内の宅地利用を考える上で興味深い。（中島和彦）

## 8. 平城京跡（左京四条五坊九坪）・奈良町遺跡の調査 第740次調査

事業名 ホテル新築

届出者名 株式会社 d h p 都市開発

調査地 三条町 531 番 1 他 5 筆

調査期間 令和元年 12 月 10 日～12 月 17 日

調査面積 90㎡

調査担当者 中島和彦

### I はじめに

調査地は、平城京左京四条五坊九坪の北東隅にあたり、三条大路の南に隣接した南北に細長い敷地である。敷地の北半が旧三条西町、南半が旧三綱田町にあたり、いずれも江戸時代以降に町屋化したものと考えられている。

調査地の三条通りを挟んで北側の発掘調査（HJ 第 571・678 次調査）では、古代～近世の顕著な遺構は確認されていない。

発掘調査は、古代～近世の様相の確認を目的とし、既存建物の基礎掘削の影響を受けていない敷地の中央部分に発掘区を設定し実施した。

### II 基本層序

上から現代の盛土層（土層図 1～3）、旧表土層（7）、江戸時代の遺物包含層（9）、整地層（13～15）とつづき、現地表下 1.0～1.1 m で淡茶灰色砂礫等の地山に至る。地山面の標高は約 67.3 m で、発掘区内ではほぼ平坦である。整地層上面には 17～18 世紀後半の遺構が、整地層下には 15 世紀頃の遺構があり、中世末～近世中頃に整地層が形成されたことがわかる。

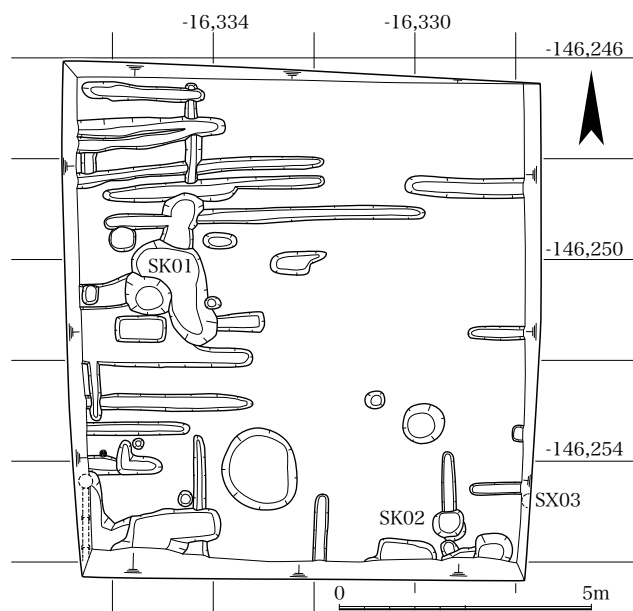
### III 検出遺構

埋甕遺構 1 基、土坑、素掘小溝を検出した。多くは近代以降のものである。以下、江戸時代以前のものについて記す。

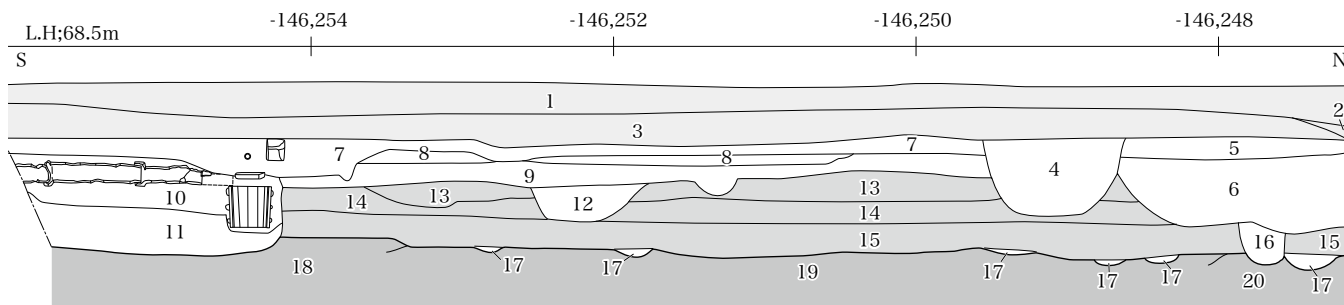
SK 01 東西 1.6 m、南北 2.1 m、深さ 0.2 m の平面不整形の土坑である。重複関係から後述する素掘小溝



HJ 第 740 次調査 調査地位置図 (1/5,000)



HJ 第 740 次調査 発掘区平面図 (1/150)



- |                    |                 |                       |           |
|--------------------|-----------------|-----------------------|-----------|
| 1 クラッシャー           | 7 黒褐色砂質土(旧表土層)  | 12 灰色砂質土              | 18 明青灰色砂  |
| 2 解体時盛土            | 8 オリーブ灰色粘質土     | 13 淡黄灰色砂質土(礫多く含む・整地層) | 19 淡茶灰色砂礫 |
| 3 造成土              | (黄褐色粘土ブロック含む)   | 14 淡灰色砂質土(橙色砂含む・整地層)  | 20 明青灰色粘土 |
| 4 暗灰色粘土(瓦礫多く含む)    | 9 暗灰色砂質土(礫多く含む) | 15 暗茶褐色粘質土(整地層)       |           |
| 5 暗灰褐色土(瓦礫含む)      | 10 暗灰色砂質土(土管掘方) | 16 暗灰色粘質土             |           |
| 6 暗灰褐色粘質土(漆喰・瓦礫含む) | 11 暗灰色粘質土       | 17 灰色粘質土(素掘小溝)        |           |

HJ 第 740 次調査 発掘区西壁土層図 (1/50)

群より古く、発掘区内では最も古い遺構と考えられる。出土遺物がなく、詳細な年代は不明である。

S K 02 径約0.6 m、深さ約0.15 mの平面円形の土坑である。土層観察から、坑内には径約0.4 mの木質容器を埋納していたことがわかるが、容器の構造は不明である。18世紀後半の肥前産磁器が出土した。

S X 03 発掘区東壁面で確認した埋甕遺構で、瓦質土器深鉢を埋納する。整地層上面から掘り込まれ、土器の型式から江戸時代前半（17世紀）頃のものと考えられる。

素掘小溝 発掘区西半には、東西南北方向の幅約0.3 mの素掘小溝が複数条ある。整地層下で地山上面から掘り込まれている。出土遺物が少なく詳細な年代は不明だが、溝の一つから中国産の青磁盤が出土しており、15世紀頃のものと考えられる。

#### IV 出土遺物

土器類が遺物整理箱3箱分、瓦類が遺物整理箱1箱分出土した。多くは江戸時代後半～近代のものである。S K 02からは、18世紀後半の土器類がまとめて出土している。

#### V 調査所見

調査の結果、古代・中世の顕著な遺構は確認できなかつ

た。整地層の存在から、近世前半頃には土地利用が開始されるが、遺構密度は低く本格的に利用されるのは近代以降と考えられる。奈良町遺跡の縁辺部の状況が明らかになった。 (中島和彦)



HJ 第740次調査 発掘区全景（北西から）



HJ 第740次調査 発掘区全景（北から）



## 9. 平城京跡（右京四条三坊十五坪・西三坊大路）の調査 第741次

事業名 宅地造成・共同住宅新築

届出者名 個人

調査地 平松一丁目828-4他

調査期間 令和2年1月9日～2月3日

調査面積 450m<sup>2</sup>

調査担当者 村瀬 陸

### I はじめに

調査地は、平城京の条坊復元によると右京四条三坊十五坪南西隅にあたり、西側に西三坊大路が推定される。調査地の南側ではHJ第304次調査を実施したが、大路に関する遺構はなく、近世の粘土採掘坑を検出した。さらに南で実施したHJ第706次調査でも西三坊大路が推定される部分は河川であったため大路に関わる遺構は確認できなかった。また調査地の南西隣接地では平成30年度に個人住宅建設に伴う試掘(2018-7次)調査を実施し、奈良時代の柱穴と近代の達磨窯を3基確認した。今回の発掘調査では建物建設部分の発掘区その他、擁壁部分に発掘区を設定し、隣接地から続く達磨窯の確認を行った。

### II 基本層序

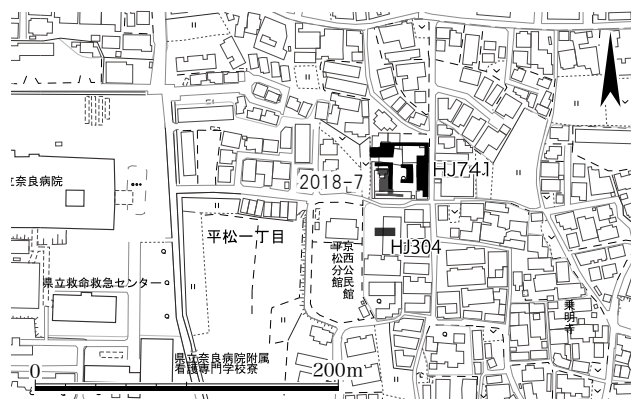
発掘区の大半は攪乱されており、遺構が残存していたのは主に西半で、試掘調査を行った周辺である。発掘区西側の基本的な層序は上から造成土(厚さ約0.2m)、褐色土(約0.1m)と続き現地地表下約0.3mで黄褐色土の地山に至る。褐色土(土層図7層)は奈良時代の整地土で、この上面から柱穴が掘り込まれる。遺構検出は整地土上面(標高77.3m)で行ったが、遺構が判別しづらいため、最終的には地山上面(標高77.2m)で行なった。

### III 検出遺構

検出した遺構は、奈良時代の掘立柱建物2棟(SB01・02)、掘立柱列2条(SA03・04)、溝1条(SD06)、土坑1基(SK08)、江戸時代以降は達磨窯6基(1～6号窯)、掘立柱塀1条(SA05)、溝1条(SD07)である。

#### 奈良時代の遺構

SB01 梁行2間×桁行1間以上の東西棟建物で柱間は梁行が2.1m等間、桁行の柱間は2.4mである。重複



HJ 第741次調査 調査地位置図 (1/5,000)

関係からSA04・SK08より古い。

SB02 梁行2間×桁行5間の南北棟建物で梁行2.25m等間、桁行2.1m等間である。

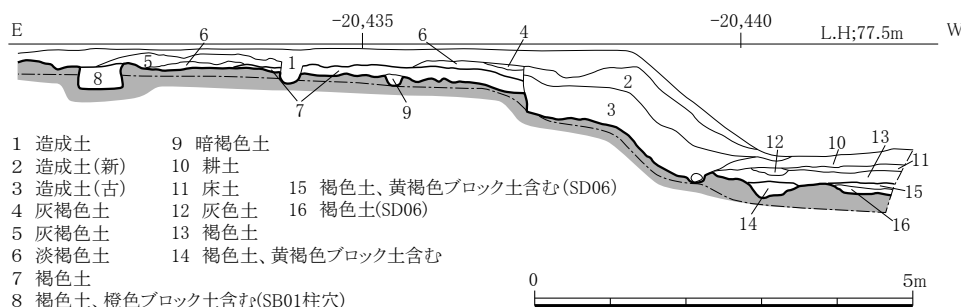
SA03・04 東西方向の柱列でいずれも柱間2.1mである。庇付の東西棟掘立柱建物となる可能性がある。

SD06 幅1m以上、長さ6m以上の南北溝である。西三坊大路の東側溝推定位置より西側にあたるが、推定位置には溝がない上に掘立柱建物等が構築されている。また、掘立柱建物等のある遺構面より約1.5m低い位置で検出したが、地形により制約を受けたと考えると、この溝が西三坊大路東側溝となる可能性がある。

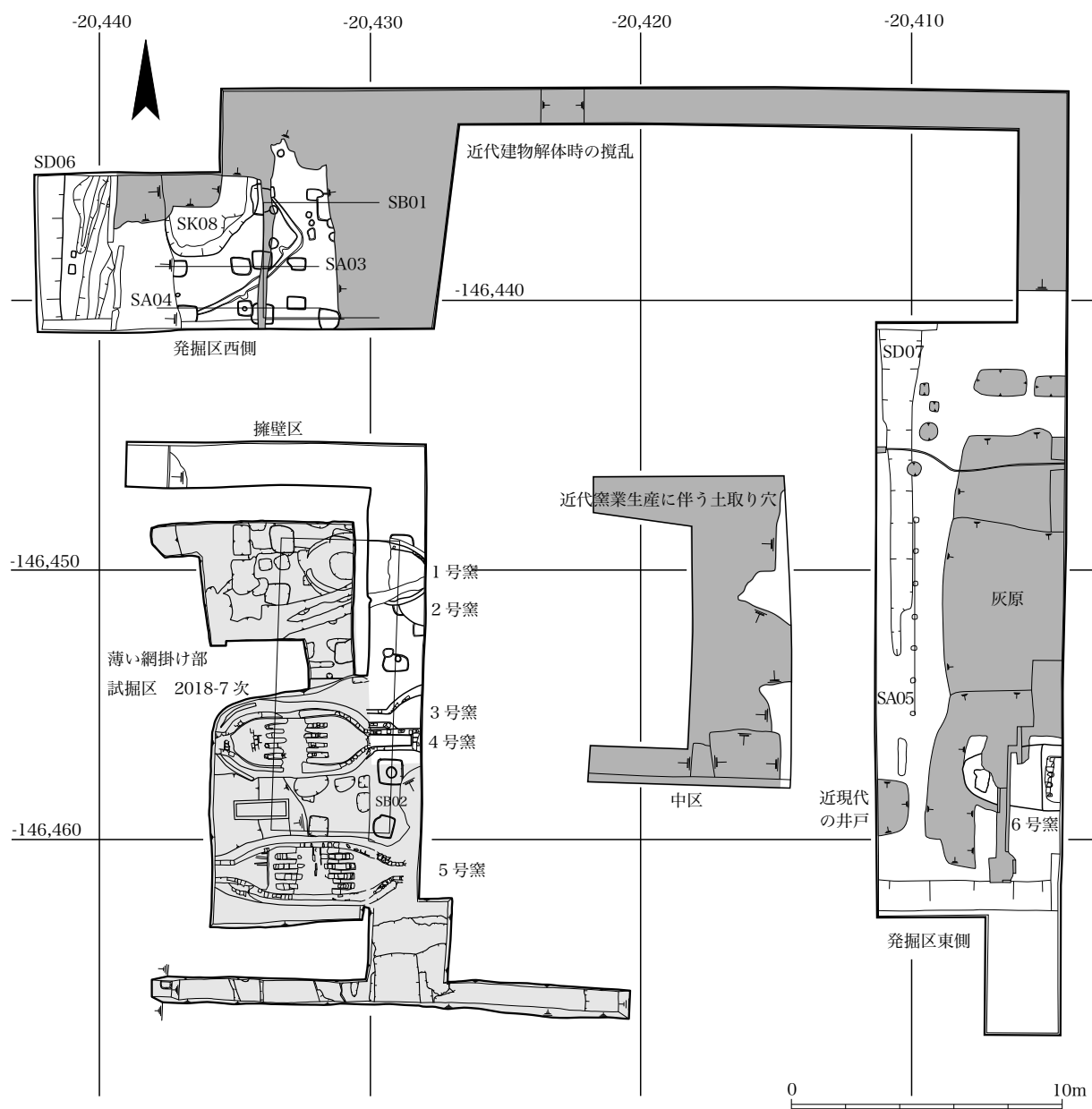
SK08 幅約3.4m、深さ約0.3mの不整形な土坑である。8世紀の土師器・須恵器が少量出土した。

#### 江戸時代以降の遺構

達磨窯1～6号窯 3・4・5号窯は燃烧室下に風道を持つ構造の達磨窯で明治時代後半以降のものであると考えられる。4・5号窯は並列しており同時期に操業して



HJ 第741次調査 本発掘区西側南壁断面図 (1/100)



HJ 第741次調査 本発掘区平面図 (1/250)

いたと考えられ、3号窯は重複関係から4号窯より古い。1・2・6号窯は風道がないもので、形式的には3・4・5号窯より古くなる可能性があるが、出土遺物がないため明治時代後半以前としか判断できない。

SA05・SD07 SA05は柱間1.2mの南北方向の柱列、SD07は幅1.4m、長さ16m以上の南北溝である。位置関係や出土遺物から、6号窯やその北側に広がる灰原と同時期のものと考えられる。

今回の発掘区の大半は粘土採掘や焼土の廃棄等が行われた近代に攪乱されており、それ以前の遺構の多くが壊されて残存しなかった。（村瀬 陸）

#### IV 出土遺物

遺物整理箱3箱分が出土した。土器類はいずれも小片であり、以下では瓦塼類について報告する。

瓦塼類 試掘2018-7次調査とHJ第741次調査を実施した場所は、19世紀初めから20世紀前半まで、藤澤家の瓦製作場があった場所で、大量の瓦塼類が出土した。このうち調査担当が現場で取捨選択ののち持ち帰った瓦塼類は、遺物整理箱で試掘2018-7次調査が13箱分、HJ第741次調査が3箱分である。瓦塼類には軒丸瓦、軒平瓦、軒棧瓦、丸瓦、平瓦、棧瓦、熨斗瓦、雁振瓦、板塼瓦、窯道具、塼、煉瓦、刻印瓦がある。

軒丸瓦は7点あり、すべて1号窯からの出土である。このうち紋様が不明の小片1点を除けば3種に分けることができる。1は無子葉単弁16弁を飾る菊花紋で、3点ある。瓦当面の復元直径は約14cm。瓦当裏面にカキメを施し、丸瓦を接合する。外縁端部は幅0.3cm程度の面取りがある。2は2点あり、1より小型。外縁端部と、瓦当裏面下半部周縁に沿って、幅0.3cm程度の面取りがある。3は1点で、1・2と比べて弁端が尖る点特徴的である。外縁端部は幅0.2cm程度、瓦当裏面下半部周縁沿いは幅0.1cm程度、それぞれ面取りを行う。1～3の3種ともに外縁に丁寧なヨコナデを施し平滑にする点、胎土は緻密、色調は内部灰白色、表面は燻しのかかった灰黒色で、焼成が堅緻である点は同じである。なお、2・3については丸瓦部が残存するものは無く、軒棧瓦あるいは棟込瓦の可能性もある。

軒平瓦は2点あり、両方とも擁壁区重機掘削時に出土した。4は橘唐草紋軒平瓦である。外縁端部は0.3cm程度の幅の面取りを行う。凹面はナデミガキ、凸面・顎面・顎部瓦当裏面はヨコナデ。胎土は緻密、色調は内部灰白色、表面は燻しのかかった灰黒色で、焼成が堅緻である。もう1点の軒平瓦は外縁部の小片である。

軒棧瓦は1点で、5号窯から出土した。5は範型を使

用しない無紋の軒棧瓦。瓦当面右辺部に陰刻「瓦利」の刻印がある。瓦当面中央には焼成時に生じた割れ目がある。上面（表）はナデミガキ。尻の切込みの外側に、凹線のアタリが残る。銅線を通す孔は上面にアタリの凹線を描き、上面側から穿孔する。下面（裏）は丁寧なナデを施し、幅3.6cm程度のヒガキを3本施す。色調は内部灰白色、表面は燻しのかかった灰黒色で、焼成は堅緻。

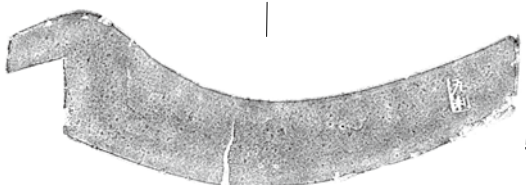
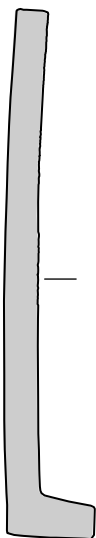
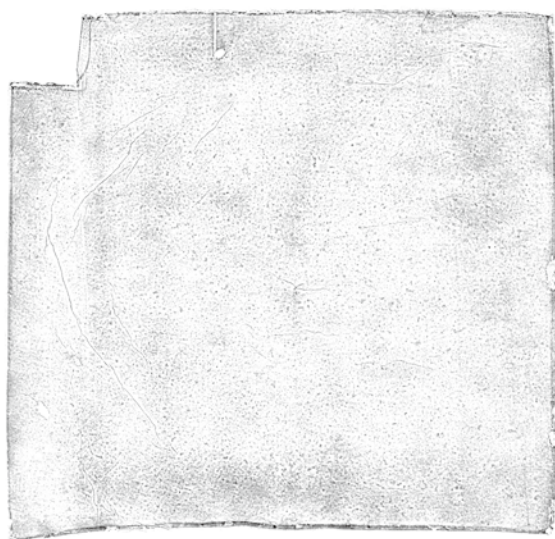
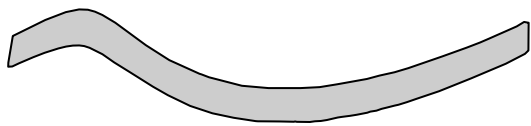
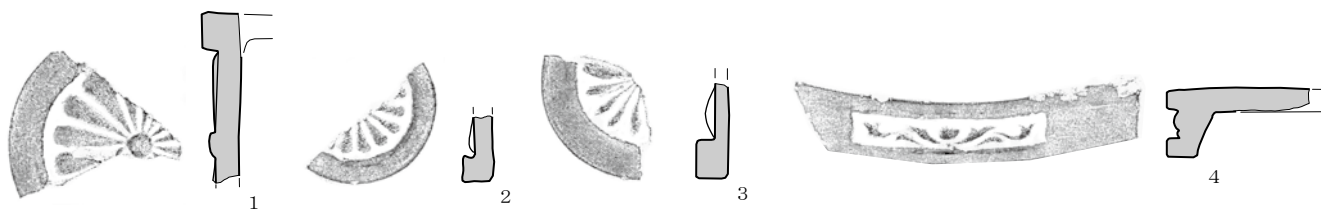
熨斗瓦は2点ある。6・7は平瓦状のものを製作した後、焼成前に凹面側に深さ0.3cmの分割線を描き、焼成後分割して作られている。両方とも3号窯構築材として出土した。凸面は丁寧なナデを施し、端部付近に凹型台（切型）の端部圧痕が残る。凹面はナデを施すが、6は部分的に細かい布目痕が残る。凹面中央には波状のヒガキを設ける。6・7ともに、胎土は緻密。色調は6が灰白色で、部分的に凹面の一部が黒灰色を呈し、7は灰色。焼成は6がやや軟質、7は硬質。

板塼瓦は1点で、8は3号窯構築材として出土した。軒先側と棧部は欠失し、棧部の取り付け位置にはカキメを施したことが分かる。上面・下面ともナデミガキ。上面の棟側に銅線を通す孔を2箇所設ける。隣接する板塼瓦の棧部が被さる箇所には、深さ約0.2cmの水切りとみられる凹線を描く。棟側の端部外縁と、棧が付かない方の端部外縁には0.3cm程度の面取りが施される。胎土は緻密。色調は内部灰色、表面は燻しのかかった灰銀色で、焼成は硬質。

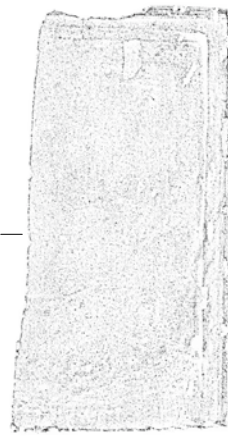
9は窯道具でツツミと呼ばれるもの。窯詰めの際、丸瓦同士の玉縁部にかませる。前後対称位置に粘土のバリが残り、左右の同形の型を合わせて作られた、型作り。5号窯から1点出土。色調は一部灰黒色の灰白色で、焼成はやや軟質の瓦質である。

塼は11点ある。擁壁区重機掘削時出土の1点を除く他は、5号窯の構築部材として出土した。大きさはすべて10と同様のもので、全長20cm、幅10.5cm、厚さ3.5cmである。表面はナデで調整されるが、部分的に窯構築の際に付けられたスサ入り粘土が溶着する。胎土は緻密。色調は内部灰色、表面は燻しのかかった灰銀色で、焼成は硬質。

煉瓦は22点ある。2次焼成を受け、表面が橙白色化しているものが大半だが、元は白色の軽い耐火煉瓦である。5号窯南側の落ち込みから10点、擁壁区重機掘削時出土の2点の他、10点が4号窯の構築部材として出土した。このうち17点は11と同様のもので全長21cm、幅11cm、厚さ5.5cmである。他5点は小片である。表面はナデで調整されるが、部分的に窯構築の際に付けられたス



5の刻印



6



7

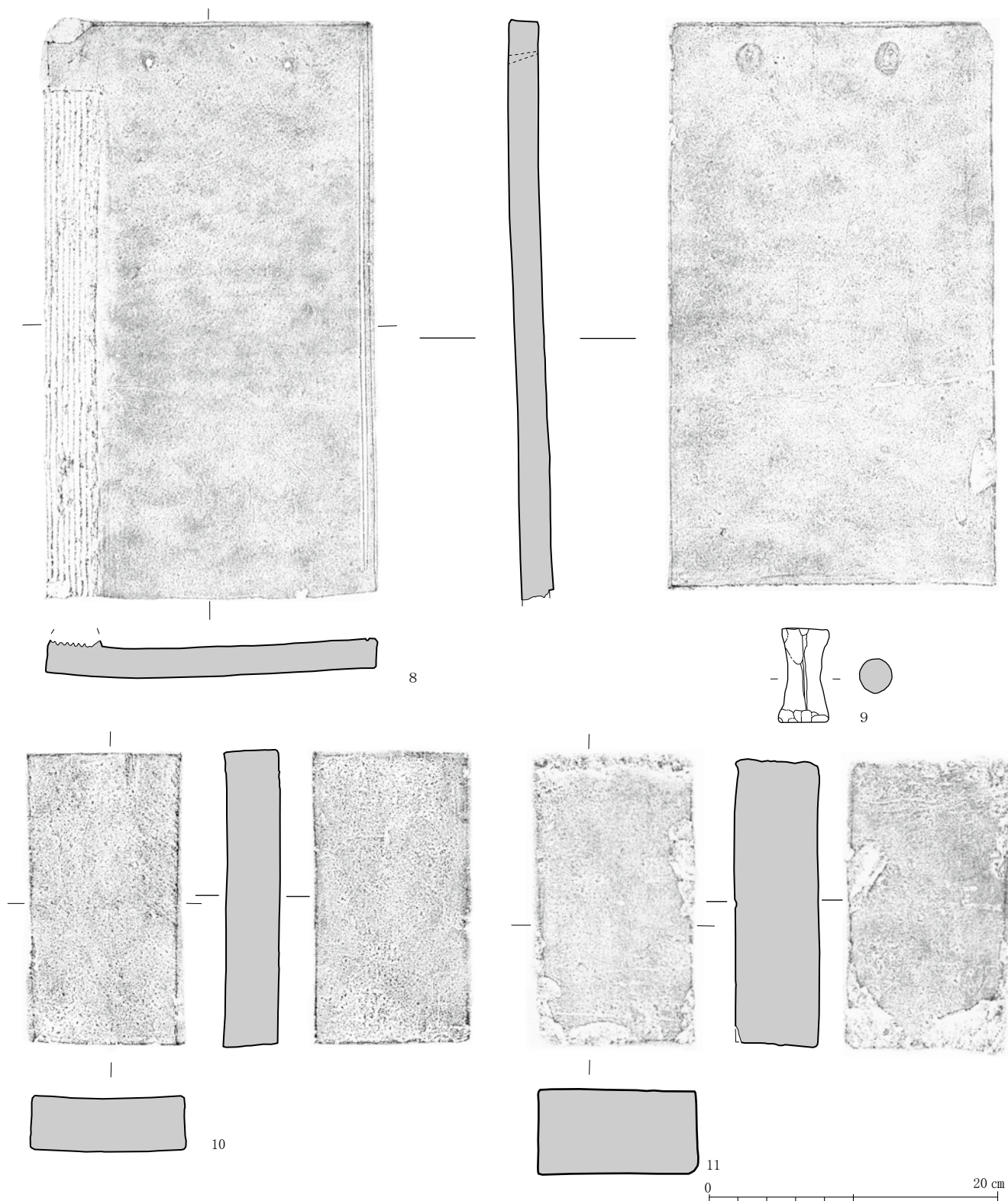


HJ 第741次調査 出土瓦類1 (1/4、刻印は1/2)

サ入り粘土が溶着する。刻印を残すものは無い。胎土は粗く、0.5cm大の小石やシャモットを多く含む。焼成はやや軟質。

刻印瓦は9点ある。出土位置の内訳は4号窯から5点で、5号窯から4点である。すべて5の軒棧瓦と同じ、陰刻「瓦利」の刻印を押捺する。押捺箇所は、5の瓦当面以

外に、6点が棧瓦の尻側の端面に、他2点も端面だが、小片のため平瓦か棧瓦かは不明である。藤澤家に伝わる書き写し<sup>1)</sup>から、利八（1793 - 1852〈寛政5 - 嘉永5年〉、59才没）、利七（1834 - 1899〈天保5 - 明治32年〉、65才没）、利兵治（1851 - 1925〈嘉永4 -



HJ 第741次調査 出土瓦類2 (1/4)

大正14年)、74才没)、利喜藏(1884 - 1956 <明治17 - 昭和31年)、72才没)といった人物の存在が明らかにされており、「利」を通字としていた家であったことがわかる。また大正6年に刊行された『實業重寶』<sup>2)</sup>には「瓦製造 瓦利 藤澤利喜藏 生駒郡伏見村」の一文がある。このようなことから、刻印「瓦利」は藤澤瓦屋の製品であることを示すものと考えられる。

(原田憲二郎)

## V 調査所見

本調査では、奈良時代の宅地利用と条坊施工、近代の達磨窯に関する成果を得た。

### i 奈良時代の宅地利用と条坊施工

今回は、発掘区の大半が攪乱されており、奈良時代の宅地利用については限定的な成果であった。しかし、確認できた範囲のなかでは掘立柱建物等が比較的密に検出できた。また、SB01などは西三坊大路が推定される位置にあたり、南北溝もないことから推定より道路が西へずれる可能性がある。それならば、西端で検出したSD07が西三坊大路東側溝の候補としてあげられる。西

三坊大路は未確認であるため、今後の調査に委ねたい。

なお、本発掘区東側でも遺構面の残存する部分があったが、柱穴は検出されなかった。今回の状況だけみれば、大路に近い部分だけに遺構が集中しているようにもみえる。

### ii 達磨窯について

検出した達磨窯は聞き取り調査から明治時代後半～昭和初めのものを中心とし、これよりやや遡る可能性のある窯も確認した。調査地のほぼ全域で粘土採掘に伴うであろう攪乱を検出しているほか、HJ第304次調査でも近代の粘土採掘坑を確認しており、現在の敷地を超えて広く瓦作りのための土地利用が行われていた可能性がある。今回検出した6号窯もさらに東側へ続くため、敷地外に一部がかかると思われる。調査地の地山は良質な黄褐色粘土であり、周辺のなかでも適地を選択して窯を構築したものと考えられる。

(村瀬 陸)

註

1) 奈良県文化財保存事務所 1988『奈良県指定文化財西大寺愛染堂修理工事報告書』。なお、2019年に藤澤章夫氏から、家蔵史料の一部と、造瓦具等が奈良市埋蔵文化財調査センターへ寄贈された。

2) 奈良県実業公衆社 1917『實業重寶』



HJ 第741次調査 発掘区西側 全景(南東から)



HJ 第741次調査 発掘区西側西端 全景(北西から)



HJ 第741次調査 発掘区擁壁区 全景（南から）



HJ 第741次調査 1・2号窯 全景（南から）



HJ 第741次調査 中区 全景（南西から）



HJ 第741次調査 6号窯 全景（北から）

## 10. 平城京跡（右京四条一坊八坪）の調査 第742次

事業名 宅地造成  
届出者名 株式会社 八州エイジェント  
調査地 四条大路四丁目53番1 他3筆

調査期間 令和2年1月28日～2月1日  
調査面積 93㎡  
調査担当者 中島和彦

### I はじめに

調査地は、平城京の条坊復元によると右京四条一坊八坪の東半部中央にあたり、東側に西一坊坊間東小路が推定されている。八坪北側の三条大路沿いでは、奈良県立橿原考古学研究所により発掘調査が行われており、西一坊坊間東小路と西一坊大路とともに八坪内の掘立柱建物等が確認されている。また同時に弥生・古墳時代の遺構も検出されている。

今回の調査は、西一坊坊間東小路と八坪内の遺構の様相の確認を目的として実施した。調査の工程上、八坪内部分と西一坊坊間東小路部分の2回に分けて調査を実施した。

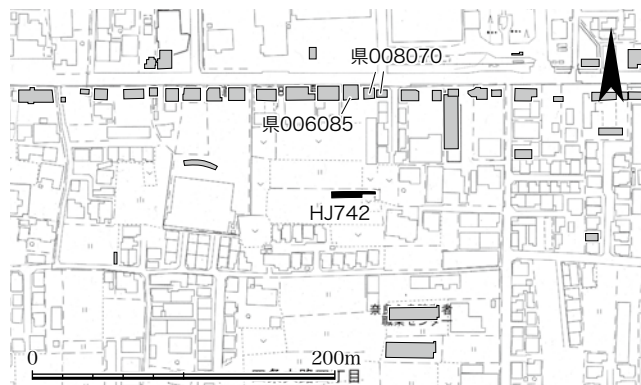
### II 基本層序

上から耕作土（土層図1）、床土（2、3）、遺物包含層（6）、整地土層（8、12、13）とつづき、現地表面約0.5mで褐色土の地山となる。整地層は、新旧2時期あり、西一坊坊間東小路西側溝が埋没後の整地層2（8）と、それ以前の八坪内の整地層1（12・13）がある。地山上面はおおむね平坦で、標高は62.9mである。

発掘区内には、北東から南西に斜行して流れる河川跡がある。幅約8.5m、深さ約0.7mあり、黄灰色砂等で埋没する。古墳時代の土器が少量出土した。

### III 検出遺構

西一坊坊間東小路西側溝、掘立柱建物1棟、素掘小溝を確認した。以下主要な遺構について記す。



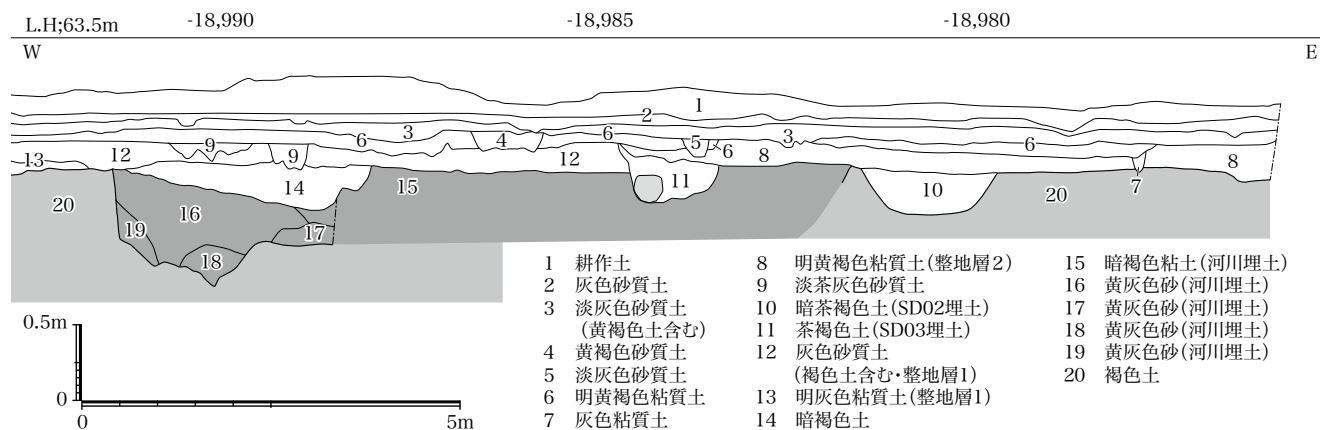
HJ 第742次調査 調査地位位置図 (1/5,000)

S F 01 西一坊坊間東小路で、幅約4m分を確認した。西側溝（S D 02）を確認したが、東側溝は確認出来なかった。また路面上には舗装等の痕跡はなかった。整地層2に覆われる。

S D 02 西一坊坊間東小路西側溝で、幅約1.6m、深さ約0.3mあり、長さ1.5m分を確認した。断面は浅いU字状である。整地層2に覆われる。溝心の座標は、X = -146,288.0、Y = -18,980.68である。

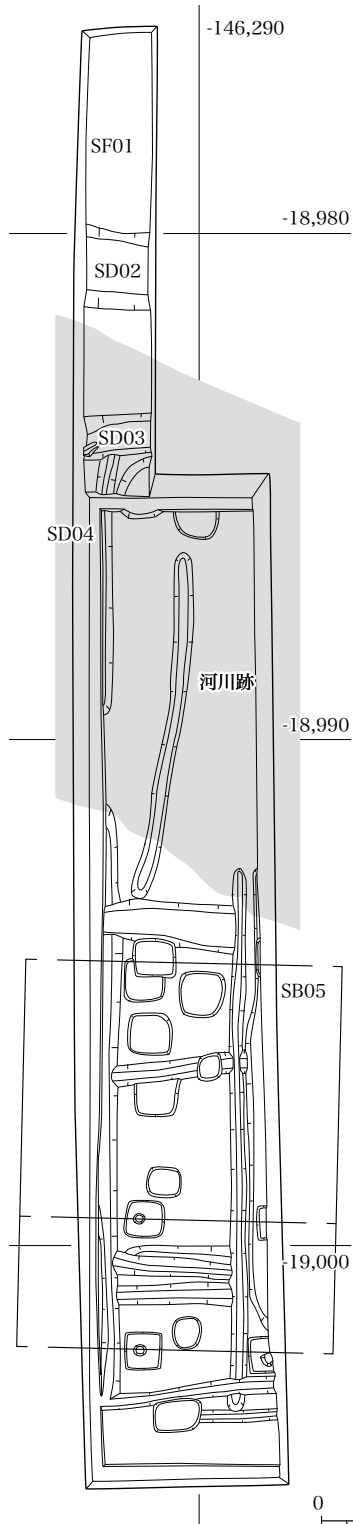
S D 03 S D 02の西側2mに平行する南北方向の溝で、幅約0.8m、深さ約0.25mあり、長さ1.5m分を確認した。整地層1上面から掘り込まれ、整地層2に覆われる。後述する東西溝S D 04が西側から接続しており、宅地内の東端の排水溝と考えられる。

S D 04 S D 03に接続する東西方向の溝で、幅約



HJ 第742次調査 北壁土層図 (縦 1/50、横 1/100)





HJ 第742次調査 遺構平面図 (1/150)

0.35 m、深さ約 0.2 m あり、長さは 18.5 m ある。整地層 1 上面から掘り込まれる。

SB05 桁行 2 間以上、梁行 3 間の南北棟建物で西面に廂が付く。発掘区外南北に続き全容は不明。柱掘形の深さは、0.5 ~ 0.7 m ある。



HJ 第742次調査 発掘区全景（西から）

#### IV 出土遺物

遺物整理箱 4 箱分の土器類・瓦類が出土した。古墳時代の土師器、奈良時代の土師器、須恵器、製塩土器、丸瓦・平瓦がある。

#### V 調査所見

調査の結果、西一坊坊間東小路を確認し、合わせて八坪内の様相の一端が判明した。

西一坊坊間東小路は、三条大路沿いの奈良県立橿原考古学研究所の発掘調査（調査番号 006085・008070）で東西両側溝を検出しており、幅員が側溝芯々間距離で 7.4 m であることが判明している。今回の発掘区に当てはめると、発掘区東側の現水路下に東側溝が推定される。西側溝の溝心の座標は、奈良県の調査成果が  $X = -146,222.0$ 、 $Y = -18,981.0$  で、今回検出の SD02 に比べ北側約 66.0 m の地点で、約 0.3 m 西にあることがわかる。この両溝の位置関係は、朱雀大路とほぼ傾きが等しく条坊施工の正確さがうかがえる。（中島和彦）

# 11. 平城京跡（左京四条六坊一坪）・奈良町遺跡の調査 第744次調査

事業名 宅地造成	調査期間 令和2年2月10日～2月12日
届出者名 個人	調査面積 80㎡
調査地 北向町26番、下三条町8番7・8番9	調査担当者 中島和彦

## I はじめに

調査地は、平城京の条坊復元によると左京四条六坊一坪の南東部にあたる。敷地南側には、四条条間北小路を踏襲した東西方向の道路がある。この道路に面した北側20m余りの部分が北向町で、さらにその北側が下三条町内となる。

発掘区は敷地奥側の下三条町内部分に設定し、古代～近世の宅地内の様相の解明を目的とし調査を実施した。

## II 基本層序

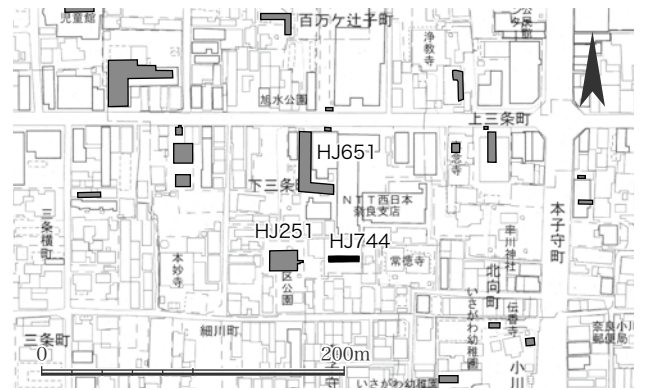
上から近現代の造成土（土層図1～5）、表土層の黒褐色土（8）、遺物包含層の暗灰色土（9）とつづき、現地表下約0.5mで暗黄褐色粘土の地山にいたる。発掘区内の地山面はほぼ平坦で、標高は約70.8mである。

## III 検出遺構

江戸時代後半の南北溝1条、中世以降の土坑・小柱穴を確認した。

溝SD01は、幅約3.3m、深さ約0.55mの南北方向の溝で、断面形は二段の逆台形である。埋土は暗灰色系の粘土で、18世紀後半頃の土師器皿が出土している。

この他の土坑・小柱穴は、少量の土器片が出土するのみで、詳細な時期・性格等は不明である。



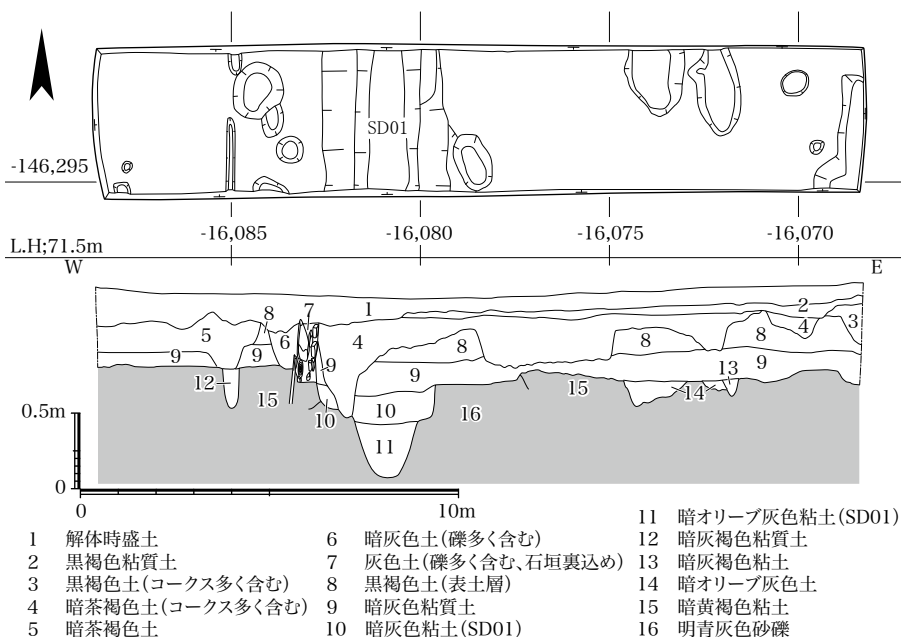
HJ 第744次調査 調査地位位置図 (1/5,000)

## IV 出土遺物

遺物整理箱1箱分の土器類が出土した。江戸時代のものが主で、奈良町遺跡内では調査面積に比べ少量である。

## V 調査所見

調査の結果、古代～中世の顕著な遺構は確認できず、宅地利用されていなかったと考えられる。調査地西側のHJ第251次調査でも同様な成果を得ており、四条六坊一坪南半部分は、近世以降に町屋化したものと想定される。一方、三条大路に面した北半部分は、HJ第651次調査成果から中世以降に活発な宅地利用が確認でき、南北の土地利用状況の対比が興味深い。(中島和彦)



HJ 第744次調査 発掘区平面図 (1/200)・北壁土層図 (縦 1/50・横 1/200)



HJ 第744次調査 発掘区全景 (南東から)

## 12. 秋篠阿弥陀谷遺跡・横穴墓群の調査 AAM 第1次

事業名 大和中央道街路整備社会資本交付金事業

届出者名 奈良市長

調査地 秋篠町 529-12 他

調査期間 令和元年 10月3日～令和2年3月18日

調査面積 1751.3㎡

調査担当者 中島和彦 吉田朋史

### I はじめに

調査地は、西ノ京丘陵北東部の東西に延びる丘陵上に位置する。奈良県遺跡分布地図によると奈良時代の遺物散布地とそれに隣接する部分にあたり、周辺の敷島町2丁目では陶棺が採集され、谷を挟んだ南側の丘陵南斜面では、昭和58年・平成22・23年度に発掘調査が実施され、赤田横穴墓群が展開することが明らかになっていた。

今回の調査地は、事業規模が広大なため、事前に遺跡有無確認踏査を事業地一帯で行った。

調査地の丘陵東側には西迎寺墓地があり、その西端部分が調査地内に含まれていた。当墓地内には多数の石造物が安置されており、最も古いものに「永正四年（1507年）」銘の地藏菩薩像がある。踏査では墓地内に土器器羽釜の蔵骨器、奈良時代の瓦の散布を確認し、丘陵上に遺跡が存在することが推定された。西迎寺墓地の西側には、谷を挟んで方形壇状の残丘があり、この残丘西側には、丘陵を切り通し状に開削した様相が地形から読み取れ、遺跡の存在が想定された。

丘陵部では道路建設に伴い大規模な切り土が計画され、事前に発掘調査を行うこととなった。樹木伐採後の平成元年3月に、北斜面部分の伐根作業時に立会調査を行い、遺構の有無を確認した。8本のトレンチを設定し調査したが、遺構・遺物は確認されなかった（立会調査）。

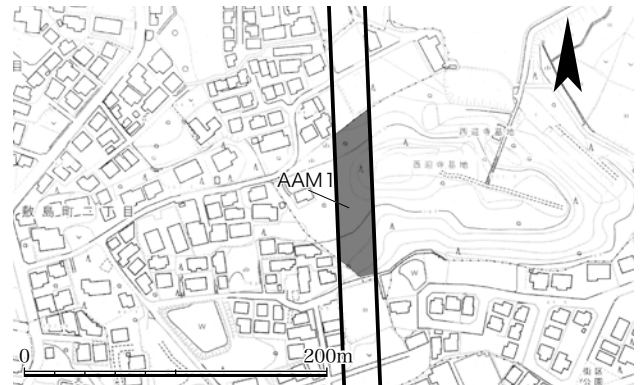
平成元年7～9月に、丘陵頂部と南斜面に7カ所のトレンチを設定し調査したところ、丘陵頂部で奈良時代の古墓と室町時代の遺物包含層を、丘陵南側裾部で横穴墓2基を確認した。（2019-3次調査）。

この結果を受け、丘陵裾部の横穴墓群、丘陵頂部の古墓等を対象とし発掘調査を実施した（AAM第1次調査）。

### II 基本層序

発掘区が広大なため層序は多様であるが、東丘陵上は表土直下（0.1～0.2 m）でにぶい黄橙色粘質土または明黄褐色粘質土の地山となる。

丘陵斜面から裾部では上から現代の盛土（厚さ0.1～1.3 m）、表土（厚さ0.1～0.4 m）、旧表土（厚さ0.1～0.3 m）、地山上面に明黄褐色砂質土（厚さ0.2～0.5 m）・黄灰色砂質土（厚さ0.1～0.5 m）・暗茶灰色



AAM 第1次調査 調査地位置図 (1/5,000)

砂質土（厚さ0.1～0.3 m）が中近世以降の遺物包含層として堆積している。

丘陵東斜面裾の2号横穴墓の墓道付近では、厚さ約1.8 mの堆積土がある。堆積土の最下層からは、五輪塔の火輪部分が出土しており、中近世以降の遺物包含層と考えられる。また、発掘区南西部では、丘陵が幅約18 mにわたって切り通し状に削平されている。地山上面には、流水による溝が網目状に走り、溝上には最大約5 mの盛土が行われている。出土遺物から、近代以降の削平であることが判明した。

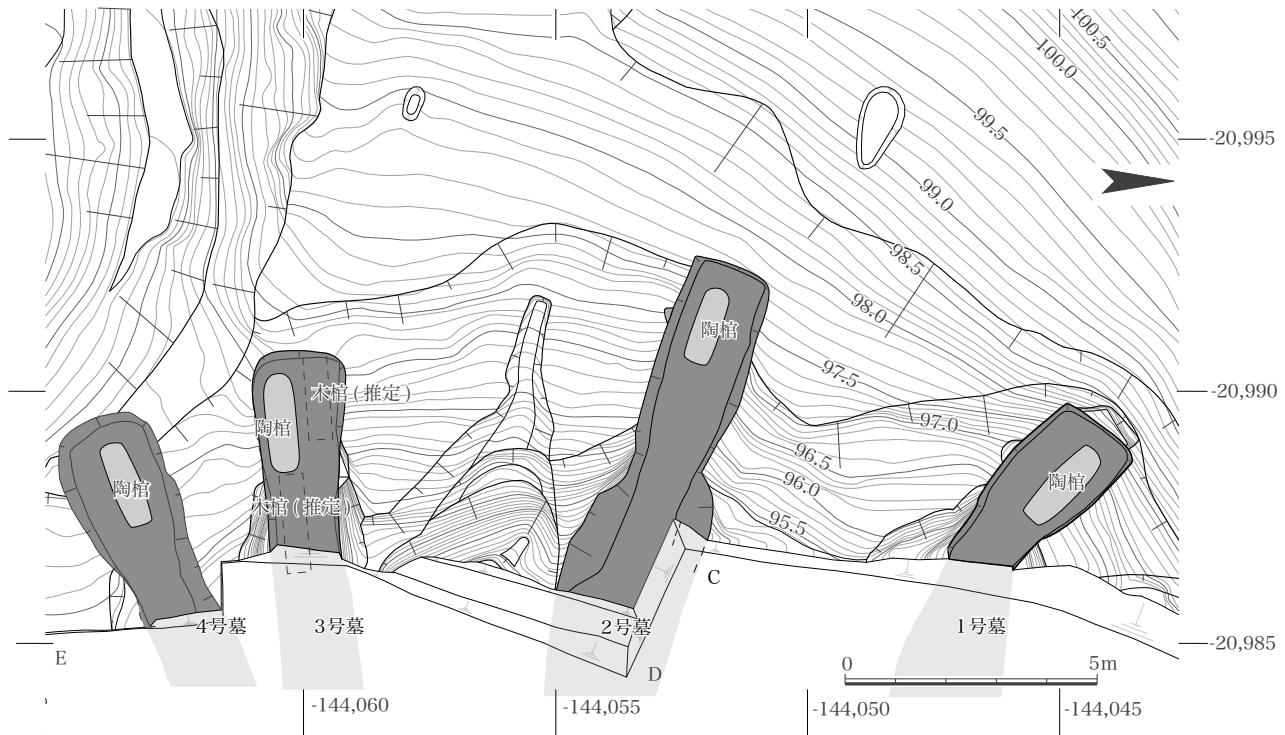
調査地内の地山面の標高は、丘陵北東部の最高所で約106.1 m、西側丘陵の最高所で約104.3 mで、2号横穴墓の墓道部分が標高約92.7 mと最も低い。



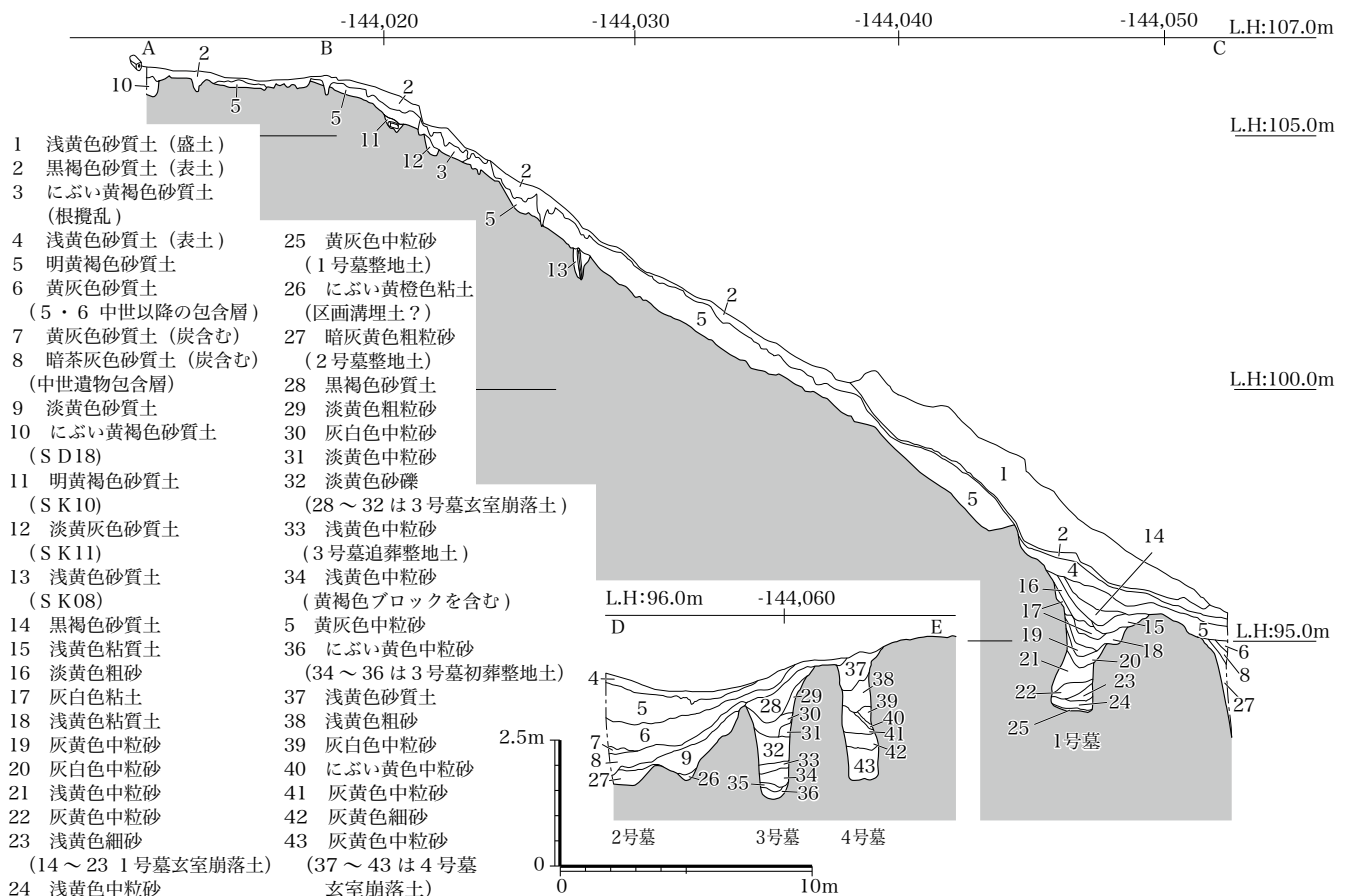
AAM 第1次調査 土層断面 (2号墓墓道前面 南から)



AAM 第1次調査 遺構平面図 (1/400 図中のアルファベットは土層断面部分を示す)



AAM 第1次調査 横穴墓群遺構平面図 (1/150 図中のアルファベットは土層断面部分を示す)



AAM 第1次調査 発掘区東壁丘陵頂部から斜面部 (上)・丘陵裾部東壁面 (下) (縦 1/150・横 1/300)

### III 検出遺構

丘陵南側裾部で飛鳥時代の横穴墓4基(1-4号墓)、西側残丘頂部の南斜面側で奈良時代の古墓1基(SX01)、東側丘陵頂部とその南北斜面で室町～江戸時代の古墓5基(SX02-06)、土坑9基(SK08-16:焼土坑含む)、石造物1基などを検出した。以下、主要な遺構を記す。

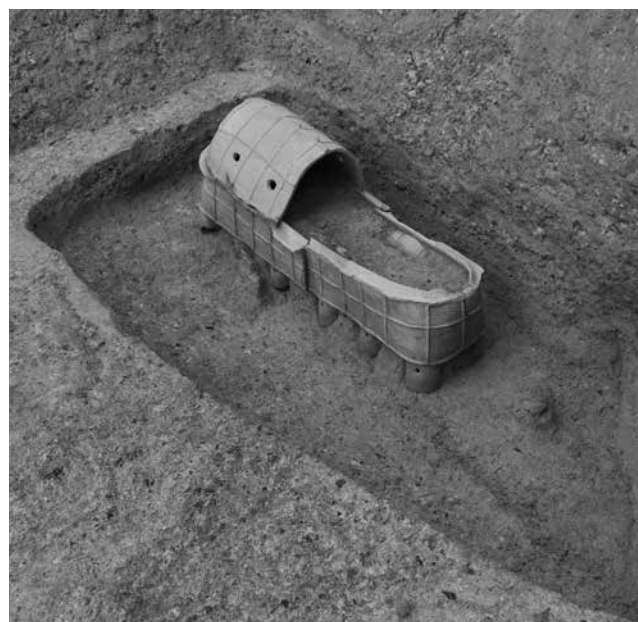
#### 飛鳥時代の遺構

横穴墓4基は、いずれも丘陵南斜面が北に入り組んだ部分に築かれ、東側に向かい開口する。横穴墓はさらに東側へつづき、この入り組んだ部分を囲むように築かれていたと考えられる。横穴墓は棺を納める玄室と丘陵斜面を溝状に切り通して築いた墓道、その間のやや幅の狭まった通路状の羨道から構成されるが、2号墓以外の横穴墓は墓道が発掘区外東側に延びており、玄室と羨道の一部を確認したに止まる。各横穴墓の玄室内には土師質亀甲形陶棺が各1基ずつ主軸に沿って置かれている。出土土器からいずれも7世紀前半頃の埋葬と考えられる。

以下、検出した4基の横穴墓について記述する。

1号墓 検出した横穴墓群の一番北側の横穴墓である。玄室の規模は奥壁幅1.8m、長さ3.9m、玄室の主軸はN-42°-Wである。玄室の平面形は羽子板形、断面形は残存形状から尖頭アーチ形で、高さは整地床面より2.3m程度と推定できる。床面は約0.1m整地して、奥壁に向かって緩やかに上がる。床面の標高は奥壁で93.9m、玄門側で93.6mである。陶棺1基が玄室北側に寄せて置かれ、西側の棺蓋は棺身の上にはほぼ埋葬当時のまま残り、東側の棺蓋は棺内に崩れ落ちていた。陶棺の棺蓋と棺身の位置関係が逆で配置されており、棺蓋の頂部には6ヶ所で小突起がある。陶棺内からは出土品がなく、陶棺外の玄門側から須恵器杯身2点、杯蓋1点が

出土した。また、陶栓2点が陶棺中央両側の玄室床面から出土している。陶棺南側からは遺物が出土せず、木棺の痕跡も確認できなかった。



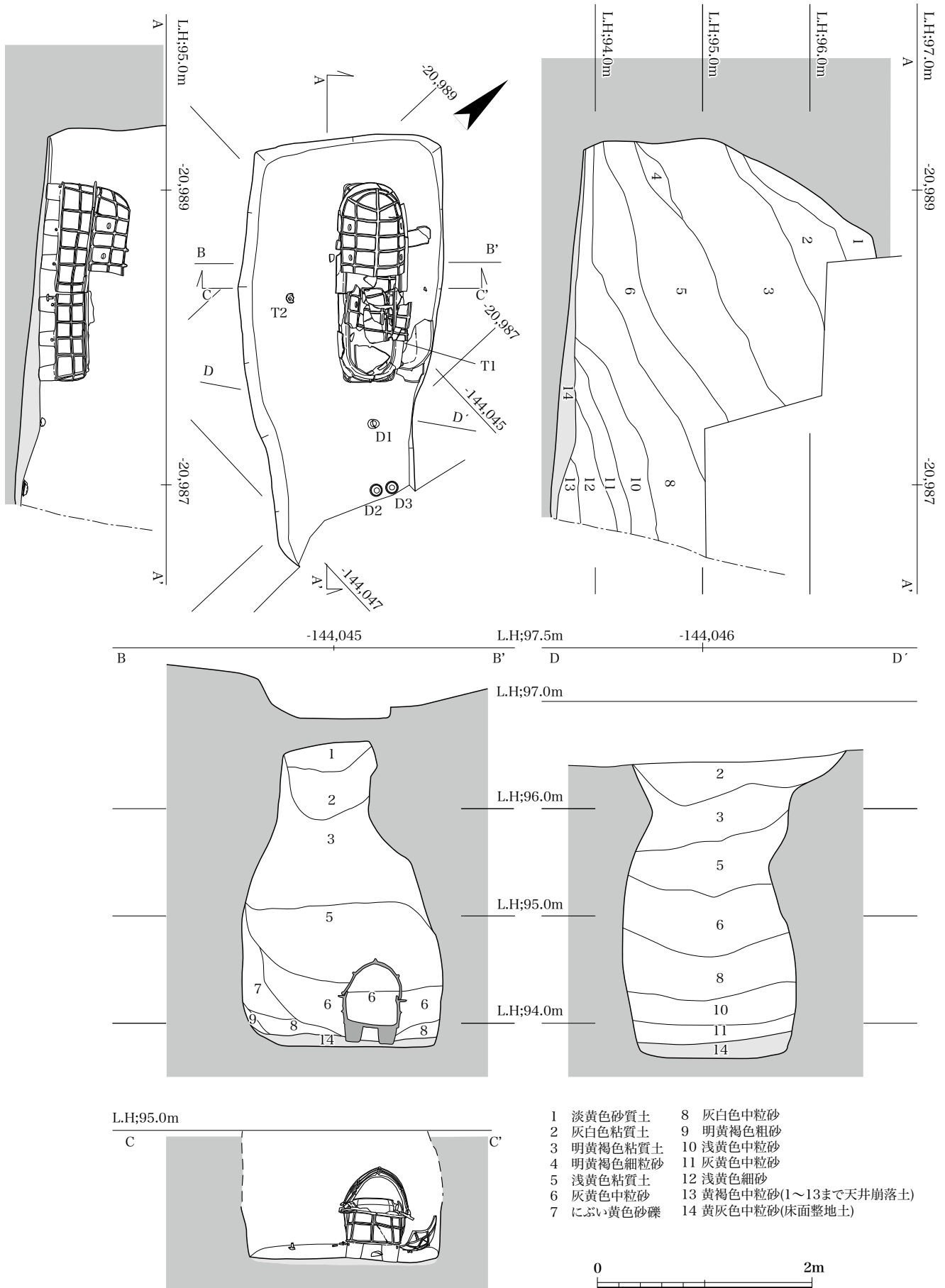
AAM 第1次調査 1号墓全景(南から)



AAM 第1次調査 1号墓全景 棺蓋取り上げ後(南西から)



AAM 第1次調査 横穴墓群全景(左が北)



AAM 第1次調査 1号墓 平面・断面・立面図 (1/50) (出土遺物の番号は遺物報告の図版に対応)

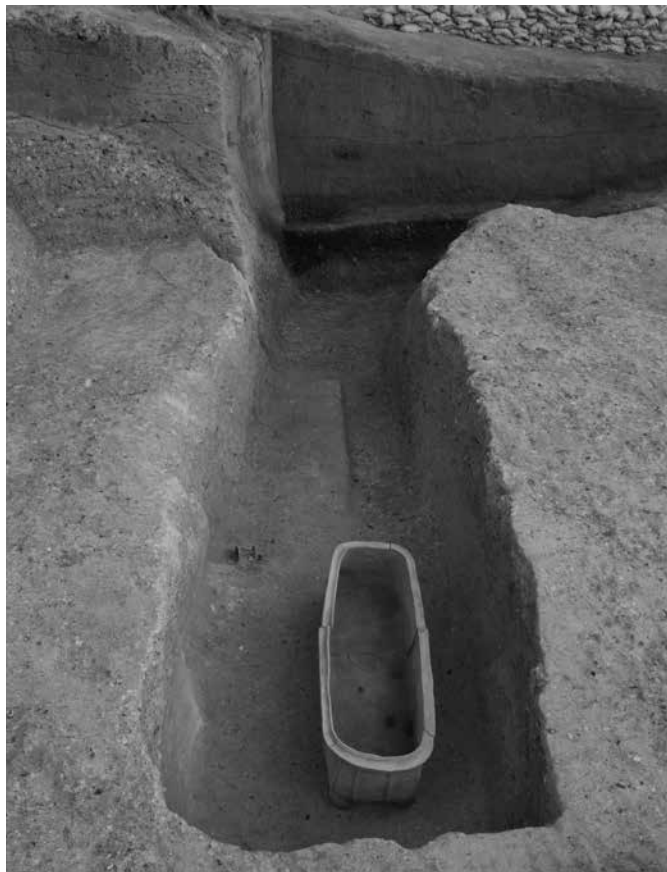
2号墓 玄室から墓道まではほぼ全容が判明する横穴墓である。玄室の規模は奥壁幅1.7m、長さ4.1m、玄室の主軸はN-68°-Wである。玄室の平面形はやや丸みをもつ羽子板形、断面形は残存形状から尖頭アーチ型で、高さは整地床面より2.7～2.8mと推定できる。床面は約0.1m整地し、奥壁に向かって緩やかに上る。床面の標高は奥壁で93.8m、玄門付近で93.4mである。陶棺1基が玄室中央に置かれていた。陶棺内からは耳環1点・

不明銅製品1点が棺の西側から出土した。陶棺外から須恵器高杯1点が出土した。棺蓋は棺身の上に残存するが、他の横穴墓に比べ破片が広範囲に散乱していた。

羨道は長さ0.8m、幅1.4mである。天井は崩落しており高さは不明であるが、閉塞土が土層観察から明瞭に認められる。墓道は長さ2.5m以上、底部幅は0.9m以上で、床面は0.1～0.3m整地されている。断面形状は逆台形である。



AAM 第1次調査 2号墓 全景 (東から)



AAM 第1次調査 2号墓 全景 (棺蓋取上げ後 西から)

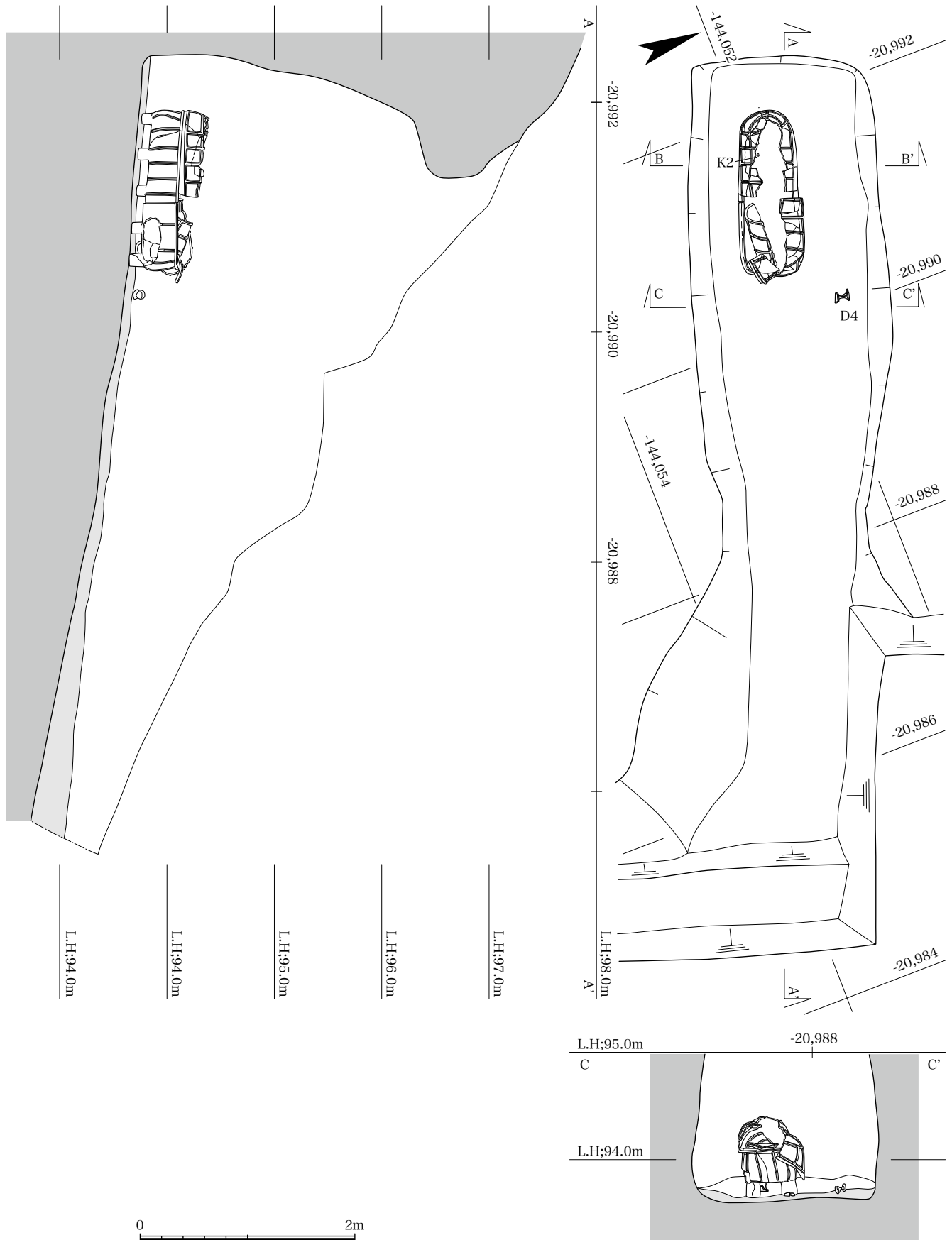


AAM 第1次調査 2号墓 全景 (北東から)

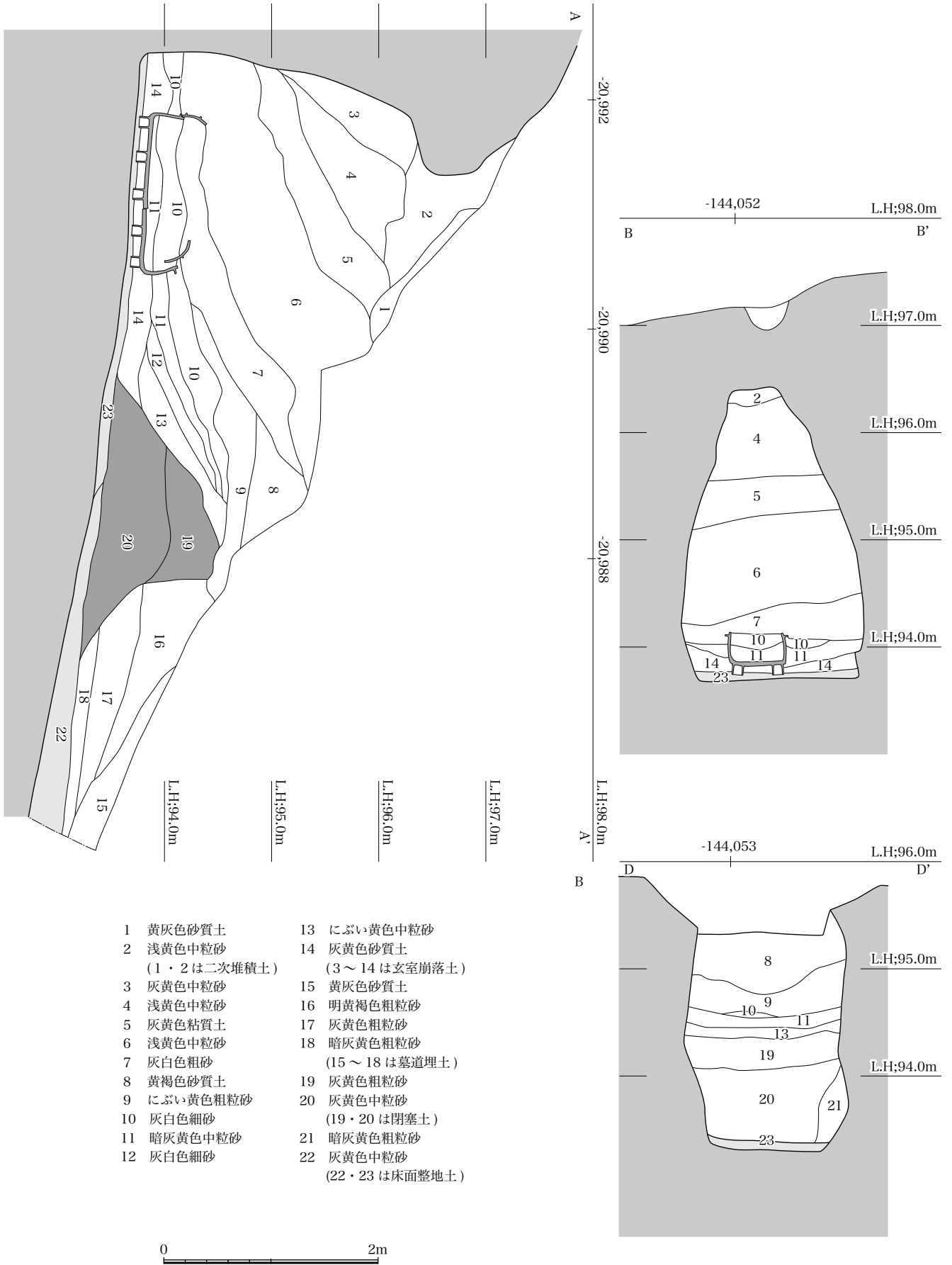


AAM 第1次調査 2号墓 全景 (棺蓋取り上げ後 北から)





AAM 第1次調査 2号墓平面・立面図 (1/50) (出土遺物の番号は遺物報告の図版に対応)



AAM 第1次調査 2号墓 断面図 (1/50)

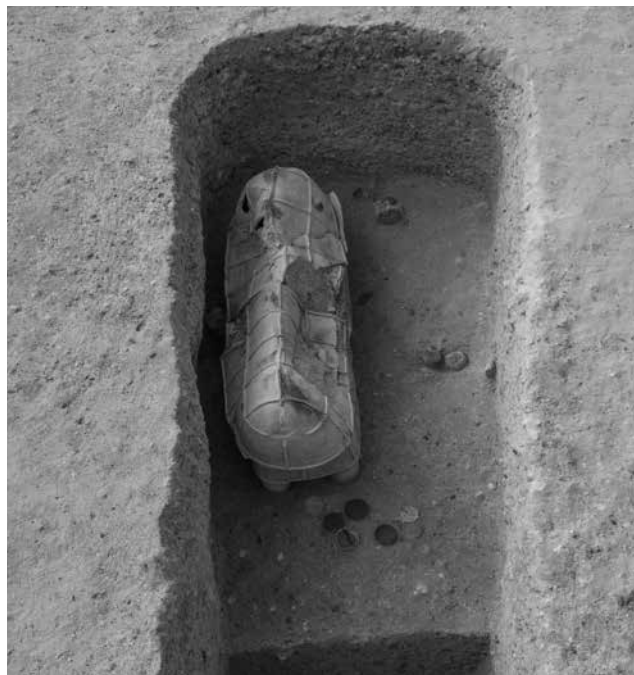
3号墓 玄室の一部のみ明らかになった横穴墓である。玄室の規模は奥壁幅1.8m、長さは4.4m以上、玄室の主軸はN-6°-Wである。玄室の平面形はやや丸みがある羽子板形、断面形は上面が崩落しており不明である。玄室高は残存形状より初葬整地床面より約2.8mと推定できる。床面は0.2~0.5m整地されており、玄門側ほど厚く整地され、奥壁側では貼床がある。床面の標高は奥壁で93.0mである。陶棺1基が玄室南側に寄せて置かれ、木棺の痕跡は確認できなかったが、副葬品の出土状態からさらに陶棺北側と東側に木棺が1基ずつ推定でき、計3棺の埋葬を確認できる。北側の木棺は陶棺と同じレベルの床面(92.9m~93.1m)、東側の木棺は陶棺の床面より約0.2m上面と推定でき、追葬に伴って再度整地し床面としたと考えられる。

陶棺は今回出土した中で最も大型で、棺蓋は棺身の上に当時のまま残存するも、土圧で押し潰されていた。また、陶栓1点が蓋の透孔を塞いだ状態で、陶棺北東側と南側床面でも抜け落ちた陶栓2点、陶棺の北側から円盤状の陶栓1点が出土した。陶棺内東側の北寄りから鉄刀子1点が出土した。

また、北側の木棺推定箇所から須恵器杯身2点が並べて置かれ、その周辺から耳環2点、木棺の中央寄りから

鉄鏃3点が出土した。他に北側木棺と陶棺周辺からは、須恵器杯身6点、杯蓋2点、高杯1点、短頸壺1点が出土している。

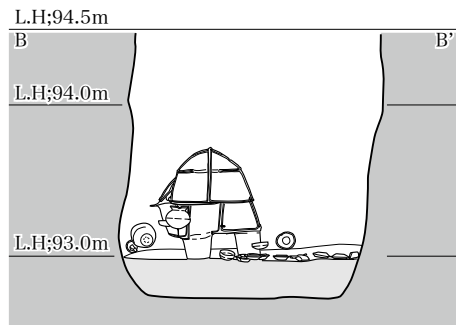
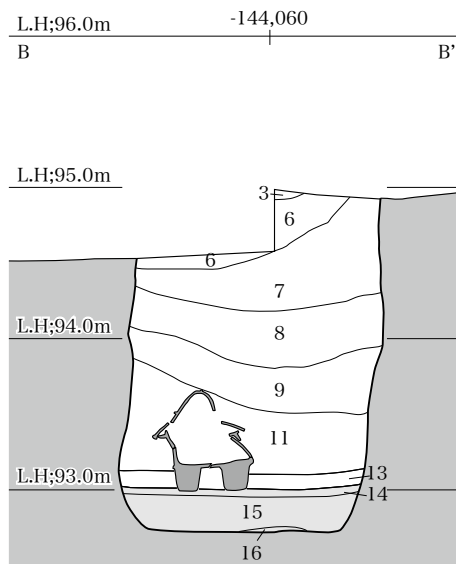
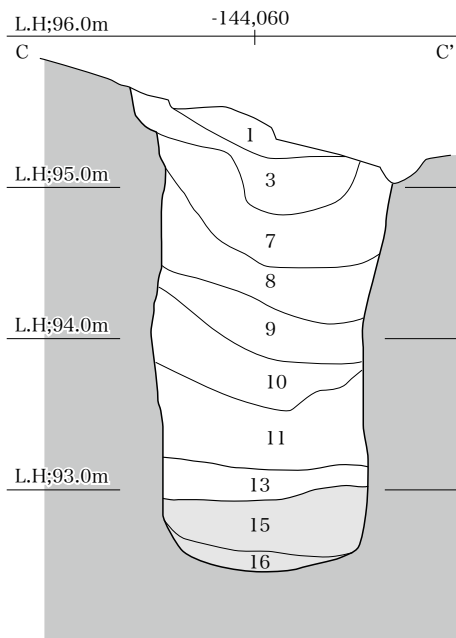
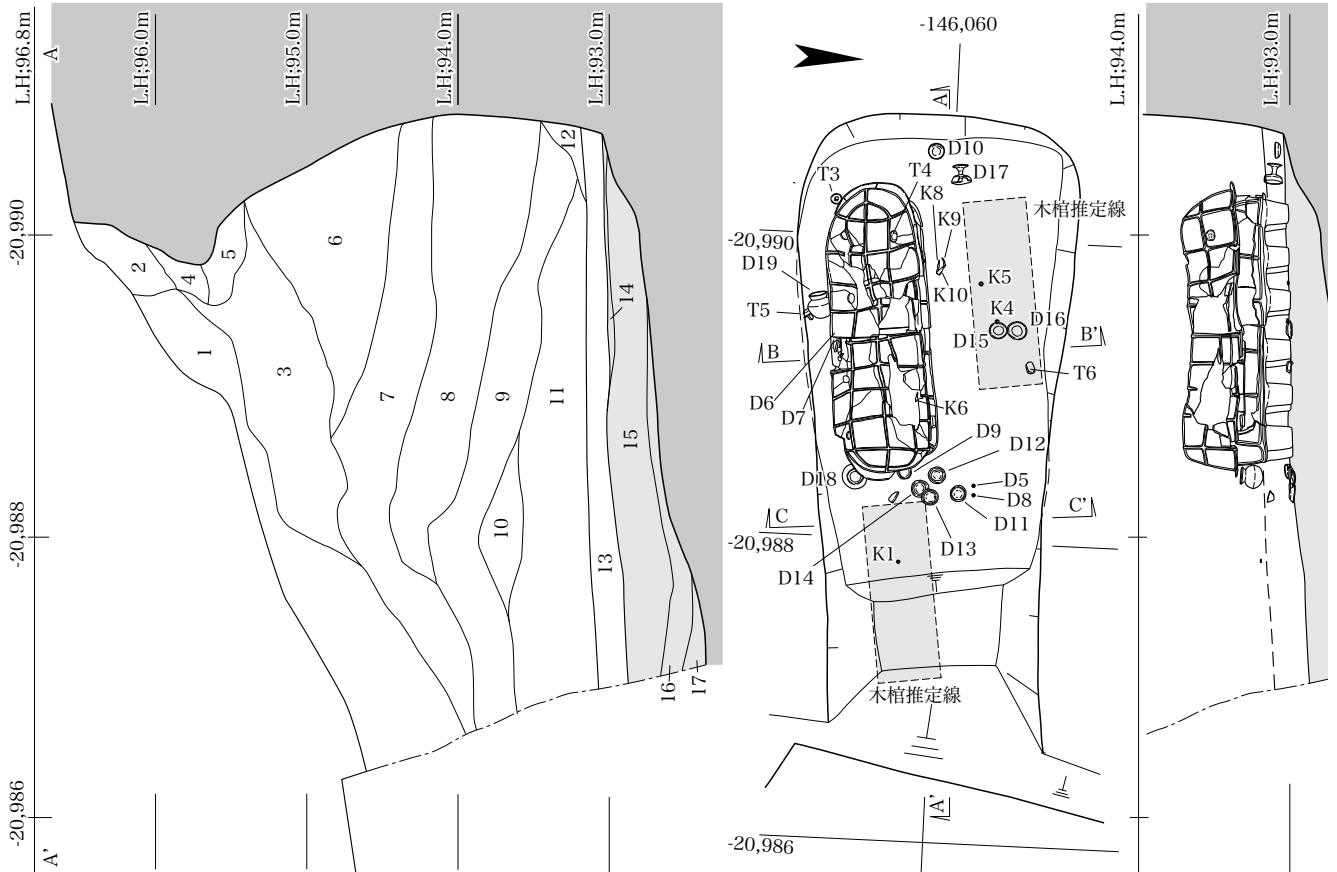
東側木棺推定箇所からは、耳環1点が西端で出土し、その南西側で同一面から須恵器短頸壺1点(D18)、杯蓋2点(D6・D7)が出土した。



AAM 第1次調査 3号墓 全景(東から)



AAM 第1次調査 3号墓 全景(北東から)



- |            |                        |
|------------|------------------------|
| 1 黒褐色砂質土   | 10 淡黄色中粒砂              |
| 2 浅黄色中粒砂   | 11 淡黄色中粒砂              |
| 3 にぶい黄触砂質土 | 12 にぶい黄色細砂             |
| 4 黄褐色粘質土   | 13 浅黄色中粒砂(2回目追層時床面)    |
| 5 暗灰黄色粘質土  | 14 浅黄色粘質土(初葬時貼床)       |
| 6 灰黄色砂質土   | 15 浅黄色中粒砂(15は初葬時床面整地土) |
| 7 浅黄色砂質土   | 16 黄灰色中粒砂              |
| 8 淡黄色粗粒砂   | 17 にぶい黄色中粒砂            |
| 9 灰白色中粒砂   |                        |



AAM 第1次調査 3号墓 平面・立面・断面図 (1/50) (出土遺物の番号は遺物報告の図版に対応)



AAM 第1次調査 3号墓 全景 (北から)



AAM 第1次調査 3号墓 全景 (東から)



AAM 第1次調査 3号墓 全景 (棺蓋取り上げ後 北から)



AAM 第1次調査 3号墓 全景 (棺蓋取り上げ後 西から)

4号墓 玄室から玄門付近まで判明する横穴墓である。玄室の規模は奥壁幅2.0 m、長さ3.6 m、玄室の主軸はN-113°-Wである。玄室の平面形はやや丸みをもつ羽子板形、断面形は奥壁の残存形状からドーム型で、高さは整地床面から2.4～2.5 mと推定できる。床面は0.1 m整地し、奥壁に向かって緩やかに上る。床面の標高は奥壁で94.0 m、玄門付近で93.6 mである。棺は、陶

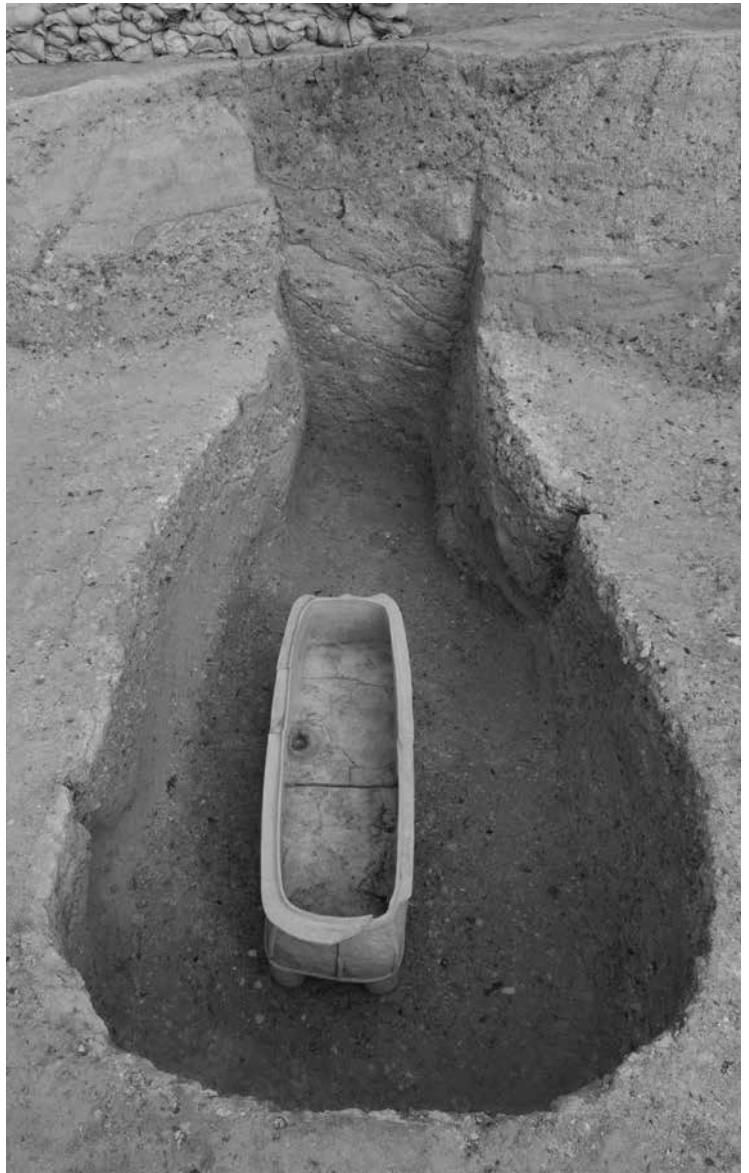
棺1基が玄室中央に置かれるものの、陶棺蓋は出土していない。埋葬時から蓋がなかったのか、または木製等の有機物の蓋が朽ち果てて残存しなかったものと考えられる。陶棺内からは耳環1点が棺中央北側で出土した。陶棺外からは、須恵器杯身4点、杯蓋2点、高杯1点、台付長頸壺1点が玄室奥側でまとまって出土した。羨道は長さ0.9 m以上、底部幅1.1 mである。(吉田 朋史)



AAM 第1次調査 4号墓 全景(東から)



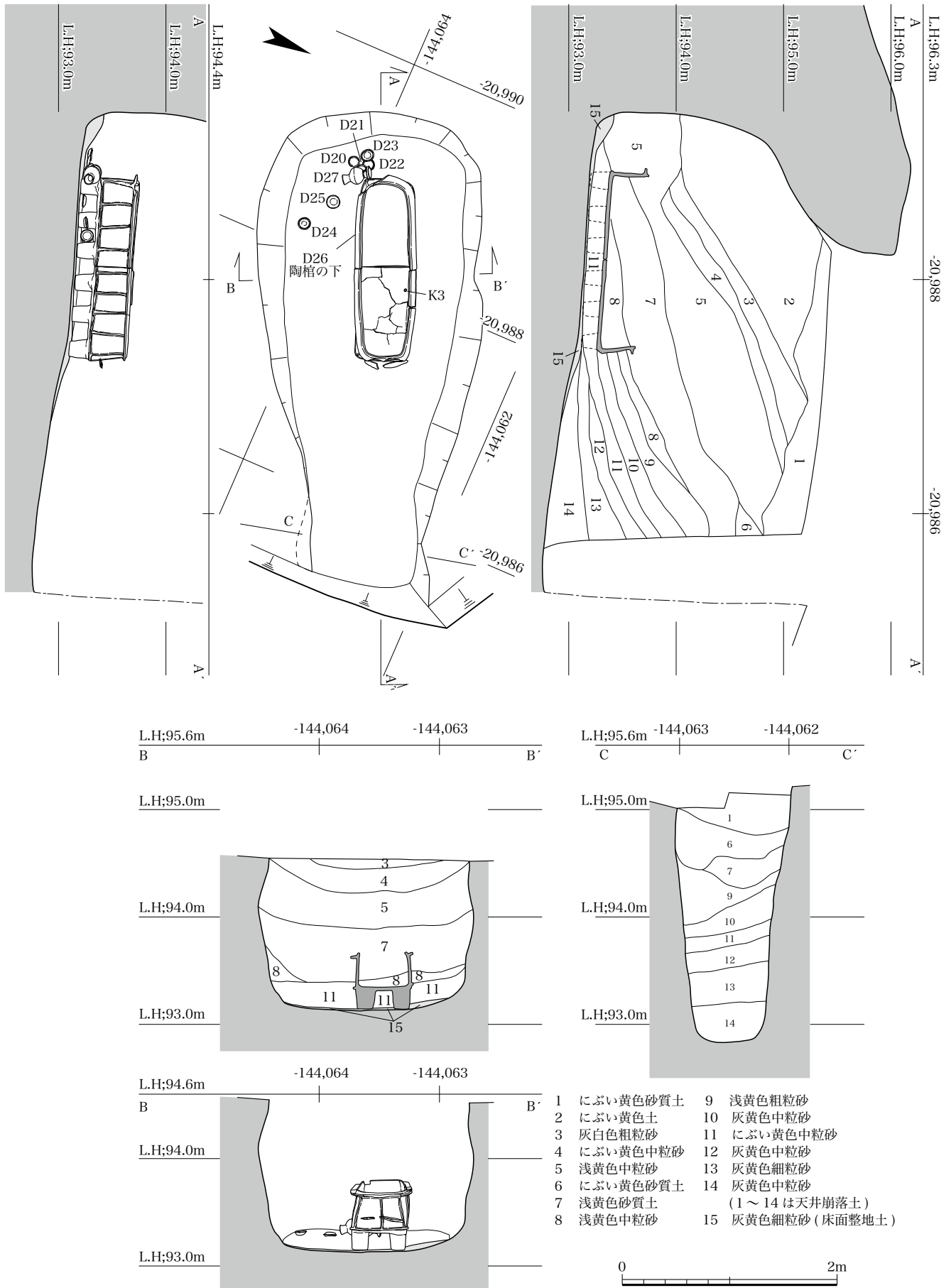
AAM 第1次調査 4号墓 全景(南から)



AAM 第1次調査 4号墓 全景(西から)

AAM 第1次調査 横穴墓一覧表

遺構番号	玄室		羨道		墓道		棺	出土遺物	
	長さ(m)	奥壁幅(m)	長さ(m)	幅(m)	長さ(m)	幅(m)		棺内	棺外
1号墓	3.9	1.8	-	-	-	-	土師質亀甲形陶棺1		須恵器杯身・杯蓋
2号墓	4.1	1.7	0.8	1.4	2.5	0.9以上	土師質亀甲形陶棺1	耳環	須恵器高杯
3号墓	4.4以上	1.8	-	-	-	-	土師質亀甲形陶棺1 木棺2	陶棺 鉄刀子 北側木棺 耳環・鉄鏃 東側木棺 耳輪	須恵器杯身・杯蓋・高杯・短頸壺
4号墓	3.6	2	0.9以上	1.1	-	-	土師質亀甲形陶棺1 (陶器棺蓋なし)	耳環	須恵器杯身・杯蓋・高杯・短頸壺 高杯・台付長頸壺



AAM 第1次調査 4号墓 平面・立面・断面図 (1/50) (出土遺物の番号は遺物報告の図版に対応)

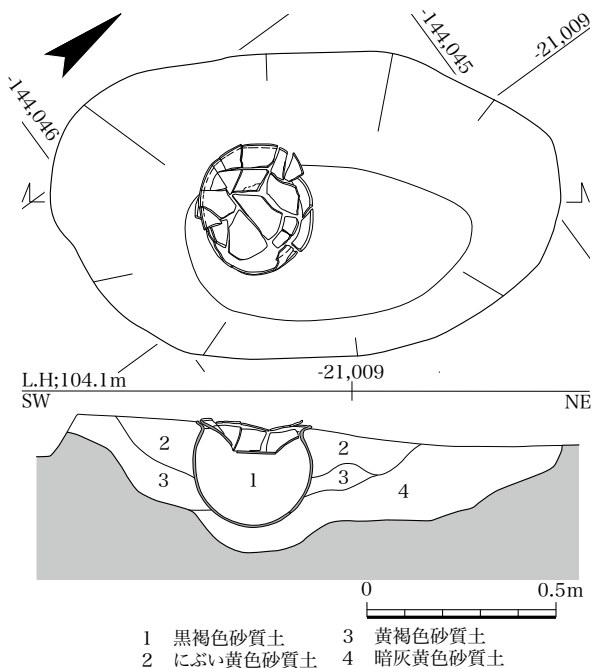
**奈良時代の遺構**

S X 01 土師器高杯の杯部で蓋をした土師器甕を埋納する遺構で、西側丘陵頂部の南側斜面に1基確認した。掘形は平面楕円形で、東西約1.4 m、南北約0.8 m、深さ約0.4 mある。断面形は浅いすり鉢状で、中央部がやや深くなる。最下層には、炭化物を含む暗灰黄色砂質土が堆積し、その上に土師器甕を掘形内の中央よりやや西側に寄せて埋納する。甕は球胴の都城型で、大きさは口径約30cm、高さ約27cm、胴部最大径約30cmある。容積から遺骨を埋納した火葬墓と考えられる。

この他、中近世墓のある丘陵斜面部からは、奈良時代の瓦類が多数出土するが、奈良時代の遺構は確認できなかった。(吉田朋史)



AAM 第1次調査 SX01 縦断土層 (南東から)



AAM 第1次調査 SX01 平面・立面図 (1/20)

**室町・江戸時代の遺構**

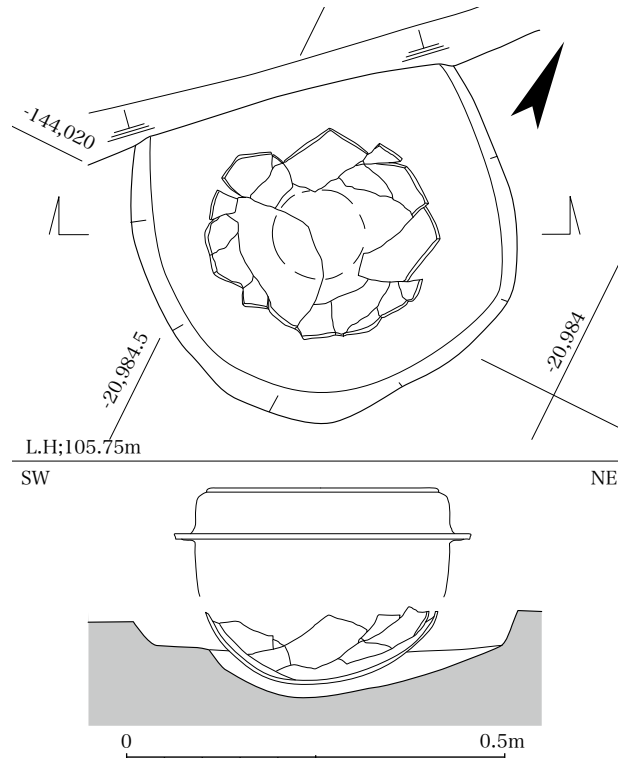
西迎寺墓地が位置する丘陵上には、東西約140 m、南北約20 mの平坦面があり、西端の約10 m分が事業地内にある。平坦面は発掘区東端で幅約8 mあり、西に向かい先細りとなる。古墓関係の遺構は、この平坦面上と南北肩部付近の傾斜地に存在する。事業地外南斜面には、地形図には現れない雛壇状の平坦面が存在し、墓域として利用されていた可能性が考えられる。

検出遺構には、室町・江戸時代の火葬墓5基、石造物1基、焼土坑3基、土坑4基があり、他に近代以降の土器棺墓1基、蔵骨器1基、土坑墓(改葬後?)2基がある。各遺構の規模等は一覧表にまとめ、主要な遺構を記す。

S X 04 土師器羽釜を蔵骨器に利用した火葬墓である。土師器は底部から約10cm分が残存し、復原すると口径約27cmの大形品となる。羽釜は未使用品で煤等の付着はなく、外面に墨書等も確認できない。内部には火葬骨と炭が残存していた。分析の結果、性別は不明だが、30～40代の人骨と判明した。羽釜の復原から、上面は20cm以上削平されていることがわかる。

S X 02・05 いずれも瓦質土器蓋・深鉢を蔵骨器に利用した火葬墓で、内部には骨・副葬品等は残存していなかった。

S X 03 土師器羽釜または鍋を蔵骨器に利用した火葬墓で、内部には骨・副葬品等は残存していなかった。口縁部の破片が出土しておらず型式は不明。

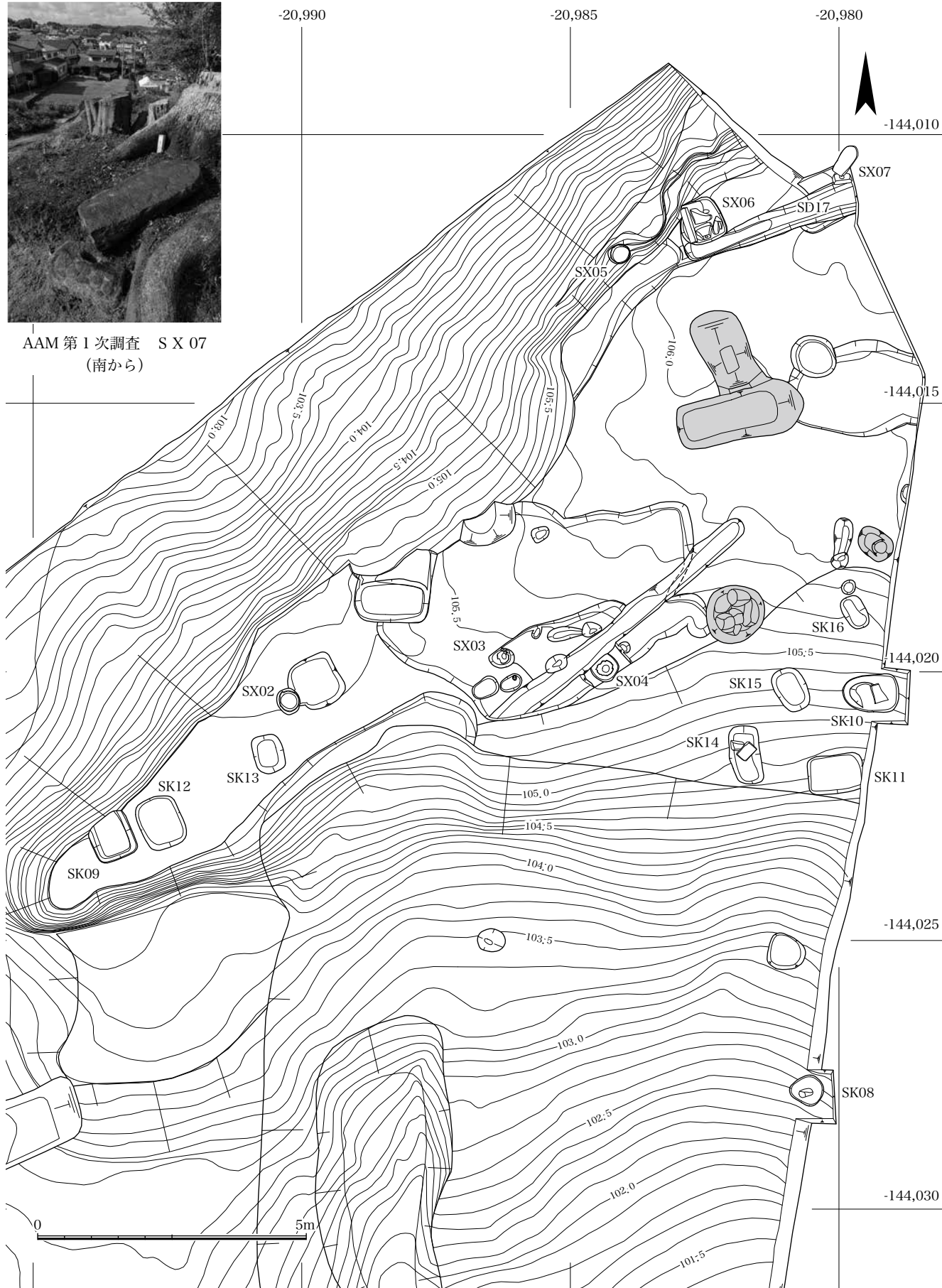


AAM 第1次調査 SX04 平面・断面図 (1/10)

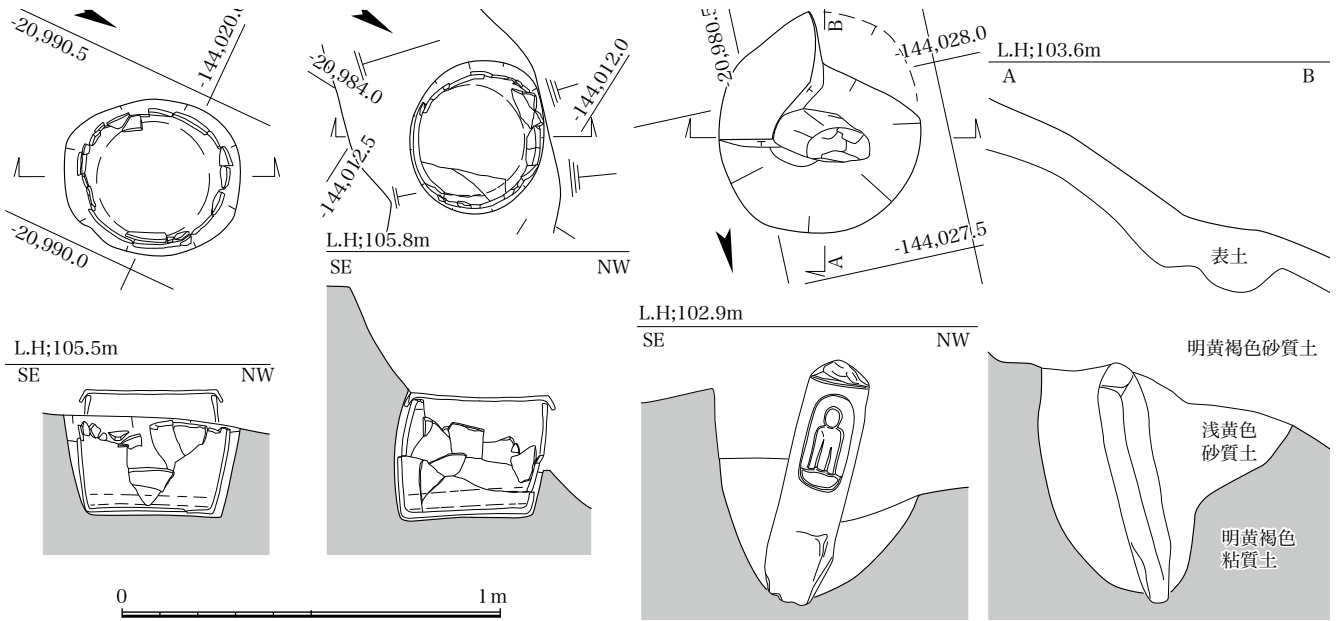




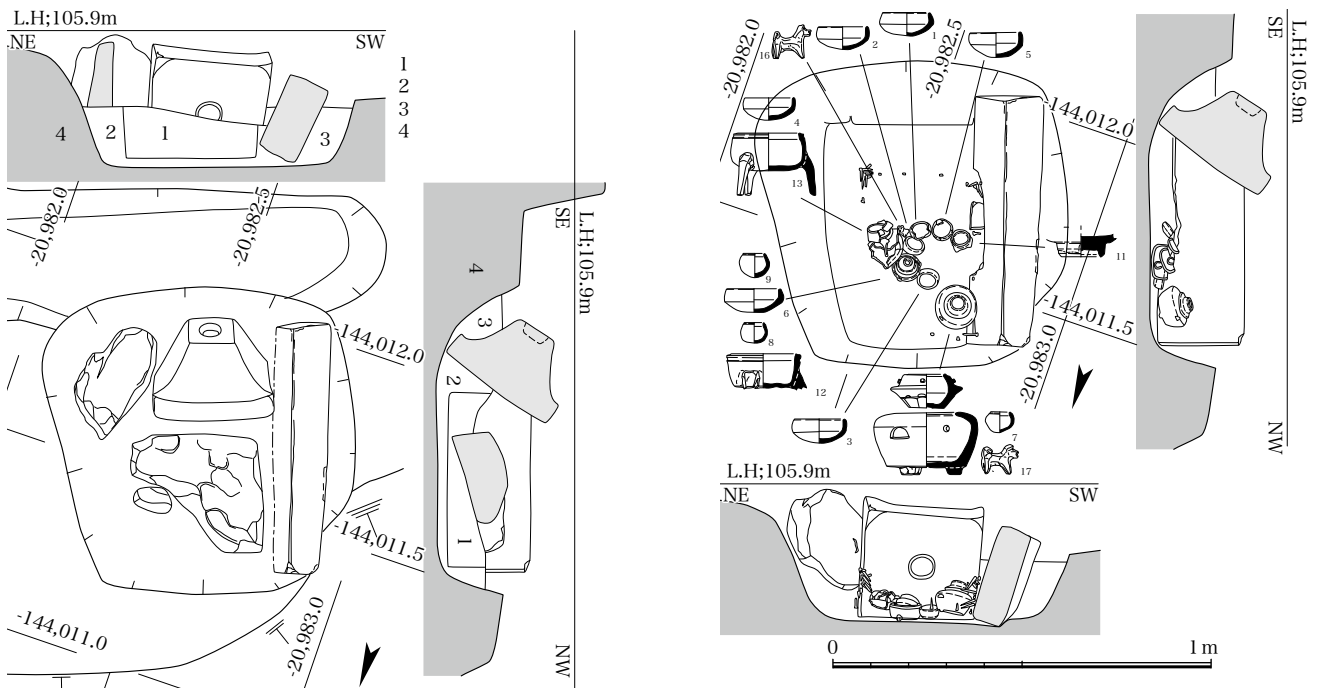
AAM 第1次調査 SX 07  
(南から)



AAM 第1次調査 中近世墓群 平面図 (1/100 網掛け部分は現代の墓)



AAM 第1次調査 SX04・05、SK08 平面図・立面図 (1/20)



AAM 第1次調査 SX06 平面図・立面図 遺物出土状況図 (1/20)

S X 06 木櫃を蔵骨器に利用した火葬墓である。一辺約0.8mの平面方形掘方内の西側に板石を、南側に底面を内側に向けた火輪と自然石を据え、その中に木櫃を置く。木櫃上は扁平な石で蓋とするが、木櫃の腐朽消失によって櫃内に陥没する。木櫃に使用した鉄釘が原位置で残存しており、長さ0.47m、幅0.35m、高さ0.1m以上の木櫃が復原できる。木櫃内には17点のミニチュア土器他が副葬されている。北西隅には瓦質土器風炉(中に小形壺と犬形土製品入り)・羽釜を置く。中央部には土師器小形鉢と三足鉢(いずれも中に小形壺を入れる)を重ねて置き、この南西側に3点、西側に1点の土師

器小形鉢を、南東側に土師器三足鉢と瓦質土器羽釜を重ね、その横に犬形土製品を置く。西端には青磁碗の高台部分を底を上にして置く。

S K 09・10・11 いずれも焼土坑で、底面と側面が被熱で赤化し、底には薄く炭が堆積する。S K 10からは仏像面を下にして箱仏が1点出土した。

S K 14・15 黄灰色砂質土で埋まる土坑で、いずれも被熱を受けた箱仏等が仏像面を下にして出土する。

S K 08 平面楕円形掘方の中に、圭頭板碑を直立させて埋める土坑。板碑の仏像面は斜面側(北側)を向く。板碑以外の顕著な遺物はない。(中島和彦)



AAM 第1次調査 中近世墓群全景（南西から）



AAM 第1次調査 SX04(南から)



AAM 第1次調査 SX06(北東から)



AAM 第1次調査 SX05(北東から)



AAM 第1次調査 SX10  
(南から・左 取り上げた箱仏、右 土に残る仏の型)

AAM 第1次調査 古代・中近世遺構一覧表

遺構番号	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)	時期	主な出土遺物	備考
SX01	楕円形	東西約 1.35× 南北約 0.8	0.35	8世紀後半～末	土師器甕・高杯	土師器甕を蔵骨器とした火葬墓
SX02	楕円形	長さ約 0.45× 幅約 0.4	0.25	15世紀以降?	瓦質土器深鉢・蓋	瓦質土器深鉢を蔵骨器とした火葬墓
SX03	楕円形	長さ約 0.4× 幅約 0.35	0.15	15世紀以降?	土師器羽釜または鍋	土師器羽釜類を蔵骨器とした火葬墓
SX04	楕円形	長さ約 0.5× 幅 0.4～0.8	0.1	15世紀後半～16世紀初め	土師器羽釜	土師器羽釜を蔵骨器とした火葬墓
SX05	楕円形	長さ約 0.45× 幅約 0.35	0.35	15世紀以降?	瓦質土器深鉢・蓋	瓦質土器深鉢を蔵骨器とした火葬墓
SX06	隅丸方形	長さ約 0.8× 幅約 0.8	0.3	16世紀末～17世紀初め	(木櫃内) 土師器小形壺 3点・小形鉢 6点・三足付鉢 2点、瓦質土器羽釜 2点・風炉 1点、青磁碗 1点、犬形土製品 2点、鉄釘 74点、平瓦 (木櫃外) 土師器皿 1点	木櫃を蔵骨器とする火葬墓
SX07				16世紀後半	舟形五輪塔・台座各 1点	五輪塔「尊壽童女 天正十七年 十月十日」銘
SK08	楕円形	長さ 6.8× 幅約 3.2	0.65		圭頭板碑 1点	板碑を直立させ埋納
SK09	隅丸長方形	長さ 0.6 以上× 幅約 0.5	0.15			焼土坑
SK10	楕円形	長さ約 1.05× 幅約 0.7	0.2		箱仏 1点	焼土坑、箱仏は仏像面を下に埋納
SK11	隅丸長方形	長さ約 1.05× 幅約 0.75	0.1			
SK12	隅丸長方形	長さ約 0.95× 幅約 0.75	0.5			
SK13	隅丸長方形	長さ約 0.7× 幅約 0.55	0.3			
SK14	隅丸長方形	長さ約 1.1× 幅約 0.55	0.5		箱仏 1点、圭頭板碑 1点	箱仏・板碑は仏像面を下に埋納
SK15	楕円形	長さ約 0.4× 幅約 0.35	0.15		箱仏 1点	箱仏は仏像面を下に埋納
SK16	楕円形	長さ約 0.3× 幅約 0.2	0.2			
SD17	東西方向	長さ 3.3 以上× 幅約 0.7	0.2			重複関係から SX06 より古

#### IV 出土遺物

飛鳥時代の土師質亀甲形陶棺・須恵器・耳環・鉄鎌・鉄刀子、奈良時代の土師器・須恵器・軒平瓦 (6663-C)・平瓦・銭貨 (神功開寶)、室町～江戸時代の土師器・瓦質土器・青磁・犬形土製品・鉄釘・石造物などが、遺物整理箱 83 箱分出土した。以下主要な遺物について記す。

#### 飛鳥時代の遺物

##### 1号墓陶棺

棺蓋 全長 177.5cm・最大幅 58cm・高さ 39.5cmで、一つの蓋をへら切りで二つに切断する。口縁部内外面及び天井部外面の一部に黒班がつく。両短側面周辺の外面にのみ赤色顔料の塗布が認められる。

稜線突帯、口縁部突帯、横位突帯を 1 条貼付けて外面全体を上下 2 段に区画する。そして、11 条の長側面縦位突帯を貼付けて長側面に左右 10 列の区画をつくる。短側面縦位突帯を貼付けないため、両短側面は左右 2 列の区画となる。

突帯の貼付け順序は、稜線突帯・縦位突帯を先に貼付けた後に口縁部突帯・横位突帯を貼付ける。そのために、稜線突帯・縦位突帯は口縁部突帯を突き抜けて口縁部端部にまで及ぶ。突帯はヨコナデで成形されるが、突帯交点の一部に板押さえの圧痕がみられる。

稜線突帯と縦位突帯の交点上の 6 箇所粘土を貼付けて扁平な小突起がつくるが、1 箇所だけ欠失する。

口縁部は高さ 5 cm の粘土帯を 7 枚接合してつくられている。口縁部端面には葉脈圧痕が局所的にみられるが、

板目圧痕や蔓状の圧痕もみられるため、全面に葉を敷いていたとは考えにくい。

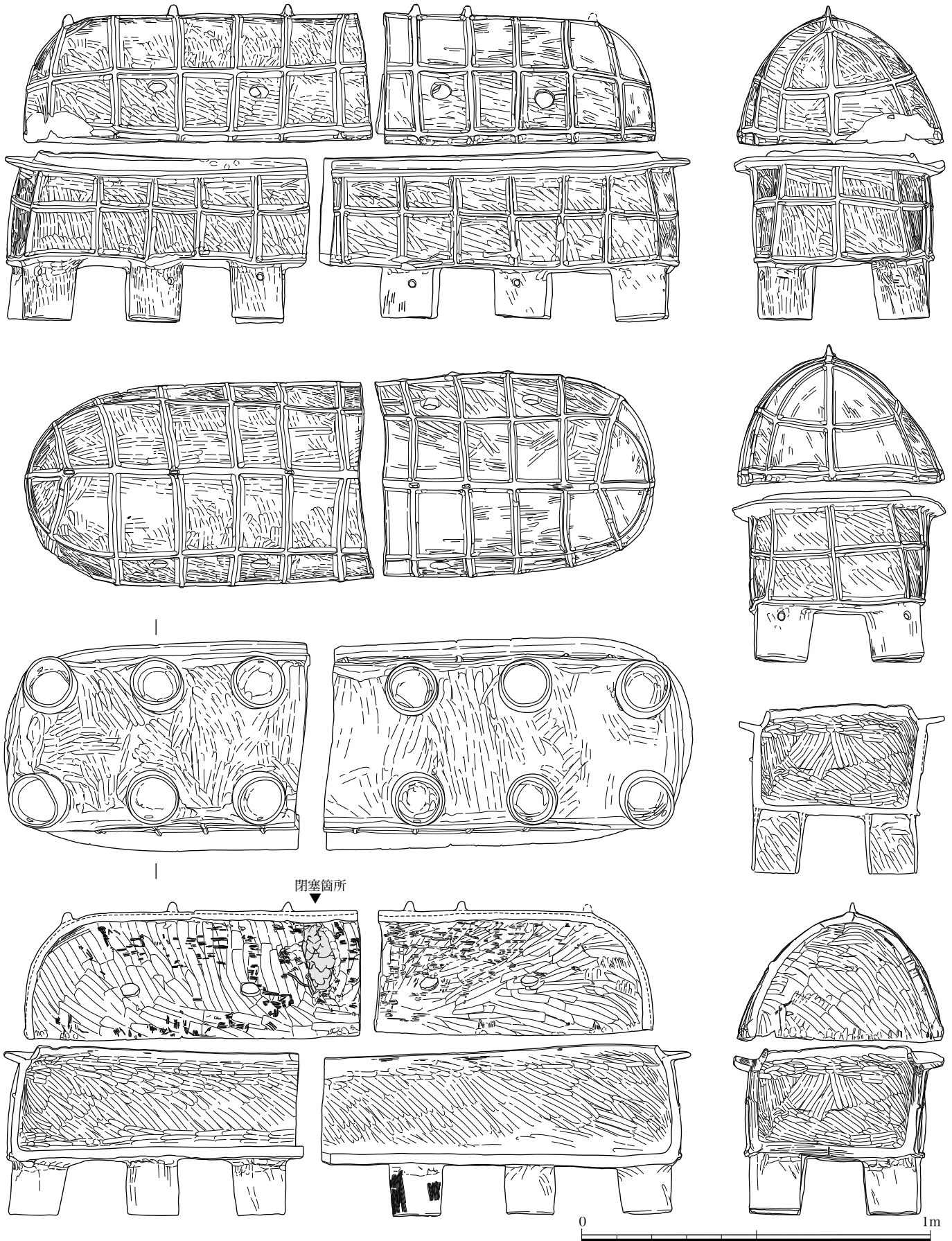
突帯は稜線突帯貼付け後に縦位突帯を貼付けてから最後に横位突帯を貼付けている。突帯の一部には板押さえによる板小口圧痕が残るものの、ほとんどの部分はヨコナデのみで仕上げる。

閉塞箇所は長側面中央に認められる。口縁部(粘土帯)の上に高さ 14cm まで粘土紐を積み上げた後、両方の短側面から縦方向に粘土紐を貼り付けていき、最後に残った中央の孔に小さな粘土塊を詰め込んで閉塞する。内面には形持たせの藁縄状圧痕がよく残っている。

棺身 全長 189cm・最大幅 60cm・高さ 49cm である。棺身中央に穿孔した穴から糸を通し、左右に分けて切断する。口縁部での内法寸法は全長 169cm・最大幅 40cm・高さ 27～30cm である。蓋受け上面にわずかな赤色顔料がみられるのみで、全体的には赤色顔料を認めない。

25 条の縦位突帯を貼付けて片側の長側面に左右 10 列、もう片側の長側面に左右 11 列、両短側面に左右 2 列の区画をつくり、さらに横位突帯で上下 2 段に区画する。突帯は周底突帯貼付け後に縦位突帯を貼付け、最後に横位突帯を貼付けている。長側面の縦位突帯貼付け位置は、脚部位置に 1 条と脚部と脚部の間に 1 条であるが、一箇所だけ脚部間に 2 条貼付け規則性が乱れる。

蓋受けは体部の器壁上端を折り曲げてつくられ、その屈曲部上に二次的に粘土を貼付けて口縁部を成形している。口縁部の高さは 4～3 cm、蓋受けは上面幅 7～8



AAM 第1次調査 1号墓出土陶棺 (1/15)

cm・厚さ1～2cmである。

脚部には6行2列、合計12本の脚が取り付く。脚には長側面外側に向いた円形透孔を一つずつ穿孔する。脚は直径14～15cm・高さ14～17cmで、外面を板タテナデあるいはタテハケ調整、内面をタテナデ調整した円筒を倒立してつくる。棺身底部となる厚さ3cmの粘土板の上に脚となる円筒を並べて配置し、円筒底部の内外に粘土を貼付けてヨコナデし粘土板と接合させた後、それをひっくり返すことで脚部の円筒が倒立する。ただし、片側の短側面に並ぶ1行分の2脚だけに脚と底部の接合箇所内面にヨコナデが行われていない。これは、この2脚をセットで粘土板に接合して身底部製作の接合単位をつくった際に内面接合箇所のナデ調整を怠ったためと考えられる。身底部外面のナデ調整を観察しても、2脚1行単位で接合していったようにみえる。したがって、この痕跡は2脚1行分を接合単位として身底部が製作されたことを示す一つの根拠となり得る。棺身底部外周を上方へ拡張させ、その上に粘土を積み上げて器壁を成形した痕跡が認められる。

内面の長側面上端に沿って局所的に木目が残るため、両長側面の口縁部内面に沿って板を当て、形持たせを行っていたと考えられる。

## 2号墓陶棺

棺蓋 全長147cm・最大幅56cm・高さ35cmで、一つの蓋をヘラ切りで二つに切断する。片側の天井部中央の一部を欠損する。口縁部内外面及び天井部外面の一部に黒班がつく。赤色顔料の塗布は認められず、透孔がない。

稜線突帯、口縁部突帯、横位突帯を1条貼付けて外面全体を上下2段に区画する。そして、8条の長側面縦位突帯を貼付けて長側面に左右7列の区画をつくる。短側面は片側の下段にのみ短側面縦位突帯2条を貼付けるため、両短側面で突帯配置方法が異なる。

突帯の貼付け順序は口縁部突帯⇒横位突帯⇒稜線突帯⇒縦位突帯とみられ、稜線突帯は片側短側面の口縁部突帯上から反対側短側面の口縁部突帯を突き抜けて口縁部にまで及ぶ。突帯は板押さえで成形されており、板端部の圧痕が一部に残る。

閉塞箇所は天井部中央に認められるが、一部を欠損する。側面四方から同心円状に粘土紐を貼り付けていき、最後に残った中央の孔を粘土円板で閉塞する。内面には形持たせの藁縄状圧痕が一部に残る。

口縁部端面に葉脈圧痕が残る。圧痕面は平らではなく凹凸(ナデの面に似る)があり、外端面で葉脈圧痕が下方へ折れていくのが看取できる。その折れ方も直角ではな

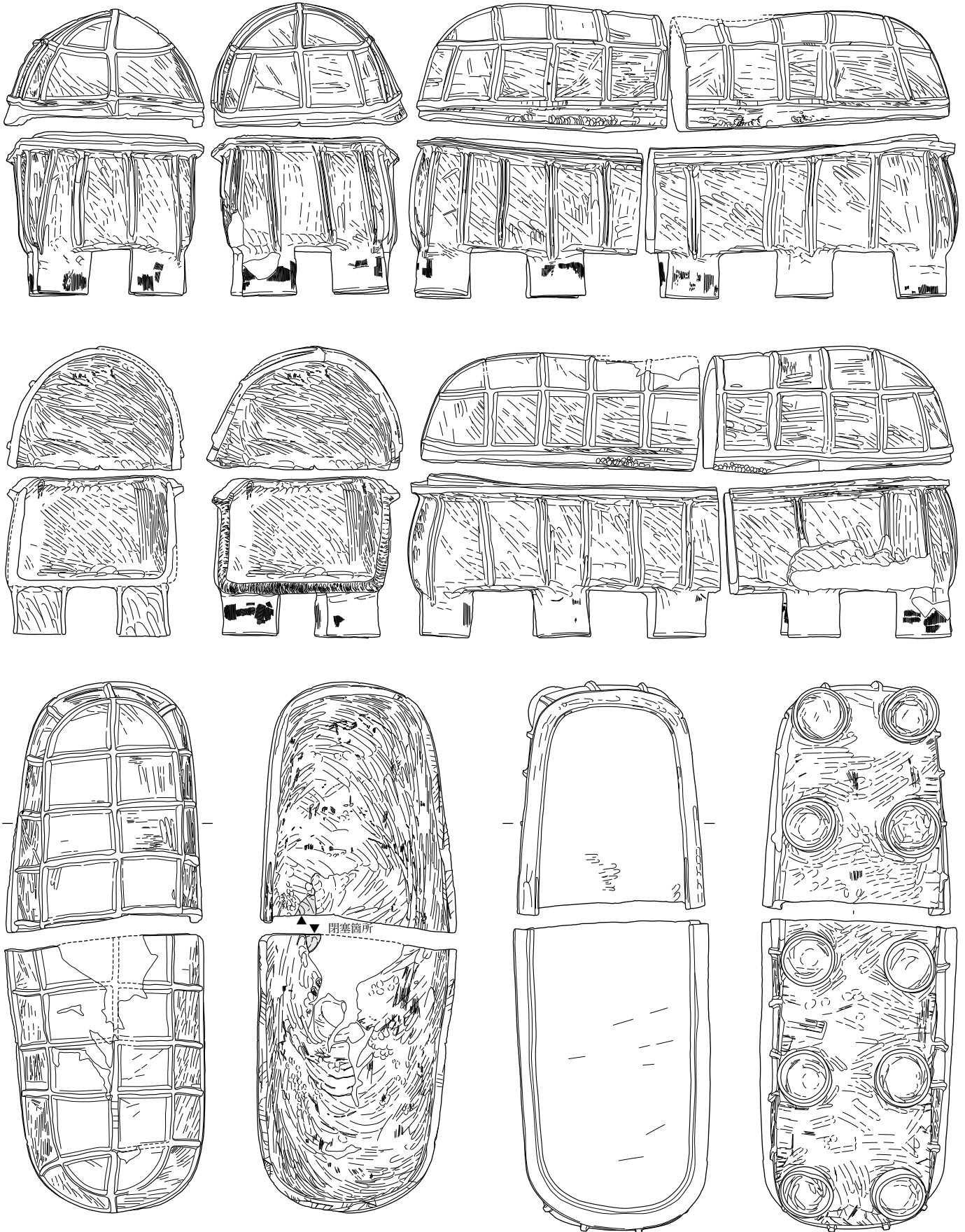
く、緩く湾曲(丸く取めた口縁端部に似る)するように折れていく。また、口縁部も直線的にならず、中央が下へ膨らむ形状となっている。以上の点から、この蓋は水平な板の上ではなく、凹凸があって中央が下がるような不安定な場所(成形台)の上に葉を敷いて製作されたことがわかる。そして、外端面が下方へ折れて途切れる箇所を追っていくと身口縁部外周の形状とほぼ合致することも判明した。これが成形台の外周形状を反映していると考えられるので、陶棺身の蓋受け上面を利用して陶棺蓋を製作したと判明する珍しい事例と評価できる。側面観に違和感を覚えるのは、口縁部が陶棺身の形状に沿うため水平にならないが、突帯は水平に貼付けられているためである。なお、身の片側口縁部が切断後(乾燥時あるいは焼成時)にやや外側へ倒れて変形しているため、蓋の製作は身切断前に行われた可能性が推測できる。

棺身 全長151cm・最大幅55cm・高さ46cmである。一つの棺身を糸切りで二つに切断するが、脚行数が奇数であるため切断位置が中央から少しずれる。また、切断後に片側の長側面が少し外傾し変形している。口縁部での内法寸法は全長136.5cm・最大幅44.5cm・高さ29～31cmである。外面の一部に赤色顔料が残る。

23条の縦位突帯を貼付けて片側の長側面に左右8列、もう片側の長側面に左右9列、両短側面に左右3列の区画をつくる。長側面の突帯貼付け位置はもともと脚部位置に1条と脚部と脚部の間に1条を貼付けるはずであったとみられるが、その規則性が一部で乱れ不規則となる。

口縁部の高さは1～3cm、蓋受けは上面幅3～4cm・厚さ1.5～2.5cmで、器壁の外面調整後に蓋受けを貼付けている。外面の底面と側面の境に沿って板押さえが行われており、その一部が脚部上端にも及ぶ。内面の長側面上端に沿って局所的に木目残り、その左右両端には割裂材小口とみられる圧痕が残る。両長側面の口縁部内面に沿って割裂いた板を当てて形持たせを行っていたと考えられる。また、底外面の脚と脚の間にも板状圧痕(木目)が残り、その明瞭な痕跡からみてこれも割裂材とみられる。

脚部には5行2列、合計10本の脚が取り付く。脚に透孔はない。脚は直径14～15cm・高さ13cmで、外面タテナデ調整・内面タテナデ調整した円筒を倒立してつくる。棺身底部となる厚さ3cmの粘土板の上に脚となる円筒を並べて配置し、円筒底部の内外に粘土を貼付けてヨコナデし粘土板と接合させた後、それをひっくり返すことで脚部の円筒が倒立する。棺身底部外周を上方へ少し拡張させ、その上に粘土を積み上げて器壁を成形した



AAM 第1次調査 2号墓出土陶棺 (1/15)

痕跡が認められる。

### 3号墓陶棺

棺蓋 全長 181.5cm・幅 61.05cm・高さ 40.05cmで、一つの蓋をヘラ切りで二つに切断する。口縁部内外面及び天井部外面の一部に黒班がつく。赤色顔料の塗布が外面の一部に認められる。

稜線突帯、口縁部突帯、横位突帯を1条貼付けて外面全体を上下2段に区画する。そして、9条の長側面縦位突帯を貼付けて長側面に左右8列の区画をつくる。短側面縦位突帯を貼付けないため、両短側面は左右2列の区画となる。

突帯の貼付け順序は、稜線突帯・縦位突帯を先に貼付けた後に口縁部突帯・横位突帯を貼付ける。そのために、稜線突帯・縦位突帯は口縁部突帯を突き抜けて口縁端部にまで及ぶ。突帯はヨコナデで成形されるが、突帯交点の一部に板押さえの圧痕がみられる。

閉塞箇所は長側面中央に一箇所認められる。高さ5cmの粘土帯を横方向に3段積み上げて蓋下半をつくった後、中央の閉塞箇所を除く左右に縦方向に粘土紐を貼り付けていき、最後に残った中央の間隙を塞いでいって最後に残った穴に小さな粘土塊を詰め込んで閉塞する。内面には形持たせの藁縄状圧痕が明瞭に残っている。

口縁部端面には葉脈圧痕が局所的にみられる。

棺身 全長 193.5cm・最大幅 63.5cm・高さ 47cmである。棺身中央に穿孔した穴から糸を通し、左右に分けて切断する。口縁部での内法寸法は全長 174cm・最大幅 47.5cm・高さ 24.5～26.5cmである。蓋受けの一部にのみ赤色顔料の塗布が認められる。

14条の縦位突帯を貼付けて両長側面に左右5列、両短側面に左右2列の区画をつくる。突帯は縦位突帯貼付け後に周底突帯を貼付けるため、縦位突帯の下端が周底突帯を越えて下へ延びるようにみえる。長側面の縦位突帯は、脚部位置に合わせて1条ずつ貼付けている。

蓋受けは体部の器壁上端を折り曲げてつくられ、その屈曲部に2次的に粘土を貼付けて口縁部を成形している。口縁部の高さは1～2cm、蓋受けは上面幅6～8cm・厚さ1.5cmである。

脚部には6行2列、合計12本の脚が取り付け。脚に透孔はない。脚は直径13～16cm・高さ17～18cmで、外面タテハケ調整・内面タテナデ調整・口縁部ヨコナデ調整した円筒を倒立してつくる。棺身底部となる厚さ2cmの粘土板の上に脚となる円筒を並べて配置し、円筒底部の内外に粘土を貼付けてヨコナデし粘土板と接合させた後、それをひっくり返すことで脚部の円筒が倒立する。

棺身底部外周を上方へ少し拡張させ、その上に粘土を積み上げて器壁を成形した痕跡が認められる。

内面の長側面隅部寄りの上端に板小口の圧痕が残っており、両長側面の口縁部内面に沿って板を当てた形持たせの痕跡と考えられる。また、片側の短側面底部外面で脚の間に板による押圧痕と平滑面がみられ、下がった底部を板で押し上げた痕跡と思われる。

### 4号墓陶棺

棺身 全長 176cm・最大幅 58cm・高さ 53cmである。棺蓋を伴わない。棺身中央に穿孔した穴から糸を通し、左右に分けて切断する。口縁部での内法寸法は全長 159cm・最大幅 44.5cm・高さ 33～34.5cmである。蓋受けの一部にのみ赤色顔料の塗布が認められる。

21条の縦位突帯を貼付けて片側の長側面に左右8列、もう片側の長側面に左右9列、両短側面に左右2列の区画をつくる。長側面の縦位突帯貼付け位置は、脚部位置に1条と脚部と脚部の間に1条を当初意図したもの、途中で突帯条数を間引いたために規則性が失われたようにみえる。

口縁部の高さは2～2.5cm、蓋受けは上面幅3.5～6.5cm・厚さ1.5～2cmで、器壁の外面調整後に蓋受けを貼付けている。

脚部には6行2列、合計12本の脚が取り付け。脚に透孔はない。脚は直径15～16cm・高さ15～16cmで、外面タテハケ調整・内面タテナデ調整した円筒を倒立してつくる。棺身底部となる厚さ3cmの粘土板の上に脚となる円筒を並べて配置し、円筒底部の内外に粘土を貼付けてヨコナデし粘土板と接合させた後、それをひっくり返すことで脚部の円筒が倒立する。

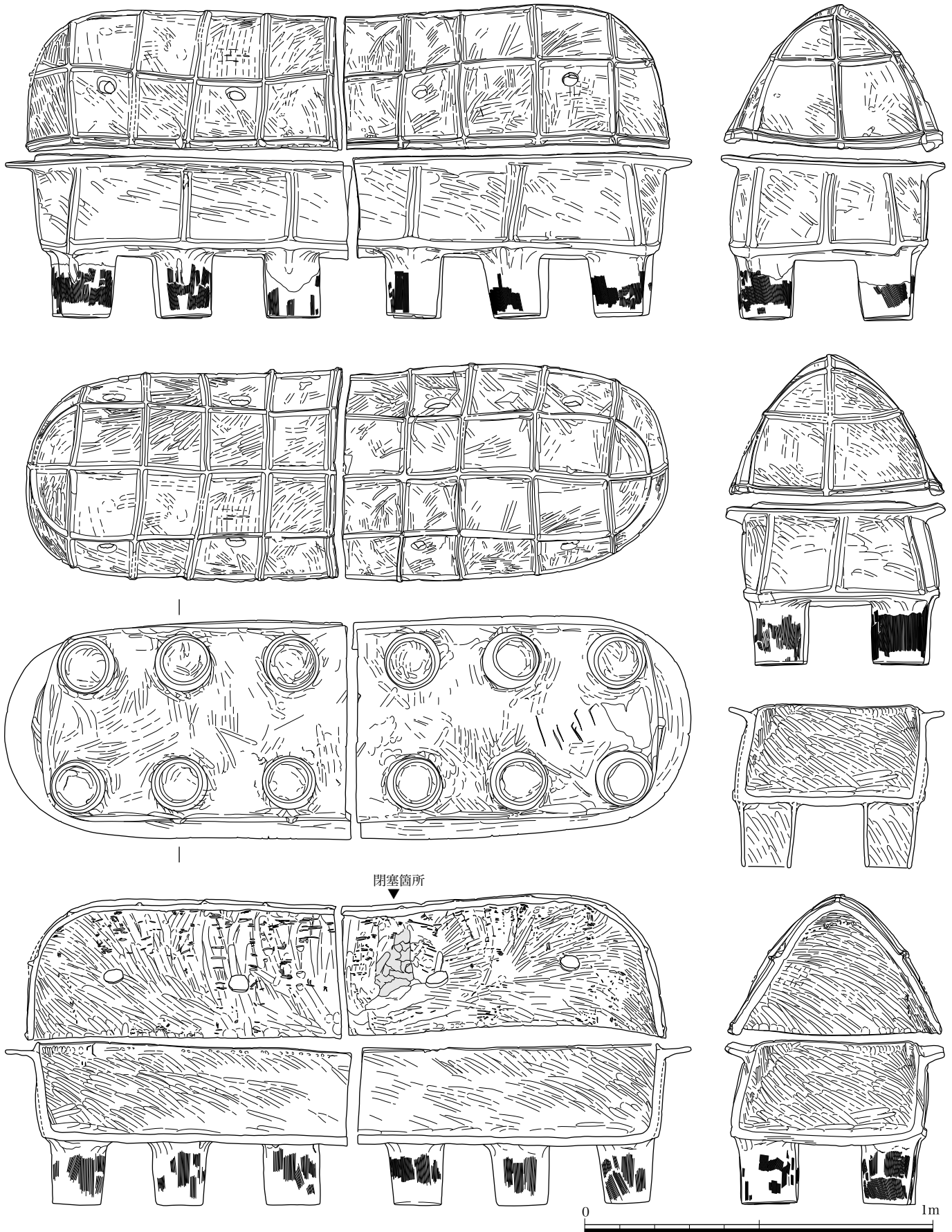
内面の長側面隅部寄りの上端に板小口の圧痕が残っており、両長側面の口縁部内面に沿って板を当てた形持たせの痕跡と考えられる。

### 陶栓

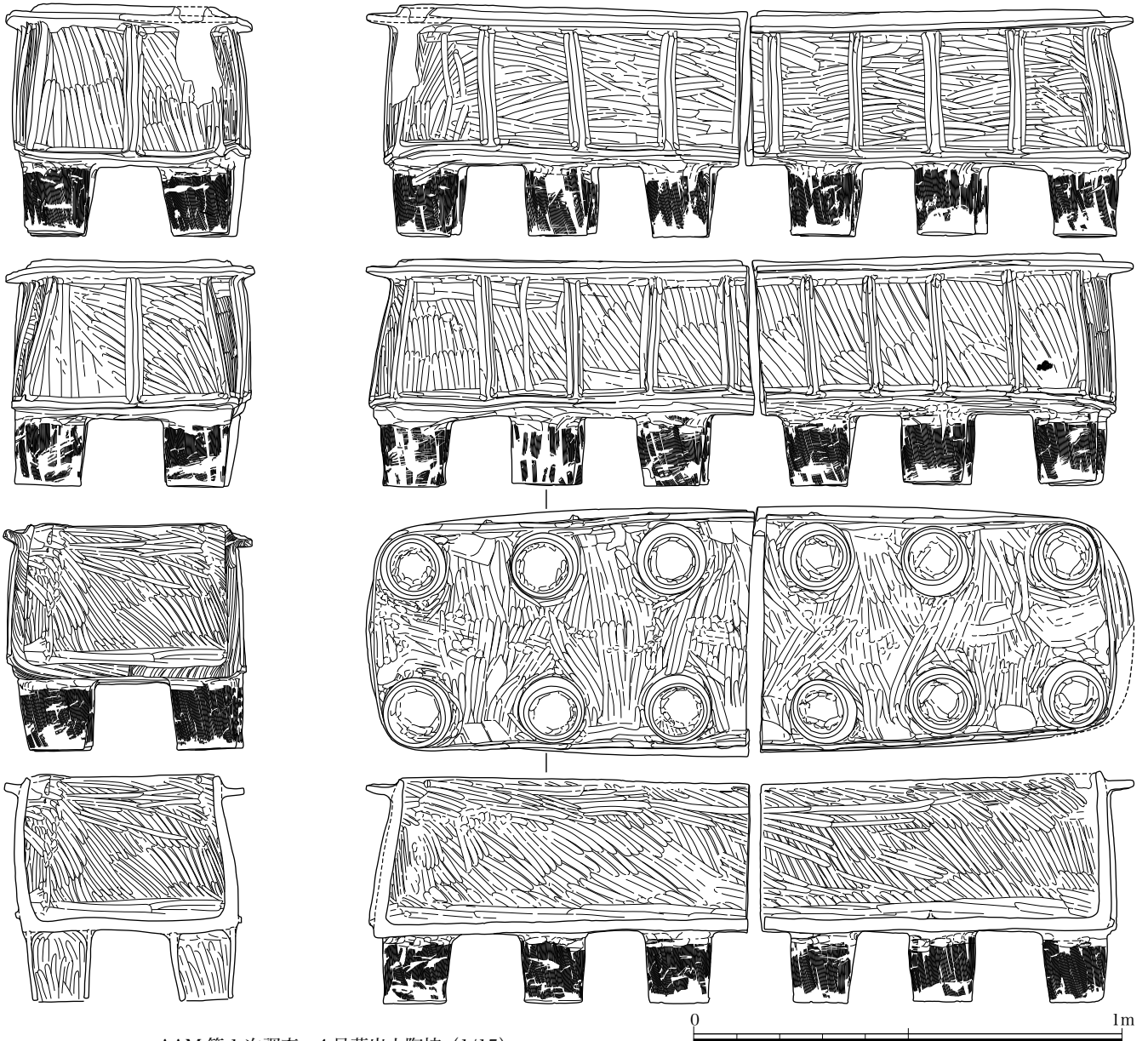
1号墓出土陶栓(1・2) キノコ形陶栓が2点出土。笠部外形はやや不整形であるが、表面はきれいな半球状に仕上げられており、型づくりの可能性が高い。軸部は断面円形につくられ、ユビナデで笠部と接合する。

3号墓出土陶栓(3～6) キノコ形陶栓が3点(3～5)、円板形陶栓(6)が1点出土。キノコ形陶栓は笠部外形がほぼ円形で、表面はきれいな半球状に仕上げられており、型づくりの可能性が高い。軸部は四方と端面をヘラケズリして仕上げるため、方柱状となる。ヘラケズリは端面→対面する2側面→残りの2側面の順であり、側面のケズリ方向は端面から笠部である。1号墓出

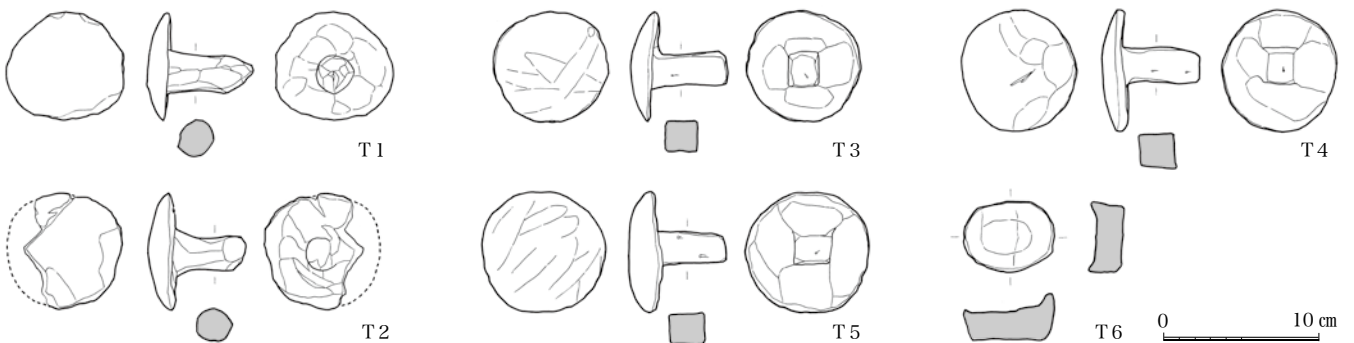




AAM 第1次調査 3号墓出土陶棺 (1/15)



AAM 第1次調査 4号墓出土陶棺 (1/15)



AAM 第1次調査 出土陶栓 (1/5)

AAM 第1次調査 陶栓一覧表

挿図番号	1 (1号墓)	2 (1号墓)	3 (3号墓)	4 (3号墓)	5 (3号墓)	6 (3号墓)
全長	7.0	6.45×7.6	6.4	6.4	6.5	6.0 (長軸) ×4.6 (短軸) 2.0×3.1 (厚さ)
笠部径	7.0×7.7	7.6	7.1×7.55	7.4×7.8	7.8×8.1	
軸部長	5.6	4.6	5.0	5.0	4.8	
軸部径 (幅)	2.4	2.4	2.0×2.1	2.3	2.0×2.3	

土品（1・2）よりも丁寧につくられている。4は棺蓋透孔に装着した状態で出土し、実際の使用方法が確認された。円板形陶栓は平面楕円形で、上面は周囲をヨコナデして立ち上げ全体を凹面状に仕上げるのに対して、下面は平らである。側面にはケズリ痕跡がみられる。棺蓋透孔の中にこの陶栓と平面形状が似る透孔があり、透孔切抜き円板を陶栓に利用したものである可能性が高い。

**金属製品**

耳環（1～5） 1は銅芯鍍金の耳輪と考えられ、接面に板のたたみ込みが認められない。鍍金は内側面に残るだけで、表面の剥落が著しい。外径1.8～1.9cm・内径1.1～1.15cm・厚さ0.4～0.45cmで断面はやや縦長の楕円形。2は緑錆に覆われた表面の一部が剥落し、環体の一部を欠失する。鍍金（鍍銀）の有無を確認できず、現状では銅環にみえる。外径2.4cm・内径1.7～1.8cm・厚さ0.3～0.35cmで断面は円形。3は鍍金がとれて銀板が見える部分があり、接面に板のたたみ込みを確認できるので、銅芯銀板巻鍍金の耳輪と考えられる。外径2.5cm・内径1.45～1.5cm・厚さ0.5～0.6cmで、断面

は縦長の楕円形。

4・5は銅芯銀板巻の耳輪である。接面に板のたたみ込みが認められ、銀板の一部を欠損する。4は外径2.95cm・内径1.45～1.55cm・厚さ0.7～0.8cmで断面はやや縦長の楕円形。5は外径2.9～3.1cm・内径1.45～1.6cm・厚さ0.7cmで断面はほぼ円形。

2は2号墓陶棺内、1は3号墓東棺、4・5は3号墓北棺、3は4号墓陶棺内から出土した。

鉄刀子（6・7） 6は残存長5.6cmの鉄刀子で、刃部の大部分を欠失する。茎口に鉄製錷の一部が残り、茎に木質が付着する。茎部の長さ4.2cm・幅0.25～1.0cm・厚さ0.2～0.55cm。片関で、関を境に刃部の厚さ（0.4cm）が薄くなる。7は完形の鉄刀子で、全長19.35cm。刃部は長さ12.5cm・最大幅1.8cmで両関につくる。茎部は長さ6.8cm・最大幅1.0cmで茎尻が尖り剣形となる。刃部と茎部の厚さは関を境に変化しない。

6は3号墓陶棺内、7は3号墓埋土上層から出土した。

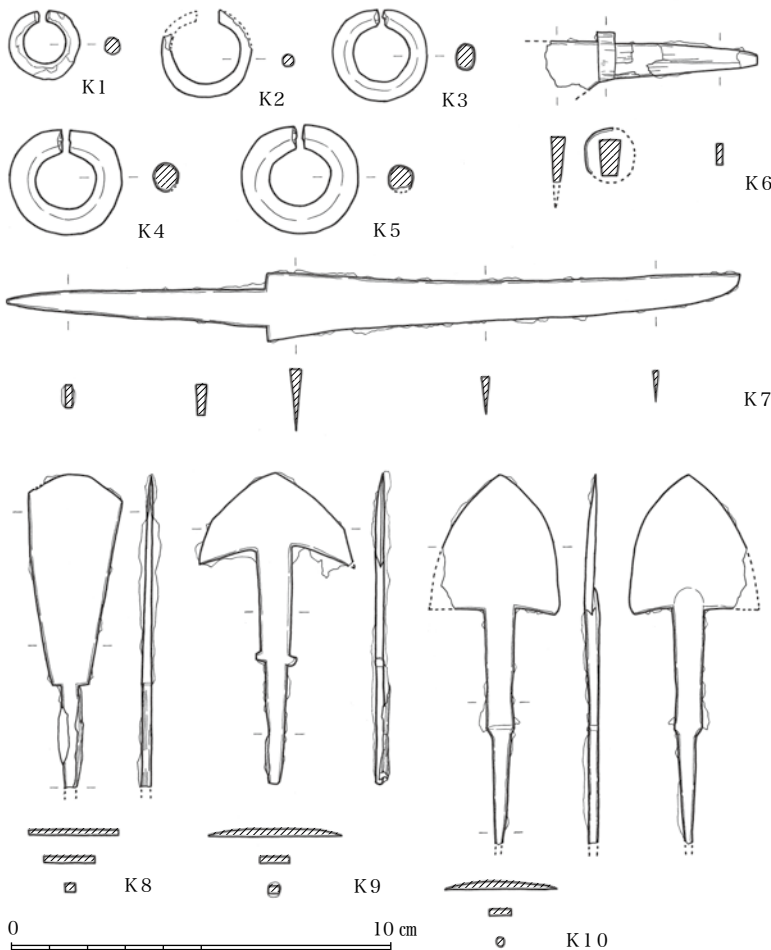
鉄鏃（8～10） 8は残存長8.2cmで、茎部先端を欠失する。鏃身部は長さ5.55cm・最大幅2.5cm・最大厚0.25cmで、圭頭式に似るが先端が尖らないため、方頭式の範疇で理解しておきたい。茎部に木質が残る。9は全長8.2cmの飛燕式である。鏃身部は長さ2.5cm・最大幅4.0cmで、左右で一度屈曲しつつ大きく開く。頸部は長さ3.1cm・幅0.8～0.9cmで、棘状関がある。鏃身部から茎部までの厚さは0.2cmと一定である。茎部に木質が残る。10は残存長9.7cmの三角形式で、茎部先端を欠失する。鏃身部は長さ3.7cm・最大幅3.4cm前後（復原）で、頸部と鍛接すると思われる。頸部は長さ3.2cmで、斜め関となる。鏃身部から茎部までの厚さは、鍛接箇所を除いて概ね0.25cmである。いずれも3号墓北棺に伴うと考えられる。

（鐘方正樹）

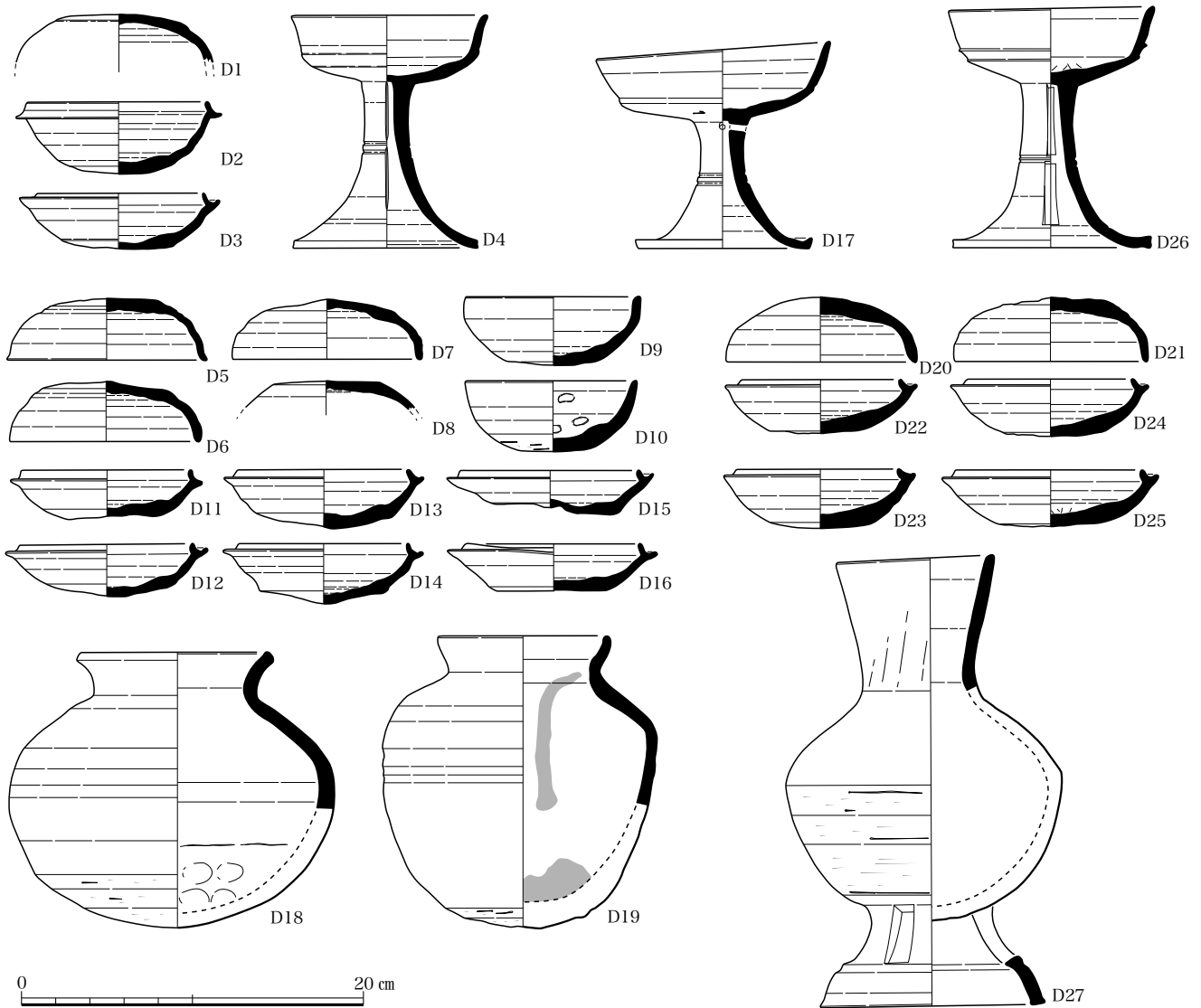
**須恵器**

1号墓出土須恵器（1～3） 杯蓋（1）と杯身（2・3）がある。杯身は2が口径10.5cm、3が9.7cmで、底部付近は2がロクロケズリ、3が未調整である。

2号墓出土須恵器（4） 高杯（4）がある。口径11.4cm、器高13.6cmで杯部外面には2条の稜線がある。脚部には中央付近に2条の沈線があり、その上下に透孔が退化した切れ込みが施される。



AAM 第1次調査 出土金属製品 (1/ 2)



AAM 第1次調査 横穴墓出土須恵器 (1/4)

3号墓出土須恵器(5～19) 杯蓋(5～8)、杯身(9～16)、高杯(17)、短頸壺(18・19)がある。杯蓋の口径は5が11.6cm、6・7が11.0cmである。8は身の可能性もある。杯身は、9・10が蓋の可能性もあるが法量からみて杯Gと考えた。口径は9が10.1cm、10が10.0cmである。杯Hは、口径が9.8～10.5cmと比較的まとまる。いずれも底部外面は未調整であり、口縁端部の返りも短い。16は、重ね焼きの痕跡があり、内面には方形の付着物の痕跡がある。高杯(17)は、口径13.6cm、器高12.1cmで脚部中央に2条の沈線がある。脚上部には直径約0.5cmの円形透孔が4方向に穿たれる。脚端部は比較的立ち上がる形状を呈する。短頸壺(18・19)は、18が口径10.9cm、器高16.1cmで底部外面をロクロケズリする。頸部の屈曲は緩やかで、口縁端部はわずかに立ち上がる。19は口径9.8cm、器高17.7cmで底部外面をロクロケズリする。口縁部はや

や内湾し、内面には自然釉が付着する。

4号墓出土須恵器(20～27) 杯蓋(20・21)、杯身(22～25)、高杯(26)、台付壺(27)がある。杯蓋の口径は20が11.0cm、21が11.2cmである。杯身の口径は22が9.3cm、23が9.5cm、24が9.7cm、25が10.9cmで25のみやや大きいがおの他はまとまりがある。底部外面はいずれも未調整で、見込みは不定ナデが施される。高杯(26)は口径11.9cm、器高14.1cmで杯部に2条の稜線がある。脚部中央に2条の沈線が施され、その上下に長方形透孔が穿たれる。台付壺(27)は口径9.6cm、器高26.4cmで、壺部下半をロクロケズリする。その他はロクロナデと思われるが単位が不明瞭で、むしろ1次調整のナデがとくに頸部付近で観察できる。脚部には長方形透孔が3方向に穿たれる。(村瀬陸)

**奈良時代の遺物**

S X 01 出土土器 (1、2) 土師器甕 A (2) は 口縁

部が外反し、体部は球形を呈する所謂「都城型甕」である。口縁端部は内側に巻き込む形で明瞭に肥厚する。法量は、口径が約 30.8cm、器高が約 27.6cmである。

体部外面は、肩部上半から頸部にかけての縦方向のハケメ調整後、下半部のハケメ調整を施す。肩部のハケメ調整は、体部のものよりも幅広く深い条痕であり、異なる工具を使用したと考えられる。このハケ調整の後、頸部にヨコナデが施される。

口縁部内面には横方向のハケメ調整がある。体部内面は、楕円形の圧痕が残り、一部分にハケメ調整を施す。

土師器高杯（1）は脚部を打ち欠き、杯部を甕の蓋として転用したものである。口径約 30.0cm、残存高 2.8cmである。杯部はほぼ水平方向にのび端部が少し上方に持ち上がっており、口縁端部は肥厚する。

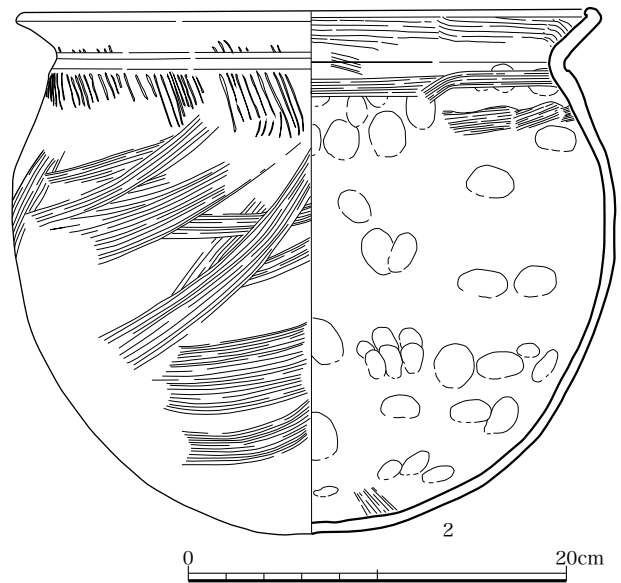
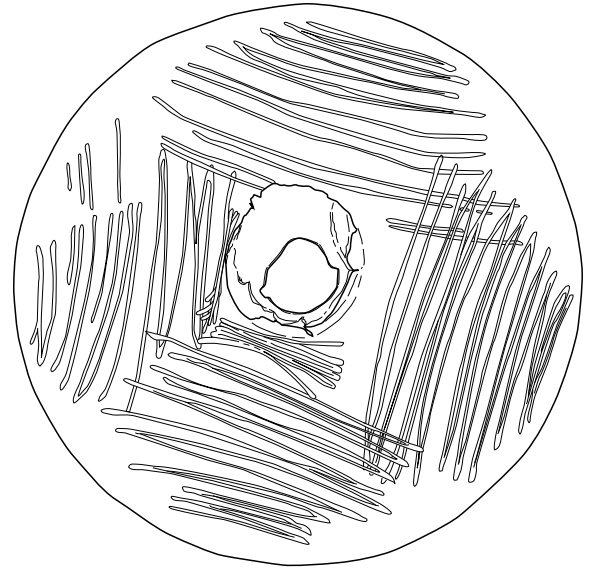
杯部外面は、全面的にケズリ調整され、その後4分割のヘラミガキ調整を施す。杯部内面に暗文は施されていない。（木村日向子）

#### 中近世の遺物

SX06 出土土器（1～17） SX06 の木櫃内からは、土師器小壺 3 点・小形鉢 6 点、瓦質土器風炉 1 点・羽釜 2 点、青磁碗底部 1 点、犬形土製品 2 点が、蓋石上の堆積土から、土師器皿 1 点が出土した。この内瓦質土器羽釜 1 点は土壤中で劣化して細片化し、取り上げることができなかつたため残りを報告する。各遺物の出土位置は、瓦質土器羽釜（14）が風炉（15）の上、土師器小壺（7）と犬形土製品（17）が風炉内から出土する。土師器三足付鉢（12）内から土師器小壺（8）が、その上に土師器小壺（9）を納めた土師器小鉢土師器小鉢（6）が重なる。他の出土位置は遺構図を参照。

1～6 は土師器小鉢で、口径 5.0～5.8cm、器高 2.4～2.7cm で、いずれも黄白色の精良な胎土である。手づくね成形で、口縁部をヨコナデ調整、内面をナデ調整、外面は未調整である。7～9 は土師器小壺で、所謂「つぼつぼ」である。口径 1.2～1.3cm、器高 2.1～2.5cm で、口縁端部は小さな玉縁状とする。いずれも胎土の特徴は小鉢と同様である。土師器皿（10）は平坦な底部と直線的に斜め上方に立ち上がる口縁部で、黄灰色の胎土である。中島・佐藤の土師器皿分類にない土師器皿である。土師器三足付鉢は、いずれも黄白色の精良な胎土で、手づくね成形で作られた鉢部に三足を貼り付け、口縁部外面に沈線を廻らす。12 は三足をすべて欠損する。

瓦質土器羽釜（14）は、鉄釜を模倣したもので、肩部に鑿付を模した粘土の小塊を一对貼り付ける。鑿以下はヘラケズリ調整である。瓦質土器風炉（15）は、底

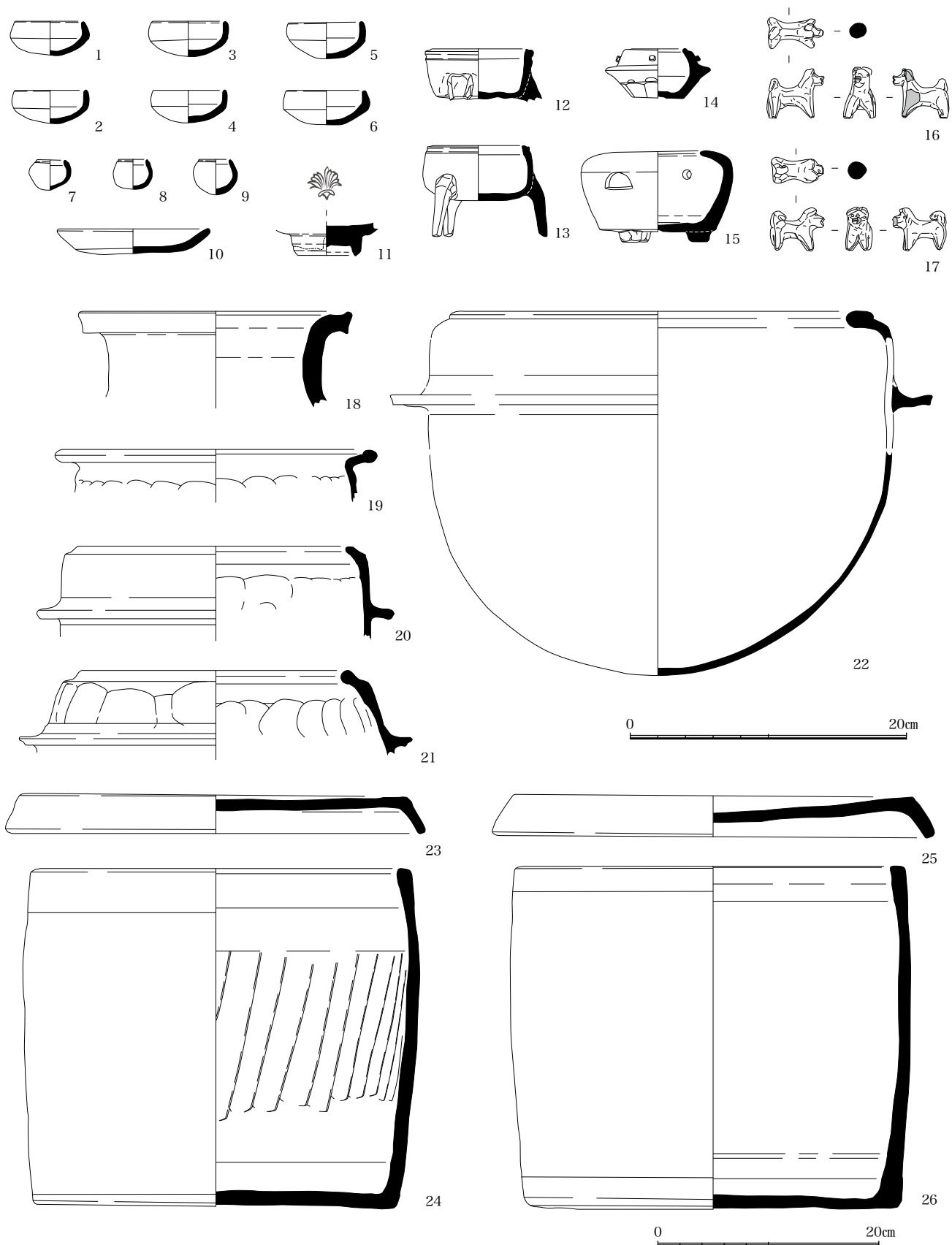


AAM 第1次調査 SX01 出土土器 (1/4)

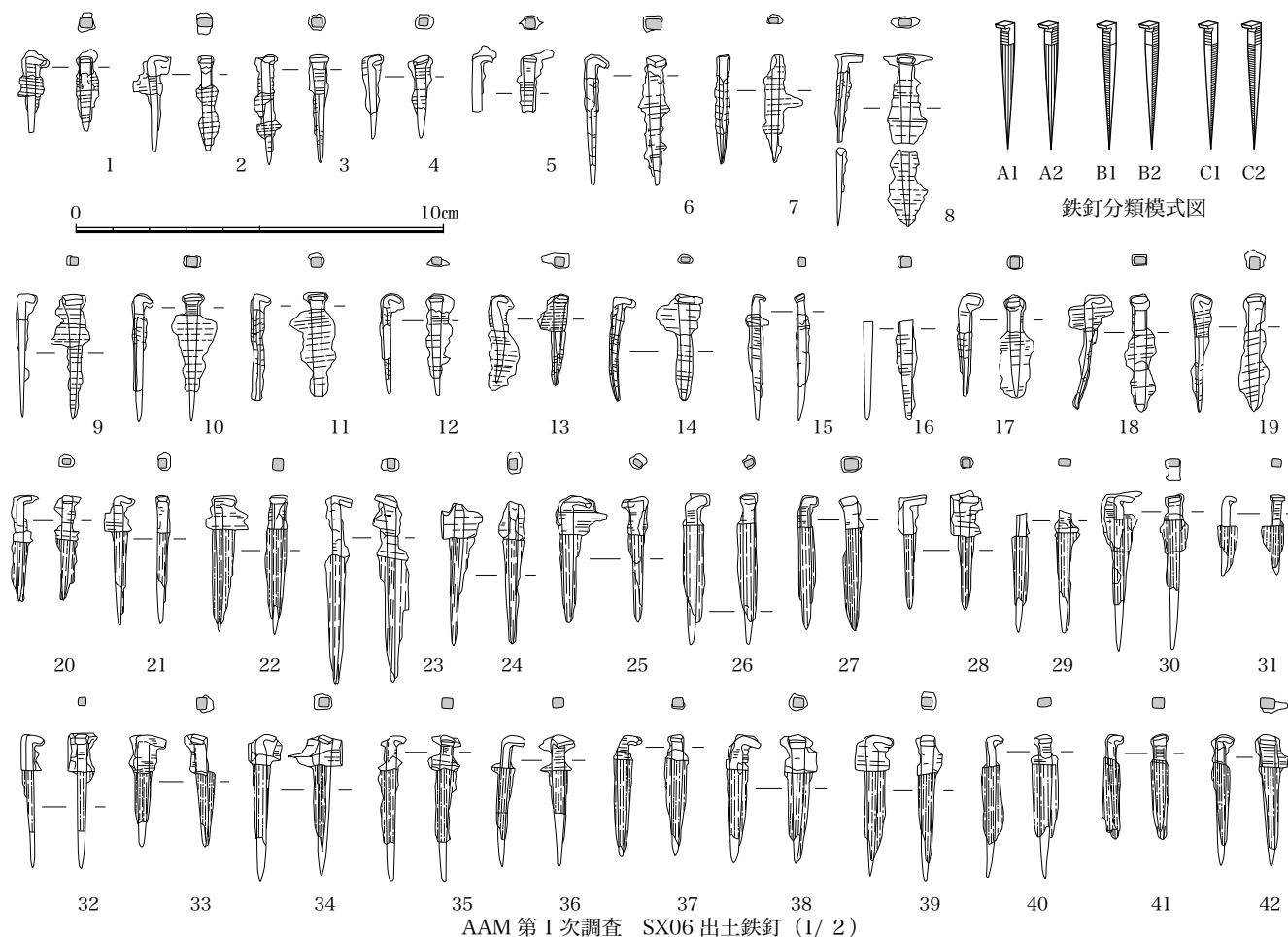
部に低い円盤状の三足を貼り付け、側面には半円形と円形の透かし孔が向かい合わせに開口する。外面は、胴部に縦方向、肩部から口縁部に横方向の緻密なヘラミガキ調整を施す。

犬形土製品 2 点はいずれも土師質焼成であるが、作風がやや異なる。16 はやや細身の胴体と四肢で、尾は後ろ側に折り曲げる。17 は短小な体軀で、尾は前側に巻き込んでおり、大坂城跡で多数出土する型式である。犬形土製品の墓からの出土は珍しい。

約 3 m 東側で見つかった「童女」銘の舟形五輪



AAM 第1次調査 中近世墓他出土土器 (1-22 : 1/4 23-26 : 1/5 16のトーン部分は剥離面を示す)



塔が当墓に伴うものとすれば、当墓の年代は天正17年(1589年)頃となる。犬形土製品は16世紀末～17世紀初めに出土例が多く、年代的に矛盾はない。

その他の出土土器(18～26)土師器羽釜(22)はSX04の蔵骨器で、口縁部・鏝・体部とも同一固体であるが接合せず図上で復元した。口縁部を内側に屈曲させる大和H型で、復元口径約26.8cmと大形である。

土師器羽釜(19～21)は、中世墓周辺の表土・遺物包含層から出土で、おそらく蔵骨器として利用されていたものと考えられる。20・21は大和H型、19は大和B型または鍋である。土師器羽釜の型式から、15世紀後半～16世紀初頭のものと考えられる。

瓦質土器深鉢・蓋はSX02(23・24)とSX05(25・26)の蔵骨器である。深鉢(24)の体部内面には板状工具による縦方向のナデ調整が残る。

東海産陶器壺(18)は表土層出土で、13世紀頃の型式である。他の土器の年代と大きくかけ離れており、伝製品と考えられる。これも蔵骨器として利用されていたものと想定される。

SX06出土鉄製品(1～42) SX06からは、木櫃に使用したと考えられる鉄釘が74本出土した。図示した

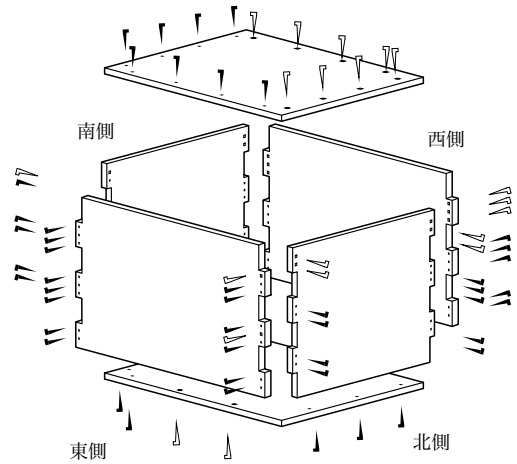
42本の鉄釘の出土位置は、木櫃の上面付近(1～8)、底面付近(9～19)、北東隅部(20～29)、南東隅部(30～42)である。9～12は木櫃南側底面で釘先を上に向けて出土し、底板で使用されたことが明らかである。各四隅部分出土の鉄釘は、2または3本毎に釘先の方角を90°変えて出土し、木櫃の四隅の組み方が復元できる。

鉄釘は断面方形または長方形で、頭部は叩き延ばして一方に折り曲げる。長さは1.6～4.8cm、幅・厚さは約3mmある。全体に木質の残存状況がよく、残存する木目方向から大きくA～Cの3類型に分けられ、さらに1・2の2類型に細分される。A型式は、頭部から体部にかけて横方向に木質が付着し、それ以下から先端にかけては縦方向に木質が付着するもの。B型式は、頭部から先端に至るまで横方向に木質が付着し、明瞭な境がないもの。C型式も、頭部から先端に至るまで横方向に木質が付着するが、途中で木目方向が90°明瞭に変化するものである。また頭部の折り曲げ方向に対して、直交する木目(1)と平行する木目(2)とに細分した。

A型式は木櫃の四隅から、B型式は東側の上面付近と南北側の底面付近で、C型式は南側の上面付近と東西底面付近から出土している。各型式の鉄釘の出土位置から

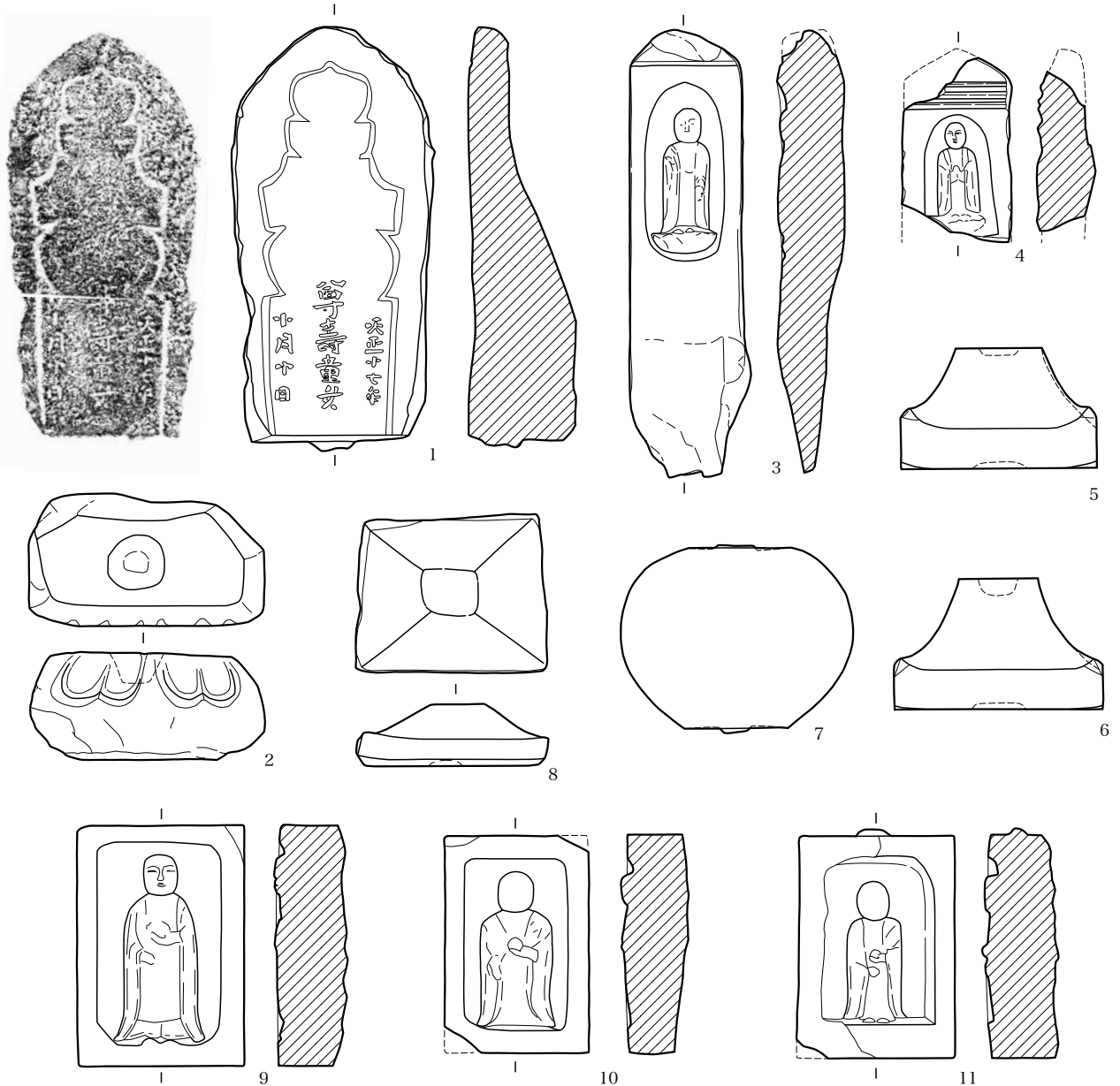
次のような木櫃が復原できる。

木櫃の側板は板材を横方向に使い、四隅を3枚組継ぎとする。各柄は2～3本の鉄釘で固定し、最も残りの良い南東隅部で13本の鉄釘が確認される。底板と蓋板は1枚の板材で、底と蓋で木目方向を違える。側板への接合はいも付けと考えられ、南側の底と蓋では鉄釘は4本ずつ確認でき、3ないしは4本の鉄釘を用いていたと推定できる。側板・底板・蓋板の厚さは、木質の残存状況からいずれも約1.0cmと復原できる。鉄釘の位置を復原すると、各隅に14本（北西隅は15本）、底板の各辺に3本（南側のみ4本）、蓋板の各辺に4本の合計82本となる。未発見の8本の釘は木櫃の北側上部に多く、蓋石陥没後に流出したものと考えられる。（中島和彦）



AAM 第1次調査 SX06 木櫃復元図

(図中の白抜き釘は未発見のもの)



AAM 第1次調査 出土石造物 (1/10)





石造物（1～11） 1はSX07から出土した舟形五輪塔で、五輪塔地輪部部分に「尊壽童女 天正十七年（1589）十月十日」と刻む。安山岩製で、下部には出柄を有する。本塔は、昭和59年に奈良市が実施した石造物調査時に秋篠墓地（西迎寺墓地）の塔として調査されており<sup>1)</sup>、この時には、2の台座に据えられた状態で写真が撮影されている。「童女」銘を有することから本塔は子供の墓と考えられる。奈良市域における「童子」・「童女」といった子供の戒名をもつ石造物は、『奈良市石造遺物調査報告書』によれば、天文21年（1552）銘をもつ元興寺極楽坊の地藏菩薩像を最古とし、16世紀後半の年号を有するものを他に16例確認できる。本五輪塔はその初現期の一例と位置付けられる<sup>2)</sup>。2は舟形五輪塔の台座で、舟形五輪塔の近隣から出土した。花崗岩製。平面不整隅丸方形で、正面には複弁の蓮弁を二葉薄肉彫するが、側面および背面は蓮弁を表さない。上部中央には径8.4cm、深さ4.6cmの柄孔がある。3はSK08から直立した状態で出土した圭頭板碑である。花崗岩製。頂部欠損。正面上部を舟形に彫り窪め、その内部に蓮座上に立つ来迎印の阿弥陀如来像を表しているものとみられる。板碑下端部は粗く形状を整え仕上げしており、土中に埋没させることを前提に作られていることが見て取れる。4はSK14出土の圭頭板碑で、頂部および下部は欠損する。上部には山形と二条線を表し、正面は舟形に彫り窪めて、蓮座上に立つ合掌手の地藏像を半肉彫する。花崗岩製。5・6は五輪塔の火輪。5は包含層出土、6はSX06出土で、木櫃を囲う石材として転用されていた。いずれも軒は水平で端部のみ上方に反る。7は包含層出土の五輪塔の水輪である。最大径はやや上位にある。8は包含層出土の箱仏の笠である。花崗岩製。平面はやや歪み、軒は薄く軒反りも緩やかである。9～11は箱仏の塔身である。9はSX10、10はSK14、11は包含層から出土した。いずれも左手には宝珠をもち、右手は左手より下に位置する。錫杖を持つ手を表しているものとみられるが、錫杖自体は省略されている。11は上部に柄があるが、9・10は平坦におさめる。（永野智子）

## V 調査所見

調査地は奈良時代の遺物散布地であったが、調査の結果、飛鳥時代の横穴墓、奈良時代の古墓、室町～江戸時代の古墓が明らかになり、調査地内に遺跡が存在することが明らかになった。調査地の字名から、秋篠阿弥陀谷遺跡・秋篠阿弥陀谷横穴墓群と命名した。

横穴墓群は、調査地丘陵の南斜面にあり、調査地東側にさらに続くと考えられる。確認した横穴墓すべてに土

師質亀甲形陶棺が埋葬されており、出土遺物から7世紀前半頃に埋葬されたと考えられる。その中でも、3号墓は追葬の痕跡が確認できたことや出土した陶棺の中で最も大型であることから若干古く、1号墓についても出土遺物から若干古い様相を示し7世紀前半の早い段階に埋葬されたと推察される。1・3・4号墓は、出土陶棺の脚部数が6行2列（12脚）であるのに、2号墓出土陶棺は5行2列（10脚）で新しい様相を示す。そのため、2号墓は今回確認した中で、最も新しいと考えられる。2・4号墓は1・3号墓に後続すると考えられ、7世紀前半頃でも少し遅い頃に埋葬されたと推察できる。また、3号墓で棺蓋の透孔に陶栓が装着された状態で出土し、陶栓の用途が明確化したことは大きな成果である。

調査地周辺では、敷島町2丁目の宅地造成工事に際して、土師質亀甲形陶棺が発見されていたが、その詳細な出土場所については明らかではなかった<sup>3)</sup>。今回の調査で新たな横穴墓群が発見されたことにより、調査地の丘陵南斜面にも横穴墓群が営まれていたことが判明した。

今回の調査事例は、調査地南側の丘陵で発見されている赤田横穴墓群と共に、陶棺を埋葬する横穴墓群として強い地域的特徴が指摘できる。これらの横穴墓群の造墓主体としては、奈良時代以前に葬送儀礼を司り、平安時代初頭に秋篠氏や菅原氏に改姓した土師氏が想定され、奈良市北西部の古墳時代終末期から飛鳥時代の墓制を考える上で貴重な調査成果となった。

奈良時代の古墓は、平城京周辺の丘陵で散発的に発見されており、今回の発見で新たな類例を加えることとなった。また、調査地から西迎寺墓地にかけて奈良時代の瓦が多数散布しており、寺院の存在を推定できるが、遺構等は確認出来なかった。

調査地東側の西迎寺墓地内には16世紀以降の石造物が存在することが従来から知られており、今回の中世墓の調査で当時の墓制の一端を知ることができた。また、今回検出した中世墓で最も年代が古いものが、15世紀後半の土師器羽釜の蔵骨器で、当墓地が中世後半から続く稀有な墓地であることが判明した。（吉田朋史）

註1) 奈良市石造遺物調査会1989『奈良市石造遺物調査報告書 奈良市教育委員会。平城地区-65。報告書では「天正十一年」銘と報告されている。

註2) 関口慶久2004「戒名・法名考」『国立歴史民俗博物館研究報告』111によれば、子供の戒名を刻む墓標は、天理市中山念仏寺墓地や新庄町平岡極楽寺墓地、京都市本園寺墓地では1620年代以降増加していくと報告。奈良市域ではその出現が半世紀ほど早く、16世紀後半には出現している。

註3) 森下浩行1993「土師質亀甲形陶棺小考一北大和・南山城を中心に」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 1993年度』

### 13. 史跡大安寺旧境内の調査

奈良市教育委員会では、令和元年度に史跡大安寺旧境内において3件の発掘調査を実施した。

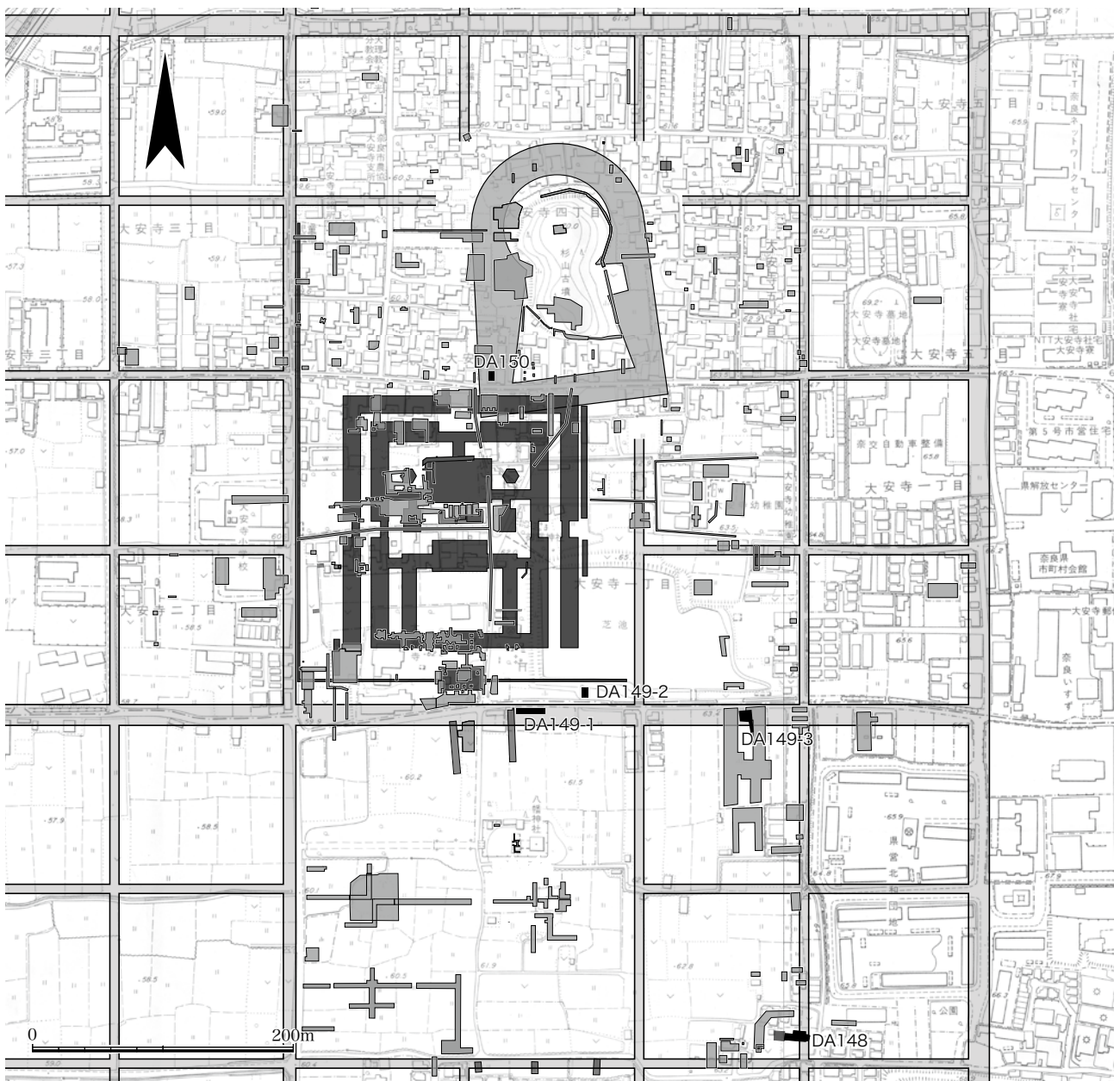
DA第149次調査は、六条大路を確認する範囲確認調査で、DA第150次調査は住宅建築に伴い、北東中房の北側の様相の確認、及び杉山古墳の周濠の堆積状況を確認

することを目的として実施した。

DA第148次調査は、平成31年度に実施したDA第147次調査の続きにあたるため、平成30年度の調査年報にまとめて報告した。

史跡大安寺旧境内 発掘調査一覧表（本書掲載分）

調査回数	事業内容	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
DA第149次調査	範囲確認調査	東九条町1295-1他	2019.7.22～9.18	250㎡	村瀬 陸
DA第150次調査	個人住宅建築	大安寺四丁目1127番地の一部	2020.1.30～2.21	44㎡	秋山成人



史跡大安寺旧境内 発掘調査位置図 (1/5,000)

# (1) 六条大路の調査 第149次

## I はじめに

調査地は、史跡大安寺旧境内の主要伽藍と塔院との間に想定される六条大路にあたる。調査地の西約50mで実施したDA第139次調査では、六条大路の南側溝に推定される東西溝を検出した。この東側で実施したDA第146次調査では、推定南側溝の南側において南大門の中軸線上に位置する塔院北門跡を検出した。DA第143次調査では推定南側溝の北15mの位置で北側溝の可能性のある東西溝を検出した。

本調査では、六条大路に関する遺構の確認を目的とし、西から1区(100㎡)、2区(25㎡)、3区(125㎡)の順で3ヶ所の発掘区を設定して調査を実施した。

## II 基本層序

1区 上から表土(厚さ0.1m)、造成土(0.3m)、黒褐色耕土(0.2m)、灰色床土(0.1m)と続き黄褐色砂礫地山

となる。

2区 上から表土(0.10m)、造成土(0.80m)、灰褐色土(0.15m)、暗灰褐色土(0.15m)と続き青灰色砂礫地山となる。

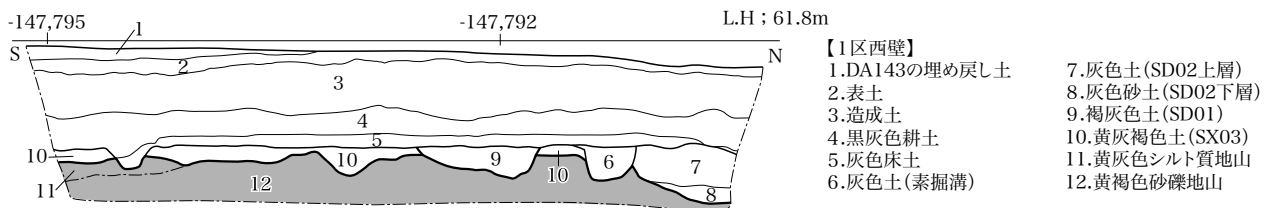
3区 上から造成土(1.0m)、礫混じりの暗灰色土(0.2m)、暗灰色耕土(0.1m)、灰色土(0.1m)と続き黄褐色土地山となる。

遺構検出面の標高は、1区で61.1m、2区で62.3m、3区で62.6mであり、西に向かって下っている。

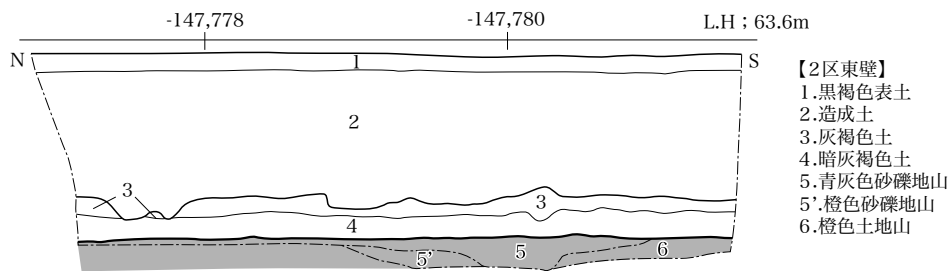
## III 検出遺構

2区では遺構がなく、1区では奈良・平安時代の溝1条、柱列2条、江戸時代の溝1条。3区では平安時代の溝1条と時期不明の柱列1条を主に検出した。

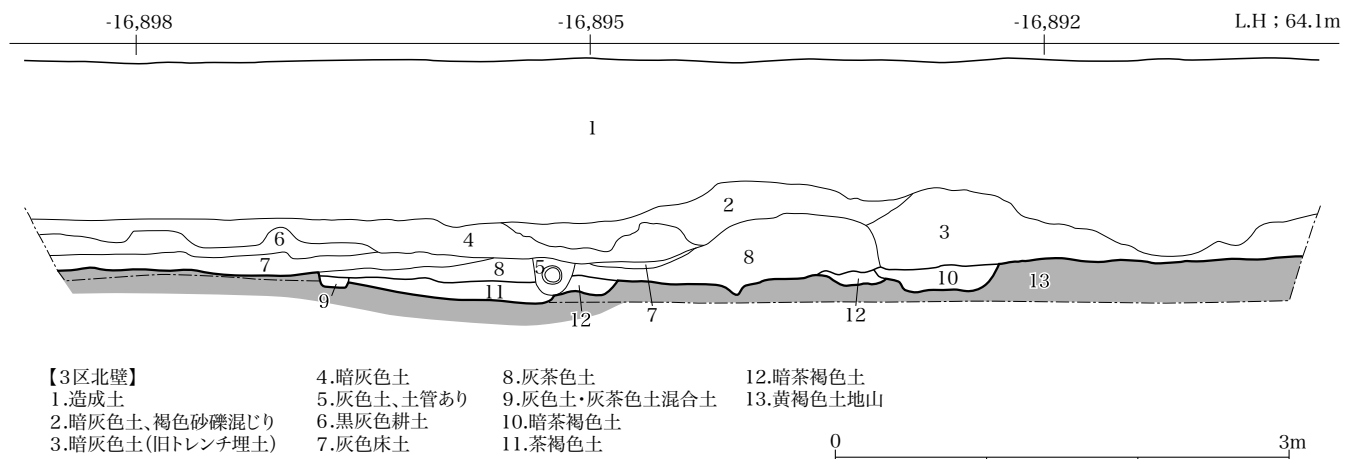
1区 DA第143次発掘区の東隣接地である。その際検出した推定北側溝の延長上で幅1.0m、検出長5.7m、



DA第149次調査 1区西壁土層断面図 (1/50)



DA第149次調査 2区東壁土層断面図 (1/50)



DA第149次調査 3区北壁土層断面図 (1/50)

深さ 0.2m の東西溝 SD01 を検出した。埋土から瓦類および 8 世紀末頃の土器類が出土した。発掘区途中で途切れて東へ続かない。SD01 の南側には整地土 SX03 が広がり、SD01 はこの整地後に掘削されている。SX03 からは 8 世紀の土器小片が少量出土した。SD01 の北側では、幅 0.7m 以上、検出長 20m、深さ 0.4m の東西溝 SD02 を検出した。下層には 16 世紀以降の遺物を含み、上層には現代の遺物が含まれる。ほかに、掘立柱列 SA04・05 を検出した。SA04 は柱間 0.9m で重複関係から SX03 より新しく 8 世紀以降である。SD01 が途切れる位置で直交しており、相互に関係する可能性がある。SA05 は柱間 1.2m で、時期や機能等不明である。

2 区 南大門から築地塀が直線的にのびる場合、その推定地にあたるが、遺構がなく遺物もほとんど出土しなかった。築地塀があれば瓦類の出土が見込まれることもふまえて、付近に築地塀は想定し難い。

3 区 奈良県が 1977・1978 年に実施した発掘区の間にあたり、その際にも確認している東西溝 SD06 を検出した。DA 第 143 次調査の成果から、推定道路芯付近に位置する。幅 2.4m、検出長 8m、深さ 0.5m で 2 段掘りになっている。8 世紀末～9 世紀の土器類が出土した。

奈良県の調査成果を合わせると、今回の発掘区までは概ね東西方向にまっすぐのびるが、以東では南側へ屈曲する。このほか SD06 に並行する柱列 SA07 (柱間 1.8m) を検出した。

#### IV 出土遺物

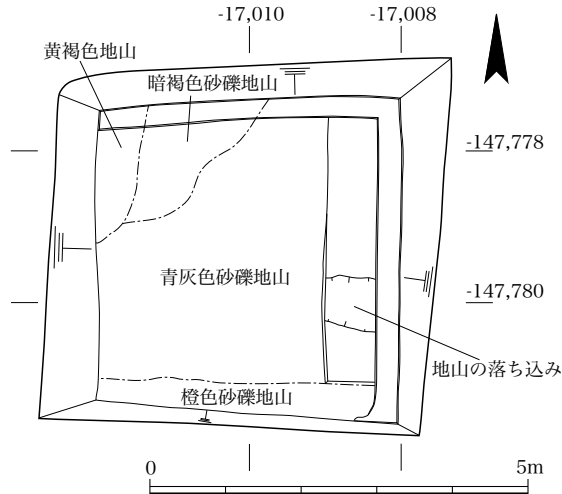
遺物整理箱で 23 箱分がある。内訳は、8 世紀の土師器・須恵器・土錘・軒丸瓦 2 点 (6138Ca 型式、型式不明)・軒平瓦 2 点 (6712A 型式、6717A 型式)・丸瓦・平瓦、9 世紀の土師器・須恵器・黒色土器 A 類、12 世紀の白磁・青磁、14 世紀の軒平瓦 1 点 (248A)、16 世紀以降の備前産陶器である。

土器類はいずれも小片であり、軒瓦も型式がかろうじて判別できる程度のもので点数も少ない。

#### V 調査所見

本調査では、六条大路の確認を目的に実施したが、それに関する成果は以下の通りである。

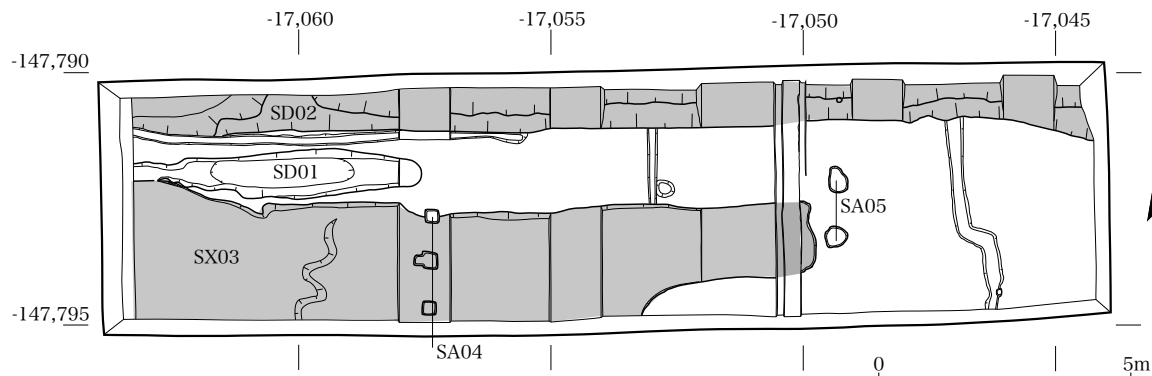
六条大路は、調査地の西約 1.2km で実施された国第 252 次調査 (八条 5 丁目) で南北両側溝が検出されており、DA 第 143 次調査で検出した南北の側溝に推定する東西溝はほぼこの延長上にあたる。さらに、DA 第 143 次調査で検出した北側の東西溝を北側溝と仮定すると、



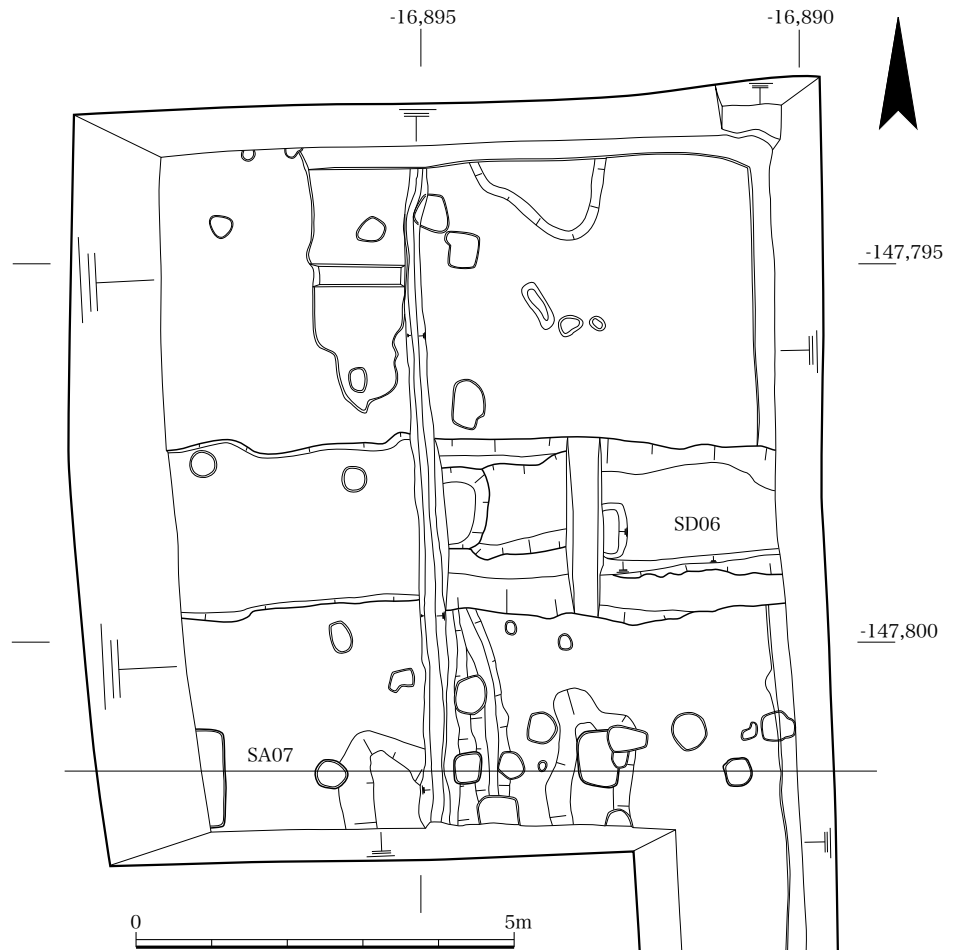
DA 第 149 次調査 2 区平面図 (1/100)



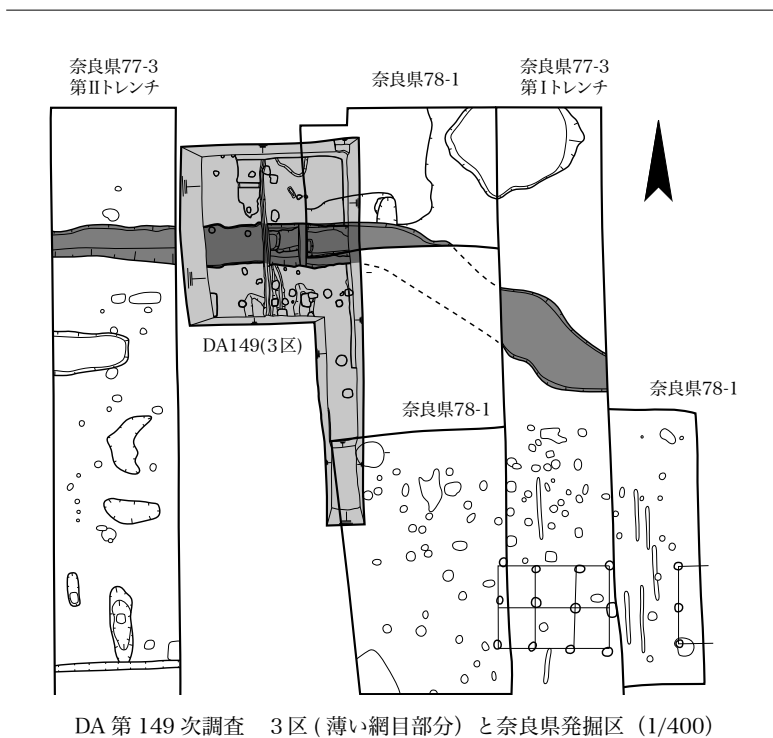
DA 第 149 次調査 2 区全景 (南西から)



DA 第 149 次調査 1 区平面図 (1/150)



DA 第149次調査 3区平面図 (1/100)



DA 第149次調査 3区(薄い網目部分)と奈良県発掘区 (1/400)

道路心から東西両塔中軸までの距離と、東西両塔間距離がともに 380 大尺で一致する。よって、DA 第 143 次調査で確認した 2 条の東西溝をそれぞれ六条大路の側溝と考えることには妥当性がある。

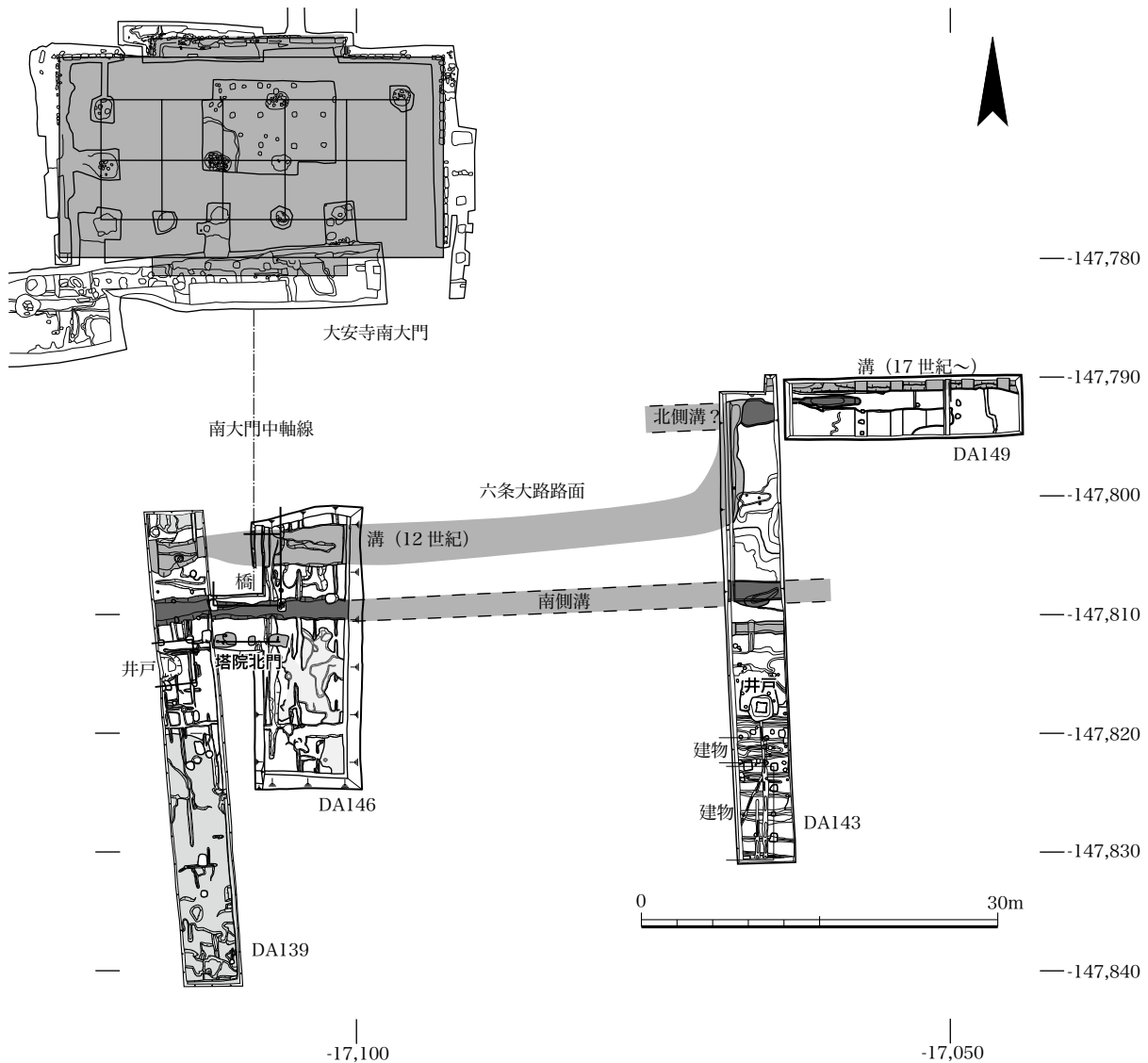
今回検出した SD01 の溝心座標は  $X=-147,792.00$  m、 $Y=17,060.00$  m で、DA143 次調査で検出した六条大路北側溝の可能性がある溝 SD01 の溝心は  $X = -147,792.95$  m、 $Y=-17,066.50$  m であり、6.5 m の距離で約 1 m 溝心がずれることになる。溝幅も DA143 次の SD01 が 1.5 ～ 2.2 m に対し、今回検出した SD01 は幅 1.0 m しかない。溝心、溝幅でずれがあるものの、DA143 次調査検出した SD01 の下層の埋土と今回検出の検出した SD01 埋土が似ており、位置関係から一連のものとして判断した。

また、今回の調査では DA 第 143 次調査で北側溝に推定した東西溝が  $Y=-17,057.50$  付近で途切れて東へのびないことがわかった。さらに、3 区では南側溝が推定される位置に東西溝がなく、推定道路心付近に南へ屈曲

する東西溝が掘削されていることを追認した。

この成果から 3 つの可能性が考えられる。①東へ地形が高くなるため、本来は側溝が東へのびていたが削られている可能性、②平城京遷都以前に大安寺の寺地が決定されたことで道路が施工されず、後に条坊に合わせて南大門と塔院間が通路状に簡易整備された可能性、③五条大路以南の条坊道路は検出できた事例が少なく、そもそも五条大路以北と同等の側溝が掘削されていなかったとすれば、六条大路も南大門付近は明瞭な側溝を掘削し、京極に近い 3 区付近では施工が不十分であった可能性、がある。

①については、3 区で 8 世紀末頃の東西溝や奈良県調査区で同時期の土坑等が検出されており、大きく遺構面が削られているとは考え難いため、可能性は低い。②、③の可能性を追求するにはさらなる調査を待つ必要があるが、いずれにしても南大門より東側の条坊施工については判然としない部分が多い。(村瀬 陸)



六条大路に係る周辺の遺構平面図 (1/600)



DA 第 149 次調査 1区全景 (西から)



DA 第 149 次調査 1区全景 (東から)



DA 第 149 次調査 3区全景 (南東から)



DA 第 149 次調査 3区溝 SD06 (東から)

## (2) 禅院食堂并大衆院の調査 第 150 次

### I はじめに

調査地は杉山古墳の南西の周濠に想定される位置で『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』に記された「禅院食堂并大衆院」又は「池并丘」と推定されている。周辺では DA 第 63 次・第 72 次・第 73 次調査を実施している。DA 第 63 次調査では 12 世紀後半頃に焼失した北東中房・杉山古墳周濠を検出した。DA 第 72 次調査では平安時代に周濠が埋められ、その後の掘立柱建物と塀を検出した。DA 第 73 次調査では北西中房東端、北東中房西端で北に延びる凝灰岩切石と自然石を使用した雨落ち溝・護岸石列・礎石据付掘方を検出している。今回の調査は、北東中房の北側の状況と杉山古墳周濠の埋没状況を明らかにする目的で実施した。

### II 基本層序

発掘区内の基本層序は上から造成土、黒褐色土(表土)、褐色土、褐灰色土、暗灰褐色土、暗褐灰色土、灰色砂質土、黄灰色粘質土(整地土、灰釉陶器含)・黄灰色粘砂(整地土)、褐色土(腐植土:周濠自然堆積土)である。遺構検出面である黄灰色粘質土・黄灰色粘砂と発掘区南辺石列上面の標高は 61.5 m である。

### III 検出遺構

検出遺構には平安時代の溝状遺構 S X 01・石列 S X 02、平安時代末の土坑 S K 03・溝 S D 04、室町時代の掘立柱列 S A 05・土坑 S K 06、室町～江戸時代の井戸 S E 07 がある。

S X 01 発掘区南側で検出した溝状遺構で、東西 3.6 m 以上、南北 4.65 m 以上、深さ 0.7 m。断面皿状である。SX01 北側は平安時代初頭の整地層が広がり、杉山古墳周濠を北側から埋めるような堆積状況である。おそらく、SX01 は、周濠が埋め立てられずに残った部分と考える。埋土は二層に大別され、上層は暗灰色土・暗褐灰色土・淡灰色粘質土・暗灰色砂質土で 12 世紀後半の瓦器、軒丸瓦 6138 型式が出土。下層は茶褐色砂質土・暗灰色砂・暗灰色粘砂で円筒埴輪、8・9 世紀の土師器・須恵器、9 世紀の灰釉陶器、9 世紀後半～10 世紀初頭の黒色土器、軒丸瓦 6304 型式、熨斗瓦、転用硯が出土した。

S X 02 発掘区南辺の S X 01 下層暗灰色砂上面で検出した石列である。石列は 1 段で長さ東西 1.2 m 以上。径 0.3～0.4 m の自然石が 3 個とその西側に抜き取り痕跡が見られ、石列の下に径 6.0cm の木杭が 2 本打込まれている。西側の石列は土坑 S K 03、井戸 S E 07 により壊されており、その際動いたと考えられる自然石 1 個が南

壁西側に見られる。

S K 03 発掘区南側で検出した平面長方形掘方の土坑で発掘区外南へ続く。南北 2.5 m 以上、東西 1.4 m、深さ 0.7 m 以上。埋土は暗灰色粘質土で円筒埴輪、奈良時代の軒平瓦 6717 型式、12 世紀後半の瓦器碗、土師器皿が出土。重複関係から S X 01 暗灰色砂層より新しいことが分かる。

S D 04 発掘区北側で検出した東西方向の溝。長さ 3.7 m 以上、幅 0.5 m、深さ 0.4 m。底には柱穴が 2 カ所あり、柱間寸法は 2.25 m で、支柱を伴う塀の布掘掘方の可能性が考えられる。埋土は暗灰色粘質土で、奈良・平安時代の須恵器杯蓋・甕、丸瓦・平瓦、12 世紀後半の瓦器皿が出土した。

S A 05 発掘区北側で検出した柱列。東西 2 間以上、柱間寸法は東から 1.5 - 1.65 m。柱穴から室町時代の瓦質土器風炉、土師器が出土した。

S K 06 発掘区西辺で検出した平面不整形掘形の土坑で発掘区外西に続く。南北 2.5 m、東西 1.4 m 以上、深さ 0.7 m 以上。埋土は暗灰色粘質土で、奈良時代の軒平瓦 6717 型式、15 世紀の瓦質土器が出土した。

S E 07 発掘区南壁の暗灰褐色土上面で検出した平面隅丸方形掘方の井戸。掘方は東西 1.4 m、南北 1.0 m 以上、深さ 1.15 m 以上で、内側に径 0.55 m の瓦質土器井戸枠が上下 2 段以上据えられている。

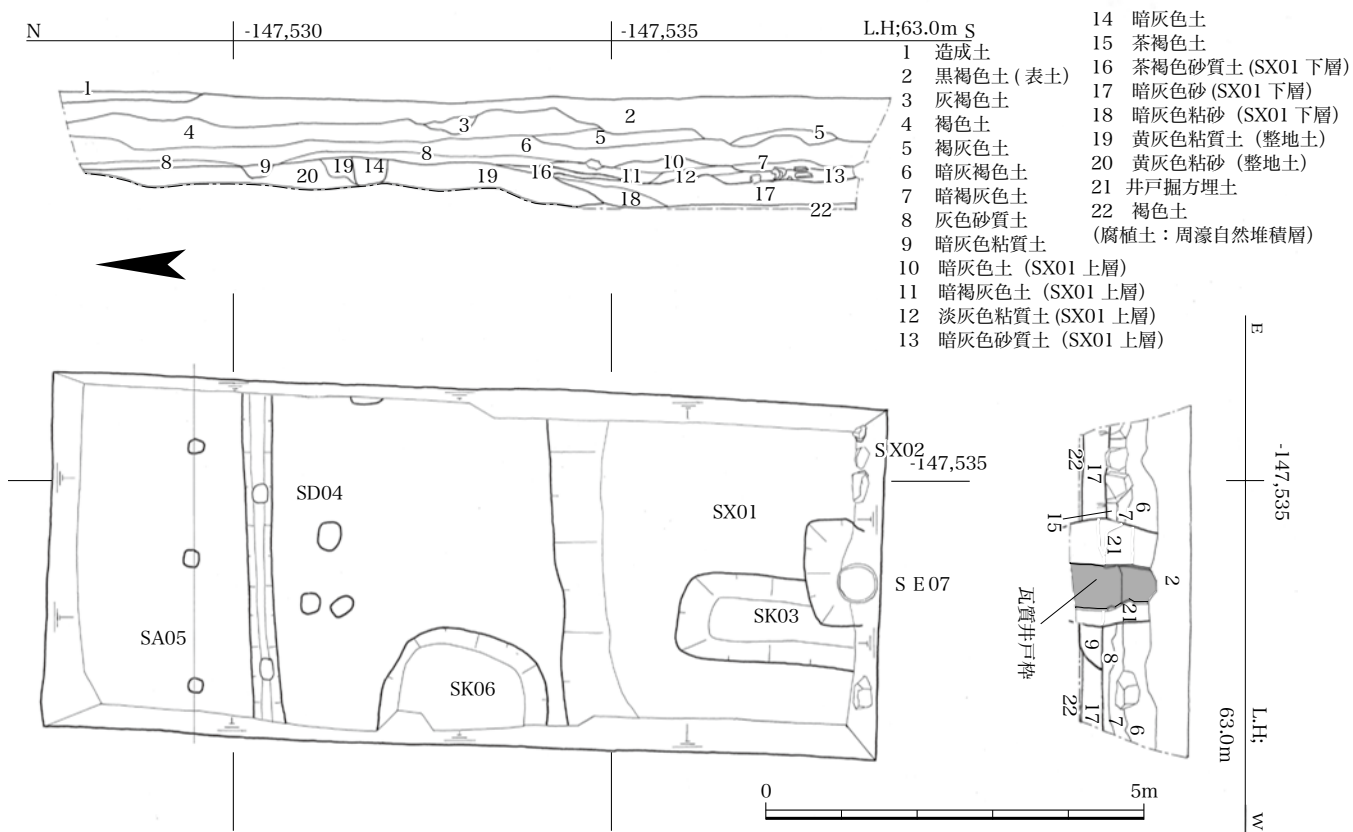
### IV 出土遺物

遺物整理箱で 27 箱分あり、5 世紀の円筒埴輪、蓋形埴輪、8～9 世紀の土師器皿・須恵器杯・壺、9 世紀の灰釉陶器、9 世紀後半から 10 世紀の黒色土器、12 世紀後半の瓦器碗・皿、15 世紀の瓦質土器、奈良時代の丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・熨斗瓦が出土した。

### IV 調査所見

調査地は全体が杉山古墳周濠内にあたり、古墳南西部の周濠は奈良時代には埋められず腐植土が堆積する湿地状で、平安時代初め頃に北側から埋められたことが判明した。SX01 は杉山古墳の周濠が北から埋め立てられた際の、埋め残した部分で、塵芥が投棄され、ある程度埋没した段階で、石列 SX02 が設置されたのであろう。石列の設置は 10 世紀以降であり、その契機が北東中房との空閑地の利用に係るものであった可能性がある。今回の調査では、杉山古墳の周濠の埋没過程を確認することができ、大安寺北東中房北側の様子を知る上で大きな成果を得ることができた。(秋山成人)





DA 第150次調査 遺構平面図 東壁・西壁土層断面図 (1/100)



DA 第150次調査 発掘区南半(南から)



DA 第150次調査 発掘区南半(北から)



DA 第150次調査 発掘区北半(北から)



DA 第150次調査 発掘区南半東壁(西から)

## 14. 元興寺跡・奈良町遺跡の調査 GG 第 77 次

事業名 個人住宅新築	調査期間 令和元年6月5日～12日
届出者名 個人	調査面積 10㎡
調査地 脇戸町1-2、1-3、1-4の一部	調査担当者 村瀬 陸

### I はじめに

調査地は元興寺旧境内の西辺中央付近に位置し、伽藍復元では西辺築地堀と僧坊の間の空間地にあたる。周辺ではGG第28・39・51・53・57・72次調査を実施し、主に平安～江戸時代の奈良町遺跡に関する遺構・遺物を確認しているほか、埋没した脇戸古墳の周溝を検出している。

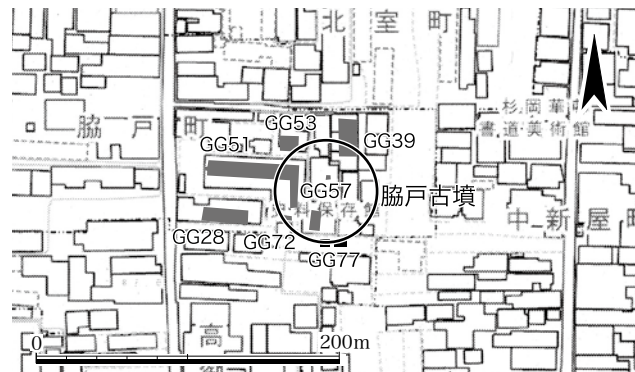
本調査は、元興寺旧境内や奈良町遺跡の様相を明らかにすることを主目的とし、脇戸古墳に関する遺構の有無にも留意して実施した。

### II 基本層序

層序は上から灰色砂質表土（厚さ約0.3m）、暗褐色造成土（0.9m）と続き、現地表下約1.2mで暗黄褐色整地土の遺構面となる。遺構面の標高は87.7mである。地山はさらにその下で現地表下約1.3mで確認した。

### III 検出遺構

平安時代の土坑1基、平安時代末～鎌倉時代の土坑2

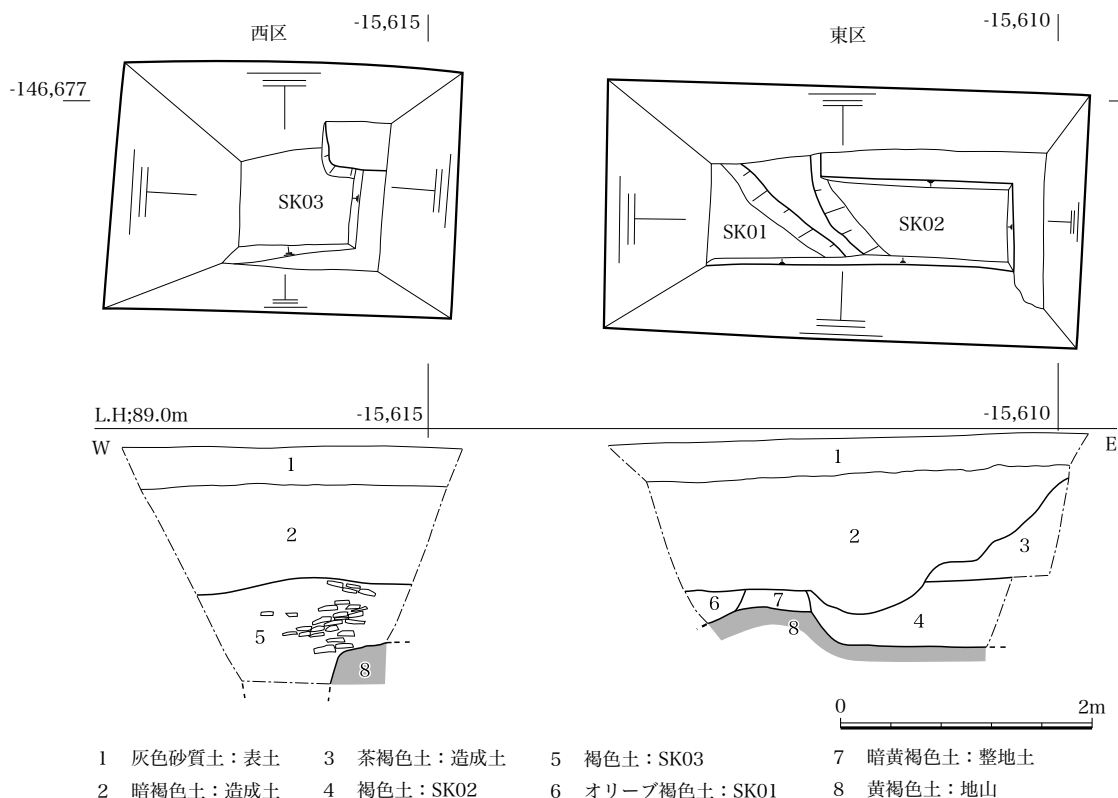


GG 第 77 次調査 調査地位置図 (1/5,000)

基を検出した。いずれも一部のみで規模等は不明である。SK01からは黒色土器A類や8～9世紀の瓦類が出土した。SK02・03からは12世紀後半～13世紀の土器類および8世紀以降の瓦類が出土した。

### IV 出土遺物

遺物整理箱5箱分がある。内訳は、8～9世紀の丸瓦・平瓦、9～10世紀の黒色土器A類碗、12世紀後半～



GG第77次調査 発掘区平面図・断面図 (1/60)

13 世紀の瓦器碗・土師器、19 世紀以降の土器類である。SK01～03 の出土遺物の大半は瓦類であり、19 世紀以降の遺物は暗褐色造成土から出土した。

### V 調査所見

本調査では平安～鎌倉時代の土坑を確認したが、その一部を検出したに過ぎず、規模や機能等は不明である。

脇戸古墳については、前方部があるならばその周溝が

想定される位置であるが、ほぼ全面が後世の土坑で攪乱されており、高い部分でも標高 87.3m まで掘削されている。周辺の調査成果では、脇戸古墳周溝底の標高は概ね 87.2m であることから、仮に周溝があったとしても土坑にほぼ削られていることになる。今回の調査で古墳時代の遺物も全く出土しておらず、脇戸古墳の墳形等については今後の調査に委ねる必要がある。(村瀬 陸)



GG 第 77 次調査 東区全景 (西から)



GG 第 77 次調査 西区全景 (西から)



GG 第 77 次調査 東区北壁断面 (南から)



GG 第 77 次調査 西区北壁断面 (南から)

## 15. 興福寺跡・奈良町遺跡の調査 KF第3次調査

事業名 店舗新築  
届出者名 株式会社 中川政七商店  
調査地 元林院町 25 他

調査期間 令和元年 9 月 30 日～10 月 3 日  
調査面積 41m<sup>2</sup>  
調査担当者 中島和彦

### I はじめに

調査地は、平城京の条坊復元では興福寺跡の南花園院推定地にあたる。東方には猿沢池があり、池から流れ出る率川が調査地北側約 25 m の所を西流する。調査地はこの率川に向かって下降する傾斜地にあたり、遺構面の残存状況を知るため事前に試掘調査（2019-02 次調査）を実施した。結果、現地表下約 0.8 m で淡灰色砂礫の地山を確認でき、その上面で小柱穴・土坑を検出したため、遺構面が残存していることが判明した。発掘調査は、奈良時代の遺構と近世元林院町につづく土地利用の変遷の解明を目的として実施した。

### II 基本層序

発掘区南側の層序は、上から盛土（厚さ約 0.2 m、土層図 1・2）、表土層（約 0.1 m、4）、江戸時代中頃～後半の遺物包含層（約 0.4 m、12・21・22）で、現地表下約 0.8 m で淡灰色砂礫の地山となる。地山上面の標高は、約 79.0 m である。地山上面は、発掘区中ほどから北側に向かって徐々に下降していき、発掘区北端では標高約 77.2 m となる。この低い部分（S X 01）では、江戸時代遺物包含層（土層図 20）の下に、砂礫を主体とした層が数層続き暗灰色粘土（30）が堆積する。暗灰色粘土上面の淡茶灰色砂（29）からは、13 世紀前半頃の土師器皿がまとめて出土し、鎌倉時代以降に埋没していったことがわかる。

### III 検出遺構

江戸時代から近代の井戸 4 基と土坑数基を確認した。

S E 02 17 世紀初頭のもので、径約 1.6 m の平面円形の掘方を検出した。深さ約 0.4 m まで掘削したが、井戸枠は確認できなかった。土師器・肥前産陶器が出土した。

S E 03 南北 3.5 m、東西 3.6 m 以上の平面方形の掘方で、深さ 2.0 m まで掘削したが、井戸枠は確認できなかった。18 世紀後半以降のものである。

S E 04 径約 3.7 m の平面円形の掘方で、径約 1.6 m 以下の円形石組みの井戸枠と推定され、上半部分が抜き取られ砂で埋め立てられる。掘削底付近で石組みの一部を検出した。重複関係から S E 03 より新しく、近代以降のものである。

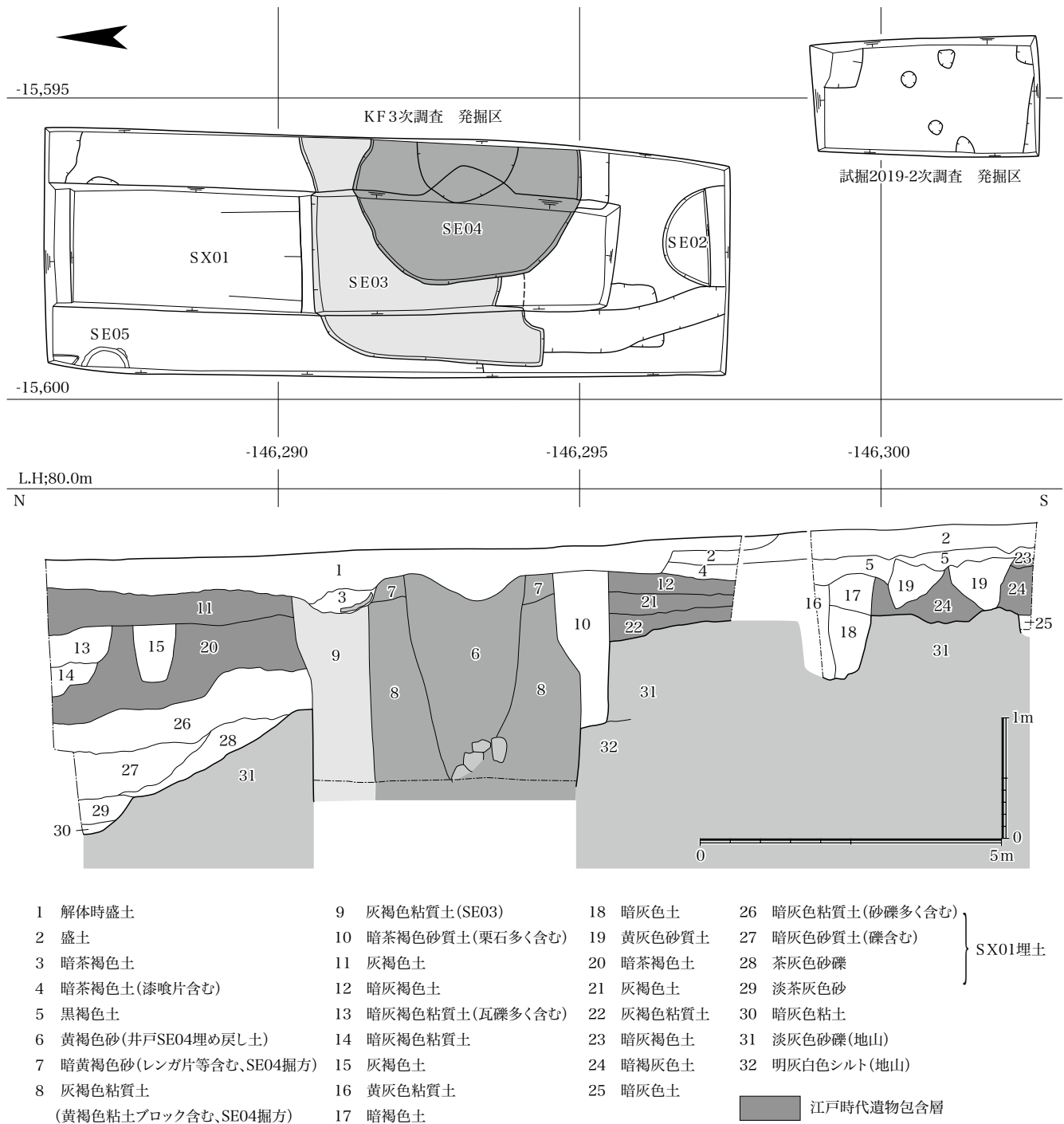


KF 第 3 次調査 発掘区位置図 (1/5,000)



KF 第 3 次調査 発掘区全景（南東から）

S E 05 内法約 0.6 m の瓦製の井戸枠で、井戸瓦を複数組合せて井戸枠を構成する。井戸瓦同士の継ぎ目には、漆喰を用いて目地を埋めている。深さ約 0.7 m 分を確認した。近代以降のものである。



KF 第3次調査 遺構平面図 (1/100)・東壁土層図 (縦 1/50・横 1/100)

#### IV 出土遺物

遺物整理箱1箱分の土器類、2箱分の瓦類、銭貨1点(天聖元寶、初鑄1023年)がある。

井戸SE02からは17世紀初頭の土器がまとめて出土した。土器には土師器皿・羽釜・鍋、瓦質土器深鉢、肥前産陶器碗・皿などがある。肥前産磁器は出土していない。

#### V 調査所見

調査の結果、近世以降の井戸を複数検出したが、古代・

中世の遺構は確認できなかった。調査地内は北に下降する斜面地にあたり、中世前半においても宅地として利用されていなかったと考えられる。

「奈良坊目拙解」によると、興福寺の別院「元林院」が天文土一揆(天文元年・1532年)による滅亡後に、在家となったとされる。元林院の所在は不明だが、17世紀初頭頃には当地が宅地化されていたことが、井戸の存在から推定できよう。(中島和彦)

## 16. 南市推定地の調査 MI 第3次

事業名 宅地造成

届出者名 ベル不動産コンサルタント株式会社

調査地 紀寺町797-1 他

調査期間 平成31年4月8日～4月17日

調査面積 100㎡

調査担当者 村瀬 陸

### I はじめに

調査地は中世の南市推定地に位置する。周辺の調査は、北西の位置でMI第1次調査を実施しており、12～15世紀の掘立柱建物や溝等の遺構を検出している。MI第2次調査では顕著な遺構がなかった。また、調査地南側には古墳時代の東紀寺遺跡が広がり、削平された東紀寺1～3号墳が確認されている。

調査地は小字名が「観音塚」といい、「塚」という文字を含む古墳を連想させる地名である。また、西に隣接する小字名は「南市」であることから、中世「南市」に関連する遺構がある可能性が考えられる。したがって、今回の調査は中世および古墳時代の遺構の広がりを確認することを目的に実施した。

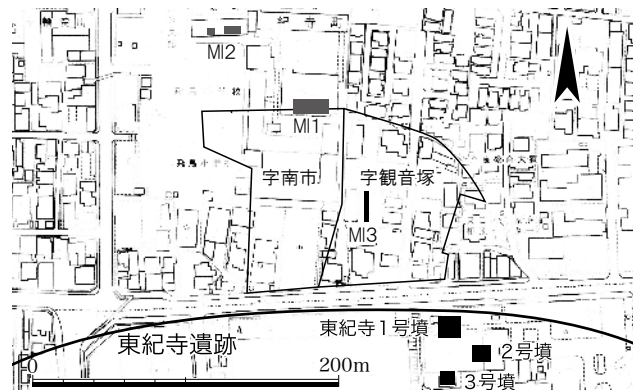
### II 基本層序

層序は上から現代の造成土(厚さ0.7m)、昭和頃の造成土(0.25m)、黒褐色耕土(0.1m)、灰色床土(0.05m)、褐色土(0.1m)と続き、現地地表下1.2mで黄褐色粘質土の地山となる。

### III 検出遺構

検出した遺構は、鎌倉～室町時代に埋められた溝状遺構(SX01)1条、SX01より新しい時期の掘立柱建物(SB02)1棟、鎌倉～室町時代の土坑(SK04～06)3基、溝(SD07)1条、他に次期不明の掘立柱列(SA03)1条である。

SX01 発掘区北側で検出した。埋土は上・下層に分かれる。上層には暗褐色土(0.25m)が堆積し、これを除去するとL字状に屈曲する輪郭を検出した。下層には灰色砂質土(0.3m)が堆積する。上下層からは13～14世紀の土器類と少量ながら5世紀中頃の円筒埴輪が出土



MI 第3次調査 調査地位置図 (1/5,000)

した。また、溝底には拳大の石材が散在的に検出された。

SB02 2×3間以上の東西棟建物で、柱穴は0.2m程度と小さい。重複関係からSX01より新しい。

SA03 南北方向の柱列で、2間分を検出した。柱間は1.5mあり、南の柱穴では石材を用いた礎盤を確認した。

SK04～06 いずれも不整形で、深さ0.2～0.3m程度である。13世紀後半～14世紀の土器類が出土した。

SD07 幅0.8m、深さ0.1mの東西溝である。13世紀後半～14世紀の土器類が出土した。

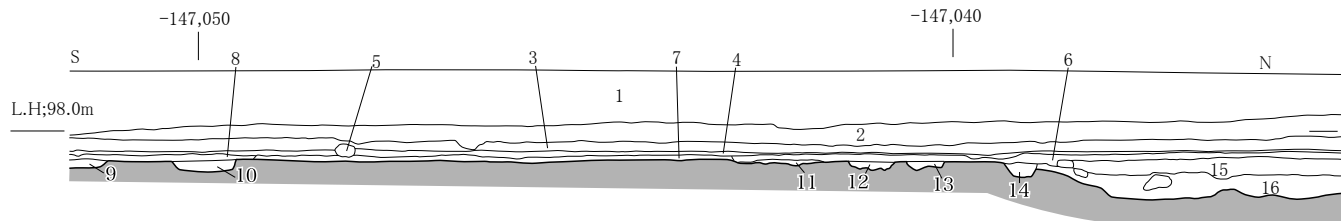
### IV 出土遺物

遺物整理箱5箱分がある。内訳は、5世紀の須恵器・円筒埴輪、13世紀後半～14世紀の土師器・白磁・青磁・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鉄滓がある。出土埴輪は主にSX01から出土し、窖窯焼成で外面ヨコハケであるものが多く埴輪編年IV期(5世紀中頃)に位置づけられる。

### V 調査所見

#### i 南市推定地について

南都焼討(1180年)により郷の多くは荒廃したが、



- |             |             |                 |                  |
|-------------|-------------|-----------------|------------------|
| 1 造成土(現代)   | 5 灰色土(ガラ含む) | 9 暗褐色土(SK06)    | 13 灰褐色土          |
| 2 造成土(昭和頃か) | 6 色土        | 10 灰褐色土(SD07)   | 14 褐色土(SB02柱穴)   |
| 3 黒褐色土(耕土)  | 7 暗褐色土      | 11 灰色土          | 15 暗褐色土(SX01上層)  |
| 4 灰色土(床土)   | 8 褐色土       | 12 灰褐色土(SB02柱穴) | 16 灰色砂質土(SX01下層) |

MI 第3次調査 西壁土層断面図 (1/100)

その後、南都七郷の名がおこり、興福寺の一乗院・大乗院の両門跡郷、東大寺の転害郷を加え活気を取り戻し発展した。大乗院文書によると、大乗院門跡郷に南市が14世紀初頭頃に開設され、一乗院門跡郷には北市が開設されたとされる。ただし、これらの郷・市の場所は絵図等で残されておらず、南市については現在に残る小字から場所が推定されている。

本調査では、13世紀後半～14世紀頃の土器類を含む溝や土坑を検出したが、なかでもSX01はこの時期に人為的に埋め戻されており、その後に掘立柱建物が構築されている。また、13世紀以前の遺物は5世紀のものを除いて出土していない。

この状況からみると、13世紀後半～14世紀頃に整地が行われ、それ以降に再び利用が始まるという変遷が読み取れる。これは、大乗院門跡郷の形成（13世紀頃）→南市の開設（14世紀初頭頃）と動向が一致し、仮に調査地周辺に南市があったとすれば、その開設を機に周辺整備（整地）が行われたと考えることもできる。

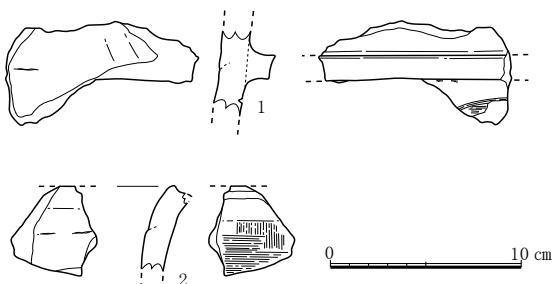
同時期の遺構はこれまでも検出されてきたが、13世紀後半～14世紀頃の整地、およびその後に建物が展開する様相を確認できたことは、中世南市を考える上で重要な成果と言える。

ii 溝状遺構 SX01 について

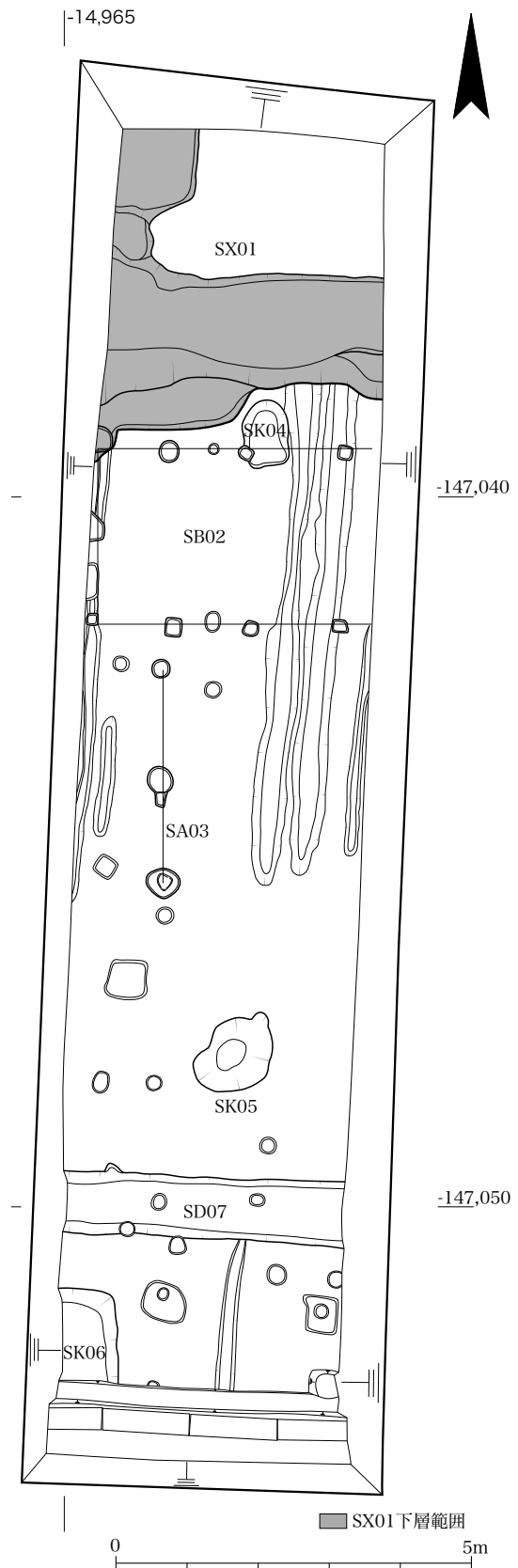
溝状遺構 SX01 は、その南肩の状況から人為的に掘削されており、L字状に屈曲する特徴をもつ。埋土からは13～14世紀の土器類が主に出土するが、5世紀中頃の円筒埴輪も出土しており、溝底には葺石の可能性もある石材が散在する状況であった。

調査地南側には古墳時代の東紀寺遺跡が広がり、約100m南東に東紀寺1～3号墳が古墳群を形成する。さらに、調査地の小字は「観音塚」であり、調査地はそのほぼ中心部分にあたる。

以上の点から、SX01は13～14世紀に埋められた遺構であるが、本来は削られた古墳とその周溝の一部であった可能性も考えられる。 (村瀬 陸)



MI 第3次調査 出土埴輪 (1/4)



MI 第3次調査 発掘区平面図 (1/100)



MI 第3次調査 発掘区全景 (南東から)



MI 第3次調査 発掘区全景 (北から)



MI 第3次調査 溝状遺構 SX01 (南西から)



## 17. 南紀寺遺跡の調査 MK 第8次

事業名 宅地造成

届出者名 株式会社 飯田産業

調査地 南紀寺町二丁目 260 番 1、261 番

調査期間 平成 31 年 4 月 11 日～4 月 23 日

調査面積 86.5㎡

調査担当者 安井宣也

### I はじめに

調査地は、古墳時代中～後期の集落遺跡である南紀寺遺跡の西辺部北寄りにあたり、能登川が形成した扇状地の扇中央部に位置する。現状は盛土造成地であるが、かつては水田で、東・西の近接地では北東から南西に流れる河川を反映する地割が認められた。

周辺では本市教委が過去に 5 回の調査を実施しており、約 100 m 東の第 5 次調査地（平成 19 年度）で古墳時代中期前半の溝・土坑と同中期後半～後期の建物・溝・土坑、第 6 次調査地（同 25 年度）で古墳時代に埋没する河川、約 200 m 東の第 1・2・4 次調査地（同 2・3・5 年度）で同中期後半の首長居館の一部とみられる石積みを伴う区画・濠・井泉、第 4 次調査地で同後期の建物・溝を検出した。これらの調査地では古墳時代の遺構が河川沿いに分布する様相がうかがえ、第 4 次調査地の濠・井泉埋土の植物遺体分析では同中期後半に周辺が森林であったことが推察されている。

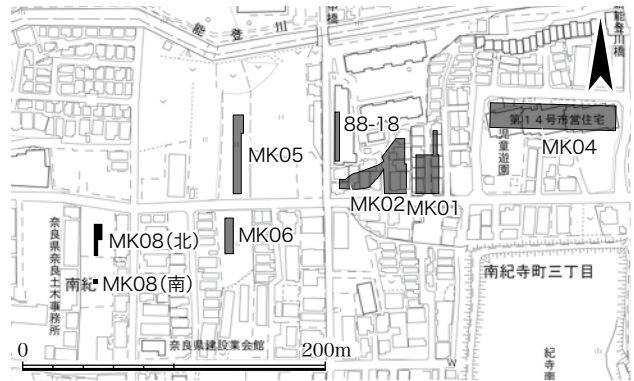
なお、能登川を挟んで北にある東紀寺遺跡、岩井川を挟んで南にある古市遺跡も同時期の集落遺跡である。東紀寺遺跡では、HJ 第 243 次調査地（平成 3 年度）と国第 249 次<sup>1)</sup> 調査地（同 4 年度）で中期後半の小規模な古墳、調査地にほど近い南寄りでは古墳時代に埋没する河川が確認されており、河川では県（2001）調査地<sup>2)</sup> で古墳時代前期後半～中期前半の土器・埴輪・甕の羽口、HK 第 6 次調査地（同 15 年度）で中期後半の土器・木製品が出土した。

今回の調査は、古墳時代の遺構の遺存状態の確認を目的とし、道路予定地に南北 2 箇所を発掘区（北発掘区：80㎡、南発掘区：6.5㎡）を設定して実施した。

### II 基本層序

北発掘区 造成土（厚さ 0.8～1.0 m）、近年までの水田に伴う耕土・床土層（同 0.4～0.7m）が全体にあり、その下が北寄りでは微高地を形成する扇状地の基盤層（以下、地山）、中央～南寄りでは古い水田に伴う耕土・床土層（同 0.5～0.6m）を挟んで古墳時代に埋没する河川の埋土や古墳時代の整地土層となる。

河川の埋土は、上から灰色砂質粘土混じりシルト層、灰色砂礫層となっており、北岸寄りでは古墳時代前期～中



MK 第8次調査 調査地位置図 (1/5,000)

期の土器を含み、南側は無遺物で湧水が著しい。

古墳時代の整地土層はしまりの良い黄褐色の砂質シルトからなり、後述する石積み遺構 SX02 の構築後に旧河川内の北岸に沿う凹み（南北約 10 m）を埋めている。北岸寄りでは古墳時代前期の土器片が出土した。

古墳時代の遺構面は、北寄りが地山上面（標高 93.4 m）、その南側が整地土層（標高 92.5～93.0 m）である。

南発掘区 造成土（厚さ 1.7 m）の下に近年までの水田に伴う耕土・床土層（同 0.6m）があり、その下で地山（図：IV層）となる。水田に伴う耕土・床土層は、層位的には北発掘区の下位のものに対応する。

古墳時代の遺構面は地山上面（標高 92.8 m）である。

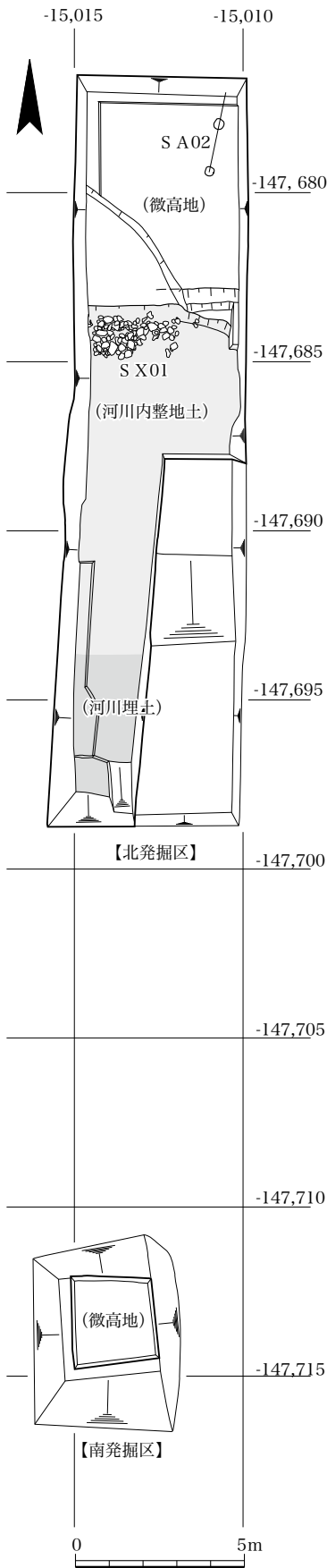
### III 検出遺構

北発掘区では古墳時代の遺構面で遺構検出を行い、北寄りでは古墳時代前期の石積み遺構 SX01 と古墳時代のものとみられる掘立柱列 SA02 を検出した。なお、南発掘区では検出遺構がなかった。

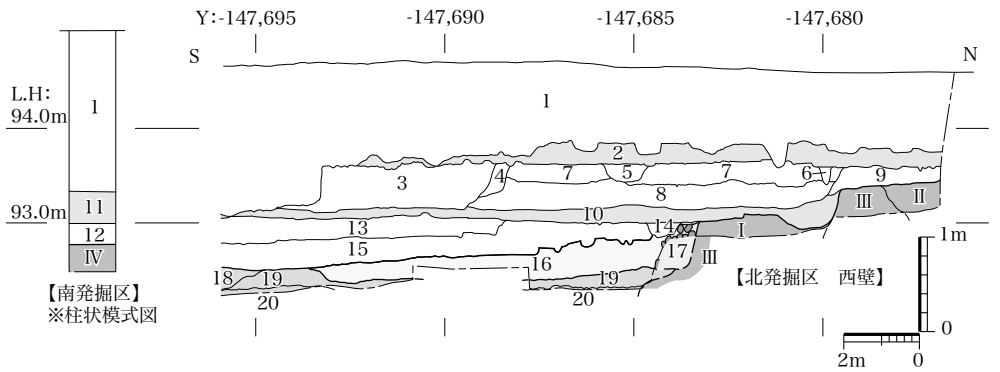
SX01 河川の北岸沿いに構築された石積み遺構で、東寄り 2.5 m 分を検出した。

石積みは幅 0.4～1.0 m、残存高 0.4 m で、上部は水田化に伴う切土改変で破壊されている。地山がやや軟弱な北岸の肩部に切欠きを加えたうえでシルト・粘土の裏込め土を充填しつつ据えており、径 0.1～0.2 m の石を小口積みにし、その前に径 0.3 m 程度の一回り大きい石を面を揃えて据える。用材の大半は背後の山地の基盤岩の花崗岩で、片麻岩・チャート等も少量含む。

石積み上及びその東側から寺澤編年<sup>3)</sup> の布留 1 式後半



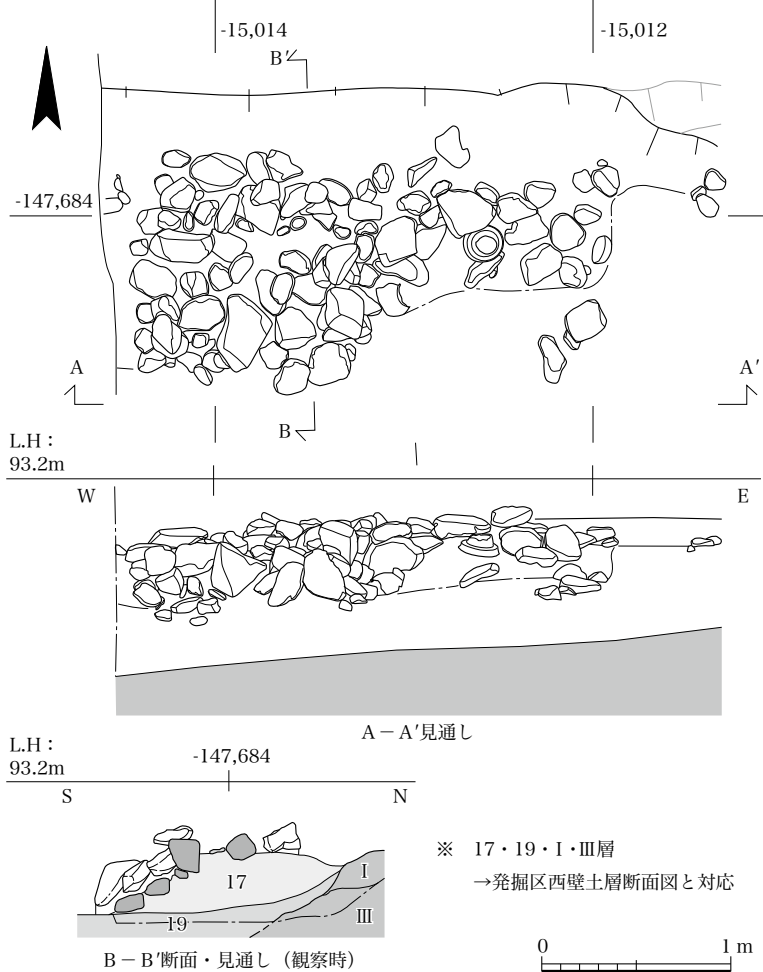
MK 第8次調査 遺構平面図 (1/200)



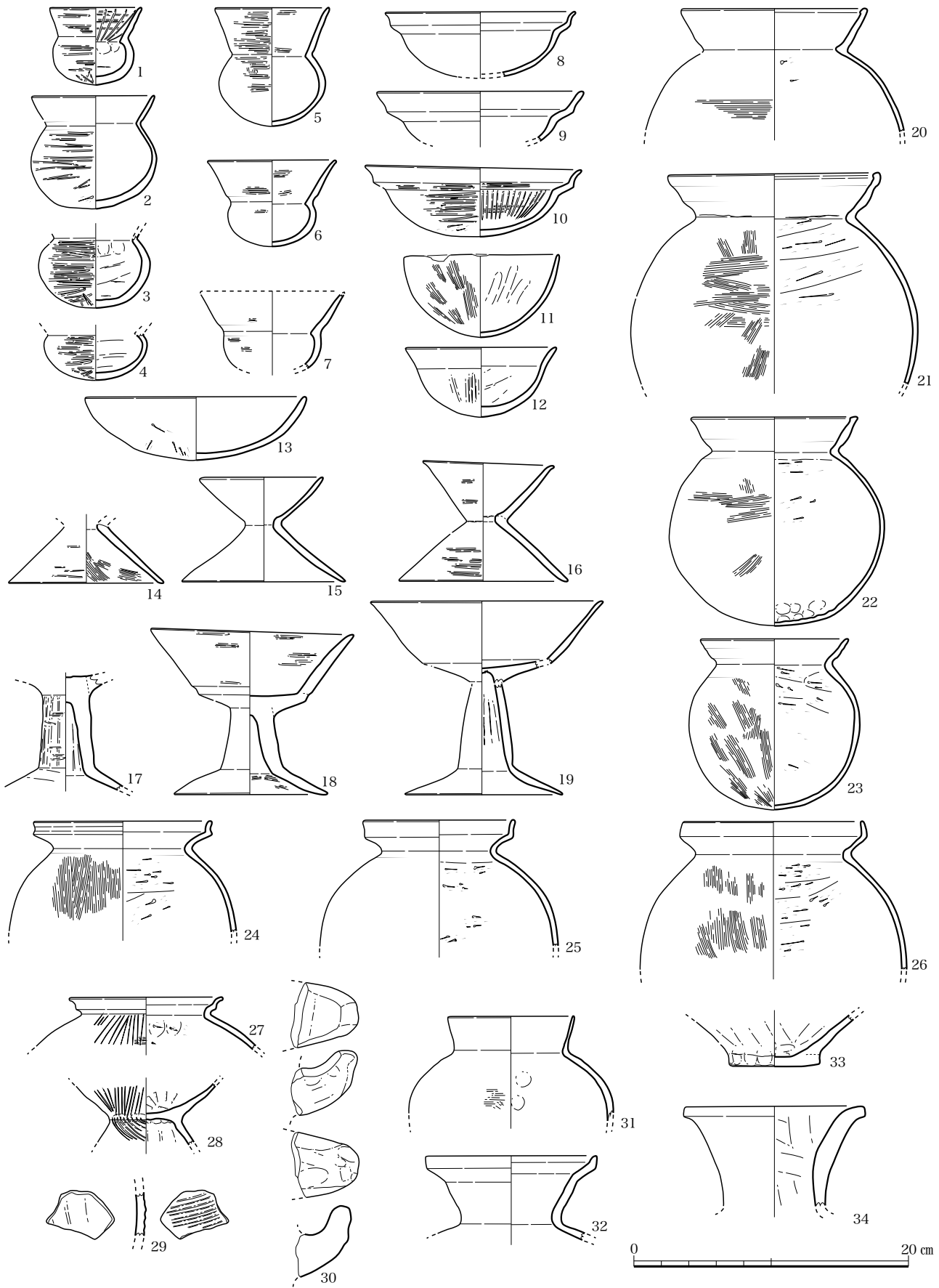
【南発掘区】  
※柱状模式図

- |                   |                     |                |
|-------------------|---------------------|----------------|
| 1 造成土             | 12 灰色砂質シルト          | I 灰色砂質シルト      |
| 2 黒褐色シルト質砂        | 13 灰色砂質シルト          | II 明黄褐色砂質シルト   |
| 3 黄灰色砂質シルトブロック+礫  | +暗灰黄色砂質シルトブロック      | III 灰黄色砂礫      |
| 4 黄灰色砂質シルトブロック    | 14 灰色砂質シルト          | IV 灰色シルト質砂     |
| 5 黄灰色砂質シルト        | 15 灰色砂質シルト          |                |
| 6 暗灰黄色砂質シルト       | 16 黄褐色砂質シルト         | 旧水田耕土: 2・10・11 |
| 7 黄灰色シルト質砂        | +暗黄灰色シルトブロック        | 旧水田床土: 3・4・7~9 |
| 8 黄灰色砂質シルト        | 17 黄灰色砂質シルト         | ・12・13・15      |
| +暗灰黄色砂質シルトブロック    | 18 黄灰色砂質シルト+砂ラミナ    | 耕作溝埋土: 5・6・14  |
| 9 黄灰色砂質シルト        | 19 灰色砂質粘土混じりシルト     | 古墳時代整地土層: 16   |
| 10 黄灰色砂質シルト~シルト質砂 | (河川北岸寄りで古墳時代土師器片含む) | SX01裏込め土: 17   |
| 11 オリーブ黒色シルト質砂    | 20 灰色砂礫 (湧水あり)      | 河川埋土: 18~20    |
|                   |                     | 地山: I~IV       |

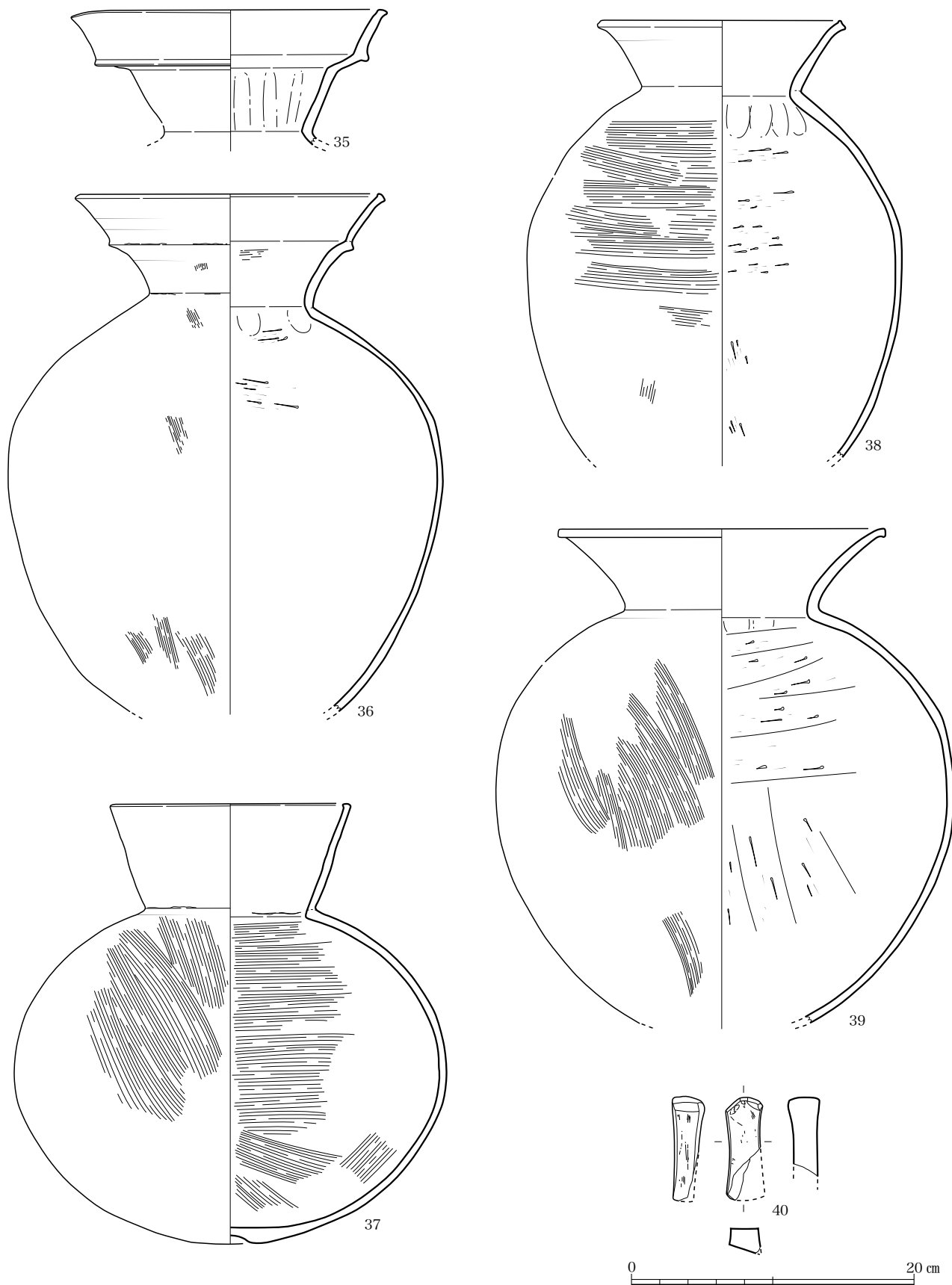
MK 第8次調査 発掘区西壁土層断面図 (縦 1/80 横 1/200)



MK 第8次調査 石積み遺構 SX01 平面・立面・断面図 (1/40)



MK 第8次調査 出土土器① (1/4)



MK 第8次調査 出土土器②・石製品 (1/4)

の様相を示す土師器が出土した。

SA02 発掘区北西隅で検出した1間(1.5 m)以上の掘立柱列。柱筋は北に対してやや東に振れ、発掘区外北に延びる可能性がある。柱穴は一辺0.3 mの隅丸方形で、深さ0.1 m。出土遺物はないが、周辺の調査成果から古墳時代中～後期のものとする。(安井宣也)

#### IV 出土遺物

遺物整理箱で9箱分ある。その大半が北調査区の石積み遺構SX01とそのすぐ東側から出土した古墳時代の遺物で、その内訳は土師器(小型丸底壺・有段口縁鉢・鉢・杯・小型器台・高杯・甕・甌・壺)、砥石である。

土器類(1～39) 小型丸底壺(1～7)は、口縁部が体部より短いもの(1・2)、同等のもの(5)、長いもの(6・7)があるが、いずれも外面に横方向のミガキ調整を施す精製品である。1は口縁部内面にもミガキ調整を施しており、横方向の後で放射状に施す。

有段口縁鉢(8～10)のうち、10は外面で横方向、内面で横方向の後に放射状に施したミガキ調整が観察できる。有段口縁部は比較的鋭く屈曲しており、9のみわずかに粗雑化した印象を受ける。

鉢(11・12)は、甕下半部の形態であるもの(11)と、口縁部と体部の境界が緩やかなもの(12)があり、12は外面に縦方向のミガキ調整が観察できる。

杯(13)は胎土がやや粗いもので、底部外面にケズリ調整が観察できる。

器台(14～16)はいずれも中空のX字状を呈し、外面に横方向のミガキ調整が観察できる。14は内面にハケ調整がみられる。

高杯(17～19)は、18は残りが良く内・外面とも横方向のミガキ調整、脚部内面のハケ調整が観察できる。18・19の杯部の稜は比較的明瞭で、脚部の屈曲も鋭い。

甕(20～28)の主体は布留式(20～23)で、口縁端部が肥厚し肩部に横方向のハケ調整を施すもの(20～22)と口縁端部が肥厚せず縦方向のハケ調整を基本とするもの(23)がある。24～26は複合口縁が特徴の吉備系、27・28はS字口縁が特徴の東海系の甕である。

甌(30)は、把手部分の破片のみが出土している。

壺(31～39)は、二重口縁のもの(35・36)とそうでないものに大別できる。ハケ調整を基本とするものが多く、やや粗雑化した形態のもの(34)もみられる。

砥石(40) 中央部がくびれる一般的な形態のもので、一部欠損する。全ての面が平滑で擦痕がみられる。

これらの出土土器は、SX01の石積み検出時あるいはその近くの埋土からまとまって出土したことから、水辺

の祭祀で用いられた土器群とみられる。精製品の小型丸底壺・有段口縁鉢・器台と稜が明瞭な高杯等の組成は寺澤編年の布留1式後半の特徴を示し、吉備系の甕が大和北部では布留2式以降に減少傾向にある点とも矛盾はない。遺構の性格上、土坑や井戸に比べると一括性は乏しいが、型式学的見地からは比較的まとまりがある資料であると評価できる。(安井宣也・村瀬 陸)

#### V 調査所見

調査地北寄りの河川の北岸付近において古墳時代前期に石積み遺構SX01が築かれ、その後北岸沿いで凹みの埋め立てと整地が行われたことを確認した。出土した土器は、いずれも短頸壺・甕・高杯・小型丸底壺が基本的な組成で、小型器種に精製品が多い。

以上のことから、河川の北岸近くで集落の成立とともに水辺の祭祀・儀礼が石積みの構築や場の整備・改変を伴いながら継続的に行われたことがうかがえ、関連する遺構が周辺に広く遺存する可能性が高い。SX01は、護岸とともに祭祀・儀礼の場所として機能したと考える。

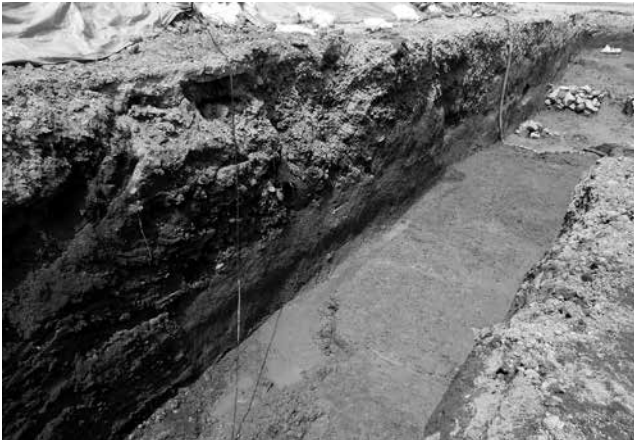
今回の調査の結果、南紀寺遺跡の成立時期が北に隣接する東紀寺遺跡と同じ古墳時代前期に遡ることがわかった。南に隣接する古市遺跡が同じ時期の古市方形墳と近接する点も踏まえると、これら3つの遺跡が一連の集落遺跡であり、中期後半には首長居館を伴い、能登川・岩井川の両流域を水利権を通じて統治する政治的拠点の性格を有した可能性が考えられる。

なお、周辺地域の同時期の拠点的な集落で水辺の祭祀場を伴う例に三重県上野市の城之越遺跡がある。古墳時代前期後半の掘削当初は素掘りの井泉を伴う祭祀用の大溝が、埋土最下層の堆積後に石積みや立石が築かれたうえで同中期まで祭祀場に利用されており、祭祀に伴う多量の土器(土師器壺・甕・高杯・小型丸底壺等)や木製品(武器形祭祀具・武具・農具・紡績具等)が出土している<sup>4)</sup>。今回の調査で確認した祭祀場とみられる遺構と出土土器の様相に城之越遺跡と類似点があり、共通する社会・文化的な背景が想定できる。奈良盆地の周辺地域も含めたより広域的な比較・検討が今後必要と考える。

(安井宣也)

註)

- 1) 国第249次調査：奈良国立文化財研究所編『東紀寺遺跡－奈良女子大学附属中学校・高等学校校内遺跡発掘調査報告－』(1994)
- 2) 県(2001)調査：奈良県立橿原考古学研究所編『奈良県遺跡調査概報2001年度(第1分冊)』(2002)
- 3) 奈良県立橿原考古学研究所『矢部遺跡』(1986)
- 4) 三重県埋蔵文化財センター『城之越遺跡』(1992)



MK 第8次調査 北発掘区 (南東から)



MK 第8次調査 北発掘区 石積 SX01 (南東から)



MK 第8次調査 北発掘区北辺部 (北東から)



MK 第8次調査 北発掘区 石積 SX01 (南東から)



MK 第8次調査 北発掘区 旧河川埋土土器出土状態 (南東から)



MK 第8次調査 北発掘区 石積 SX01 断面 (東から)



MK 第8次調査 北発掘区 旧河川埋土土器出土状態 (西南から)



MK 第8次調査 南発掘区 (北東から)

## 18. 令和元年度実施 遺跡有無確認踏査一覧

令和元年度の遺跡有無確認踏査は3件実施し、いずれも遺跡は確認できなかった。

	受理番号	調査地	踏査日	事業面積 (㎡)	事業者	事業内容	調査所見
1	H30.4006	月ヶ瀬石打2-12、17-4、-5、18-7、-8、-10、19、4449-1、-2	H31.4.24	13,995.26	株式会社 TY コーポレーション	山林整備	遺物、遺構とも確認できなかった。
2	H30.4001	大淵町 3893 の一部他 12 筆	R1.10.30	10291.31	株式会社 八州エイジェント	宅地造成	遺物、遺構とも確認できなかった。
3	R1.4002	針 町 3814-1 の 一 部、3851-1、3853、3854、3855、3871-1、3877 の一部	R2.3.19	19,408.20	福住運送倉庫株式会社	物流倉庫新築	遺物、遺構とも確認できなかった。

## 19. 令和元年度実施 工事立会一覧

令和元年度に土木工事に関わってのべ179件の立会を実施した。

番号	受理番号	遺跡名	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	立会調査	
							日付	結果
1	H30.3440	菅原東遺跡	菅原町 472、474-7、475	(宗) 西蓮寺	寺院新築	宅地	H31.4.3	GL-0.4～0.5 m 盛土 0.4～0.5 m
2	H30.3367	磐之姫陵古墳隣接地、コナベ古墳隣接地	佐紀町～法華寺町地内	奈良市公営企業管理者	水道工事	道路	H31.4.3	GL-1.2 m アスファルト 0.1 m、盛土 0.4 m、黒褐色土 0.05 m、黄褐色砂礫混り砂質粘土 0.25 m、黄褐色細礫混り砂質粘土 0.4 m
							H31.4.4	GL-1.45 m アスファルト 0.1 m、碎石 0.35 m、淡黄褐色砂質土 0.35 m、黄褐色粘質砂 (地山) 0.65 m 以上
							H31.4.5	GL-1.6 m アスファルト 0.05 m、碎石 0.45 m、淡黄褐色砂質土 0.2 m、黄褐色粘質砂 (地山) 0.9 m 以上
							H31.4.9	GL-1.0 m 旧水道管掘形埋土 (アスファルト 0.05 m、盛土 0.95 m 以上)
							H31.4.12	GL-1.0 m 旧水道管掘形埋土 (アスファルト 0.05 m、盛土 0.95 m 以上)
3	H30.1199	史跡大安寺旧境内附石橋瓦窯跡	大安寺二丁目 1299-1	(宗) 大安寺	石段撤去・参拝者通路等設置	境内地	H31.4.4	GL-0.1 m 盛土 0.1 m 以上
4	H30.1197	史跡東大寺旧境内	雑司町	奈良市長	キュービクル・フェンス・引込柱等の設置	学校用地	H31.4.5	GL-2.0 m 黒褐色土 0.7 m、暗灰色粘砂 1.3 m 以上
5	H30.3506	左京六条四坊一坪	大安寺四丁目 1036-2 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H31.4.8	GL-0.2～0.3 m 黒褐色土 (表土) 0.2～0.3 m 以上
6	H30.1159	史跡大安寺旧境内附石橋瓦窯跡	大安寺一丁目 1239 番 1、1256 番 1	(株) 大翔	造成盛土工事	水田	H31.4.11	GL-0.3 m まで土留めの単管打ち耕作土に 0.55 m 盛土
7	H30.3467	左京三条三坊十四坪	大宮町四丁目 223-1 大宮小学校	奈良市長	空調機器設置工事 (ハンドホール)	学校用地	H31.4.12	GL-2.7 m アスファルト 0.05 m、盛土 0.4 m、黒灰色土 (耕作土) 0.1 m、淡黄褐色砂質土 0.3 m、灰色粗砂 0.2 m、灰色粘土 (地山) 0.35 m 以上
		左京六条三坪十四坪	大安寺二丁目 15-1 大安寺小学校				H31.4.25	GL-0.35 m 黒褐色土 (表土) 0.1 m、盛土 0.25 m 以上
8	H30.3462	奈良町遺跡	高畑町 1456-1	個人	個人住宅新築新築	宅地	H31.4.15	GL-0.35 m 盛土 0.35 m 以上
9	H30.3428	四条条間路	四条大路三丁目 979-1、四条大路三丁目 979-1 地先	関西電力 (株)	本柱・支線新設	宅地	H31.4.15	GL-0.8 m 盛土 0.5 m、黒灰色土 (耕作土) 0.15 m、灰色砂質土 0.15 m 以上
10	H30.3498	左京四条六坊九坪	角振町 11-1、12-3	(株) 柴田衣料店	店舗増築	宅地	H31.4.16	GL-1.2～1.5 m アスファルト 0.05 m、盛土 1.15～1.45 m
11	H30.3119	奈良町遺跡	高畑町 181-4	関西電力 (株)	電柱新設	宅地	H31.4.16	C・D地点:GL-2.7 m 盛土 2.0 m、礫層 (地山) 0.7 m 以上
							H31.4.17	E地点:GL-2.9 m 盛土 1.2 m、礫層 0.7 m 以上
12	H30.3085	左京五条四坊八坪	大森町	関西電力 (株)	電柱新設	宅地	H31.4.18	GL-1.5 m 盛土 1.5 m 以上
13	H30.3490	左京一条四坊十四坪	法連町 651-1	関西電力 (株)	電柱・支線新設	宅地	H31.4.18	GL-0.7 m コンクリート 0.15 m、黒褐色土 (表土) 0.55 m

番号	受理番号	遺跡名	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	立会調査	
							日付	結果
14	H30.3133	九条大路	北ノ庄西町一丁目12番地の2	奈良不二サッシ(株)	事務所新築	宅地	H31.4.18	GL-1.4～1.5m 盛土1.1m、黒灰色土(耕作土)0.2m、灰色土0.1～0.2m以上
15	H30.3356	左京四条六坊十四坪	下御門町4-1	個人	店舗・事務所・倉庫新築	宅地	H31.4.19	GL-1.0m 黒褐色土1.0m以上
16	H30.3013	右京五条三坊七坪	五条二丁目518-1	(宗) 唐招提寺	五輪塔の改修	墓地	H31.4.19	GL-0.2～0.3m 盛土0.2～0.3m以上
17	H30.3468	五条大路	北京終町53番2、53番3	個人	個人住宅新築	宅地	H31.4.22	GL-0.6m 黒褐色土(表土)0.6m
18	H30.3467	左京六条三坊十四坪	大安寺二丁目15-1	奈良市長	空調機器設置工事	学校用地	H31.4.25	GL-0.35m 黒褐色土(表土)0.1m、盛土0.25m
19	H30.3488	右京六条四坊十四坪	六条西三丁目1560-4	三和住宅(株)	分譲住宅新築	宅地	H31.4.25	GL-0.4m 盛土0.4m以上
20	H30.3489	右京六条四坊十四坪	六条西三丁目1560-5	三和住宅(株)	分譲住宅新築	宅地	H31.4.25	GL-0.4m 盛土0.3m、黄白色粘砂0.1m以上
21	H31.3010	左京二条四坊十六坪	法連町350番6、350番9の各一部	個人	生活介護事業所新築	宅地	H31.4.26	GL-0.5m 盛土0.4m、黒灰色土(耕作土)0.1m以上
22	H31.3031	西大寺跡	西大寺野神町二丁目1797番17の一部	(株) フロンティアホーム	分譲住宅新築	宅地	R1.5.10	GL-0.2m 盛土0.2m以上
23	H30.3390	右京四条四坊十二坪、平松廃寺	平松三丁目25～26	大阪ガス(株)	ガス管敷設撤去	宅地	R1.5.10	GL-0.8m 砕石0.5m、盛土0.5m以上
24	H30.3511	右京二条四坊七坪	法連町368-1	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	R1.5.13	GL-0.95m アスファルト0.1m砕石0.25m、盛土0.6m以上
25	H30.3535	右京七条三坊五坪	七条一丁目405番12	個人	個人住宅新築	宅地	R1.5.15	GL-0.2～0.5m 盛土0.2～0.5m以上
26	H31.3481	右京二条四坊六坪	菅原町325-2	個人	個人住宅新築	宅地	R1.5.16	GL-0.25m 黒灰色(耕作土)0.25m以上
27	H31.3502	左京二条四坊七坪	法連町368-2、368	関西電力(株)	電柱・支線新設	宅地	R1.5.17	No.1:GL-1.0m アスファルト0.07m、砕石0.15m、盛土0.78m以上 No.2:GL-1.0m アスファルト0.07m、砕石0.45m、盛土0.48m以上
28	H30.3386	右京四条一坊二坪	四条大路四丁目89-4、1047-3、1047-4、1048-1の一部	個人	共同住宅新築	水田	R1.5.20	GL-0.95m 盛土0.5m、黒灰色土(耕作土)0.15m、淡黄灰色土(床土)0.25m、灰色粘土0.05m以上
29	H30.3504	高円離宮推定地	鹿野園町876-1番地	関西電力(株)	アース棒設置	宅地	R1.5.20	GL-0.75m 暗褐色土0.75m、以下暗灰色砂質土
30	R1.1028	史跡大安寺旧境内附石橋瓦窯跡	大安寺四丁目地内	奈良市長	道路修繕工事及び舗装道補修工事	道路	R1.5.22	GL-0.3m 盛土0.3m以上
							R1.5.24	GL-約0.3m上に0.03mの砂を入れL字コンクリートを設置する
31	H30.1196	史跡大安寺旧境内附石橋瓦窯跡	大安寺一丁目1159番6	個人	既存建物の撤去並びに住宅建設	宅地	R1.5.24	GL-0.2～0.3m 盛土0.2～0.3m以上
							R1.7.10	GL-0.55m 盛土0.5m、黒褐色土(耕作土)0.05m以上
32	H31.3563	左京九条二坊十五坪	西九条町二丁目11番7	(有) 辻久	事務所付き倉庫新築	宅地	R1.5.27	GL-1.0m 砕石0.2m、盛土0.8m
33	H31.3014	右京四条三坊十六坪	宝来三丁目143番2	個人	個人住宅新築	駐車場	R1.5.29	GL-0.3m 盛土0.3m以上
34	H30.3464	奈良町遺跡	高畑町1397地先	関西電力(株)	支柱新設	道路	R1.5.31	GL-0.75m コンクリート0.05m、砕石0.05m、盛土0.65m以上
35	H30.3465	西大寺跡	西大寺本町228-1	関西電力(株)	電柱・支柱新設 支線新設	宅地	R1.6.3	GL-0.7m アスファルト0.05m、砕石0.2m、盛土0.45m
36	H31.3026	左京八条二坊十坪、東二坊坊間路	杵町58-2の一部、58-3	個人	宅地造成、重層長屋住宅新築	宅地	R1.6.3	GL-0.9m 盛土0.5m、黒灰色土(耕作土)0.4m、淡黄灰色土0.2m、灰色土0.3m以上
37	H31.1010	史跡大安寺旧境内附石橋瓦窯跡	東九条町1316番地	八幡神社	御神輿置場の設置及び葺改修に伴う仮設足場の設置	神社境内	R1.6.4	基礎石及び土台施工



令和元年度実施 工事立会

番号	受理番号	遺跡名	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	立会調査	
							日付	結果
38	H31.3062	左京三条四坊二坪	大宮町五丁目 4-7	(株) セブン・イレブン・ジャパン	物販店舗新築	宅地	R1.6.10	GL-1.8 m 盛土 1.1 m、黒灰色土(耕作土) 0.2 m、淡灰色粗砂 0.2 m、灰色砂質土(地山) 0.3 m以上
39	H31.3009	四条大路、西四坊大路	平松五丁目 620 番 10	個人	個人住宅新築	宅地	R1.6.12	GL-0.2 ~ 0.25 m 盛土 0.2 ~ 0.25 m以上
40	H30.3549	右京七条四坊十六坪、西四坊大路	六条西四丁目 1492-51	個人	個人住宅新築	宅地	R1.6.13	GL-0.3 ~ 0.4 m 盛土 0.3 ~ 0.4 m以上
41	H31.3029	右京七条四坊十一坪	七条西町一丁目 627 番 38	個人	個人住宅新築	宅地	R1.6.14	GL-0.3 ~ 0.7 m 盛土 0.3 ~ 0.7 m以上
42	H31.3019	遺物散布地	北永井町 131 番の一部	個人	個人住宅新築	宅地	R1.6.19	GL-0.2 m 黒褐色土(表土) 0.2 m、以下盛土(造成土)
43	R1.3066	右京一条北辺二坊二坪	山陵町 64 番の一部、66 番の一部、65 番 2	個人	個人住宅新築	宅地	R1.6.19	GL-0.6 m 褐色土 0.5 m、暗褐色土(土師器碎片含) 0.1 m以上
44	R1.3054	右京四条一坊十五坪	四条大路五丁目 14 番	(株) ヤマトラ	宅地造成	水田	R1.6.20	GL-1.3 m 黒灰色土(耕作土) 0.2 m 淡黄灰色土 0.7 m、黄灰色粘土(地山) 0.4 m以上
45	H30.3538	右京四条四坊十二坪 平松麩寺	平松三丁目 665-1、665-4、661-1、661-2、657、658、659、660	関西電力(株)	電柱・支線新設	宅地	R1.6.26	GL-0.8 m 盛土 0.3 ~ 0.4、黒灰色土 0.1 ~ 0.2 m、淡褐色土 0.1 ~ 0.25 m、黄褐色土(整地土) 0.05 ~ 0.2 m以上
							R1.8.20	GL-1.0 m 盛土 0.35 m、黒灰色土 0.15 m、淡褐色土 0.2 m、黄褐色土(整地土) 0.3 m以上
							R1.10.23	GL-1.6 m 盛土 0.8 m、黒灰色土 0.2 m、淡褐色土 0.2 m以上
46	R1.3112	左京二条五坊十四坪	北市町 69-1	個人	共同住宅新築	宅地	R1.6.27	GL-0.5 m 黒褐色土(表土) 0.3 m、黄褐色土(地土) 0.1 m以上
47	R1.3111	右京二条四坊四坪	菅原町 377-16	個人	個人住宅新築	宅地	R1.6.28	GL-0.3 m 盛土 0.3 m以上
48	H29.3486	左京九条三坊三・四・五・六坪	西九条町四丁目 1 番地の 11 他 1 筆	大和ハウス工業(株)	工場新築	工場用地	R1.6.28	GL-1.0 m 盛土 1.0 m以上
							R1.7.3	GL-1.6 m、盛土 1.3 m、黒灰色土 0.3 m以上
							R1.8.9	GL-2.1 m、盛土 2.1 m以上
49	R1.3087	右京六条三坊三坪	六条一丁目 515 番	個人	宅地造成	水田	R1.7.4	GL-0.45 m 黒灰色土(耕作土) 0.3 m、黄灰色粘土(地山) 0.15 m以上
50	H31.3045	左京九条四坊七坪	東九条町 293 番	平井建設(株)	事務所新築	宅地	R1.7.5	GL-1.8 m 盛土 0.9 m、黒灰色土(耕作土) 0.2 m、淡褐色土 0.45 m、灰色粗砂(河川堆積) 0.25 m以上
51	R1.3092	右京二条二坊四坪	西大寺国見町二丁目 357 番 8	個人	個人住宅新築	宅地	R1.7.5	GL-1.0 m 盛土 0.6、黒灰色土(耕作土) 0.2 m、淡黄灰色土 0.2 m以上
52	H31.3023	右京四条四坊一坪	宝来三丁目 158 番	個人	賃貸住宅新築	青空駐車場	R1.7.8	GL-0.15 m 黒灰色土(耕作土) 0.15 m以上
53	R1.3530	左京二条七坊九坪	東包永町 27 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	R1.7.8	GL-0.2 m 黒褐色土(表土) 0.2 m以上
54	R1.3020	野神古墳隣接地	南京終町二丁目 1201 番 1	(株) 奈良自動車学校	工場新築	宅地	R1.7.16	GL-0.8 m 盛土 0.8 m以上
55	R1.3063	左京五条六坊十一坪	西木辻町 216 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	R1.7.16	GL-0.3 m 黒褐色土(表土) 0.3 m以上
56	R1.3093	西大寺跡	西大寺竜王町一丁目 1607 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	R1.7.16	GL-0.5 m 盛土 0.5 m以上
57	R1.3005	左京四条五坊八・九坪	三条町地内	奈良市公営企業管理者	下水道工事	道路	R1.7.17	GL-2.0 m アスファルト 0.1 m、盛土(砕石含) 0.8 m、盛土 1.1 m以上
							R1.7.23	GL-1.2 m アスファルト 0.1 m、盛土(砕石含) 1.1 m以上
58	H29.3487	左京九条三坊五・六・十一・十二坪	西九条町四丁目 1 番地の 11 他 2 筆	大和ハウス工業(株)	研修センター新築	工場用地	R1.7.18	防火水槽 A : GL-2.0 m 盛土 1.15 m、以下地山の褐色砂質土 0.15 m、赤褐色土 0.15 m、灰色砂質土 0.1 m、黒色粘土 0.45 m、以下灰色粗砂
							R1.8.6	防火水槽 B : GL-2.8 m 盛土 1.4 m、以下地山の赤褐色土 0.1 m、灰色粗砂 0.2 m、黒灰色粘土 0.2 m、淡灰色砂質土 0.1 m、灰色粘土 0.8 m以上
							R1.9.13	防火水槽 C : GL-2.75 m 盛土 0.63 m、以下地山の暗灰色土 0.12 m、灰色土 0.1 m、褐色砂質土 0.45 m、灰褐色砂 0.24 m、暗灰色粘質土 0.06 m、灰色粗砂 0.25 m、灰色粘土 0.65 m、青灰色砂質土 0.25 m以上

番号	受理番号	遺跡名	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	立会調査	
							日付	結果
59	H31.1003	史跡大安寺旧境内附石橋瓦窯跡	大安寺四丁目 1112 番地	(有) サザンエスレート	建物老朽化に伴う解体工事	宅地	R1.8.1	GL-0.5 m 盛土 0.3 m、黒褐色土(旧表土) 0.2 m以上
							R1.8.2	
60	H30.3101	左京五条四坊七坪	大安寺七丁目	関西電力(株)	電柱新設	宅地	R1.8.2	GL-1.0 m 盛土 1.0 m以上
61	H31.3047	古墳隣接地	山町 1322-1 番地他	関西電力(株)	電柱・支線新設	山林	R1.8.5	GL-0.55 m アスファルト 0.05 m、碎石 0.3 m、黄褐色砂礫土(地山) 0.2 m以上
62	R1.3101	左京二条七坊九坪、奈良町遺跡	東包永町 22-1、22-2、22-3	(一社) RA 政経研究所	共同住宅新築	宅地	R1.8.5	GL-0.7 m 黒褐色土 0.7 m以上
63	R1.3085	左京二条七坊一坪、奈良町遺跡	西笹鉾町 16 番 5 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	R1.8.5	GL-0.3 ~ 0.5 m 黒褐色土 0.3 ~ 0.5 m以上
64	R1.3123	窪ノ庄城跡	窪ノ庄町 334 番、335 番の各一部	個人	個人住宅新築	宅地	R1.8.7	GL-0.35 m 盛土 0.35 m以上
65	R1.3099	菅原寺跡	菅原町 467 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	R1.8.16	GL-0.27 m 盛土 0.2 m、褐灰色砂質土 0.07 m以上
66	R1.3061	薬師寺跡	六条町 296 番 4	個人	個人住宅新築	宅地	R1.8.22	GL-0.2 m 盛土 0.2 m以上
67	R1.3097	左京三条一坊五坪	三条大路三丁目 496-1 の一部	個人	賃貸住宅新設	宅地	R1.8.26	GL-0.85 m 盛土 0.65 m、耕作土 0.2 m
68	R1.3051	南市推定地	紀寺町 805-1 番地	関西電力(株)	電柱新設	宅地	R1.8.29	GL-0.7 ~ 0.8 m 盛土 0.7 ~ 0.8 m以上
69	R1.3119	右京五条三坊五坪	五条二丁目 682 番 7	個人	個人住宅新築	宅地	R1.8.30	GL-0.4 m 盛土 0.4 m以上
70	R1.3168	西二坊大路	平松五丁目 731-6	関西電力(株)	電柱新設	宅地	R1.9.2	GL-0.4 ~ 0.6 m 黒褐色土(表土) 0.1 m、黄褐色土(地山) 0.3 ~ 0.5 m以上
71	H29.3568	西大寺跡	西大寺新田町 491 番 1 の一部、491 番 4	個人	診療所新築	宅地	R1.9.6	GL-0.4 ~ 0.7 m 盛土 0.4 ~ 0.7 m以上
72	R1.3172	右京五条四坊十一坪	平松四丁目 560-71	一建設(株)	分譲住宅新築	宅地	R1.9.9	GL-0.5 m 盛土 0.5 m以上、以下黄灰色粘質土(地山)
							R1.11.26	
73	R1.3109	奈良町遺跡	京終地方地方東側町 16 番 4、16 番 5	個人	個人住宅新築	宅地	R1.9.10	GL-0.6 m 盛土 0.2 m、黒褐色土(表土) 0.2 m、淡褐色土 0.2 m以上
74	R1.3168	右京五条三坊十六坪	平松二丁目 224-1	関西電力(株)	電柱・支線新設	宅地	R1.9.12	GL-0.6 ~ 0.8 m 盛土 0.6 ~ 0.8 m以上
75	R1.3158	左京四条四坊十六坪	三条宮前町 1192	個人	ホテル新築	宅地	R1.9.17	GL-0.85 m 碎石 0.2 m、造成土 0.6 m、灰色土 0.05 m
76	R1.3048	古市桜谷遺跡、古市城跡	古市町 144-1、141、139-1 番地	関西電力(株)	電柱・支線新設	宅地	R1.9.17	GL-0.65 ~ 0.8 m No.1: 盛土 0.6 m、黒灰色土(耕作土) 0.1 m以上 No.2: 黒褐色土(表土) 0.1 m、淡褐色砂礫(地山) 0.7 m以上 No.3: 黒褐色土(表土) 0.05 m、赤褐色土 0.4 m、淡褐色砂礫(地山) 0.4 m以上
77	R1.3122	遺物散布地	阪原町 5016	関西電力(株)	本柱建替	畑地	R1.9.17	GL-1.2 m 黒灰色土(表土) 0.6 m、黄灰色砂(地山) 0.6 m以上
78	R1.3162	左京二条五坊八坪	法連町 295-3 ~ 280-1	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	R1.9.19	GL-0.75 m アスファルト 0.05 m、盛土 0.6 m、灰褐色土 0.1 m以上
79	R1.3135	奈良町遺跡	福智院町 1-3	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	R1.9.19	GL-0.8 m アスファルト 0.05 m、碎石 0.1 m、盛土 0.1 m、黒褐色土 0.3 m、黄褐色砂礫(地山) 0.25 m以上
80	H30.3522	右京八条一坊十一坪	杏町 216-4、216-2、223-1、217-1	五条運輸(株)	物流倉庫新築	宅地	R1.9.19	GL-0.5 m アスファルト 0.05 m、盛土 0.25、褐灰色土 0.2 m以上
							R1.11.26	
81	R1.1093	史跡大安寺旧境内附石橋瓦窯跡	東九条町 1316	八幡神社	本殿周囲雨水排水設備工事	境内地	R1.9.19	GL-0.13 m 盛土 0.13 m
82	R1.3130	右京五条四坊九坪	平松三丁目 529 番 25	個人	個人住宅新築	宅地	R1.9.20	GL-0.4 m 黄灰色粘質土(地山) 0.4 m以上
83	H31.3011	古市城跡	古市町 93 番 1	(福) こぶしの会	宅地造成	水田	R1.9.20	GL-2.2 m 黒灰色土 0.15 m、灰褐色土 0.17 m、以下地山の灰色砂礫 0.4 m、黄褐色粘土 1.48 m、黄灰色砂質土
84	H30.1175	史跡大安寺旧境内附石橋瓦窯跡	東九条町 1416 番、1417 番の一部	個人	戸建て住宅も新築・地盤改良	宅地	R1.10.1	GL-0.7 ~ 1.2 m 盛土 0.3 m、黒灰色土(耕作土) 0.2 m、黄灰色土 0.3 m、淡灰色土 0.2 m、灰色粗砂 0.3 m以上

令和元年度実施 工事立会

番号	受理番号	遺跡名	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	立会調査	
							日付	結果
85	H31.3006	左京三条四坊十四坪	大宮町二丁目 127 番 38	(株) ダイカイ	共同住宅新築	宅地	R1.10.3	GL-1.3 m 盛土 0.5 m、黒灰色土(耕作土) 0.2 m、灰褐色土 0.6 m以上
86	R1.3124	元興寺跡	南市町 10-2、10-4	(株) シュガーアソシエイツ	簡易宿所新築	宅地	R1.10.4	GL-0.3 ~ 0.41 m 黒褐色土(表土) 0.3 ~ 0.41 m以上
87	R1.3105	右京五条四坊十一坪	平松四丁目 396-33	関西電力(株)	電柱・支線新設	宅地	R1.10.7	GL-0.7 m 上から盛土 0.5 m、黄灰色砂質土(地山) 0.2 m以上
88	R1.3152	一条北辺北極路	西大寺北町四丁目 444 番 4	ファースト住建(株)	分譲住宅新築	宅地	R1.10.7	GL-1.5 m 上から盛土 0.5 m、黒灰色土(耕作土) 0.2 m、灰色土 0.2 m、黄灰色粘土(地山) 0.6 m以上
89	R1.3114	左京一条三坊七坪	法華寺町 1262 番 6	関西電力(株)	電柱・支線新設	青空駐車場	R1.10.8	GL-2.3 m 盛土 0.5 m、黒灰色土(耕作土) 0.2 m、灰色土 0.1 m、黄灰色砂質土(地山)
90	R1.3072	左京四条二坊六坪	四条大路一丁目四番地	関西電力(株)	電柱新設	宅地	R1.10.15	GL-0.5 m 碎石 0.1 ~ 0.15 m、盛土 0.35 ~ 0.4 m以上
91	R1.3230	古市城跡	古市町 2187 番 8	個人	個人住宅新築	宅地	R1.10.16	GL-0.2 m 盛土 0.1 m、黄褐色砂質土(地山) 0.1 m以上
92	R1.3237	右京四条四坊十三坪	平松五丁目 620-1	個人	個人住宅新築	宅地	R1.10.17	GL-0.2 m 盛土 0.2 m以上
93	R1.3078	南紀寺遺跡	南紀寺町二丁目 260-1 番地 261 番地	関西電力(株)	電柱新設	宅地	R1.10.21	GL-0.8 m 黒褐色土 0.8 m以上
94	R1.3188	奈良町遺跡	紀寺町 841 番 2、841 番 3、841 番 7、841 番 10	オーエスハウジング(株)	宅地造成	宅地	R1.10.21	GL-1.6 m 黒褐色土 0.6 m、淡褐色砂 0.6 m、淡褐色粗砂(3 ~ 5cm の川原石含) 0.4 m以上
95	R1.3205	南紀寺遺跡	南紀寺町二丁目 276 番 8、276 番 33	個人	個人住宅新築	宅地	R1.10.24	GL-0.3 m 盛土 0.3 m以上
96	R1.3098	一条北辺京極路	西大寺北町四丁目 1-5 ~ 四丁目 1-30	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	R1.10.24	GL-0.75 m アスファルト 0.05 m、盛土 0.35 m、黄灰色粘土(地山) 0.35 m以上
97	H29.3548	左京三条二坊十三坪	三条大路一丁目 691 番 16、697 番 1、698 番 1	日本放送協会	事務所新築	宅地	R1.10.29	GL-3.8 m 地盤改良土 0.7 m、黒灰色土 0.7 m、黒灰色砂礫 1.3 m、灰褐色土 0.6 m、褐灰色土 0.4 m、灰褐色土 0.6 m、黄褐色粘土(地山) 0.1 m以上
98	R1.3193	右京四条一坊十五坪	四条大路五丁目 14-4、14-5、14-6	関西電力(株)	電柱新設	宅地	R1.10.30	GL-0.6 m 盛土 0.2 m、黒灰色土(耕作土) 0.2 m、褐灰色土 0.2 m以上
99	R1.3202	右京六条四坊十四坪	六条三丁目 1923 番 5	個人	個人住宅新築	宅地	R1.10.30	GL-0.4 m 黒褐色土(表土) 0.3 m、黄灰色粘土(地山) 0.1 m以上
100	R1.3128	五条条間路	五条町 91-1	関西電力(株)	電線・支線新設	水田	R1.10.30	GL-0.7 m 盛土 0.2 m、黒灰色土(耕作土) 0.3 m、灰褐色土 0.2 m以上
101	R1.3095	右京二条三坊九・十坪	西大寺南仮換地 21-1-2・21-3	関西電力(株)	電柱・支線新設	宅地	R1.11.5	GL-0.8 m 盛土 0.5 m、黒灰色土(耕作土) 0.2 m、灰色土 0.1 m以上
102	R1.3206	左京四条五坊九坪	三条町 516 番 1	個人	賃貸住宅新築	宅地	R1.11.6	GL-0.35 m 盛土 0.35 m以上
103	R1.3037	左京二条七坊十一・十二坪	北半田町 18 番地、19-1 の一部	住都営繕(株)	事務所新築	宅地	R1.11.6	GL-1.2 ~ 1.3 m 東側:コンクリートブロック 0.2 m、盛土 0.2 m、黒灰色土(耕作土) 0.2 m、灰色土 0.1 m、黄灰色土 0.3 m、黄灰色粘土(地山) 0.3 m以上
							R1.11.8	西側:碎石 0.2 m、黒褐色土(表土) 0.5 m、黄灰色土 0.2 m、黄灰色粘土(地山) 0.3 m以上
104	R1.3264	右京四条一坊九坪	四条大路四丁目 30-11	個人	個人住宅新築	宅地	R1.11.11	GL-1.0 m 盛土 0.5 m、黒灰色土(耕作土) 0.2 m 淡黄灰色土 0.3 m以上
105	R1.3201	左京二条四坊十六坪	法連町 339-7 ~ 330	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	R1.11.12	GL-0.7 ~ 0.8 m 碎石 0.2 m、黒褐色土(盛土) 0.3 m、暗灰色土(耕作土) 0.1 ~ 0.2 m、灰褐色土 0.15 ~ 0.2 m
106	R1.3319	右京二条四坊十五坪	若葉台四丁目 239-1 の一部、239-5 の一部	個人	倉庫新築	畑地	R1.11.14	GL-0.47 m 黒灰色土(耕作土) 0.47 m以上
107	R1.3170	興福寺跡	大豆山突抜町 13 番 1、13 番 4 の一部	個人	共同住宅新築	宅地	R1.11.14	GL-0.7 m 黒褐色土(表土) 0.6 m、茶褐色土 0.1 m以上
108	R1.3222	左京一条四坊六坪	法連町 589 番 20	ファースト住建(株)	分譲住宅新築	宅地	R1.11.14	GL-1.25 m 黒灰色土(耕作土) 0.2 m、灰色土 0.1 m、以下地山の黄灰色砂質土 0.15 m、灰色砂質土 0.1 m、暗灰色粘土 0.2 m、暗褐色粘土 0.5 m
109	R1.3068	左京二条四坊七坪	法連町 368-5 の一部(1 ~ 3 号棟)	一建設(株)	分譲住宅新築	宅地	R1.11.21	GL-0.6 ~ 0.7 m 盛土 0.6 ~ 0.7 m以上
110	R1.3069	左京二条四坊七坪	法連町 368-5 の一部(4 ~ 5 号棟)	一建設(株)	分譲住宅新築	宅地	R1.11.21	GL-0.6 ~ 0.7 m 盛土 0.6 ~ 0.7 m以上

番号	受理番号	遺跡名	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	立会調査	
							日付	結果
111	R1.3070	左京二条四坊七坪	法連町368-5の一部(6~7号)	一建設(株)	分譲住宅新築	宅地	R1.11.21	GL-0.6~0.7m 盛土0.6~0.7m以上
112	R1.3252	般若寺	般若寺町199番9	個人	個人住宅新築	宅地	R1.11.21	GL-0.4~0.5m 暗褐色土0.2m、淡褐色土0.2~0.3m以上
113	R1.3161	古市遺跡	古市町1670-1、1670-2、1670-3の各一部	個人	賃貸住宅新築	青空駐車場	R1.11.22	GL-0.4~0.5m 盛土0.3m、淡褐色土0.1~0.2m以上
114	R1.3269	右京六条四坊十・十一坪	六条二丁目1461-5~1471-2	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	R1.11.25	GL-0.65m 黒褐色土(表土)0.15m、黄褐色砂質土(地山)0.35m以上
115	R1.3163	右京七条四坊六坪	七条西町一丁目627番155	個人	個人住宅新築	宅地	R1.11.27	GL-1.1m 盛土0.4m 黄褐色粘土(地山)0.7m以上
116	R1.3076	矢田原遺跡	矢田原町893	関西電力(株)	本柱・支線新設	宅地	R1.11.29	GL-1.1m 黒褐色土(表土)0.45m 黄褐色粘土(地山)0.65m以上
117	R1.3314	左京九条四坊十六坪	東九条町243-1	関西電力(株)	電柱新設	宅地	R1.12.2	GL-1.0m 砕石0.1m、盛土0.15m、黒灰色土(耕作土)0.25m、灰色土0.2m、淡褐色土0.3m以上
118	R1.3238	西三坊坊間路	菅原東一丁目140-1地先	関西電力(株)	電柱移設	宅地	R1.12.2	GL-0.8m 黒褐色土(表土)0.15m、盛土0.65m以上
119	R1.3129	四条条間南小路	四条大路三丁目899-1	関西電力(株)	電柱新設	宅地	R1.12.2	GL-1.3m 盛土0.4m、黒灰色土(耕作土)0.2m、暗灰色土0.3m、淡褐色土0.1m、灰色砂(河川堆積)0.3m以上
120	R1.3340	左京四条六坊十二坪	南中町10番の一部・11番の一部、南風呂町1番の一部	個人	個人住宅新築	宅地	R1.12.3	GL-0.6m コンクリート0.2m、黒褐色土(表土)0.3m、淡褐色砂質土0.1m以上
121	R1.3169	八条大路、東二坊坊間路	杏町58-2	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	R1.12.3	GL-1.2m アスファルト0.2m、盛土1.0m以上
122	R1.3113	東市推定地	東九条町地内	奈良市長	下水道工事	道路	R1.12.4	GL-3.3m 黒灰色土(池埋立土)2.5m、以下河川堆積の淡灰色砂0.15m、黒色粘砂0.1m、灰色砂0.2m、暗灰色粘砂0.35m以上
123	R1.3228	左京五条六坊七坪	西木辻町323番1、324番2、325番1の一部、327番1の一部	(株)セブン・イレブン・ジャパン	店舗新築	宅地	R1.12.4	GL-0.6m 盛土0.2m、黒褐色土0.2m、灰褐色砂質土0.2m以上
124	R1.3080	三条条間路	菅原町492番の一部、94番2	個人	個人住宅新築	宅地	R1.12.4	GL-0.4m 盛土0.1m、褐色土0.3m以上
125	R1.3326	左京七条二坊十坪	八条三丁目79-2	関西電力(株)	電柱・支線新設	道路	R1.12.6	GL-1.0m 盛土0.8m、灰色土0.2m以上
126	R1.3195	右京五条三坊六坪	五条二丁目601番91	個人	賃貸住宅新築	青空駐車場	R1.12.9	GL-0.3m 盛土0.25m、黄灰色粘土(地山)0.05m以上
127	R1.3271	奈良町遺跡	高畑町573番1、634番6	個人	個人住宅新築	宅地	R1.12.10	GL-0.8m 盛土0.8m以上
128	R1.3286	南紀寺遺跡	南紀寺町三丁目64番1、64番7	個人	個人住宅新築	宅地	R1.12.11	GL-0.2m 盛土0.2m以上
129	R1.3255	右京七条四坊十二坪	七条西町一丁目627番182	ファースト住建(株)	分譲住宅新築	宅地	R1.12.16	GL-0.4~0.6m 盛土 GL-0.15(東側)~0.3(西側)m、以下黄灰色シルト(地山)
130	R1.3245	右京六条四坊十五・十六坪	六条二丁目14番1	奈良市長	放課後児童クラブ新築	学校用地	R1.12.18	GL-0.7m 黒褐色シルト質砂(表土)0.2m、黄褐色シルト質砂(造成土)0.47~0.48m、砕石0.02~0.03m、
131	R1.3248	右京三条一坊四坪	三条大路四丁目100番1、100番16、100番27	積水化学工業(株)	敷地内排水処理	工場跡	R1.12.18	GL-0.3m 盛土0.3m
132	R1.3312	右京四条四坊三坪	平松一丁目873-1、873-2	関西電力(株)	電柱撤去、電柱支線新設	宅地	R1.12.18	GL-1.5m 盛土1.0m、黒色粘土(旧水路埋土)0.5m以上
133	R1.3274	右京四条四坊五坪	平松三丁目203番3、482番6	個人	個人住宅新築	宅地	R1.12.20	GL-0.4m 盛土0.4m以上
134	R1.3267	右京八条三坊一坪	七条一丁目514番3	個人	個人住宅新築	宅地	R1.12.23	GL-0.2m 盛土0.2m以上
135	R1.3261	日笠東・大野遺跡	大野町198番1	楽天モバイル(株)	携帯基地局設置	宅地	R1.12.23	GL-1.0m 砕石0.1m、盛土0.35m、黒褐色土0.45m、淡褐色砂礫(地山)0.1m以上
136	R1.3315	西大寺跡	西大寺小坊町299番の一部	個人	個人住宅新築	宅地	R1.12.23	GL-3.0m 黒褐色土(表土)0.1m、褐色土0.3m、淡褐色土0.3m、暗褐色土0.1m、灰色土0.1m、黄灰色粘土(地山)0.1m
137	R1.3322	右京四条四坊五坪	平松三丁目203番2、482番5	個人	個人住宅新築	宅地	R2.1.6	GL-0.35m 盛土0.35m以上
138	R1.3246	東七坊大路 中世南市推定地	紀寺町785番地	奈良市長	放課後児童クラブ新築	宅地	R2.1.7	GL-0.5m 盛土0.5m以上
139	R1.3145	左京五条五坊十六坪	大森町17-9	個人	共同住宅新築	宅地	R2.1.7	GL-0.6m 盛土0.1m、黒灰色土(耕作土)0.2m、茶褐色土0.2m、黄灰色砂質土(地山)0.1m以上

令和元年度実施 工事立会

番号	受理番号	遺跡名	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	立会調査	
							日付	結果
140	R1.3332	左京七条四坊二・三坪	東九条町 1178-1	(株) エステートトラスト	宅地造成	駐車場	R2.1.9	GL-0.9 m 盛土 0.5 m、黒灰色土(耕作土) 0.2 m、灰色土 0.2 m以上
141	R1.3356	南紀寺遺跡	南紀寺町二丁目 276-5 ～ 276-8	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	R2.1.11	GL-0.8 m 盛土 0.5 m、黒灰色土(耕作土) 0.2 m、灰色土 0.1 m以上
142	R1.3334	西大寺跡	西大寺野神町二丁目 1797 番 8 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	R2.1.14	GL-0.2 m 盛土 0.2 m以上
143	R1.3275	元興寺跡 奈良町遺跡	南市町 10 番 2	関西電力(株)	電柱・支線建替	道路	R2.1.16	GL-0.9 m 黒褐色土(表土) 0.6 m、 褐灰色土 0.2 m、灰色土 0.1 m以上
144	R1.3377	右京六条三坊十四坪	六条一丁目 782-2	個人	個人住宅新築	宅地	R2.1.20	GL-0.4 m 盛土 0.2 m、黒灰色土(耕作土) 0.2 m以上
145	R1.1123	大安寺旧境内附石橋瓦窯跡	大安寺町四丁目 1127 番地の一部	個人	既存建築物の解体及び一戸建て住宅の建築	宅地	R2.1.22	GL-0.1 ～ 0.3 m 盛土約 0.3 m
146	R1.3075	左京三条六坊三坪、奈良町遺跡	今辻子町 22-1	個人	個人住宅新築	宅地	R2.1.23	GL-0.6 m 黒褐色砂礫 0.6 m
147	R1.3339	古市遺跡	古市町 1670-1	関西電力(株)	電柱・支線建替	道路	R2.1.23	GL-2.6 m アスファルト 0.1 m、 盛土 0.3 m、黒褐色土 0.6 m、以下 地山の茶褐色粘質土(栗石・礫含む)
148	R1.3363	左京二条六坊北郊	法連町 962-19	(株) 西組	事務所新築	宅地	R2.1.23	GL-1.1 ～ 1.3 m 盛土 0.5 m、 灰色細砂 0.4 m、暗灰色粘質土 0.1 m、 以下黄褐色粘土(地山) 0.1 ～ 0.3 m以上
149	R1.3373	右京四条四坊五坪	平松三丁目 203-5	個人	個人住宅新築	宅地	R2.1.24	GL-0.4 m 盛土 0.4 m以上
150	R1.3213	右京五条一坊二坪	五条町 12-1、18、20	関西電力(株)	本柱・支線建替	道路	R2.1.24	GL-1.1 ～ 2.4 m 黒灰色土(耕作土) 0.3 ～ 0.4 m、暗黄灰色土 0.3 ～ 0.4 m、褐灰色土 0.25 ～ 0.3 m、 以下地山の黄褐色粘土 0.3 m、灰色 粘土 0.3 ～ 0.8 m、灰色砂 0.65 ～ 0.95 m
151	R1.3351	左京二条五坊北郊	法連町 845-1、820-1 の一部、820-3 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	R2.1.29	GL-0.25 m 黒褐色土(表土) 0.25 m、以下褐灰色土
152	R1.1159	史跡大安寺旧境内附石橋瓦窯跡	大安寺四丁目 1127 番 1	個人	雨水浸透管の設置	宅地	R2.1.31	GL-0.5 m 盛土 0.35 m、黒褐色土 (陶磁器小片含) 0.15 m以上
153	R1.3401	左京四条二坊八坪	四条大路一丁目 785 番 1	MULプロパティ(株)	事務所新築	宅地	R2.2.3	GL-2.5 m 盛土 2.5 m以上
154	R1.3303	右京二条四坊十二坪、平松廃寺	平松三丁目(4号棟)	一建設(株)	分譲住宅新築	宅地	R2.2.4	GL-2.5 ～ 3 m 柱状改良の為、土 層堆積は確認されず。遺物出土せず
155	R1.3302	右京二条四坊十二坪、平松廃寺	平松三丁目(3号棟)	一建設(株)	分譲住宅新築	宅地	R2.2.5	GL-2.5 ～ 3 m 柱状改良の為、土 層堆積は確認されず。遺物出土せず
156	R1.3301	右京二条四坊十二坪、平松廃寺	平松三丁目(2号棟)	一建設(株)	分譲住宅新築	宅地	R2.2.6	GL-2.5 ～ 3 m 柱状改良の為、土 層堆積は確認されず。遺物出土せず
157	R1.3291	興福寺跡	登大路町 34-3 番地先 ～ 東向北町 190-2 番 地先	奈良市公営企業 管理者	水道管の入替	道路	R2.2.10	GL-1.2 m アスファルト・砕石 0.2 m、黒褐色土(表土) 0.2、明黄橙 色粘土(地山) 0.8 m以上
158	R1.3328	奈良町遺跡	高畑町 756 番	個人	個人住宅新築	宅地	R2.2.17	GL-0.7 m 表土・暗灰褐色土 0.25 m、以下明黄橙色砂礫(地山)は西 へ下降
159	R1.3008	東四坊坊間西小路	法連町 559 番地 1 ～ 380 番地	大阪ガス(株)	ガス管入替	道路	R2.2.18	GL-0.85 m 盛土 0.85 m以上
160	R1.3369	左京三条三坊十四坪	大宮町四丁目 223 番 地の 1	奈良市長	放課後児童クラブ 新築	学校用地	R2.2.19	GL-1.15 m 盛土 0.5 m、耕作土 0.1 m、灰褐色土 0.15 m、黄灰褐 色土 0.1 m、茶褐色土 0.1 m、褐色 土 0.1 m、灰色粘土 0.05 m、以下 灰色砂(河川堆積層) 0.05 m以上
161	R1.1131	史跡大安寺旧境内附石橋瓦窯跡	東九条町 1316 番地	八幡神社	本殿防災設備設置	境内地	R2.2.20	GL-0.1 m 黒褐色土(表土) 0.1 m 以上
162	R1.3181	左京二条七坊十坪、奈良町遺跡	中御門町 38 番 1	(株) MINTS	共同住宅新築	宅地	R2.2.25	GL-1.3 m 盛土 0.8 m、黒褐色土 0.3 m、黄灰色粘土(地山) 0.2 m 以上
163	R1.3410	西大寺跡	西大寺野神町二丁目 1748-1	関西電力(株)	電柱撤去、電柱・ 支線新設	宅地	R2.2.27	GL-2.7 m アスファルト 0.05 m、 盛土 0.15 m、以下地山の黄灰色砂 質土
164	R1.3349	奈良町遺跡	北京終町 65 番 2 の一 部	(福) 楽慈会	共同住宅新築	宅地	R2.2.28	GL-0.3 m コンクリート 0.25 m、 黒褐色土(表土) 0.05 m以上

番号	受理番号	遺跡名	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	立会調査	
							日付	結果
165	R1.3438	左京七条四坊三坪	東九条町 1171-1	関西電力(株)	本柱・支線建替、支線柱新設	宅地	R2.3.2	GL-1.0～1.1 m アスファルト 0.1 m、盛土 0.5 m、暗灰色土 0.5 m 以下灰色砂
166	R1.3348	五条大路	五条三丁目 909-4	関西電力(株)	電柱・支線新設	宅地	R2.3.4	GL-1.5 m 盛土 1.5 m以上
167	R1.3426	二条条間路	法華寺町 292	関西電力(株)	本柱・支線新設	宅地	R2.3.9	GL-1.0 m 黒褐色土(表土) 0.1 m、盛土 0.9 m以上
168	H22.3105	五条大路	南京終町～西木辻町	奈良市長	道路工事	道路	R2.3.11	北側:GL-1.2 m 盛土 1.2 m以上
							R2.3.25	南側:GL-1.5 m 盛土 1.5 m以上
							R2.4.27	敷地北側:GL-3.0 m 盛土 1.5 m、以下河川堆積の灰色砂礫 0.3 m・灰色粗砂 0.3 m・灰色粘土 0.4 m以上
							R2.5.28	南側:GL-2.6 m 盛土 1.5～1.6 m、灰色砂礫(地山) 1～1.1 m以上
169	R1.1181	大安寺旧境内附石橋瓦窯跡	東九条町 1290 番他	個人	史跡指定地公有化に伴う倉庫の撤去	宅地	R2.3.16	倉庫:簡易建物、床面コンクリートであるが、打設でなく、影響なし。
170	R1.3430	一条条間路	法連町 833 番 8、833 番 9	個人	個人住宅新築	宅地	R2.3.17	GL-0.3 m 黒褐色土(表土) 0.1 m、黄褐色砂質土(地山) 0.2 m以上
171	R1.3399	遺物散布地	古市町地内	奈良市公営企業管理者	遺物散布地	道路	R2.3.17	GL-2.85 m コンクリート 1.5 m、以下河川堆積の淡灰色粗砂 0.5 m、暗灰色粘土 0.5 m、灰色粗砂 0.35 m以上
172	R1.3404	右京七条四坊十三坪	七条西町一丁目 627-339	個人	個人住宅新築	宅地	R2.3.17	GL-0.3 m 盛土 0.3 m以上
173	R1.1076	史跡大安寺旧境内附石橋瓦窯跡	奈良市大安寺一丁目 1160-5	個人	住宅の解体除去	宅地	R2.3.23	GL-0.3～0.7 m 盛土 0.3 m、黒灰色土(耕作土) 0.3 m、灰色粘土 0.1 m以上
174	R1.3451	左京五条六坊三坪	西木辻町 112	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	R2.3.23	GL-0.7 m 盛土 0.3 m、黒灰色土(耕作土) 0.3 m、灰色土 0.1 m以上
175	R1.3227	左京一条三坊十二坪	法華寺町 1268-1～1359-1	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	R2.3.25	GL-0.7 m アスファルト 0.05 m、盛土 0.55 m、淡黄灰色土 0.1 m以上
176	R1.3376	朱雀大路	杏町 186 番 1	関西電力(株)	電柱・支線新設	宅地	R2.3.26	GL-1.2 m 表土・盛土 1.2 m
177	R1.3455	右京五条三坊五坪	五条二丁目 682-7・682-7 地先	関西電力(株)	電柱移設	宅地	R2.3.26	GL-1.2 m アスファルト・盛土 1.2 m
178	R1.3411	右京北辺三坊六坪	西大寺北町一丁目 392 番の一部	関西電力(株)	共同住宅	宅地	R2.3.27	GL-0.5 m 表土 0.15 m、明黄灰色シルト(地山) 0.35 m
179	R1.1123	史跡大安寺旧境内附石橋瓦窯跡	大安寺四丁目 1127 番地 1 の一部	個人	既存建築物の解体及び一戸建住宅の建設	宅地	R2.3.30	先端翼径 300 mm、350 mmの鋼管打設確認
							R2.4.10	GL-0.3～0.4 m 敷地北端:盛土 0.4 m以上、南側:茶褐色砂質土(表土) 0.3 m以上
							R2.6.1	GL-1.2 m 給水管掘形北壁:アスファルト 0.15 m、盛土 0.55 m、暗灰色砂質土(SX 01 埋土) 南壁:アスファルト 0.15 m、盛土 0.4 m、灰褐色土 0.6 m以上

なお、表中の遺跡名のうち、平城京跡については、名称を略し、○京○条○坊○坪、もしくは○条大路、○坊大路等で示した。



## 第2章 令和元(2019)年度 埋蔵文化財保存活用・学習推進事業報告





# 令和元（2019）年度 埋蔵文化財保存活用・学習推進事業報告

## 1. 展示

### A 常設展示

対 象：一般  
会 期：平成31年4月1日(月)～令和元年7月19日(金)  
令和元年10月21日(月)～12月27日(金)  
令和2年1月6日(月)～3月31日(火)  
(260日間)  
場 所：埋蔵文化財調査センター展示室  
趣 旨：埋蔵文化財の展示を通じ奈良市の歴史を紹介。  
内 容：旧石器時代～江戸時代の各時代の埋蔵文化財を遺跡ごとに展示。

### B 奈良市教育委員会平城京発掘調査40周年記念特別展「平城京の市と商売」の開催

対 象：一般  
会期・場所：令和元年8月1日(木)～10月11日(金)  
(51日間)・埋蔵文化財調査センター展示室  
および同室前ロビー  
令和元年10月27日(日)～12月20日(金)  
(47日間)・奈良大学博物館  
趣 旨：平城京の東市・西市等で売られていた大量の商品に注目し、“商品”という観点から遺物を見直した時に、平城京が巨大消費市場となって栄えていたことを、奈良市教育委員会による平城京発掘40周年にちなんで、発掘調査で発見された遺構・遺物により紹介。また奈良大学との連携により、2施設で巡回展示する。  
そ の 他：・案内を「しみんだより」8月号と奈良市役

所のホームページに掲載。  
・宣伝用のポスター・チラシの作成・配布。  
・展示パンフレットの作成。  
・事前に報道機関へ資料配布、内覧会を実施。

### C 巡回ミニ展示「奈良を掘る」の開催

対 象：一般  
趣 旨：奈良新聞に平成26年7月から平成28年1月に連載した「奈良を掘る」の記事のひとつを取り上げ、出土遺物を加えて、夏季と冬季の2回に分けて、2施設で巡回展示する。

①夏季展示「第7回 古市城築城で壊された中世墓地」  
会期・場所：令和元年6月17日(月)～7月19日(金)  
(22日間)・埋蔵文化財調査センター展示室前ロビー

令和元年8月5日(月)～8月31日(土)  
(23日間)・奈良大学博物館

内 容：「奈良を掘る」第24話「古市城の築城で壊された中世墓地」を取り上げ、火葬骨を納めていた土師器羽釜や瓦質土器、副葬品の可能性がある陶磁器や銭貨などを展示し、中世大和の墓制や墓を壊して造営された古市「城山」の新城について紹介。

そ の 他：・案内を「しみんだより」6月号と奈良市役所のホームページに掲載。

・宣伝用チラシの作成・配布。  
・展示リーフレットの作成。  
・事前に報道機関に資料を配布。



特別展「平城京の市と商売」



巡回ミニ展示「奈良を掘る（第8回）」

表1 月別観覧者数

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
138	131	144	178	365	437	229	123	172	64	89	129

②冬季展示「第8回 棧瓦と両棧瓦」

(22日間)

会期・場所：令和2年1月16日(木)～2月21日(金)  
(37日間)・埋蔵文化財調査センター展示室  
前ロビー

場 所：埋蔵文化財調査センター展示室前ロビー

令和2年3月4日(水)～9月30日(水)  
(211日間)・奈良大学博物館

趣 旨：発掘調査等の最新成果について、展示・紹介  
する。

内 容：「奈良を掘る」第37話「棧瓦と両棧瓦」を  
取り上げ、今小路町で実施した奈良町遺跡の  
18世紀初頭の土坑から出土した両棧瓦を展  
示し、棧瓦の発明と同じ頃、あるいはこれに  
先行して、奈良の地で両棧瓦が発明されてい  
た可能性を紹介。また「本瓦葺き」と「棧瓦  
葺き」に使用される瓦について紹介した。

内 容：令和元年度に南紀寺町で調査を実施し、石積  
遺構を確認した南紀寺遺跡、平成30・令和  
元年度に西九条町で調査を実施し、小規模宅  
地と九条条間南小路を確認した平城京跡、平  
成30年度に平松三丁目で調査を実施し、橿  
原市田中廃寺創建瓦と同形の瓦が出土した平  
松廃寺の調査成果を遺物・パネルで展示・紹  
介した。

そ の 他：・案内を「しみんだより」1月号と奈良市役  
所のホームページに掲載。

観覧者数：129名

- ・宣伝用チラシの作成・配布。
- ・展示リーフレットの作成。
- ・事前に報道機関に資料を配布。

そ の 他：・案内を「しみんだより」3月号と奈良市役  
所のホームページに掲載。

- ・宣伝用チラシの作成・配布。
- ・展示リーフレットの作成。
- ・事前に報道機関に資料を配布。

D 春季発掘調査速報展

「南紀寺遺跡、平城京跡(左京九条三坊五・六坪)、平松廃寺」  
会 期：令和2年3月2日(月)～3月31日(火)

E 年間観覧者数 2,199名(236日間)。月平均183名。

## 2. 施設見学の受け入れ

埋蔵文化財調査センター施設見学

(1) 対 象：ふわく山の会会員 25名

見学日：令和元年11月15日(金)

## 3. 講演会・教室の開催

A 埋蔵文化財講演会

対 象：一般

開 催 日：令和元年11月24日(日)13:00～16:00

内 容：特別展のテーマである「平城京の市と商売」  
について、さらに理解を深めて貰うために、  
古代の商業活動について詳しい歴史学および  
考古学の先生方を講師に迎え、講演と討論会  
を開催した。



なお、本年度の埋蔵文化財講演会は、奈良  
市・奈良大学包括連携協定関連事業として開  
催し、大勢の方々に聴講していただけるよう  
に奈良大学の講堂で実施した。

埋蔵文化財講演会

会 場：奈良大学講堂

参加者数：200名

演題 三好美穂(奈良市埋蔵文化財調査センター所長)  
「考古資料が語ること」

小森俊寛(元京都市埋蔵文化財研究所研究員)  
「都市的消費市場の出現と発展」

寺崎保広(奈良大学文学部教授)  
「文献史料からみる平城京の市と商業活動」

舘野和巳(奈良女子大学名誉教授)  
「長屋王家の商業活動」

討論 「土器は商品となり得るか！」

司会 坂井秀弥(奈良大学文学部教授)

その他：・募集案内を「しみんだより」11月号と奈良市役所のホームページに掲載。

・宣伝用チラシの作成・配布。また特別展チラシにも掲載

・報道機関に募集要項をお知らせ。

## B 夏休み親子考古学体験

対 象：小学4年生以上の児童とその保護者

開 催 日：令和元年8月4日(日)

内 容：「拓本をとろう！」と題し、瓦の紋様や銭貨の文様を学んだ後、拓本を製作し、拓本を用いた栞も製作した。

会 場：埋蔵文化財調査センター講座室

参加者数：18名

その他：募集案内を「しみんだより」7月号と市役所ホームページに掲載。案内チラシの配布・掲示



夏休み親子考古学体験

## 4. 市民考古学講座

対 象：一般

開催期間：令和元年7月3日(水)～令和2年3月4日(水)、全11回(実施は10回 表2参照)

内 容：市民考古学サポーター協力のもと、埋蔵文化財調査センター職員が講師を務める講座。生涯学習の一環として体系的に考古学を学び、文化財ボランティア活動を実践する際に必要な基本的知識と技能を身につけ、地域における歴史文化遺産の保護活用のリーダーとして活躍できる人材の育成が目的。

受講者数：25名

その他：・案内を「しみんだより」6月号と奈良市役所のホームページに掲載。

表2 市民考古学講座日程一覧表

	日 時	講 座 名
第 1 回	7 月 3 日	開講式・オリエンテーション 考古学って何?・旧石器・縄文時代の基礎知識
第 2 回	7 月 17 日	弥生時代の基礎知識
第 3 回	8 月 7 日	古墳時代の基礎知識
第 4 回	9 月 4 日	奈良の都 平城京
第 5 回	9 月 18 日	古代の瓦
第 6 回	10 月 2 日	古代の土器
第 7 回	10 月 23 日	発掘調査と遺物整理
第 8 回	11 月 6 日	発掘調査体験(屋外実習)
第 9 回	12 月 4 日	遺物整理(洗浄と拓本実習)
第 10 回	2 月 12 日	奈良町と中近世の土器・陶磁器
第 11 回	3 月 4 日	土器類の分類整理(実習)・閉講式*

\*第11回は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止

## 5. 市民考古サポーターの活動支援

市民考古サポーター事業

市民考古学講座終了後、希望者を「市民考古サポーター」として登録し、奈良市の埋蔵文化財保護を支援していただくとともに、楽しみながら学ぶ場を提供する。

対 象：平成30年度の受講修了者

登録人員：11名(登録総人数106名)

活動内容：土器洗浄などの遺物整理、展示作業の補助、講座の準備・受付、体験学習の補助や施設見学の案内、発掘調査実習の補助などに参画。

月平均活動人数：110名

活動開始：令和元年7月～

(3月は新型コロナウイルス感染拡大防止のため活動中止)

## 6. 体験学習・実習の受け入れ

### A 市立高校体験学習

(1)

対象：一条高校人文科学科1～3年生 120名  
期日：令和元年5月30・31(木・金)、6月3日(月)  
場所：一条高校内発掘調査現場  
内容：発掘調査の体験実習

(2)

対象：一条高校人文科学科1年生 40名  
期日：令和元年11月26日(火)  
場所：埋蔵文化財調査センター  
内容：出土遺物の整理実習(注記・拓本)

### B 体験学習事業

発掘体験学習(富雄丸山古墳)

対象：一般

期日：令和元年10月26(土)～27日(日)、11月1(金)～5日(火)・9(土)～12日(火)・14(木)～18日(月)、12月5(木)～6日(金)の18日間  
事前説明会実施日：令和元年10月28日(月)・29日(火)  
内容：事前説明会にて発掘調査方法や安全の為の講習を受講後に、体験を実施。調査を始める前には必ず現況説明と、仕事の内容を説明し、終了時には出土遺物の解説・遺構の説明を行った。

その他：・募集案内を「しみんだより」10月号と奈良市役所のホームページに掲載  
・宣伝用チラシに掲載。  
・報道機関に募集要項をお知らせ  
参加者数：のべ394名

## 7. 文化財学習用キットの貸出し

市内の発掘調査で出土した石器・土器・瓦等の実物資料の貸し出しキットで解説書付き。小・中学校の社会科学習・郷土学習の補助教材に利用でき、埋蔵文化財調査センターを見学する小・中学生に「触れることのできる文化財」としても使用する。

対象：奈良市内の小・中学校

内容：①～⑥の6キット

- ① 縄文土器と弥生土器
- ② 縄文時代の石鏃と弥生時代の石鏃・石包丁
- ③ 古墳時代の埴輪と須恵器

- ④ 奈良時代の土器(A・B2セットあり)
  - ⑤ 奈良時代の瓦一軒丸瓦・軒平瓦
  - ⑥ 奈良時代の硯と墨書土器・和同開珎
- 貸出・利用

(1) 春日中学校社会科の歴史学習

期日等：令和元年6月3日～7日

キット：①・②

(2) 辰市小学校国際理解教育

期日等：令和元年12月2日～23日

キット：②・⑥

## 8. 職員の派遣(講師など)

### A 市立一条高校人文科学科「総合文化研究」授業

期日：①令和元年5月14日(火)  
②令和元年5月17日(金)  
③令和元年9月17日(火)

場所：一条高校

派遣人数：①・②・③各1名

内容：①・②発掘調査について

③埋蔵文化財調査センターの仕事

### B 京都府立山城郷土資料館主催企画展「木津川流域の首長墳―最新の成果から―」関連事業文化財講演会

期日：令和元年6月8日(土)

場所：同志社大学京田辺キャンパス夢告館

派遣人数：1名

演題：「南山城の古墳時代―豪族からのメッセージ―」

### C 大阪府立近つ飛鳥博物館主催夏季特別展「百舌鳥・古市古墳群と土師氏」関連ミニシンポジウム

期日：令和元年9月16日(月)

場所：大阪府立近つ飛鳥博物館 地階ホール

派遣人数：1名

演題：「大和・菅原東遺跡周辺の土師氏の動態」

### D 天理大学附属天理参考館主催連続講座「ヤマトの歴史絵巻」講演会

期日：令和元年11月8日(金)

場所：天理参考館研修室

派遣人数：1名  
 演題：第3回「国内最大の円墳・富雄丸山古墳をめぐる諸問題」  
**E 奈良大学・一般財団法人奈良市総合財団主催第18回「奈良大学世界遺産講座」**

期日：令和2年2月2日（日）  
 場所：ならまちセンター市民ホール  
 派遣人数：1名  
 演題：「平城京大寺院を支えた経済活動」

## 9. 出土遺物保存処理

埋蔵文化財調査センターで保管・管理している金属製遺物の化学的保存処理を計画的に行い恒久的な保存を図った。

(保存処理資料)  
 平城京跡出土鉄斧2点、刀子9点、  
 藤尾城出土刀子1点  
 元興寺跡出土刀子1点、  
 ベンショ塚古墳出土冑(鍔)1点・鉄斧1点・鏝1点

## 10. 保管資料・写真の貸出し・閲覧等

埋蔵文化財調査センターで保存・管理している遺物・写真などの貸出し・提供・掲載許可を行った。また、学術研究等に関わって、資料の閲覧を受け入れた。

**A 遺物などの貸出し 12件 (表3参照)**  
**B 写真などの貸出し・提供・掲載許可 27件 (表4参照)**  
**C 学術研究等に関わる資料閲覧 15件 (表5参照)**

表3 遺物などの貸出し

	貸出機関	使用目的	貸出期間	貸出内容
1	東京国立博物館	平成館考古展示室に常設展示	H31.4.1～ R2.3.31	平城京跡出土木簡(模造品)10点(礫進上木簡1点、月借錢進上木簡1点、豹皮分銭付札1点、渋皮御田侍奴画指木簡1点、北宮封緘木簡1点、衛府進塩付札1点、祿布付札1点、槐花進上木簡1点、造酒司符1点、瓦進上木簡1点)、分銅(模造品)1点(平城京跡第167次調査出土)
2	国土交通省近畿地方整備局国営飛鳥歴史公園事務所	平城宮いざない館に展示	H31.4.1～ R2.3.31	元興寺旧境内第7次調査出土軒丸瓦1点、軒平瓦1点
3	天理市教育委員会	夏の文化財展「和爾地域の考古学」で展示	R1.6.20～ R1.7.31	中ノ庄上ノ山古墳出土円筒埴輪1点・鞆形埴輪4点・絵画埴輪1点
4	大阪府立近つ飛鳥博物館	大阪府立近つ飛鳥博物館夏季企画展に展示	R1.7.16～ R1.10.18	菅原東遺跡出土埴輪24点、赤田横穴5号墓出土陶棺1点・陶栓7点・管玉3点・琥珀玉1点・土玉1点・鉄刀1点・刀子2点・鉄鏃4点・耳環2点、赤田横穴9号墓出土円筒形陶棺1点、歌姫赤井谷3号横穴墓出土須臾器3点・土師器1点・耳環3点
5	奈良文化財研究所員	「平城京跡東院下層窯(奈文研保管)の埴輪検討会」において比較検討するため	R1.8.2～ R1.8.5	コナベ古墳の円筒埴輪3点、ヤイ2号墳の円筒埴輪9点、杉山古墳の円筒埴輪44点
6	橿原市教育委員会	歴史に憩う橿原市博物館令和元年度秋季特別展『ならの史跡に行こう(飛鳥—江戸時代)』に展示	R1.8.26～ R1.12.25	史跡大安寺旧境内出土三彩方形垂木先瓦1点・三彩円形垂木先瓦1点・軒丸瓦1点・軒平瓦1点・相輪用金銅製風鐸1点・相輪用金銅製風招1点・金銅製水煙1点・軒隅用金銅製風鐸3点・唐三彩陶枕4点・ガラス玉4点・ガラス片2点・水晶玉2点・金糸2点・螺髪15点
7	奈良大学文化財学科	講義(考古学研究法)に使用	R1.9.24～ R2.2.18	平城京右京一条二坊十四坪(HJ207次調査)出土土器類8箱分
8	香芝市教育委員会	香芝市二上山博物館令和元年度特別展「聖徳太子と古代王家—片岡・広瀬地域の開発—」に展示	R1.9.26～ R1.12.13	史跡大安寺旧境内第28次調査出土軒丸瓦(6091A)2点、平城京跡第274次調査出土軒平瓦(6717B)1点、史跡大安寺旧境内第10次調査出土軒平瓦(6717A)1点、史跡大安寺旧境内第62次調査出土獣面紋鬼瓦(南都七大寺式IV式B <sub>1</sub> b)1点
9	奈良大学文化財学科	講義(考古学研究法)に使用	R1.9.27～ R2.2.18	平城京右京一条二坊十四坪(HJ207次調査)出土土器類9箱分

	貸出機関	使用目的	貸出期間	貸出内容
10	大阪府立近つ飛鳥博物館	大阪府立近つ飛鳥博物館秋季企画展に展示	R 1.10.1 ~ R 1.12.20	菅原東遺跡出土石釧1点・車輪石1点・玉類(管玉・小玉)6点・緑色凝灰岩未成品1点・SX22周濠出土土器7点
11	八尾市立歴史民俗資料館指定管理者公益財団法人八尾市文化財調査研究会	「由義寺発見! - 国史跡指定記念 -」に展示	R 1.10.5 ~ R 1.11.25	西大寺旧境内第25次調査出土単弁十六弁蓮華紋軒丸瓦(6133R)1点、甕A(墨書)1点・墨書土器(法王)1点・墨書土器1点・くじ引き木筒4点、史跡東大寺旧境内第13・14次調査出土複弁八弁蓮華紋軒丸瓦(6235E・6235F)2点、平城京跡第31・126次調査出土均整唐草紋軒平瓦(6732H・6732D)2点
12	大和ハウス工業株式会社	仮称大和ハウスグループ研修棟において展示公開するための保存処理を行うため	R 1.11.10 ~ R 2.3.31	平城京左京九条三坊六坪(平城京跡727次調査)SE294 井戸枠25点

表4 写真などの貸出・提供・掲載許可

	申請日	申請機関(申請者)	目的	内容	その他
1	H 31.4.17	天理教道友社	『すきっと33号』内連載「やまと拾遺物語」(近江昌司「芸亭案内」)に掲載	西大寺旧境内25次調査出土木筒035写真1枚	貸出・掲載許可
2	R 1.5.4	大阪府立近つ飛鳥博物館	大阪府立近つ飛鳥博物館令和元年度夏季特別展にともなう展示、図録・展示パネル、ならびにポスター・チラシ・ホームページ等の広報資料へ掲載	「菅原東遺跡埴輪窯跡群全景」、「菅原東遺跡出土II期の円筒・形象埴輪」、「菅原東遺跡埴輪窯跡群出土円筒・形象埴輪」、「菅原東遺跡出土形象埴輪」、「赤田横穴墓群発掘区全景」、「赤田5号墓北陶棺出土玉類」、「赤田5号墓北陶棺出土耳環・鉄器」、「赤田5号墓玄室陶棺・土器出土状態」、「赤田9号墓玄室陶棺出土状態」、「赤田5号墓北陶棺」、「赤田5号墓陶棺」、「赤田9号墓円筒形陶棺A」、「歌姫赤井谷第3号横穴の調査第3次横穴玄室」、「歌姫赤井谷第3号横穴墓全景」、「歌姫赤井谷第3号墓出土土器」、「歌姫赤井谷第3号墓出土金属製品」各写真1枚	貸出・掲載許可
3	R 1.5.17	株式会社 吉川弘文館	『人物叢書 早良親王』に挿図として掲載	史跡大安寺旧境内出土「東院」墨書須恵器 写真1枚・「東院器」墨書須恵器 実測図	貸出・掲載許可
4	R 1.5.30	寧楽考古楽倶楽部	『寧楽考古楽倶楽部10周年記念誌』に掲載	史跡大安寺旧境内出土大安寺式軒瓦・円形垂木先瓦・方形垂木先瓦・唐三彩陶枕・東塔調査空中写真、西大寺跡出土イスラム陶器、奈良町遺跡出土刀装具鋳型写真各1枚	貸出・掲載許可
5	R 1.6.5	天理市教育委員会	夏の文化財展「和爾地域の考古学」で展示パネルとして掲載	「UK第2次調査 調査地遠景」、「上ノ山古墳全景」、「上ノ山古墳後円部墳丘裾と周溝」、「上ノ山古墳出土土器・埴輪」各写真1枚	貸出・掲載許可
6	R 1.6.6	株式会社奈良新聞社	奈良新聞に掲載	市立一条高校での発掘調査実習(6月3日)の作業風景写真1枚	貸出・掲載許可
7	R 1.7.8	橿原市教育委員会	歴史に憩う橿原市博物館令和元年度夏季特別展『ならの史跡に行こう(飛鳥-江戸時代)』における展示パネル・図録・広報に掲載	「大安寺東塔整備後風景」、「大安寺出土平城宮系軒瓦の組み合わせ」、「大安寺西塔出土水煙」、「大安寺西塔出土相輪用風鐸1」、「大安寺西塔出土相輪用風鐸2」、「大安寺金堂・講堂付近出土金糸」、「大安寺金堂・講堂付近出土螺髪」、「大安寺金堂・講堂付近出土施釉円形垂木先瓦」、「大安寺金堂・講堂付近出土施釉方形垂木先瓦」写真1枚	貸出・掲載許可
8	R 1.8.3	大阪府立近つ飛鳥博物館	大阪府立近つ飛鳥博物館秋季企画展にともなう展示図録・展示パネルならびにポスター・チラシ・ホームページ等の広報資料へ掲載	「菅原東遺跡方形区画SX22」、「菅原東遺跡出土石釧・玉類・原石」、「西大寺東遺跡SB21東端の柱」写真各1枚	貸出・掲載許可
9	R 1.8.7	浜松市博物館	伊場遺跡発見70年・浜松市博物館開館40年記念特別展「古代東海道駅伝展」展示パネル・図録・広報に掲載	「西大寺旧境内第25次調査出土木筒(第042号)」表・裏写真各1枚	貸出・掲載許可
10	R 1.8.7	浜松市博物館	伊場遺跡発見70年・浜松市博物館開館40年記念特別展「古代東海道駅伝展」展示パネル・図録・広報に掲載	平城京跡出土須恵器壺G写真1枚	掲載許可

	申請日	申請機関(申請者)	目的	内容	その他
11	R 1.8.15	八尾市立歴史民俗資料館 指定管理者公益財団法人 八尾市文化財調査研究会	「由義寺 発見! - 国史跡指定記念 -」 展にともなう図録など広報資料への掲載	西大寺旧境内第25次発掘区全景・墨書土器 501・ 503・596・木簡 060・064・065・籤引き木簡・イ スラム陶器・軒丸瓦(6133R)、史跡東大寺旧境内 13次出土東大寺式軒丸(6235E)、史跡東大寺旧境 内14次出土東大寺式軒丸瓦(6235F)、平城京跡第 31次出土軒平瓦(6732G)、平城京跡第126次調査 出土(6732D)各写真1枚	貸出・掲載許可
12	R 1.9.11	公益社団法人奈良市観光 協会	冬の奈良大和路キャンペーン2019の 広告に、「富雄丸山古墳」及び「富雄 丸山古墳発掘体験」を掲載	富雄丸山古墳および発掘調査体験風景写真11枚	貸出・掲載許可
13	R 1.9.13	朝日新聞奈良総局	朝日新聞奈良版に掲載	富雄丸山古墳発掘調査体験風景写真3枚	貸出・掲載許可
14	R 1.9.23	株式会社ディ・コンプレ ックス	テレビ番組で放送	富雄丸山古墳遠望写真2枚	貸出・掲載許可
15	R 1.9.27	佐川印刷株式会社	フジッコ株式会社通販会員向け会報誌 『晴れ晴れ』に掲載	平城京跡73次調査出土墨書土器「真万呂」、平城京 跡339次調査出土墨書土器「大磨」、平城京跡62次 調査出土墨書土器「稔房」の写真各1枚	貸出・掲載許可
16	R 1.10.11	株式会社吉川弘文館	平川南著『新しい古代へ3交通・情報 となりわい』に掲載	西大寺旧境内第25次査出土木簡(第042号表) 写真1枚	貸出・掲載許可
17	R 1.12.3	株式会社エディキュープ	洋泉社発行『カラー版 敗者の日本史』 に掲載	西大寺旧境内第25次調査出土木簡(第035号表) 写真1枚	掲載許可
18	R 1.12.9	教育出版株式会社 ICT事業局	小学社会指導者用デジタル教科書(教 材)(教育出版株式会社)6年に掲載	「平城京左京五条二坊出土奈良時代の土師器・須恵 器」、「平城京左京五条二坊出土硯」、「東市と東堀河 出土 銭貨」写真各1枚	掲載許可
19	R 1.12.11	木簡学会	会誌『木簡研究』の電子化およびイン ターネット公開	『木簡研究』第3・5・6・8・11・14～18・20 ～23・25～29・31・33～36・40号掲載図版	掲載許可
20	R 1.12.11	産経新聞大阪本社	12月18日付産経新聞夕刊に掲載	平城京左京二条四坊十坪出土「宮寺」墨書土器写真 1枚	掲載許可
21	R 2.1.30	株式会社岩波書店編集局	『渡来系移住民』(シリーズ「古代史を ひらく」)に掲載	西大寺旧境内第25次調査出土墨書土器「皇甫東朝」 須恵器杯の写真1枚	貸出・掲載許可
22	R 2.1.31	株式会社クリエイティブ・ スイート	『〈京都・大阪・奈良・滋賀〉凹凸で歩 く戦国時代』に掲載	多聞城出土軒丸瓦・軒平瓦写真1枚	貸出・掲載許可
23	R 2.3.10	横浜ユーラシア文化館	鈴木靖民「東ユーラシア・東アジアと 古代日本のモノ・人の交流」『横浜ユ ーラシア文化館紀要』第8号に掲載	西大寺旧境内第25次調査出土イスラム陶器写真1 枚	貸出・掲載許可
24	R 2.3.19	株式会社ジャパン通信情 報センター	『文化財発掘出土情報』2020年5～6 月号「各地の動向」に掲載	「富雄丸山古墳の発掘調査―第3次調査―」リーフレ ットの内容	掲載許可
25	R 2.3.24	柏木町誌発行準備委員会	「柏木町誌」に掲載	「平城京跡第24次発掘区全景」、「平城京跡第65次 井戸SE45」、「井戸SE45断割」、「平城京跡第65 次出土鏡・箸」、「平城京跡第103次朱雀大路西側溝・ 下ツ道東側溝」、「下ツ道西側溝」、「出土二又針」、「平 城京跡第139次発掘区全景」、「東発掘区全景」、「建 物SB13」、「平城京跡第338・370次方形周溝墓6 号墓全景」、「SX802」、「土器埋納遺構SX801」、「地 鎮遺構SX803」、「地鎮遺構SX804」、「平城京跡 第405次西発掘区(弥生時代遺構面)全景」、「西発 掘区(奈良時代遺構面)全景」、「調査区全景」、「井 戸SE14」、「柏木遺跡出土弥生土器壺・高杯・甕他」、 「柏木遺跡出土古墳時代前期土師器」、「柏木遺跡出土 弥生時代石鏃・石包丁」、「柏木遺跡出土鳥型金具」、 「柏木遺跡出土古墳時代石釧・石杵」、「市指定文化財 神功開寶鑄銭遺物」写真各1枚	貸出・掲載許可
26	R 2.3.24	木簡学会	会誌『木簡研究』の電子化およびイン ターネット公開	奈良町遺跡出土「南都諸白」銘信楽焼陶器壺写真1 枚・出土木簡写真2枚	掲載許可
27	R 2.3.30	日本考古学協会会員	論文挿図に掲載	菅原東遺跡出土碧玉製品・碧玉未製品・碧玉破片・ 同玉類写真2枚	貸出・掲載許可



表5 学術研究等に関わる資料閲覧

	閲覧日	申請者	目的	閲覧資料名
1	H 31.4.16	宗教法人東大寺境内史跡整備計画室長	史跡整備基本計画策定	史跡東大寺旧境内第12～15次調査図面の熟覧・複写
2	R 1.5.10	奈良県立橿原考古学研究所員	個人研究	市指定文化財三角縁吾作銘二神二獣鏡（弥勒寺所蔵）の観察・実測・撮影
3	R 1.6.5	天理市教育委員会職員	展示	中之庄上之山古墳出土円筒埴輪1点・形象埴輪5点の観察・撮影
4	R 1.7.4	奈良文化財研究所職員	個人研究	コナベ古墳・ウワナベ古墳・杉山古墳・法華寺垣内古墳（HJ第520次）・南新コモ川2号墳（HJ第550次）・ヤイ2号墳（HJ第600次）の埴輪一括の観察・実測・撮影
5	R 1.7.8	姫路市教育委員会職員	個人研究	多聞城跡出土軒平瓦11点の観察・実測・撮影
6	R 1.7.12	奈良大学学生	卒業論文	歌姫赤井谷横穴の発掘調査写真の熟覧
7	R 1.8.5	奈良大学学生	卒業論文	歌姫赤井谷横穴の発掘調査（人骨出土状態）写真22枚・図面8枚の熟覧・複写
8	R 1.8.19-22	奈良大学学生	卒業論文	コナベ古墳外堤・鶯塚古墳採集品、若草中学校旧蔵品、平松北内古墳、法華寺垣内古墳（HJ第520次）の埴輪一括の観察・実測・撮影
9	R 1.9.26・27	奈良大学学生	卒業論文	杉山古墳・南新コモ川2号墳（HJ第550次）・ヤイ2号墳（HJ第600次）の埴輪一括の観察・実測・撮影
10	R 1.11.5	大阪歴史博物館員	個人研究	平城京跡第459-2次調査出土杓子形木製品1点、平城京跡第459-2次調査出土高台付鉢1点、平城京跡第460次調査出土北陸系長胴甕2点、平城京跡第608次調査出土新羅土器甕2点、平城京跡第538次調査出土新羅土器甕1点、平城京跡第683次調査出土須恵器甕1点、赤田3号墓墓道出土須恵器甕1点、赤田5号墓北陶棺出土陶栓7点、赤田5号墓墓道出土須恵器甕1点、赤田6号墓墓道出土須恵器甕1点、赤田8号墓玄室出土陶栓7点、赤田8号墓出土須恵器甕1点、赤田9号墓玄室出土土師器甕1点、赤田9号墓玄室出土土師器甕1点の観察・撮影
11	R 1.12.10	奈良文化財研究所員・市立枚方宿鍵屋資料館員	個人研究	西大寺跡第25次調査出土漆刷毛1点・檜扇1点・挽物2点の観察・撮影
12	R 1.12.25	奈良文化財研究所員	個人研究	史跡大安寺旧境内西塔出土風鐸（軒間用）3点の観察・実測・撮影
13	R 2.1.23	奈良大学学生	卒業論文	若草中学校旧蔵埴輪一括の実測
14	R 2.1.27	弘前学院大学職員	個人研究	赤田横穴5号墓出土琥珀玉1点、平城京右京二条三坊二坪（HJ第431-2次）・右京二条三坊四坪（HJ第273-1次）・右京三条三坊八坪（HJ第196-2次）・左京二条四坊二坪（HJ第157次）・左京四条六坊一坪（HJ第651次）の各調査出土の琥珀の小片の撮影
15	R 2.3.13	山口大学教授	個人研究	市指定文化財平城京出土分銅、市指定文化財神功開寶鑄銭遺物、平城京右京八条一坊十坪出土分銅の観察・撮影

## 第3章 資料報告

### 菅原東遺跡出土の石製品・玉類

—古墳時代前～中期における菅原東遺跡の研究IV—

村瀬 陸



# 菅原東遺跡出土の石製品・玉類

## - 古墳時代前～中期における菅原東遺跡の研究IV -

村瀬 陸

### I はじめに

本稿は、菅原東遺跡から出土した古墳時代前～中期の石製品・玉類について報告することを目的とする。

菅原東遺跡出土遺物については、筆者が継続的に資料報告を行ってきた（村瀬 2016・2018・2021a・b）。この成果によれば、菅原東遺跡は古墳時代前期中頃に成立し、出土土器の様相から南約 500m に位置する宝来山古墳の造営期間と概ね消長が一致する（村瀬 2021a）。また、菅原東遺跡で宝来山古墳出土埴輪の特徴に似る同時期の埴輪が出土していることも確認した（村瀬 2018）。そして、宝来山古墳への埋葬や祭祀等が終了した段階にあたる古墳時代前期末～中期初頭に、菅原東遺跡は一度廃絶するという特徴がある。次に遺跡が再開されるのが、古墳時代中期末～後期で、埴輪生産遺跡としての性格が強調される。遺跡所在地の地名が菅原であることなどから、菅原土師氏との関連が古くから指摘されており（直木 1960）、上述した特異な集落消長である性格などを史的成果と合わせて筆者も評価したことがある（村瀬編 2021b）。

菅原東遺跡の主な出土土器・埴輪は資料報告を行ってきたが、石製品・玉類にも未報告のものを確認した。今後、総合的な菅原東遺跡の評価を行う上で重要な資料であるため報告する。このほか、奈良市が所蔵する古墳時代の石製品には合子、石釧、紡錘車形石製品があり、菅原東遺跡出土資料と混同しないよう合わせて報告しておきたい。

### II 菅原東遺跡出土の石製品・玉類

菅原東遺跡で出土した石製品・玉類には、緑色凝灰岩未製品 1 点、碧玉未製品 1 点、車輪石 1 点、石釧 1 点、管玉 8 点、ガラス小玉 3 点、滑石製白玉 2 点がある。

#### i 緑色凝灰岩未製品（1）

概要報告では HJ 第 257-3 次調査の方形区画溝 SX22 出土とされているが、居館に重複するピットから出土したものである。白形を呈し、上面径 2.5cm、下面径 4.0cm、高さ 3.0cm である。材質は岡寺分類の材質 II である（岡寺 1999）。上下面はいずれも磨かれて平滑で、側面は粗割状態である。なんらかの石製品を作るための未製品とみられ、石材産出地ではなく消費地で製品化していた可能性を示す一例として評価できる。



図1 報告する出土遺物の調査地と菅原東遺跡

#### ii 碧玉未製品（2）

HJ 第 256 次調査の居館付近の下層包含層から出土している。長さ 5.5cm、幅 4.0cm、高さ 2.4cm である。濃緑色を呈する材質 I で、全面が粗割状態である。管玉等の未製品である可能性が考えられる。

#### iii 車輪石（3）

HJ 第 257-3 次調査の方形区画溝 SX22 から出土した。緑色凝灰岩製で石材に葉理がみられる材質 IV である。全体の約 1/5 が遺存する。環体幅 6.2～6.7cm、厚さ 1.7cm である。表面は森下分類の山谷式である（森下 2005）。底面はやや上げ底で、内孔はやや丸みをもって立ち上がる。

#### iv 石釧（4）

HJ 第 257-2 次調査の溝 SD04 から出土した。やや軟質の緑色凝灰岩製で材質 III である。全体の約 1/6 が遺

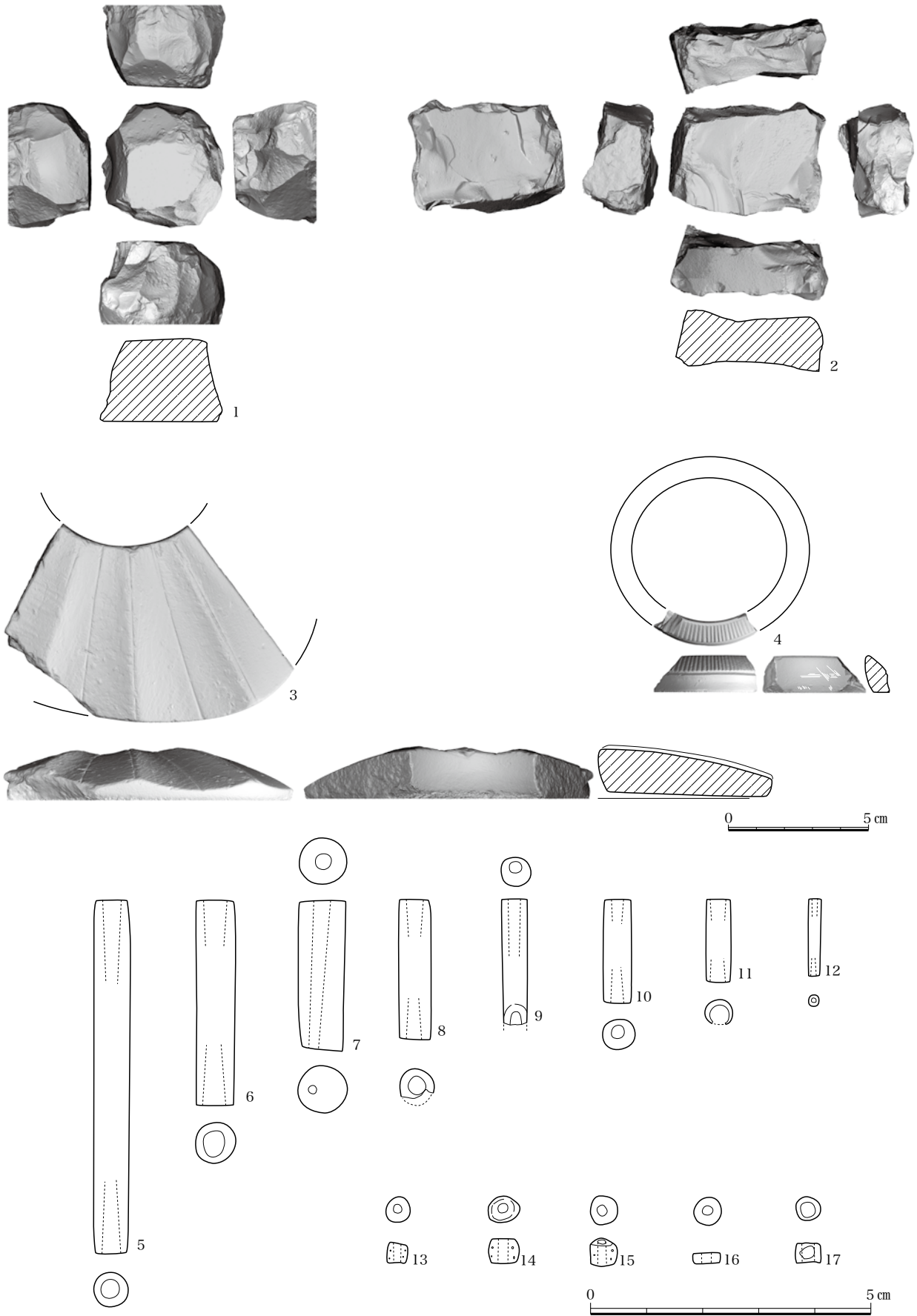


図2 菅原東遺跡で出土した石製品（1～4：1/2）と玉類（5～17：1/1）

存する。外面の上半部斜面には沈線が放射状に刻まれ、側面は1条の沈線を挟んで凹線をまわす一凹式である。内孔は回転性のある擦痕の上に斜め方向の擦痕が観察できる。高さ1.2cmで復元すると外径7.0cm、内径5.4cmである。

#### v 管玉 (5~12)

5は、HJ第169次調査の包含層から出土した。濃緑色を呈する材質Ⅱで、長さ6.3cm、直径0.6cmである。両面穿孔である。

6は、HJ第256次調査の居館付近の包含層から出土した。灰褐色を呈するが材質の印象は碧玉に近いもので、岡寺分類に当てはまらない。長さ3.7cm、直径0.7cmで、両面穿孔である。

7は、HJ第326-1次調査の土坑SK43<sup>(註1)</sup>から出土した。濃緑色を呈する材質Ⅱで、長さ2.7cm、直径0.9cmとやや短く太い印象をもつ。穿孔は片側が0.3cmなのに対し、もう一方が0.1cmと小さく片面穿孔である。

8は、HJ第257-4次調査の溝SD01から出土した。

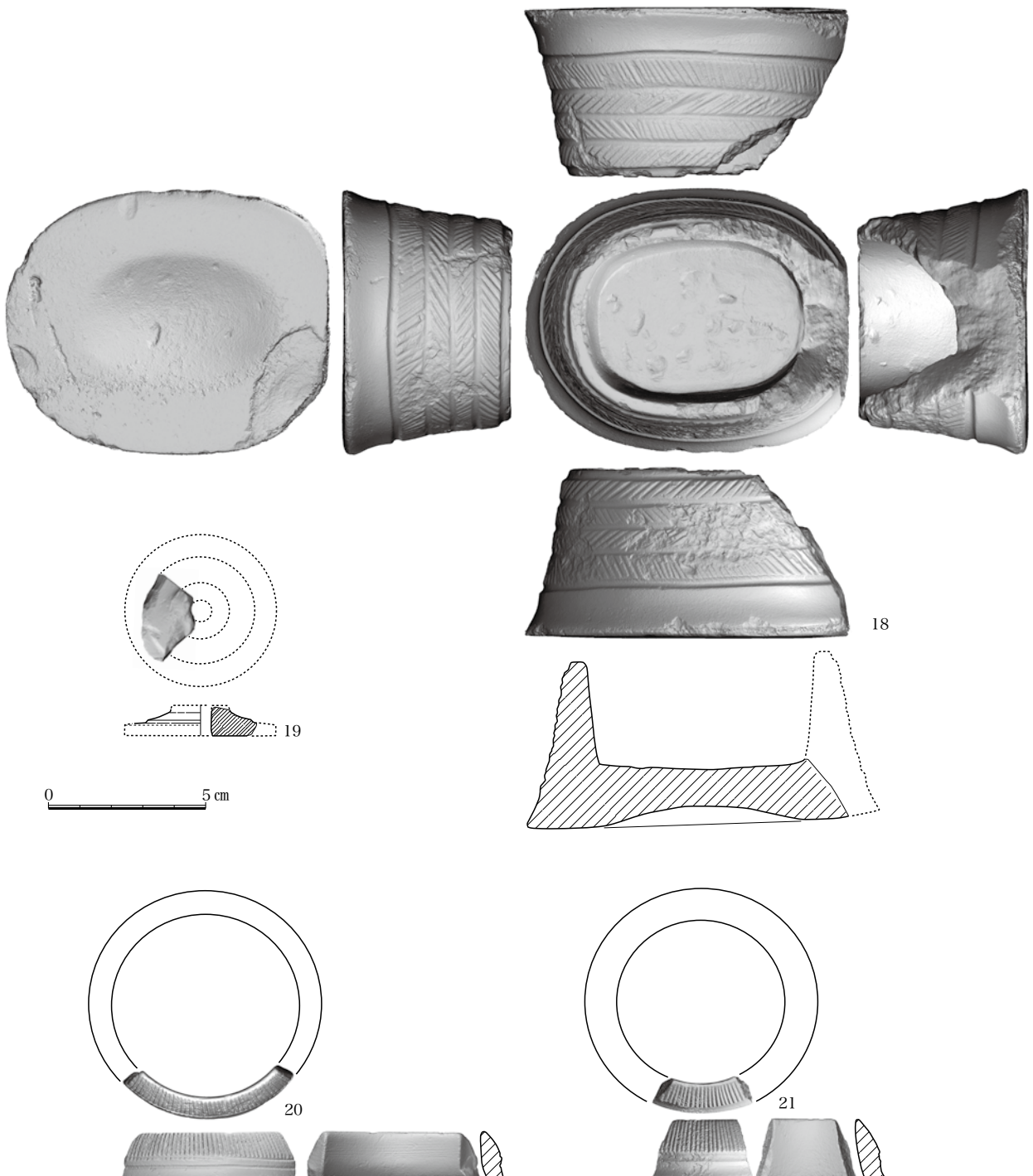


図3 その他の遺跡から出土した石製品 (18~21: 1/2)

淡緑色を呈する材質Ⅲで、長さ 2.5cm、直径 0.6cm である。両面穿孔である。

9 は、HJ 第 257-2 次調査の溝 SD04 から石釧と共に出土した。淡緑色を呈する材質Ⅲで、片側の端部が欠損しているが長さ 2.2cm 以上、直径 0.6cm である。両面穿孔の可能性が高い。

10 は、HJ 第 257-3 次調査の古墳時代盛土下で検出した土坑下層のピット内から出土した。淡緑色を呈する材質Ⅲで、長さ 1.9cm、直径 0.6cm である。両面穿孔である。

11 は、HJ 第 276 次調査のピット内から出土した。濃緑灰色を呈し滑石製の可能性が高い。一部欠損しているが、長さ 1.5cm、直径 0.5cm で両面穿孔である。

12 は、HJ 第 443-7 次調査の谷状落ち込みから出土した。濃緑色を呈する材質Ⅱで、長さ 1.4cm、直径 0.2cm と小さく細い。両面穿孔である。

#### vi ガラス小玉 (13～15)

13 は、HJ 第 326-1 次調査のピット内から出土した。濃青色を呈し直径 0.45cm、高さ 0.4cm である。引きのばし法により作られ、気泡が内部に観察できる。

14・15 は、HJ 第 257-3 次調査の方形区画溝 SX22 下層から出土した。14 は濃青色を呈し、形状はやや不整形で直径は 0.5～0.6cm、高さ 0.5cm である。上下の端面が削られて平滑に仕上げられている。引きのばし法により作られ、気泡が内部に観察できる。15 は濃青色を呈し、直径 0.5cm、高さ 0.5cm である。引きのばし法により作られ、気泡が内部に観察できる。

#### vii 白玉 (16・17)

16・17 は、HJ 第 257-3 次調査の方形区画溝 SX22 下層から出土した。16 は、灰黒色を呈する滑石製で直径 0.5cm、高さ 0.2cm である。17 は 16 よりも濃い灰黒色を呈する滑石製で直径 0.5cm、高さ 0.4cm である。側面にも穴があげられている。

### III その他の遺跡から出土した石製品

#### i 奈良町遺跡出土石製合子 (18)

HJ 第 258 次調査で鎌倉時代の井戸 SE03 から出土した。材質Ⅲで身のみであり、一部欠損する。平面楕円形で底部は裾が広がり、底面中央が窪む。口縁部の短径 6.0cm、底部の短径 8.3cm、高さ 5.4cm、身の深さは 3.4cm である。外面に 4 条の沈線を横方向に施し、条間に綾杉文を線刻する。底部外面の一部に赤色顔料が付着する。また、同調査では埴輪編年Ⅱ期の円筒埴輪片が出土しており(村瀬 2020)、付近にあった前期古墳が

壊されて、なんらかの要因で井戸に紛れ込んだものと思われる。

#### ii 奈良町遺跡出土紡錘車形石製品 (19)

HJ 第 650 次調査で江戸時代の土坑 SK49 から出土した。材質Ⅲで、長さ 2.8cm、高さ 0.9cm の小片である。中央に復原径 0.7cm の穿孔がある。底面は平坦で同心円状に 2 つの段をめぐらせている。

#### iii 柏木遺跡出土石釧 (20)

HJ 第 249 次調査の溝 SD12 から出土した。SD12 では布留 1 式後半～2 式に相当する土器群が出土している。材質Ⅲで全体の約 1/4 が遺存しており、高さ 1.4cm で、復元すると外径 7.4cm、内径 6.0cm である。側面形態は谷式で、内孔には回転性をもつ擦痕がみられる。

#### iv 佐紀遺跡出土石釧 (21)

HJ 第 421 次調査の溝 SD04 から出土した。材質Ⅲで全体の約 1/8 程度が遺存する。高さ 1.8cm で、復元すると外径 7.4cm、内径 6.0cm である。斜面は高式で、側面は 2 条の凹線をまわす二凹式である。

## IV 考察

#### i 石製品からみた菅原東遺跡

集落で出土する腕輪形石製品は、破片資料であることや、居館・祭祀関連の遺跡に目立つことなどから破砕埋納に関わる祭祀遺物との指摘がある(北條 1994)。菅原東遺跡出土の腕輪形石製品については、三浦俊明が集落出土資料の開始期を評価する上で取り上げている(三浦 2012)。また、高橋幸治は福井県坂井平野付近の石材産出地からの流通ルートを経た首長居館での出土品として位置づけている(高橋 2010a)。

ここで新たに考察できることは少ないが、合わせて紹介した柏木遺跡溝 SD12 も方形区画溝になる可能性があるもので、東側には前期末～中期後半の古墳群が広がるとみられる(村瀬 2017)。佐紀遺跡出土品は、高橋集成(高橋 2010b) から漏れているもので、これまであまり知られていなかった資料である。溝 SD04 は布留式新相～TK208 型式までの土器を含み、佐紀古墳群西群に近くその関連を想定できる。これらはいずれも破片資料であり、なおかつ大型古墳群が立地する居館的性格の強い集落遺跡から出土していることからみても、北條の見解を追認する資料であるといえる。ただし、出土量としては 1 点程度で、その傾向は全国的に同様であるため、最初から祭祀用に用意したというよりは、なんらかの原因で割れてしまったものを再利用した程度のものであろう。

ii 管玉からみた菅原東遺跡

管玉についても、古墳出土品が多数を占めるが、集落で出土する事例も腕輪形石製品に比べれば多い。ただし、その出土は祭祀的性格の強い遺構からみられる場合が多く、菅原東遺跡に近い西大寺旧境内の調査でも布留2式の土坑に祭祀土器とともに管玉が納められていた事例がある（奈良市教育委員会 2017）。

菅原東遺跡で出土した管玉は、方形区画溝 SX22 から出土したものがあるほかは、包含層などから出土したものが多く、遺構の性格と合わせて検討できる資料に乏し

い。ここでは、管玉自体がもつ性格から菅原東遺跡について考察する。

古墳時代前期の管玉は、その直径と全長から傾向を抽出した廣瀬時習の分析があり（廣瀬 1994）、古墳時代全体を通じた生産と流通を米田克彦が示した（米田 2006）。これらをさらに網羅的に深めた大賀克彦の研究（大賀 2010）が現状の到達点といえよう。

そこで、大賀が作成した図に報告した管玉を重ねた（図4）。古墳時代前～中期における菅原東遺跡の存続時期は、布留1式新相～布留4式古相であり、概ね大賀編年

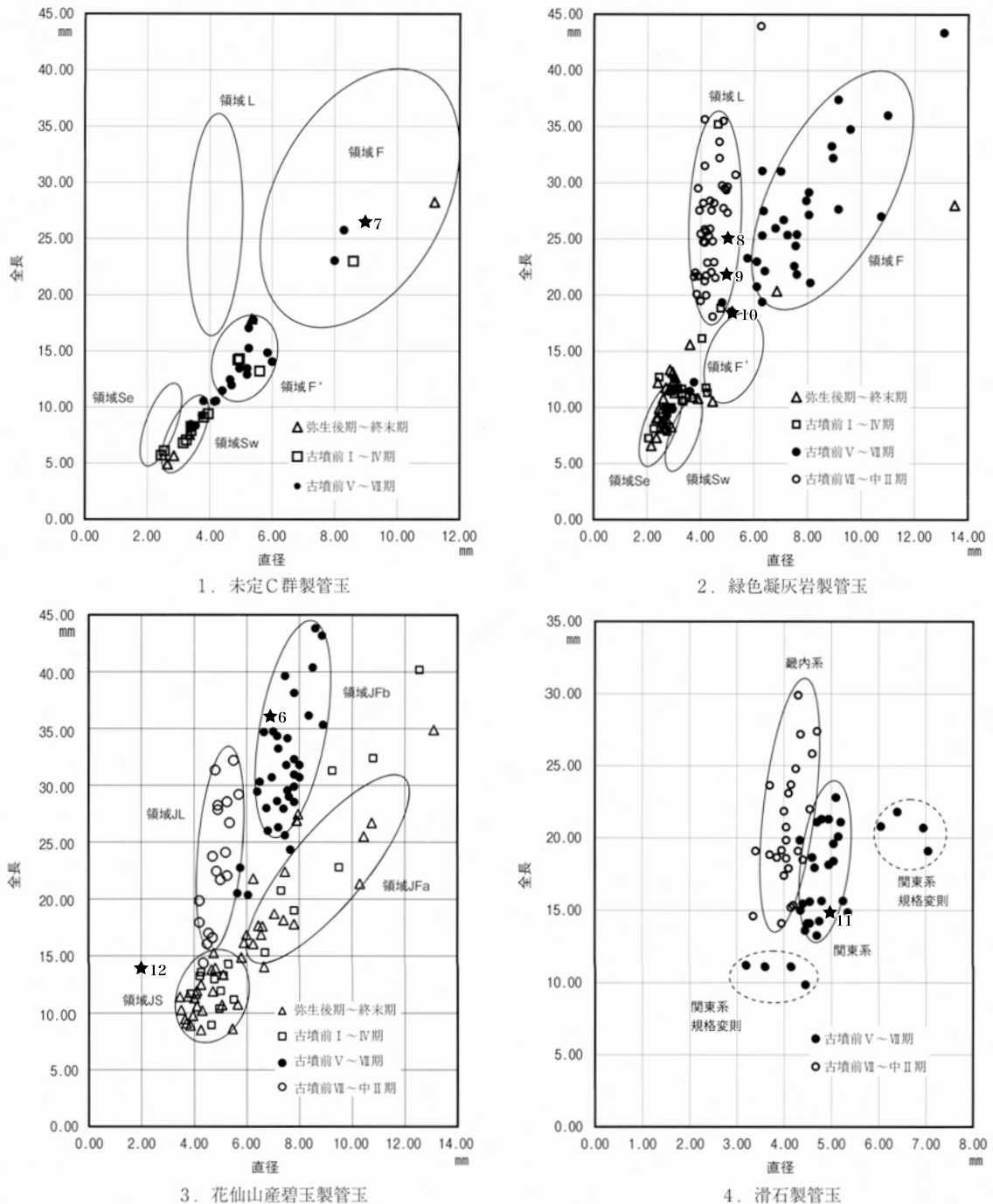


図4 菅原東遺跡出土管玉の材質別分布（★が菅原東遺跡出土資料）



前V～VII期に該当する。したがって、報告した管玉は遺構出土品でないものが含まれるが、概ねこの時期幅のなかにおさまることが想定できる。

結果として、基本的に大賀編年前V～VII期の様相をまとめた領域におさまっていることがわかる。逆説的に前述した想定が正しいことを裏づける。しかし、緑色凝灰岩製管玉は、大賀編年前VII～中II期の領域Lにまとまる傾向があり、その他の材質のものに比べて、緑色凝灰岩製管玉は遅れて製作されたものとみることができのかもしれない。

また、滑石製とした11は、関東系の領域におさまる。菅原東遺跡では今のところ関東系の土器類は出土していないが、ウワナベ越え沿いに所在する長谷遺跡では、関東系の土器類の出土が知られている（中野ほか2019）。長谷遺跡は時期的に後出するものと考えられるが、佐紀古墳群と関東を結ぶ事例として紹介しておきたい。

最後にこの分布図におさまらないものとして、5と12がある。5は長さ6.3cm、直径0.6cmで古墳時代前期でみれば弁天山C1号墳（大賀編年前IV期：長さ6.9cm、直径1.4cm）、新沢500号墳（大賀編年前V期：長さ6.5cm、直径1.9cm）に6cmを越えるものがあるが、類例は比較的少なく、菅原東遺跡出土品は直径が小さく細長い。長い管玉が出現するのは、大賀の表からみて前V期以降にそういった現象が起こるようである。したがって、時期的に問題ないものであるが、出土事例が首長墳である点からして、佐紀古墳群に供給されることを見越したものであった可能性がある。HJ第169次調査周辺では短期間に建て替えのある竪穴建物・土坑群が密集するエリアで、筆者は宝来山古墳の造営キャンプである可能性を述べている（村瀬2021a）。そういった大型古墳へ副葬を予定していたものがなんらかの原因で取り残されたと考えられることもできよう。

12は、非常に細く短いという特徴を抽出できるが、筆者の力量不足で評価できず今後の課題としたい。

## V おわりに

本稿では、菅原東遺跡出土石製品・玉類についてを報告し、若干の考察を加えて評価を行なった。その結果、石製品は既往の認識を追認することとなり、管玉については古墳時代前期後半に通有のものが多数であることから、想定される菅原東遺跡の存続時期を補足する資料であることを明らかにした。他方、管玉の一部には細長いものが存在し、同様の管玉が近畿地方における有力古墳から出土している。出土地点が宝来山古墳の造営キャン

プ地に想定されることから、宝来山古墳に副葬が予定されていた可能性が想定できることを述べた。

筆者の評価に誤りがある部分もあろうが、本稿で提示した資料自体は菅原東遺跡や佐紀古墳群に関連する重要な資料であるため、活用されることを望みたい。

（村瀬 陸）

註1) 概要報告に遺構番号がなく、調査時の遺構番号

## 引用文献

- 大賀克彦 2010 「東大寺山古墳出土玉類の考古学的評価」『東大寺山古墳の研究』東大寺山古墳研究会・天理大学・天理大学附属天理参考館
- 岡寺良 1999 「石製品研究の新視点-材質・製作技法に着目した視点-」『考古学ジャーナル』453 ニュー・サイエンス社
- 高橋幸治 2010a 「腕輪形石製品の流通-集落出土品を中心に-」『古代学研究』187 古代学研究会
- 高橋幸治 2010b 「集落関連遺跡出土の腕輪形・宝器類石製品集成表」『古代学研究』187 古代学研究会
- 直木孝次郎 1960 「土師氏の研究」『人文研究』11-9 大阪市立大学文学部
- 中野咲ほか 2019 「古墳時代中期における大和と投獄の地域間交流-奈良県長谷遺跡出土土器の分析を中心に-」『日本考古学協会第85回総会研究発表要旨』日本考古学協会
- 廣瀬時習 1994 「玉副葬の意義-前期古墳に見る管玉の副葬について-」『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 北條芳隆 1994 「石川条里遺跡と腕輪形石製品」『中部高地の考古学IV』長野県考古学会
- 三浦俊明 2012 「古墳時代前期における石製品の流通」『石川県立博物館紀要』24 石川県立博物館
- 村瀬陸 2016 「菅原東遺跡の首長居館出土土器」『古墳出現期土器研究』4 古墳出現期土器研究会
- 村瀬陸 2017 「南新コモ川古墳の研究-甲冑形埴輪の位置づけを中心に-」『埴輪論叢』7 埴輪検討会
- 村瀬陸 2018 「HJ第229・443-7次出土埴輪からみた菅原東遺跡と宝来山古墳」『奈良市埋蔵文化財調査年報平成27年度』奈良市教育委員会
- 村瀬陸 2020 「平城京域の埋没前期古墳とその埴輪」『埴輪論叢』10 埴輪検討会
- 村瀬陸 2021a 「菅原東遺跡の竪穴建物・土坑群出土土器」『奈良市埋蔵文化財調査年報平成30年度』奈良市教育委員会
- 村瀬陸編 2021b 「古墳時代後期埴輪生産からみた菅原土師氏の実証的研究」『研究紀要』25 由良大和古代文化研究協会
- 森下章司 2005 「前期古墳副葬品の組合せ」『考古学雑誌』89-1 日本考古学会
- 米田克彦 2006 「古墳時代管玉の生産と流通」『季刊考古学』94 雄山閣

印刷・製本仕様データ

表紙：アートポストカード220kg/m<sup>2</sup>・マットpp加工  
見返し：白色上質紙110kg/m<sup>2</sup>  
巻頭図版：特アート紙135kg/m<sup>2</sup>  
本文：白色マットコート紙104.7kg/m<sup>2</sup>  
本文フォント：ヒラギノ明朝体  
製本：左開き・糸かがり綴じ

©2022 by the Nara Municipal Board of Education

No part of this publication may be copied or reproduced in any form without written permission from the copyright owner. Printed in Japan.

---

## 奈良市埋蔵文化財調査年報

令和元(2019)年度

ISSN 1882-9775

印刷 令和4(2022)年3月15日

発行 令和4(2022)年3月25日

編集 奈良市埋蔵文化財調査センター

630-8135 奈良市大安寺西二丁目281番地

TEL 0742-33-1821

FAX 0742-33-1822

URL <http://www.city.nara.nara.jp/>

E-mail [maizoubunka@city.nara.lg.jp](mailto:maizoubunka@city.nara.lg.jp)

発行 奈良市教育委員会

630-8580 奈良市二条大路南一丁目1-1

TEL 0742-34-1111 (代)

印刷 株式会社 近畿印刷センター

630-8325 奈良市西木辻町121-2-404

---

*ISSN 1882-9775*

**ANNUAL RESEARCH REPORT  
OF  
ARCHAEOLOGY IN NARA CITY AREA  
2019**

**CONTENTS**

**I PRELIMINARY REPORTS OF ARCHAEOLOGICAL  
EXCAVATION IN NARA CITY AREA IN 2019**

**II REPORTS OF CONSERVATION AND MANAGEMENT  
FOR ARCHAEOLOGICAL SITE AND MATERIALS  
IN 2019.**

**III THE REPORT OF ANCIENT RELICS**

**NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION  
2022**